

# 奇譚クラブ

新しい風俗文藝集



7  
月  
号

奇譚クラブ

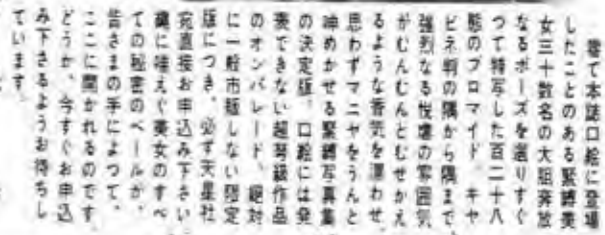
KITAN CLUB

7

THE KITAN CLUB  
Published Monthly by T. KAWAKATSU  
Tokyo, Japan

DEPT. 110000

五百四





演劇「あべこべの国」

南村俊平画







# 奇譚クラブ 七月号 目次

目次裏 「風流いろは歌留多」……………三十九夜同人作・滝れい子画  
戯画 「演劇・あべこべの国」……………南村 俊平

首振り人形……………四馬 孝

異臭の中の芳香……………四馬 孝

回転する苦痛……………四馬 孝

M画 「御挨拶」……………栗原 伸

祖国敗れたら 〈ある女子挺身〉……………滝 れい子

いぶし責め……………四馬 孝

さてどうしてやろうか……………四馬 孝

手中の珠玉……………四馬 孝

グラビヤ・フォト・セクション……………構成・塚本鉄三

美と幻想とバントマイム……………絹川 文代

喘えぐ白肌……………梨花悠紀子

粘著タッチとゴムカバー着……………大塚 啓子

女体切腹の幻想……………大塚 啓子

Mフォト―幸福なる隷属

基盤の重圧……………梨花悠紀子

アブ・ストーリー―奴隷学園優等生……………影本 晃 36

奇譚三十九夜物語……………辻村 隆 46

児童福祉審議会の勧告に対する私見……………毛利 三雄 60

吉白的随筆 女人紅記 (マダムの脱)……………須藤 律夫 65

告白 私の趣味……………梅川幸二郎 70

長篇連載 宇宙のどこかで……………佐治 麻造 72

おまマニヤの回想 いつかあのころ……………水木 清一 88

住み慣れた地獄をたち去るために……………福田 久文 90

切腹体験者藤村陵子への手紙……………明石満寿男 99

カン作・マニヤのノート……………芳野 麗美 100

妻の体驗 被虐の春……………西田 仁 102

アクロ・ダンサーの告白 曲馬団の娘……………上田 隆子 110

手記―禪……………白山 繁 114

女相撲思い出話……………津谷 正春 116

拒信往来 女相撲実録……………伊万里 進 117

当代女武勇列伝……………諸岡 賢男 118

まぞ川樓自註 海辺にて……………西田 仁 125

女形役者の回想告白わたしの青春……………阪東 秀美 126

下着マニヤ 洗濯夫の幻想……………秋元 悦男 134

告白 バックナンパー……………川端多奈子 136

短信 吊責めへの誘い……………中田 明 140

S.M.村話 社長と女秘書……………中野 三郎 141

切腹研究 法谷四郎論……………中康 弘通 142

手記 私の闘病記……………島崎 収 148

新聞記事のイメージによる小品……………桐野 次郎 158

地下第三特高調室の女……………高宮 良一 164

緊縛フォト撮影の実際(モデルと読者の便り)塚本 鉄三……………168

分譲品案内……………174

本誌最近号 総目次……………176

読者通信……………178





# 風流いろは歌留多

三十九夜同人作  
淹れ子魚

あ



荒縄に  
乱れ髪

き



聞いて極楽水

縛られ  
地獄で

さ



猿轡は

女  
イテンパの

め



目隠し  
恥しき  
か

隠れ

み



身をきる鞭が  
マリの  
願望

ゆ



湯敷を  
覗

怒心  
られ  
る



# 首振り人形

四馬孝画







異臭の中の芳香 四馬孝画





回 転 す る 苦 痛 四 馬 孝 画





M 画 『 御 挨 拶 』 栗 原 伸 画



# 祖国敗れたり

滝 子 画

(ある女子挺身隊員の最期)





いぶし責め

四馬孝画





「さてどうしてやろうか」

四馬孝画







手 中 の 珠 玉

四 馬 孝 画

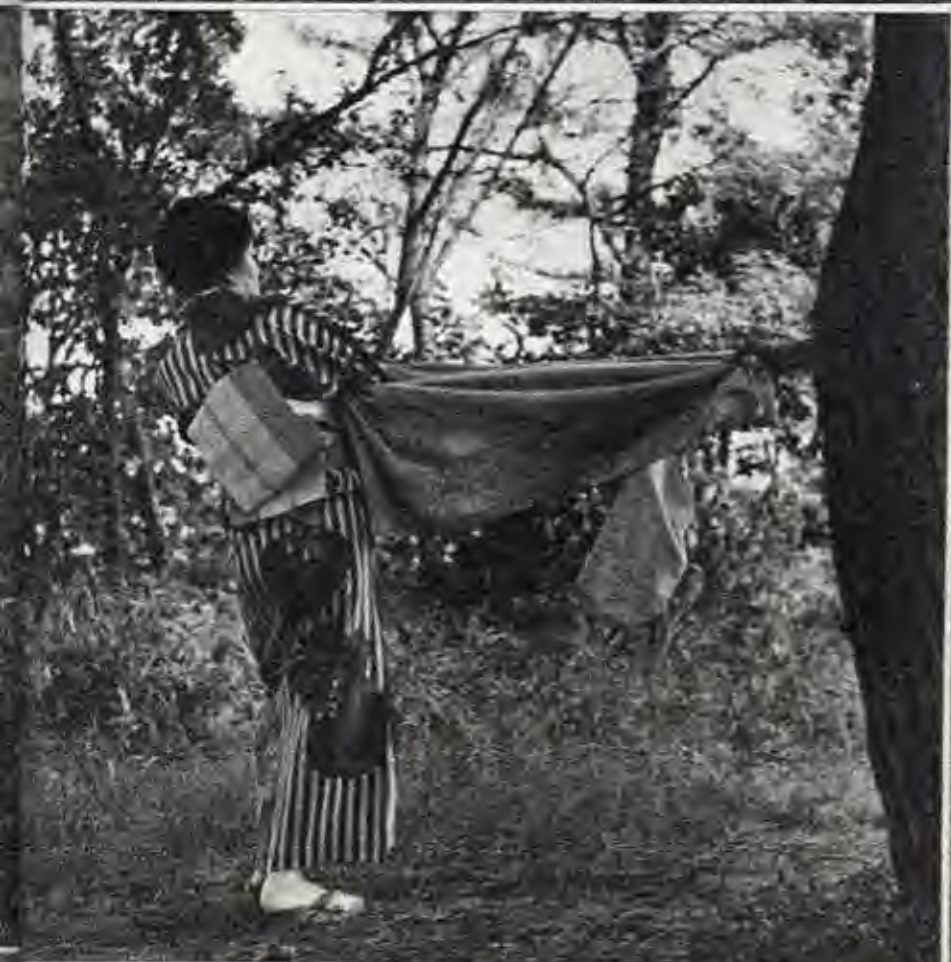


# 美の幻想とパントマイム

構成 塚本鉄三





















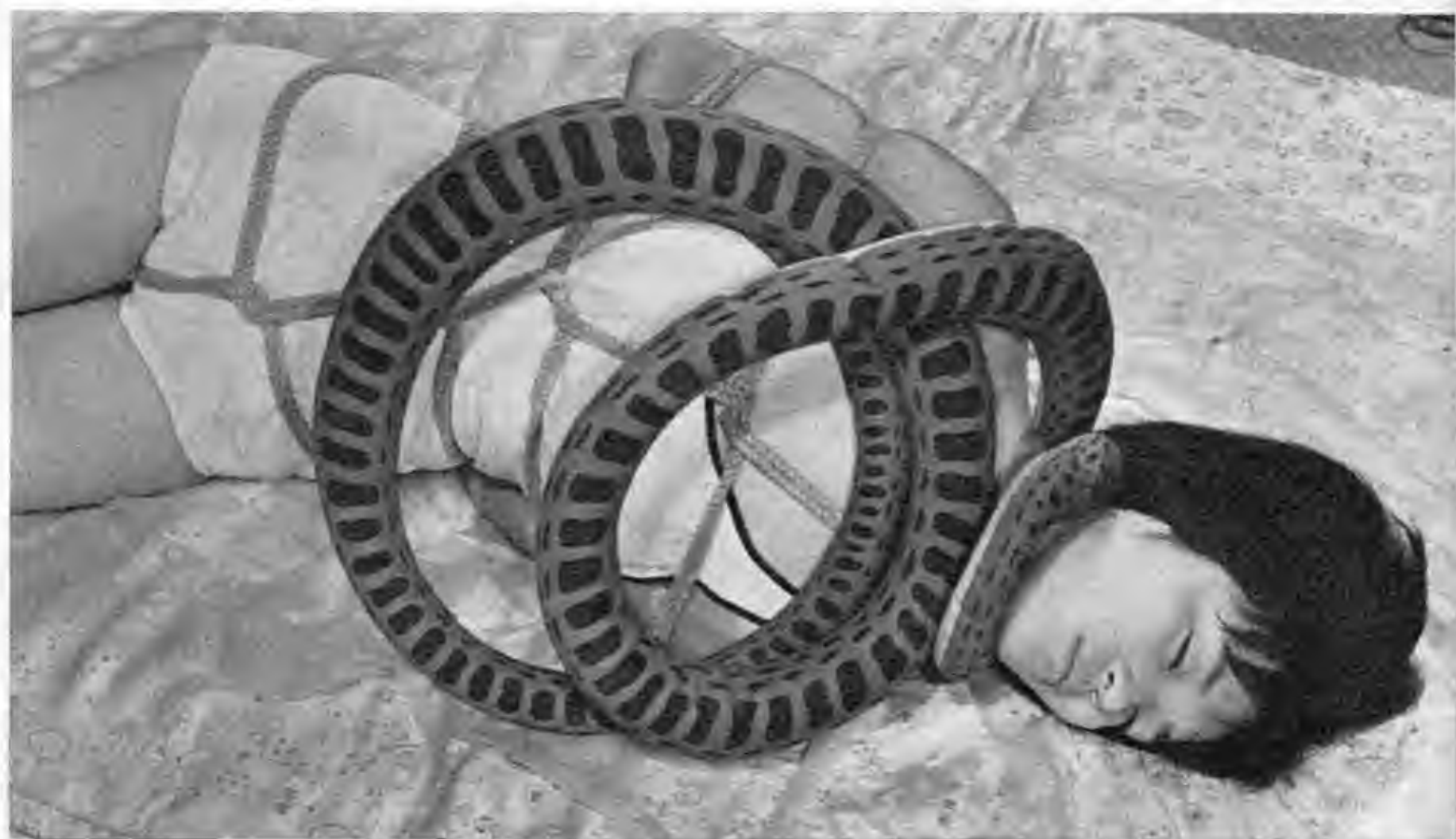








肌白くえ喘











ゴムカバー着







粘着タッチと





女体切腹の幻想















幸福なる隷属





基盤の重圧



新しい風俗文献研究誌

奇 譚 ク ラ ブ

七 月 号



1962年 7月号

(第16卷 第7号 通刊 第167号)



アブ・ストーリー

## 奴隷学園優等生

影 本 晃

## (一)

本宅から中庭を通って、寮兼校舎の建物にと、中川一郎はゆっくりと歩を進めた。夏休みも終り、九月の新学期の初めての授業だった。中川は、この学園の唯一の講師で、しかも、外界からここにやって来る唯一の人間でもあった。彼は、この学園の園長富子女史の夫である蛭島邦彦の友人であった。彼は、ここで英会話と世界史（実は、奴隷史）を教えていた。

寮に入ると、この校舎の中で、これも唯一

の狭い普通の教室のドアを開けて入った。「起立！」と若い、よく響く声と共に十人ばかりの娘が、勢よく立った。

「礼！」と始めの娘が叫んだ。皆、丁寧に頭を下げた。そしてそのまま、立ったままだった。この学園では、教師の許しがなければ席に坐れなかった。

中川は、教壇に立って、生徒の顔をゆっくりと一人、一人見ていた。娘達は、みな黒い水着一枚の姿で立っていた。女の子達の胸には、ゼッケンのような布がついていて、大きく、A、B、Cの字が書いてあるのだ。この

学園では、本名は呼ばず、この記号で生活しているのだった。

前の学期と同じく、組長は一番古顔のA子だった。中川は、一番前の席の横に、新しい生徒を発見した。目の大きな、可愛らしい娘だった。胸にL子という札をつけていた。

「掛けてよろしい！」と中川は重々しい声で言った。生徒達はそれぞれの椅子にかけた。生徒の席は、一つ一つの間をゆったりとあけてあった。小さな椅子にかけた生徒は、誰も胸を張って、全く、正しい姿勢で、中川の方に視線を集めた。組長のA子は、立ってきて、



中川に丁寧に一礼すると、壁にかけてある一本の鞭を差し出した。A子は、大柄な娘で、この奴隷学園に、もう、三年以上も居るのだった。中川は、英語で喋り出した。それは、可成、程度が進んだものだった。ここの教育では、解っても解らなくても、水準を一番高い教育程度に置き、初歩のものは、努力してついて来なければならなかった。

今、教室に居る娘達は、八人だった。この生徒は、全部で、十四、五人居る筈だから、後の者は、当番か、懲罰刑を受けているのだろう。当番というのは、一週間交代で、四人の生徒が、園長一家の女中として奉仕しているのだ。懲罰刑を受けるものは、どんな日でも、二人や三人はあった。この生活は、それ程、苦しい苛酷なものなのだ。

中川は、授業をしながら、新人のL子が気になって、ジロジロと眺め、その席の廻りを歩いた。質問を試みたが、案外英語の学力はあった。他の者より、寧ろ、出来るくらいだった。この教室の椅子は、普通の学校のものと同じだが、表面の板の上に、三角形の棒が三本打ってあるので、腰掛けてはいるだけで、相当に辛いものだった。生徒達は、それでも、全く、姿勢をくずさずにキチンと掛けて

いた。

中川は、一番年の若い、やせ細ったN子の姿がない事に気がついた。あの顔の蒼白い病身な子は、また、失敗して懲罰を受けているに違いないと思った。それから、一番美人で体格のいいE子の姿が見えないのにも気がついた。E子は、要領がよく、寧ろ、ずるかしこい方だから、懲罰を受ける事は、めったにないのだ。と言って、朝、本宅を覗いた時は、当番女中でもなかったようだ。中川は、そんな事を考えていた。その間に、自分が教えるのがくたびれたので、生徒の中から二人選んで、日常生活の会話をやらせてみた。この奴隷学園では、外人のメイドになる事もあるのだ、英会話は、特に、重視していた。

二人の生徒は、教壇に出て、一人は、主人役、一人は客の役をやって、英語で喋った。解らなかつたり、失敗したものは、教壇の横の懲罰台に立って、別の娘が代りに応待をやって。懲罰台に立った娘は、中川の持っている鞭で、力一杯に打たれるのだ。

だが、中川の授業は、この奴隷学園の授業の中では最も楽で、娘達にとっては、安心していられる時間なのだ。他の授業は、こんな生やさしいのは、一つもなかった。

この学園は、女奴隷をつくりあげる事が目的の養成所なのだ。立派な奴隷となるためには、英語もしやべれ、家事の一切が出来、その上にあらゆる苦難に耐えられる精神と肉体がつくりあげられるのだった。応接間には、「忍耐」という大きな額がある。「忍耐」こそこの学園のモットーなのだ。

この学園の園長蛭島豊子女史は、「大和撫子である日本の娘は、良妻賢母になるためにあらゆる苦痛に耐えねばならない」とおっしゃるのだった。「絶対服従」も、この学校のモットーだった。

授業は、中川の教えるもの以外に、豊子女史の教える修身、家事。学校経営のすべてや、主事の蛭島邦彦の教える体操。豊子女史の妹の浪子女史の教えるアクロバット・ダンスと音楽などがあった。どの授業も、立派な女奴隷をつくるために、厳しく、苛酷なものだった。これ等の人々は、この学園内に住んでいた。その他に、女奴隷となる生徒が、万一にも逃げたりする事を監視する寮母の川村女史、門衛兼用心棒の田中、小使い夫婦もこの学園内に住んでいた。表面はアクロバットの教授場となっていたが、完全な監獄と同じようなものだった。ここの生徒をどうして



集めるかは、中川も知らなかった。何でも、孤児や家出娘、継子などを集めるらしいが、本名や前身については、園長夫妻以外には、秘密になっていた。

中川は、新入生のし子に、大いに興味を持



った。一目見た時から、その娘が、彼の趣好にピッタリとしていた。色白で、やせ型ではあるが、日本人に珍らしい鳩胸で張り切っていた。胴は細く、手足もスナリと

必要上、胴を細くするため、夜は固いコルセットをつけて床につくし、アクロバットをやられ、粗食と過労で仕上げられるのだから、誰も、胴の太い肥った娘は居なかった。大柄なA子でさえ、決して世間の娘に比べて肥って居るのではない。A子といえば、中川が、新入生のし子に興味を持った事を、早くも感じ、嫉妬に燃える瞳で、ジッとし子を睨みつけていた。

授業が終っても、この生徒は廊下を駆けたりなど絶対にしなかった。ピカピカに磨いてある廊下を、そっと音のしない様に歩いて、次の授業のアクロバット・ダンス場に行くのだった。庭に出る事は

許されなかった。体操も、雨天体操場でするのだ。

中川は、校舎を後に本宅に入って行った。

女中として園長一家に奉仕する生徒が、廊下で、丁寧に、中川に頭を下げた。この当番になった生徒だけ、粗末なセーラー服に白いエプロンをかけることを許されていた。

中川は、応接間に入った。ここは、事務室にもなっていた。蛭島邦彦が大きなテーブルに向って、何か書類を見ていた。

「中川君か、御苦労さま」と笑顔で迎え、傍に立っている当番女中に、「お茶!」と鋭く命じた。蛭島は、中川と年令は同じの三十八才だが、五十近い程の年に見えた。ガッチリとした体の赤ら顔で、髪の毛が、真白になっていた。

「E子が見えないが、どうしました。」

中川は、長髪を手でかきあげ、眼鏡越しに邦彦を見て言った。

「ああ、E子か。君は、あの子におぼしめしがあったのか。ワハハハ……」

邦彦は、大声で笑って、醜い顔をしわくちゃにした。

「冗談じゃない。ボクは……」

中川は、本心をつかれたので、われにもな





邦彦がそう言った時、園長の豊子女史が入って来た。「アラッ、中川先生でしたの。」

金縁の眼鏡をかけた背の高い、カマキリのようにやせた豊子は、流行のサック・ドレスなどを着ていた。中川は、豊子園長にも信用されていた。三人は、いろんな雑談をして、時を過ごした。

「N子は、また、懲罰ですか」

川中は、豊子夫人に訊ねた。

「ええ、何故？」

「あの子は病身で弱いから……」

中川は、顔を曇らせた。

「オホホ……中川先生のまたヒューマニズムね。女というものは、ビシビシと育てなければ駄目です！」

豊子女史は、蛇のような目で中川を睨みつけた。

「懲罰室ですか。ボク、一寸、見て来ます。」

中川は立ち上った。

「N子は、私の居間の方に居ます。」

豊子の声を後にして、中川は、奥の方に入

って行った。中川は、蛭島夫妻のこの奴隷学校の主旨に賛成だったが、時には、生徒達の身の上を心配した。

豊子女史の居間に入るのは始めてではなかったが、日本間の八畳の襖を開けて入って、中川は、ハッとした。

居間の壁の前にN子が裸形で立たされているのだ。しかも、実に、奇妙な姿をしているのだ。N子は、一本足で立ち、一方の足は足首と太股を鎖で縛られている。N子の頭には、徒然草の仁和寺の僧ではないが、大きな鉄の火鉢をかぶせられ、両手を前に出して、金魚鉢を差し上げているのだ。鉄の火鉢は、やせ細ったN子の肩の骨でささえられているのだ。

中川は、立ったままこの娘の姿を眺めた。蒼白い肌には、懲罰と折檻による鞭の痕、灸の痕が残っているのだ。全生徒の中で、この少女が、一番園長に憎まれ、折檻された。その理由は、この少女は体力が弱く、どんな授業でも一番ビリだったからだ。

「苦しいございます。もう、お許し下さいまし……腕が……お……おれそうです。」

N子は、園長先生が入って来たと思ったのだろう、細い声で哀願した。

中川は、黙って、前に出ると、少女の捧げ

く赤くなった。

「売れたよ。すばらしく高く。」

邦彦は、低い声で囁いた。

「売れた？」

「驚ろく事はないさ。卒業させたのだ。夏のパーテイで、外国人がメイドに言って……」

「そうですか。」

中川は、当番の持って来た熱いお茶を飲みながら目を伏せた。

「あの子も、幸福になるよ。いい奉仕員になるだろう。」



る金魚鉢を受け取ってやった。少女は倒れそうに、中川の肩に摺った。中川は、金魚鉢を畳に置くと、少女の頭にかぶせてある火鉢を脱がせてやった。

「アッ……中川先生」

少女は、ハッとして、顔を赤らめた。

少女の両肩には、火鉢の縁で出来た赤い傷が痛々しかった。

「中川先生！ まだ、その子は許してはいけませんよ。」

園長の豊子が、恐しい顔で荒々しく入って来た。

「でも、園長先生。これでは……」と中川は少女の肩の傷を指差した。

「中川先生は、あちらへ行って下さい。この教育は、私の思い通りにするのですから。」

豊子は、キッパリと言った。

## (11)

新入生L子は、この奴隷学園の教育なるものが、どんなものか次第に解って来た。一日中、水着を着せられ、御不浄にも自由に行けない生活だった。夜は、コルセットをつけさせられた。胴が一定の細さになる迄は、どんどん締め上げられるのだった。幸いにも、L

子は、生れつき胴が細かったので、コルセットで苦しめられる事はなかった。厳重な訓練も辛かったが、生徒仲間の嫉妬や憎しみ合いというものが、想像以上であるのに驚かされた。尤も、これは、誰もが懲罰をのがれるために、相手を蹴落さねばならない事から起った。その日の授業で、どの課目でも一番ビリの者は、夜になると園長室に呼ばれて、翌日一日中は懲罰を受けねばならないのだった。

懲罰には、いろいろとあった。L子も、入園してから一カ月以上になるが、もう、何回も懲罰を受けねばならなかった。

その日の懲罰者は、夕食が終ってから、寮から本宅へとゾロゾロ並んで行った。

まず、園長室に入って、そこで寮母の川村女史が報告して、豊子夫人に引き渡すのだ。川村女史はデブプリ肥ったオールド・ミスだが、体に似合わぬ陰険な女だった。彼女は、気分次第で、ある事、ない事を報告した。また、自分の嫌いな生徒は、何回でも懲罰組に入れた。L子は、授業の成績はよく、懲罰に廻る事はないのに、川村女史は、彼女がやさしく、可愛らしいのが憎く、何とか理由をつけて、懲罰に廻すのだった。

懲罰組の娘は、第一に、懲罰試験を受けね

ばならないのだ。これで合格をすれば、合格者一人だけは、懲罰を許されて、寮に帰れるのだ。この試験は、浣腸による耐苦試験であった。そして、一番我慢の出来たものが、合格者と認められるのだった。

園長室の木の大きなテーブルに、娘達は、観念の眼を閉じて並んだ。この時は、夜なので、娘達は水着ではなく、みな縞模様の囚人のようなネグリジェだけだった。

園長の豊子は、一人の時もあるが、よく夫の邦彦や妹の浪子女史を動員した。時には、A子のように古い生徒が当番の時は、当番女中にも手伝わせる事があった。

園長先生は、タイム・ウォッチを押して、じっと娘達を見ている。

我慢の出来なくなった娘が、次々とテーブルから飛び下りて、廊下に走り出て行く。

L子は、両手を組んで、じっと耐えた。

また、一人の娘が走り出て行った。

L子は、何か別の事を考えて、忘れようと努力をした。中川先生の顔が思い出された。他の生徒より自分に特別にやさしくして呉れる事も解っていた。彼女は、継子で不幸な半生を送って来た。ここに入れられたのも、継母の考えなのだ。継母にいじめられて育っ



た彼女は、この学園の苦勞も、他の者より耐え得られた。

また、別の娘が走り出た。今夜の懲罰者は五人だから、もう、テーブルの上にいるのは、L子ともう一人の娘だけだ。どうしても、最後の一人になりたいとL子は、齒を喰いしはって我慢した。横を向いて、もう一人の娘をL子は見た。C子だ。A子について古顔の娘だ。鼻筋の通った美人のこの娘は、ガンバリの強い生徒の一人だった。L子にとっては大の強敵だ。

L子は、もう耐えられなかった。万一に不仕末でもしたら、それこそ、最大の懲罰を受けねばならないのだ。

落第した娘達は、蒼い顔で壁の所に並んで立っている。

「もう、駄目」とL子は心で叫んだ。体がブルブルと震えた。隣のC子も、体が震えているようだ。

L子は、遂に負けた。我慢出来ず廊下に走り出てしまった。L子と何秒も違わずに、C子も走り出た。苦しみから一応解放され、しおしおとL子は、室に帰って来た。

園長の豊子は、ニヤリと気味悪い笑いをL子に投げかけた。

C子だけは、許されて寮に帰えされた。

園長の豊子は、十分ばかり訓辞をした後、それぞれの懲罰を命じた。重い者は、懲罰室に、連れて行かれるのだ。軽い者は、その場で鞭打たれたり、椅子に後手に縛りつけられたり、ある者は、N子の様に片足を縛られ、翌日一日中、勤務奉仕の手伝いをさせられたりするのだ。

L子は、重い懲罰者の一人なのだ。何故なら、合格者と勝負して負けた者は、一番ひどく折檻されるのだった。

L子と今一人重刑者のS子は、地下室に連れて行かれた。二人は、暫く、そこで立って待たされた。この暗い電燈のついた室には、いろいろの折檻道具が置かれていた。園長先生は、間もなく、夫の邦彦を連れて来た。

「あんた。今夜は、この二人よ」

豊子は、ニヤニヤとして犠牲者の方を指差した。

二人の娘は、園長先生の膝にすがりついてお許しを願った。勿論、そんな事をしても無駄な事は知っていたが、娘達は、どうしてもそうせねばならない程に、恐しかった。

邦彦は、用意の革の猿轡を二人の娘につけL子を壁に立たせて後手に縛り、鎖のついた

犬の首輪を嵌めた。始めにもう一人の娘が折檻を受けるのだ。その娘は、お下げにした色の黒い娘だった。T子だ。T子は、邦彦に押えつけられ後手に縛られ、両足首に鉄の輪をつけ、天井から下った鎖に結ばれると、邦彦は、滑車を廻した。T子は、逆吊りにされるのだった。園長の豊子は、壁の鞭を取ると、この逆吊の娘のやせた背中をビシリビシリと打ち始めた。娘の体は、その度に、クルクルと廻った。

L子は、怖ろしさで体が震えながら、その娘の苦しみを見ていねばならなかった。

「もう、いいだろう。」

邦彦が言った。娘は氣を失っていた。鎖からとかれたT子は、用意の氣つけの注射をされ、今度は、部屋の間際の土間に坐らされ、手と首に枷をつけられた。

「今度はL子だ」

「園長先生、どうぞ、お許し下さいまし。これから氣をつけますから。」

L子は、大きな瞳からポロポロと涙を流して叫ぶのだが、猿轡のため声にもならなかった。

「この娘は、いい奴隷になるよ。優等生だからね。」



園長の豊子は、夫に言った。

「なかなか立派な体をしているね。これも吊しか」

「いいえ。この子は、売りものになるのだから、水責めです。丁度、水責めの訓練になりますからね。」

「では、上に連れて行こう。」

こう言つて、邦彦は、犬の首輪の鎖を壁から取ると「さあ、歩け」とばかりに肩を押した。し子は、後手のまま二人に連れられ、地下室を出た。地下室の扉は固く閉ざされた。

夜は、十時頃だが、家の中はシーンとしていた。当番女中達は、疲れ切つて、部屋で眠っていたし、軽懲罰者も、それぞれの位置で眠っていた。泣いたり、叫んだりする事は、更に、恐ろしい懲罰を呼ぶ事を生徒達はよく承知していた。

「アラツ。兄さま達、何処に居らしたの。」

妹の浪子女史は、廊下で三人に会った。豊子に似て、やせてギスギスした女だったが、アクロバットで鍛えた体と若さがあるので、豊子より美しく見えた。

「この娘を水責めにするんだ。」

邦彦が言った。

「そう。私も見物しよう。」

そう言つて、浪子がついて来た。四人は、浴場に入った。

し子は、タイルの上に後手のまま仰向けに寝かされた。両足を豊子が押さえ、地下室から持って来た足枷をつけた。

邦彦は、し子の狼轡を取ると、水責用の漏斗を乱暴に口をこじ開けて啜えさせた。

「カンニンして……」というし子の叫びは、半分も聞えなかった。

豊子が、水道の栓からゴム・ホースをその上に持つて来た。

「浪子、水道の栓をひねって！」

豊子が命じた。水は流れて来た。し子は、夢中で頭を振ろうとしたが、邦彦に押さえられて、どうしようもなかった。息をつまらせないため、豊子が、適当にゴム・ホースを口からはずして、タイルに水を流した。だが、し子は、咳込んで真赤な顔になった。

し子の細い胴、ペチャンコの腹部は、次第にふくれ出した。

し子の黒い大きな目は、更に大きく見開き苦しさに吊り上つて来た。

「もう、よかろうね」と豊子は、水責めを中止した。

し子は、目を閉じて、ゼーゼーと苦しそう

に息をしていた。あの細い胴、ペチャンコの腹は、今は、はち切れそうにふくれ、臨月かと思われる程だった。

美しい鳩胸は、激しく上下していた。

「なかなかいいじゃない。」

浪子は、二人の方を見て言った。

「そう、この子は、素直な優等生だからね。こうした訓練や仕置に耐えると立派な女奴隷になるよ。」

豊子は、妹の方を見て言った。

三人は、苦しむし子の態を楽しそうに眺めていた。筋肉の動き、線の動き、そうした細かな所を観察するように、暫くの間は、三人は、それぞれの位置から見ていた。

「この娘は、安くは売れないわね」

ポツンと豊子が、誰に向つて言うともなく呟やいた。

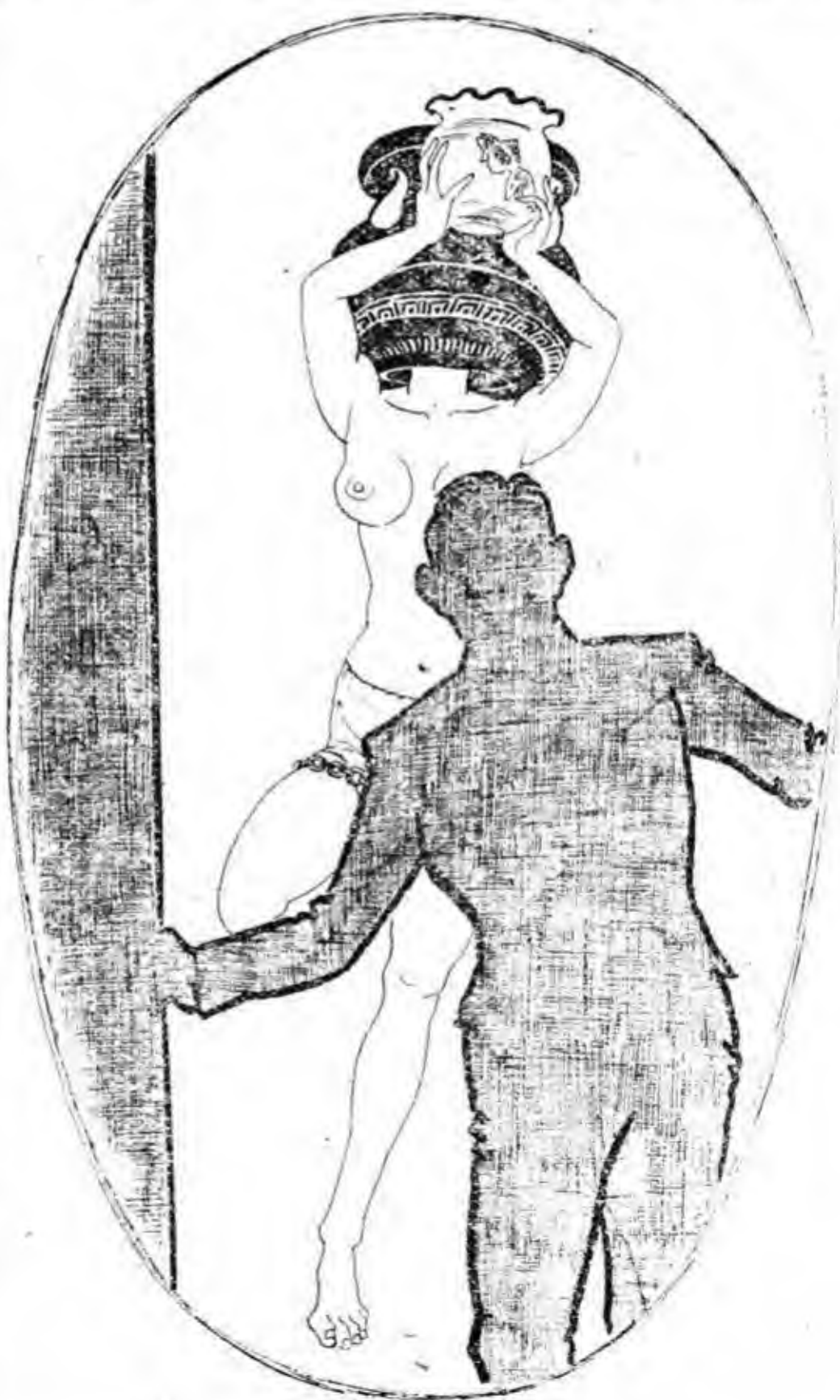
### (三)

し子は、どんな苦しみにも耐えられるだけの修養をつんで来た。誰の目にも、彼女がこの学園の優等生である事が解った。それだけに、仲間の嫉妬も激しかった。何故ならば、よい女奴隷になれば、早く、この学園から出て行く事が出来たからだ。しかも、よい女



奴隷は、高い金で売れるので、肌を傷つけるような仕置は受けなかった。その反対に、劣等生は、生傷の痕が絶えないのだ。何をやっても、体力がないため一番先に駄目になるN子は、一番可哀そうだった。授業を受ける日も殆んどなく、懲罰から懲罰と、園長先生の手許に置かれていた。彼女の泣き声を聞かない夜は殆んどなかった。園長の豊子は、誰よりもN子をいじめた。仲間の生徒も、N子にはつらく当たった。特にA子やC子のような古顔の生徒は、当番女中で園長先生の家に行く時は、寄ってたかってN子をいじめるのだった。

N子は懲罰室に居ない時でも、パンティ一枚で、首に犬の輪をつけて奥の廊下の柱に鎖でつながれているとか、片足でピョンピョンと園長先生の居間で歩かされているとか、浴場のタイルの上に、四ツ這いにされ、手足に重い鎖をつけさせられているとかするのだ。A子やC子は、当番女中になると、用の閑を見ては、N子をいじめに行った。



「牝犬さん、ワンと泣いてごらん」

タイルの上に四ツ這いにされているN子にA子達は言うのだった。細い髪を垂らしたN子が、悲しそうに顔をあげると皆で笑った。彼女の目からポロポロと涙が流れる。

「ワンと言わないの！ これでも言わないのかい！」

A子が、しゃがんでN子の肩の辺りを爪をたてて抓った。

「アッ、イタイ……」とN子は低い声で叫んだ。

「痛い？ 痛いもんかね。アラッ……皆、ごらんよ」

A子の声に、C子達は、しゃがんで、四ツ



這いのN子の胸をのぞき込んだ。

「ホラ。一杯、お灸の痕が……」

「本当……」

他の生徒達は、身につまされたのか、しみみりした。さすがのA子も黙って、この傷だらけの娘の姿を見ていた。

L子は、誰よりもN子の味方となってやっていた。当番女中の時は、何かの失敗をN子にしても、それを自分の罪にして、彼女を出来るだけ折檻から救ってやった。

ある時も、細い両腕に、一杯水の入ったバケツを下げて廊下に立たされたN子が、余りの苦しさにバケツの水を廊下にこぼした時も当番女中だったL子は、自分が走って来て、突き当たったのだと園長に報告して罰を受けた事もあった。このため、L子は、A子やC子の憎しみを受ける事にさえた。

翌年の春に、女奴隷の売買が行われるパーティーが催された。表面は、何でもないパーティーなのだが、この日は、優等生と思われる生徒達が、このパーティーの招待役として、サービスに出席するのだった。金持連中の貴夫人達が、女中として、女奴隷を探しに集って来るのだ。そして、その場で話が決れば、売れた生徒は、その新しい主人と一緒に学園を出

て行けるのだった。このパーティーには、女ばかりの会と、男ばかりの会と二つ催された。

女の会では、不思議に美貌の生徒は、売れ残った。男の会では、その反対だった。

この会が催される二日間だけは、すべての生徒が懲罰を受けず、洋服を着て、普通の生活をする事が許された。尤も、卒業の見込みのない者は、寮の方に閉じ込められているのだった。N子などは、その組だった。蒼白い顔で淋しそうな彼女は、一人ポツンと寮の部屋に居た。寮に残ってる他の生徒達は、食堂に集って、珍らしく出される甘いものなどを食べ、ワイワイと互にふざけ合ったりしていた。

本宅の方では、優等生達が、普通人と同じような思い思いのワンピースを着て、お客のサービスをしていた。女達の会の時は、園長先生が主役であつたし、男達の会は、主事の邦彦が主役だった。前日にあつた女達の会でA子と他の一人が買われて行った。A子は、随分長く売れ残っていたので、大喜びで、新しい御主人の貴婦人と自動車で行った。男の会が始まる日の昼間だった。中川は、悲痛な顔で、何時間も邦彦と応接間で話をしていた。豊子園長も話に加わっていた。

「よろしい。じゃ解った。他ならぬ君の事だから、承知しよう。」

邦彦は、ドンと卓を叩いて大声で言った。

「では、中川先生、おやめになる考えは撤回したのですね。」と豊子が念を押した。

「ええ、L子をボクの妻として下さるなら。」

「それは承知しました。だけど、N子も連れて行くというのは承知出来ません。」

豊子は、怖ろしい目で中川を睨んだ。だが中川は、既にL子と約束をしていたのだ。

「ですから、必ず、ボクが責任を持って、新しいよい生徒を二人連れて来ると申上げているのです。」

「それは、そうして貰わなくては。N子とも角、L子は本学園の優等生だから、莫大な利益を生む女なのだ。それを、君の妻に渡すというのも、君とボクの間柄だし、この秘密を世間に知られたくないからだ。」

邦彦は、怒ったように言った。

「まあ、いいわ。中川先生なら、安心して、今後も交際出来るから。それに本学園の生徒を奥さんにして呉れたら、秘密を売る事もしね。オホホ……」

「では、承知して下さるのですね。L子の事も、N子の事も。」



「そう。あんたが、今後も献身的に学園のためには働いて下されば……」

三人は、固く手を握った。

L子が呼ばれた。L子は、中川からすべてを話された。

「N子さんも、一緒に……」

L子の大きな目には、感謝の涙が光っていた。

「園長先生、有難うございます。」とL子は豊子女史の骨ばった手を取り、甲に接吻した。豊子女史は、何時もと同じ表情で、冷めたくL子を見下ろしながら言った。

「あんたは、この学園の模範生だから、いい奥さんになれるだろうよ。本来なら、あんたは、今夜のパーティーで、人気者になって、中川先生よりも、もっといい御主人を得たのかも知れないけどね……」

豊子は、そう言っ、て、深刻な表情をしてかしまっている中川の方に、皮肉な視線を投げた。

「そう決まれば、一時も早く、出て行って貰いたいな。こちらは、今夜のパーティーの用意もあるし、最優等生を奪われたんでは困ったものさ。ワハハハ……」

邦彦が、ガラガラ声で笑った。こんな事を

言っても、邦彦にしても、豊子にしても、L子やN子が居なくなっても、大して困らないのだ。

寧ろ新入生の不足している時だから、中川に、うんと恩をかけて、新しい娘を連れて来させる方がよいとさえ思っていた。

L子は、大急ぎで、寮に飛んで行った。L子は、N子の姿を探した。

だが、何処にも見えなかった。寮の寝室に行った。

「Nちゃん、何をするの！」

L子は、大きな叫び声と共に、N子に飛びかかった。

N子は、何処で手に入れたのか、鋭いナイフで喉をつこうとしていたのだ。

「アッ、お姉さま……私……」

「バカ！、バカ！」

L子は、N子の手からナイフを奪い、蒼白い彼女の頬に平手打ちを加えた。こうする事が、N子に元気をつけると、L子は思ったからだ。

そこへ、中川もやって来た。

「Nちゃん、あなたは、私と一緒に中川先生のお宅に行くのよ。」

「エッ……」

N子は、ポカンと口を開けて、L子の顔を見た。

パーティーの日なので、サービス女中のL子は、美しく化粧していた。その化粧した顔に大粒の涙が流れているのを見て、N子もワッと泣きくずれた。女奴隷は、絶対に泣いてはならなかったのだが。

中川は、L子の大声を聞いて集って来た先生や、寮母の川村女史を室から押し出して、二人だけにしてやった。

そして、彼は、ゆっくりとした口調で、川村女史に、L子とN子の私物を出して呉れるように言った。

「ヘエー、本当ですか？」

全く、呆れ返ったという顔で川村女史は、まじまじと中川を顔を眺めていたが、園長先生の命令とあれば仕方がないといった風に、首を振り振り階下におりていった。

部屋の中では、二人の奴隷娘が抱き合って嬉し泣きに、まだ泣いていた。

この二人の娘が、本当に幸福になるかどうかは、また、別の話だった。

(おわり)

## 奇譚三十九夜物語

オ十六夜

辻村 隆

山も緑、野も緑、街にも緑、そしてこのビルの谷間の一角にも、緑の匂いがそこはかとなく忍びよっている様な宵のひとつです。

暖房も冷房もない、自然な空気のクラブの一室に、八人の退屈男は、今夜も獵奇を求めて集いました。

「唯今、皆さんに回覧致しました様に、特に我々の為に、羽村京子さんから、データや参考資料と共に、『奇ク』には未発表の貴重な告白文を送って戴きました。彼女の好意に酬いる意味で、今夜は彼女のアイデアなり、参考資料に基づいて、皆様の話を発表して貰いたいと思います。」

スバル氏は一巡して手許に戻って来た、羽村京子さんの、原稿用紙二枚半の裏表に、ギッシリと細字で小さく書かれた告白文と、資

料を手にして、一同を見廻わしたのです。

「この儘『奇ク』に発表すれば、随分喜ばれる読者もあろうが、全文の三分の二以上削除じゃあ意味もないしね。特に羽村京子さんが彼と呼んでいる御主人との夫婦生活なんか、私の趣味にピッタリで嬉しくなるネ。私の女房に、彼女の半分程度でもこの種の趣味があれば、人生も亦愉しからず哉なんだけど……」

ナイロン氏は慨嘆調で呟きました。

「それに本をよく読んでいますね。特に女性としての想像力の強さは抜群ですよ。我々で考えた三十九夜いろは加留多の『蓮華往生、女を尻から串ざしに』の一句から、可能性の限界を探求していますしね」



パイプ氏も、さもさも感心した様に、そう云って、

「そうそう、この句はゴルフ氏が考えたのじゃなかったかな——」  
と、ゴルフ氏に問いかけます。

「確か私でしたね。この一句から、私は羽村さんの文を引用して、今夜の口火を切ろうと考えついた処です」

改めて、ゴルフ氏は羽村京子さんの、細字で原稿紙一杯に埋めつくされた、彼女の告白文を手にとると、さてと改まりました。

### 第三十九話 串刺し私刑談

羽村京子の告白文から。

「(前略)……四月号の目次裏にのっています「蓮華往生、女を尻から串ざしに」というのですが、これはやれば出来そうです。医者のつかう胃鏡の原理で、胃まで上から固い筒をさしこみ、胃壁を中から切開して腹腔内に突き出します。一方、下からは体のうしろ側を切開して腹腔内に出ます。両方をうまくつなぎ合せた後、一本の鉄棒と取り替れば、彼女は完全に串ざしになるわけです。(直腸を破って腹腔内に出てもいいと思います)四肢をそれぞれ伸ばして鉄棒に固定します。両膝の間隔が二〇センチ位、両足首では一〇センチ位、両肘の間隔一五センチ位、両手首五センチ位です。鉄棒の両側に金具で固定するのです。出血は少しずつ、徐々ですから、まだまだ生きていて、ピクピク動いています。それを生きたまま野外で火にかけて、ぐるぐる廻転させ乍ら焼いて食べるのです。臓物入りのままの、風流な野外科理(バーベキュー)です。一通り焼いたら皮膚を剥いでもう一度火にかけ、ソースを塗りかけながら、ゆっくり焼くのです。こうなるともう「わたしを料理して下さい」という

ことになります。……(後略)」(原文の儘)

蓮華往生は、芝居講談でおなじみ深い、延命院日当の好色物語に出てくるのであって、日夜漁色に耽る延命院が、遂に女の始末に困って、法悦境と称し、香煙渦巻く金色の大蓮華に、座禅を組ませて女を座らせるのである。大蓮華を支える茎は太い筒になっていて、地下と蓮華の中心の、恰度尻の位置が、一本の筒によって結ばれている。女がこれに坐ると、合図と共に、悪僧が、地下から穂先の鋭い槍を繰上げ、ズブリとさし通す仕掛になっている。まさか頭のとっぺんへ突き抜ける事もあるまいが、腹腔から胃袋位までは突き通した事であろう。溢れる血汐は茎の筒を通して、地下へ落下する。女は下から刺し通された儘だから倒れもせず、仏經の莊嚴な楽の音に消されて悲鳴も聞えない。つまり蓮華の上で往生すると云うことになるのである。

江戸の鎖国期には、こうした邪教が股賑をきわめたが、こうした宗教による弾圧や、異端者の極刑は外国の方も之に劣らなかった。右の様な串刺しの刑罰は、有名な宗教裁判に於ても見受けられる。これはキリスト教に於て、異端をなくすため、カトリック教会や、皇帝、君主が行なった裁判で、徳川時代に於ける、日本でのキリスト教の弾圧と対照的である。これは四世紀末、ローマ皇帝のテオドシウスが国教として以来、種々の刑罰を課す様になったが、十一、十二世紀、異端者が多くなった為、特に刑罰も極端になって来た。十三世紀になると、裁判官が各地に派遣され、自首や密告の手段で異端者を探し出し、裁判、拷問によって自白させ、残酷きわまる刑罰に処した。旧教国のスペインでは特にそれが激しく、何千人という

人間が殺された。舌を抜いたり、火焙りにしたり、手足を切断したり、人間の想像で考え得る、あらゆるむごい行為が、宗教裁判の名の下に執行されて来た。フスやジャンヌ・ダルクの火あぶりも有名であるが、こうした刑罰の絵画の中に、かなり多くの串刺し刑も見受けられる。

羽村京子さんが想像する、人間バーベキュー的な行為が、実際に行われて来た事は、こうした絵画の中からも容易に想像出来るのである。閑話休題——串刺し私刑のこんな話がある。

伊那の山々が深い溪谷をつくり、天竜川が白い牙をむいて、噛みくだけている谷間の、猫のひたい程の土地に、新八の粗朶で蔽われたあばら家があった。筏流しのしがねい稼業の新八にとって、現在の生甲斐は女房おきぬとの、二人っ切りのたのしいひとときだけである。

信州伊那で生れ、天竜川で産湯を使った新八が、東へ三里離れた城下町の高遠の居酒屋へ、散々足を運んで、漸やくものにした女がおきぬであった。

おきぬにとっては、新八が、せめて三州街道沿いの小宿場、伊那部辺りにでも住んでいたのなら、又氣も紛れたであろうが、何と云っても、猪か猿やむさびの姿しか見掛けぬ山奥の一軒家である。水商売に馴染んだ女だけに淋しくてやり切れない。

それに筏を流して新八が天竜川を下ると、早くて十日、遅い時は二十日以上も留守にしているから、益々やり切れない。

身代金の八両を、しがねい筏流しの新八が、そっくりの貯わえを投げ出して自由な体にくれたのだから、おきぬにとっては文句

のいえた義理ではない。

やりきれない淋しさから、おきぬは、いつか新八の眼を盗んで、炭焼き男の六造という男と密通した。

谷間の一軒家でもあるし、人の往来とて殆んどない僻間の地だから、新八が筏に乗ると、二人は公然と夫婦氣取りの振舞に耽っていた。

大嵐の前触れを聞いた新八は、仲間達と、途中で筏をしっかりつなぎ、無気味な風の吹き始めた険しい山道を、夜をこめて我が家に急ぎ足でとって帰した。

昨日の朝、新八を送り出したばかりのおきぬは、早速六造を家に引き入れていた。

樹々を震わす激しい夜風と共に、土間の戸が開いて、いきなり新八が風に巻かれて飛び込んで来た。

瞬間の出来事であり、おきぬは身繕いする間もなく、しどけない露わな姿で飛び起きた。この場の有様は、一言の弁解の余地もなかった。

新八は可愛さから、憎さ百倍の、怒り心頭に発した。

わなわな打震えて、蒼ざめたおきぬを蹴倒すと、新八は腰の山刀を六造にかざして、じりじりと殺氣をこめて、恨み骨髓に徹した姦夫に近づいた。

激しい死闘が続いて、腕力に勝る六造が、ついに新八を組み伏せてしまった。

「おい、その縄を放ってくれ！」

六造は、息を弾ませ乍らおきぬに命じた。おきぬは無言でうなづいて、筏をつなぐ太い縄をずるずると六造の手許へ引っ張り出して



きた。新八を放せば、自分は殺されるにきまっている。おきぬは咄嗟の思案で、亭主を捨てて間夫についた。

六造が新八の腕を捻じ上げて、後手に縛々と縛り上げる間に、おきぬはバタつく新八の両足を縛るのを手伝った。

「フフ、悪く思うなよ。命をとるのだけは許してやるぜ。その代り女房は貰って行くからな。こいつはな、手前の様な甲斐性なしの、女房を放ったらかしにしておく亭主は大嫌いだとよ……」

両手足を縛られて、土間に転がる新八に捨て台詞を残して、六造は悠々と塵を払ってその場を立去った。おきぬはチラリと憐みの眼を彼に投げたが、思い返して、匆々に身の廻りのものと、有金を風呂敷に包み終ると、そうこうと六造のあとを追って、嵐の闇に消えた。

歯ざしりして身悶えしていた新八は、土間に転がった己れの山刀に、尺取虫のようにじりじり近づく、後手の両手首を山刀にゴシゴシこすりつけた。皮膚の破れや、斬れ目から血がにじみ出たが、ようやく太い縄は切れた。

大胆な六造は、おきぬを炭焼小屋に引き入れて、新八の癖から半里も離れぬ先で、のうのうと樂しげに暮していた。

恨み重なる相手ではあるが、尋常に立向えば、所詮新八に勝ち味はなかった。

喃喃と暮している様に見えても、その実、六造は細心の注意は怠らず、小屋の廻りに鳴子をめぐらし、刃を肌身から離さず、小屋の戸締りは厳重を極めていた。

暫らくは用心していた六造も、聴て半年もすると、徐々に注意の



紐がゆるんで来た。

或る夜、六造が、仲間の婚礼の振舞酒によばれたのを知ると、新八は時こそ来れと、寝刃を研いだ。帰りを待ち受ける闇の茨道に、間もなく、足許も乱れた六造がさしかかって来た。

勝負は一瞬でついた。恨みのこもる棍棒をいきなり頭にうけて六造は、ギャーッと一声咆えて血汐のふき出た頭を抱えて昏倒した。急所を外れたのか、彼はヨロヨロとよろめき起って必死に逃れようとする。

新八は弱った六造をぎりぎり縛り上げると、かたわらの雑木にしつかりとつないだ。

△この儘、あっさり殺しては、俺の腹が癒えねえ。姦夫姦婦を並べて、鬭り殺しにしてやらぬば……。おきぬのあまをここへ曳ずり出してきて、料理はそれからだ▽

憤怒と嫉妬に狂った新八は、その足で炭焼小屋を襲った。

おきぬは既に寢床に入っていた。戸の開く音に、背を向けた儘、

「あんたなの？ 遅かったじゃないの——待ち草臥れて、先に床に入ったところさ——」

と、甘え声をかける。

新八は黙々と、おきぬの傍らに近寄った。

おきぬは向きを変えて男を見上げた途端——「あーッ」と、たまげた悲鳴をあげた。

「うぬ——このあまッ」

新八は、ぐいとおきぬにのしかかると、手筈しておいた荒縄で、腰巻一枚の後手を捻じあげ、力任せに後手に縛り上げた。

「いくら、泣いたって喚いたって、六造の野郎は来はしねえよ。喚

け喚け！ 手前の可愛い男に逢わしてやるから立てッ。畜生！」半裸のおきぬを引き立てて、新八は表に出た。小屋のそばに立てかけてあった炭焼用の長い火掻き棒にフト眼をつけると、彼は、無気味に頬を歪めて、ニヤリとひきつった笑いを浮べた。

長い鉄の火掻き棒を片手に持ち、縄尻を片手に握って、素足のおきぬをこづき上げ、しばき上げ乍ら、茨や石ころの山道をとって返した。

茨にかかれ、石にけつまづき、彼女の素足は無惨にも血にまみれていた。

沸々たる復讐心が新八の心を疼かせる。六造もおきぬも、今はすっかり彼の思いのままである。姦夫姦婦を並べておいて、散々に痛めつけ、鬭り殺しにする快虐に、新八は様々な苛め方や責め方を頭に浮べて見た。

その彼方に、六造の荒い呻きが聞えて来た。

彼は疲れ果て、困憊し切ったおきぬを、いきなり、荒々しく押し倒すと縄をとき、改めて首に縄をかけると

「六造が向うで、手前を待っているんだ。早く馬になれば、この俺様を背にのせて這って歩け——」

と、女の背に跨がった。

「糞——歩け！ 歩かねえとこの首縄をしめるぞ」

ビシリと、鉄棒がおきぬの尻にとんだ。

ヨタヨタとおきぬは新八を背にのせて這い始めた。

六造を縛った雑木と向い合せの木におきぬを縛りつけると、新八は粗朶を集めて火を作った。メラメラと野火が辺りを赤く照らし出した。



当時の私刑として、姦夫姦婦の刑罰は、等しく、男は『羅切』女は『竅抉』と相場がきまっていた。要するにえぐりとる事を云うのであるが、流石に徳川時代には、公の刑としては行われなくなったが、民間の私刑には、この惨虐な復讐が、半ば黙認の形で行われていた様である。

江戸から流れて来た噂でも、新八はごく最近、江戸でこの私刑のあった事を仲間達から聞いていた。

江戸を外れた鳴子堀の辺りの煙草筒の蒔絵彫りの町人が、女房の間男を発見し、二人をとり押えて、近所の寺の境内につれて行き男を羅切、女を竅抉し、鞭で散々なぐった上、切りとったものを兩人に喰わせた。二人は出血多量で絶命したが、町人は姦夫姦婦の成敗と云うので、何のお咎めもなかったという話である。

▲畜生め。俺の復讐は、そんな生易しいものじゃねえぞ——。今に見ておれ……

赤々と野火に照らされて、密通の二人が、立木と立木に相對して立姿で縛られている。新八はよく研いだ山刀を抜くと、先ず手始めに、六造の鼻をそいだ。

姦夫姦婦の私刑の手始めが鼻削ぎである事は、当時の一般風潮で鼻のさきはそがれにけりないはずらに

わが間男と長寝せし間に

と云う、小野小町の「花の色は」をもじった狂歌も、天明の頃には京阪地方で唄われていた位だから、新八も当然、それにならったようだ。

ついで新八は六造の両耳もそいだ。絶叫が谷間にこだまする。ゆっくりと時間をかけて、たのしむように六造の尻の肉をきりと

ると、おきぬにそれを喰わせた。

六造の縄を切ると、朽木のようにどうと彼は前に倒れた。火掻き棒が焚火で、尖端が真火に灼けている。

氣息えんえんとした六造の顔を、土足でふみつけて、新八は灼けた鉄棒を眼球につき立てた。男は最後の呻きと共に絶命した。ブスブスと肉の焦げるいやな臭い——。

羅刹さながらに、新八は更にその鉄棒を灼いた。灼怖の余り、おきぬは声も出なかった。真赤な鉄棒を火の中からとり出すと、新八はおきぬの前にニタリニタリと薄気味悪く笑って近附くと、胸や、腹や、顔を、灼けた鉄棒の尖端でチクリチクリとつついた。

その都度、たまぎる悲鳴が、樹立を縫うて闇に走った。白い膚がチリチリと焦げ、異臭がムツと鼻をついた。

女は既に狂気寸前にあった。

新八はおきぬの体を立木からはなし、仰向けに地面へ寝かせて、左右の足を高々と立木に別々に引き絞った。半身が宙にういた姿に向って、新八は鉄棒を槍のように構えると、小一町も先から勢いをつけて突進した。

力強い衝撃と共に、鉄棒は無残にも深く突きささり、尖端が肋骨の間隙を縫って咽喉からその鉄棒の先を覗かせた。

新八は焚火の両側に、枝をはらって、又の字の杭を打込むと、それに鉄棒の両端をかけた。狂気のように、屍体の下に枝をなげ込む新八の顔は、真赤な炎に映えて、赤鬼のように凄まじかった。

× × ×

「羽村京子式のバーベキューの人間の丸焼きが出来上ったところでこの惨虐な話は終わりますが、新八の自首によって、彼は姦夫姦婦を

殺した事に対しては何のお咎めもなく、私刑のやり方に対し、きついお叱りですんだそうですが、日を経ずしてうなされ続け、遂に狂い死にしたそうです。昔はうかつにはよろめく事の出来なかった時代でもありました。」

ゴルフ氏の話は終わりました。続いて、ドクター氏が身を乗り出します。

「羽村京子さんの好む、浣腸について、今日は彼女に敬意を表して一席伺がう事にしますが……。さて、私の話が、ベテランの京子さんの趣味に合致するかどうか——、浣腸の一品料理よりも、私は私なりの、浣腸、妊娠、マゾヒズムと、いわば、ゴタ煮の八宝菜の味とでも行きましよう」  
こう云ってドクター氏は語り出しました。

#### 第四十話 人工受胎

「私の友人の院長が次の様な可成り長文の手紙を受取ったのです。世の常の様に、手紙の質疑に対する回答を私に求められているのですが、この手紙

が果して、回答を要するものかどうか。それを皆さんに回答して頂き度いのです」

× × ×

〇〇府〇〇市××町〇番地 百地三恵子  
手記——

「（挨拶文略）恰度春の宵でした。退屈紛れに同僚と、寮から五六





町許り離れたU劇場のアトラクションを覗きに行きました。或る電気会社の招待ショウだったのです。

漫才、歌謡ショウが終って、司会者の説明で『人間ポンプ』と云う超人的な、多少はゲテ趣味の演し物が始まりました。

何の因果でしょうか、私はその『人間ポンプ』の演ずる数々の超人的な行為に魅せられてしまったのです。

釘や針をのみ、金魚を生きた儘のみこみ、遂には豆球をのみこんで胃袋でランプを点滅させ、挙句の果てにガソリンをのみこんで口中から火を吐く、その凄まじさに、私はまるでおこりのように体をブルブル震わせ、しっかりと両手を握りしめて、息もこらさず、憑かれたように凝視していたのでした。

ワンマンショウは終って、万雷の拍手と共に、私はハッと我にかえりました。

私の性質を茲で少し御説明致しますと、私は多分に内攻的な女です。寮に起居を共にする若い同僚が、ツイストやボーイフレンドや、錦ちゃん、大川さんとわいわい騒いでいる時、私はひっそりと私自身を虐める事許りを空想しているのです。これが雑誌や本などに書かれてあるマゾ的な心理なのでしょうか——。同僚が、裕ちゃんや小林旭を見に行く時も、私は独り洋画劇場の片隅で『蒙古の嵐』を朝から三べんも見続けていたのです。

ジンギスカンの長男のジャック・パランスに鞭打たれ、X型の十字架にはりつけにされて火烙りにされるポーランド娘に陶醉して、いつしか私がジャック・パランスに、ピシピシと鞭打たれ、苦悶する娘になったかのような錯覚をおぼえて、身内が疼いてくるのでした。

マゾ的な血が私の体内に渦巻いていて、若し誰かが、何かの機会に私を責めさいなんたら、私はヒイヒイ泣き乍らも、心はもっともっとと叫んでいる事と思います。

私は夜毎、阿鼻叫喚の世界に、うっとりとしをにおいて、或る時は落城した城主の姫君になって、途中野武士に捕えられるシーンを想像してみたり、或る夜は、ソ満国境から引揚げる受難の女になって数々の屈辱を受けるシーンを空想したり、又或る時は、奴隷女になって、鎖につながれ、鞭打たれて曳かれてゆく我が身を夢に見るのでした。

けれど、そのどれもが想像上の産物にすぎず、現実の私は、ヒソと声を殺し、布団を頭からかぶってじっと瞑想に耽っているに過ぎないので。

いえ、唯一つ実行に移しているものが御座います。ヒョんなことから忘れられなくなった、アースへの憧憬です。寮内に大腸菌保持者が発見された時、私達全員が強制検便を受けたのです。すぐ排便出来た人はそれでいいのですが、私達若い年頃の女には、案外便秘の人が多いのです。吹出ものや肌荒れがすると云われて、私達はよくピサチンなどの緩下錠を服用するのですが、すぐ便秘になります。私の起居するすみれ組にも四人の常習便秘者がおりまして、私もその一人でした。

その日、白衣を来た四、五人の検査員が来られて、日程の都合で便の出ない人は、一様に四つ這いにさせられたのでした。その時の恥かしさは今も忘れません。係員の一人の方がニヤニヤ笑い乍ら、「便秘には浣腸が一番だよ。君の便は宿便で、カチカチの石になっているよ。」と云われました。その夜私達検便棒組四人は、やれ人権

ジューリンだ、人間失格だのと論議に華を咲かせました。その時年上のR子が誰にともなく浣腸を提唱したのでした。イチヂク浣腸は度々では高くつくから、浣腸器によるグリセリン浣腸はどう—と、見習看護婦の経験あるR子がウンチクを傾むけて話しました。見習のプレをしていただけに、R子は浣腸に対する羞恥感は余り感じないようです。私達はめいめい浣腸に対する羞恥と抵抗から、異論統出でしたが、吹出もの、胃腸病、肌荒れを治すには快便が一番であり、それにはビサチンやサラリンのような緩下錠より、浣腸が手取り早いと、諄々と聞かされ、聽て不承不承に納得しました。

一人一人、R子に浣腸されましたのは、その数日後でした。私はこれが病みつきになりました。

いつしか私は、R子に浣腸をされる時間を楽しみにする様になりました。何かジーンと私のマゾの血を掻き立てるのです。

組は同じでもそれぞれ室が違ふところから、最近では、めいめいが浣腸器を手に、自分で行える様になりました。私達四人は浣腸によって、奇妙な友好を結ぶ様になりました。浣腸をR子の部屋でした最後の夜、私達はお別れ会と称して、R子の手によって、三人が並んで同時に浣腸をして貰ったのです。体内の秘密を知られた気持ちが、R子を姉のように慕う気持ちに変わっていました。R子は私より一つ年が下のくせに、私達には姐さん株のように振舞いました。

被虐を心に求め、浣腸を好み、同性を慕う、私と云う女は、アブノーマルな行為なら、何にでも身を投げ出したくなる様な女で御座いました。

私は劇場の出口で同僚と別れると、近くの洋菓子店でケーキを買求め、惹かれるようにフラフラと劇場の楽屋口を訪れていました。

内攻性の私が、どうして『人間ポンプ』に面会を求めたのか、私はその時の記憶はありません。多分夢中で、前後のわきまもなく只管『人間ポンプ』に逢いたい一念のみだったのでしょうか。

旅先の興行で『人間ポンプ』の部屋は、運よく一人の訪問客もありませんでした。

彼は不意の訪問者を、いぶかしげに、そして半ば好奇の眼差して迎えました。

面会出来ても、何から訊ねようか、何を話そうかと、そんな思案は毛頭ありませんでした。唯、この超人を真近く一眼見さえすれば恐らく私は満足だったでしょう。

ガッチリと、ボディビルの標本のような『人間ポンプ』は意外にやさしい声で、声をかけてくれたのです。

「お嬢さんのような、若い方が、私のファンとは意外でした。どうして又私を……」

「——あの偉大な人間離れした演技に、私の魂は奪われてしまったのです。どうしてあのような苦行を会得なさったのですか、それを私は知りたいのです——」

大胆率直に私は問いかけていました。

「鍛練と修業です。そして健康なエネルギーですよ。私の食道は、胃は、腸は、そして体内のすべての機能が、皮膚の一部に化しているのです。すべて細心の鍛練と、長年の慣習によって、胃壁は私の掌の如く厚くなり、食道は指の如く自由に働きます。咀嚼も嘔吐も、すべて自在なのです——」

「全く素晴らしいですわ。でも、仮に——仮に私がそれを実行しようとしても、果して可能なものでしょうか——」



「えッ——」

『人間ポンプ』は驚いた顔でマジマジと私を見つめました。世にも奇妙な女に見えたのでしよう。

「人間である私が可能な限り、誰でも可能性はあると答えるべきでしょう。併し不断の訓練と努力、そして命の綱を渡る大胆さがあればね——」

そして、彼は奇妙な訪問者に、意外に饒舌になって、初歩的なことをあれこれと話してくれたのです。

咀嚼と嘔吐——。自在に吞み込み、自在に意の儘に吐き出す。一度嚥下した食物を、再び食道から口腔へ戻すコツなどを教えてくれました。

私は『人間ポンプ』のように針をのんだり、赤ランプを胃でともしたり、火を吐いたりする必要はないのです。

私が何時も夢想するのは、口腔から肛門につながる一本の線をつくりたかったのです。

細い丈夫なビニール紐を嚥下し、それから食道から胃を下り、長い腸の中を遊行し乍ら直腸に下って、やがてその尖端をお尻から覗かせる。医学的にこれが可能か不可能かは、誰方の発表もないから存じませんが、ゾンデがかなり体内の奥深く潜行しても、呼吸は困難にならず、反対に、相当長い肛門カテーテルを使用しても人体に影響がない筈ですから、『人間ポンプ』のように鍛練と努力とを克服すれば出来得るのではないかと思うのです。

『人間ポンプ』に逢えて昂奮した私は、その夜試しに、小粒の飴玉を絹糸で縛り、それを丸の儘嚥下して見ました。ガブガブと沢山の水を吞むと、丸い粒は胃袋へ納まったようです。私は齒で絹糸をか

み切らない様充分注意して絹糸の尖端を握っていました。極く微かでありましたが、絹糸がミリを数えて体内へ潜行して行く様です。吐気と、咽喉部の咳の出そうなはしかい気持、胸苦しさをぐっとこらえていましたが、素人の果敢ない努力は数分間でした。激しく咳込んで、私はゲーッと吐き気き催おし、すっかり吐き終った時、絹糸は、私の手許に飴玉と一緒に戻って来たのです。

『人間ポンプ』の修練が、到底一朝一夕のものでないことが泌々とわかったのです。

床についてからも、私はうなされていました。口腔と肛門につながったビニール紐に、細いキラキラと輝やく金鎖が口腔のビニール紐へつながれたのです。徐々に紐は引っ張られます。ズルズルと金鎖が食道を降下して行きます。気がつくくと、私はサーカス団の大テントの地上数十尺の空間で、体内を従走する。太い鉄鎖によってピンと張られて、人間の串差しのようになって、潮騒のようにさわぐ見物に、浅ましい肢体を曝しているのです。

地上に立つ『人間ポンプ』の口から吐き出す炎が私に当たると、それが蜘蛛の糸のように、私の体を雁字搦目にひしひしと動けぬよう縛りつけて行くのです。

——助けて……助けて……

私は千手観音そっくりの、数百本の手で、空宙にのたうち廻って炎の糸をはらいのけ、太い鎖を切ろうと悶えていました。

激しいひきつれる痛みが、ぐっぐつと間歇的に腹部を襲います。

私は、助けて……死ぬわ……助けて……と叫んでいました。

そこで眼が覚めたのです。

同僚が心配そうに、二人私の顔を覗いていました。R子も心配し

てかけつけてくれていました。腹部のひきつれる痛みは、夢の醒めた現実でも少しも消えませんでした。

そして、その月から月経がとまりました。私は神かけて誓いますが、男性との交遊関係は絶対になく、純潔である事を誇りに思っております。

それなのに、月々私の腹部は膨張して来るのです。これは一体どうした事でしようか。

私はこの悩みを誰一人として打明ける人もなく、日夜煩悶し続けました。

思い余って私は、恥を忍んでR子の部屋をおとすれました。生憎彼女は入浴に行った直後でした。R子の帰るのを待つ間、私はイライラした気持で、部屋中をグルグル歩き廻りました。何気なく机の上の日記が私の眼に触れました。思わずとり上げると、パラリと落ちた紙片があります。週刊誌の切抜きで、私はそのトップ記事の大きな活字を見るともなく見て、思わずギョッとになりました。

「人間生活の革命——母胎よさようなら……子宮時代近し」

そしてところどころ赤い線がこれ見よがしに引かれてあります。私はその一節を、血の気のひく思いで大急ぎで読んだのです。

（人工子宮の登場）

——ホルモンを注射したメスヤギは、何十もの卵を子宮へおろした。これを帝王切開してとり出し、精子をふりかける。そしてできた受精卵を、別のメスヤギの子宮へ納める。月満ちて、元気な子ヤギがうぶ声を上げる。世界最初の人工受胎。子宮だけを借りたヤギの誕生であった（中略）もう二十頭もの子ヤギがこの人工受胎で生まれている。丹羽博士は、さらにこんどは牛で試みる実験にとりかかっ

ている。牛で成功したあかつきは、最後の目標、人類へとなることはいうまでもあるまい。（中略）「生む」という、女性最大の苦勞は、もはや金さえ出せば解消する。（中略）しかし女性のだれかが子宮を提供しなければならぬ。ここに生まれてくる職業的な貸し子宮婦。（中略）奇想天外な考えと云うよりほかはないが、人工子宮の研究も着実に進んでいるのだ。——

私の膝はガクガクと震え、体はおこりのようにとめどなくブルブルと小刻みに揺れつづけました。

慌てて私は、R子の日記を開いて見ました。

×月××日

私の最も熱愛するK先生の命令だもの。私は喜んで受諾する。多量のホルモン注射をされ、私は注射器で数個の卵子を抽出された。

——世紀の大実験だね——

先生はそう云ってニッコリ笑われた。私達の計画は、私の腹を痛めることなく、二人の愛の結晶を造り出そうとしているのだ。

——イタリアのボローニア市の研究所では、ペトルツチ教授と、美学生物学博士ロウラ・デパウリ嬢によって、人工子宮が完成し、六十日までの生命の芽生えを十六ミリカメラに納めてあるのだよ。ボクの試験管に於ても屢々成功を見た。後は人体に於ての研究のみだ。その女性を探してほしい——

私は先生の言葉は断わり切れない。見習看護婦から准看をのぞんでいた私の前に現われた先生のため、私の希みは絶たれたけれど、あれから一年半、先生への愛情は変わらない。

愛人の為なら如何なる方法でも私は先生の研究に協力すべきだ。



私の脳裡にフト、三恵子の顔が浮ぶ。そうだ――。

×月××日

私は三恵子にクリステイルを施した際、観察したが、三恵子は確かにバージン。適材と信じる。どうして、いつ実行すべきかに悩む。精子と卵子の寿命がある。急がねばならない。

×月××日

M子が私の部屋にかけこんでくる。三恵子がひどくうなされていそう。今こそチャンス――。私は決意する。

かねて先生に云われた通りにした試験管をしっかりと握りしめて三恵子の部屋を訪れる。合部屋の三人のうち、一人はよく熟睡、あとのM子ともう一人はおろおろしている。私は洗面器、水を一人にもう一人に温湯をわかさせる。こんな事はすべて関係のない時間かせぎ――。

二人の出たあと、私は大急ぎで、三恵子を仰むさせる。三恵子はしきりに悶え、くさがりが……くさがりが……助けて……と途切れ途切れに叫んでいる。念の為ラボナをのませる。

私は大急ぎで、先生に云われた通り、この生命の芽生えを着床させ終る。慌てて、三恵子を元の姿に戻し、介抱するそぶりを見せた。ラボナの効めで、三恵子はスヤスヤと眠りにつく。私は数本のヘガールを置き終り、試験管をポケットに入れ、注射器をバッグにしまった時、相ついで二人が戻る。

三恵子は時々、腹部を無意識に押える。先生の命令とは云え、罪の意識を感じる。医師法違反を私は敢えておかしてしまった。

三恵子が眼ざめる。寝汗がひどい。非道く腹部が痛そうだ――。

×月××日



入浴時の観察で、三恵子の腹部は徐々にふくれを見せている。私を愛している三恵子に悪い。処女懐胎——。聖母マリアになるか三恵子——。夜な夜な三恵子の恨めしげな顔を夢見る——。

私はめくらめく思いで、R子の部屋を出ました。裏切られ、性の神秘を冒瀆された憎悪が沸々とたぎる思いでした。

私は次の電休日を利用して、某病院の婦人科を訪れました。婦人科の医師は若い、きりりとした眼鼻立ちの立派な青年医師でした。私はすべてを秘してアウスを依頼したのです。

馴れた物腰で、彼は治療台に私を上らせチクロパンで局部麻酔をした時、ギョッと痛みが全身に走りました。でも、その痛みが、私の運命を大きく変えるいとぐちでした。

「おかしいな……。」

医師の口から、そんなつぶやきが洩れました。

「確かに妊娠した覚えがあるのですか？」

医師は不審と、多少の憤どおりをこめて私をにらむ様にして申しました。

私はどうして本当の事が申せましょう。あいまいな返事しか出来なかったのです。

それが医師をますます不愉快にさせたのか、彼は吐き出す様に呟やきました。

「貴女の子宮は第一、發育不全ですよ。卵胞ホルモンの分泌が少ないから、月経不順や、少なかったりで、それで無かったので、勝手に早合点なさったんでしょう」  
「でもこの通りおなかが……」

「腸満の場合や、想像妊娠でも、そう云うことはよくある症状です。内科へ廻って見て貰うのですなあ——」

私は安心と解放感で、急に虚脱状態になった様です。腕に痛みを感じて私は正気づきました。

「ビタカンファアを射っておきましたよ——」

「先生。あたし、どうしたらいいでしょう」

「さあ、脳下垂体にレントゲンの照射をして、下垂体の機能を昂めることですね——」

「先生、お願いしますわ——」

私は懸命になって、何とかこの医師に縋りたい気持ちにかられました。

医師は稍、迷惑そうでしたが、それでもやがて氣をとり直したかの様に、笑顔になって承諾してくれました。

内科の精密な診断によって私は、自分の恥を曝け出す結果になりました。頻度の浣腸によって、不純な雑菌が直腸から浸入し、私の腹部にカタル性の炎症と、腸満を起させていたのです。

私の病院通いは続きました。一つはこの遅ましく理智に富んだ青年医師に、恋の炎を燃やす様になったからです。

私の卵巣は發育し、卵巣の中の卵胞からも、女性ホルモンがどんどん分泌される様になりました。私は急に女らしさが加わって来ました。過去の殺伐な映画に耽溺した頃とは違って、甘い心をゆすぶるような映画が好きになって参りました。

私の精一杯のひたむきな慕情と、女らしさにつやつや磨かれて来た柔肌に、青年医師は遂に陥落しました。ボーイハント……。そんな生易しい感情ではなく、精魂こめての愛情の発露でした。



私と彼は、勝浦のいで湯で一夜を共にしました。そして、交際がつづいたのです。

私は再び月経がとまりました。

医師は私の体を検診して、

「間違いないな——。ボクの子だよ」

とささやいてくれたのです。

人工受胎の実験台になった私は、子宮發育不全が幸いして妊娠せず、健全な体となった今、彼の愛の結晶を宿す事に成功したのです。今更何を隠しましょう。青年医師は外ならぬ、私に人工受胎を実施させたK先生であり、かつてのR子の恋人でもあった人です。

私は完全に彼をとりこにする事によって、R子に復讐したのです。R子が気付く頃に、私はもう既に会社の寮を出て、新しい自活の道を求めて、何の気兼ねもなくK先生とデイトを楽しんでいました。

R子とK先生の二人の、非人道的な秘密を握っている限り、R子は恐らく手も足も出ない事でしょう。

長いお手紙になりました。

最後に申し上げます。K先生こそは、貴病院の御長男でいらっしゃる修先生でございます。そして私が今、御相談申上げている先生こそ、即ち、修先生の御殿父、金子榮寿先生で御座います。修先生は既に人工受胎の実験台となった私の事をR子よりきき、恐縮して妻にするに仰有っています。

父上大先生、私は先生の義理の娘として、快よく迎えていただきますでしょうか——。

私の困った性状もすっかりなおっております。唯、話の筋道として申上げておいた方がよかったと存じましたからです。

ではお体御大切に御長命の程祈り上げます。御返事は最愛の修先生にお伝え下さいませ。

× × ×

ドクター氏は長い告白を読み終わりました。女の執念と、妖しい次代の背信と、狂おしい性癖が渦を巻いて、重苦しく、めんめんと脳裡にこびりついているようです。

緑の匂いもいつしか消えて、そこはかたなく、深更の夜気がヒタヒタとクラブにも忍びよっております。

「人間飼育——、人工出産株式会社か——。長生きすると奇妙な時代になってくるね——」

クラブの最年長者、元陸軍少将のステッキ氏は、誰にともなく呟やいて、大きく背伸びをしました。

階下にクラクションの響き——

既に誰かの自家用車が、主人を待ちかねているのでしょう。退屈男達は一斉に立上りました。

後記 羽村京子さんから、貴重な文献と私信を頂戴致しました。

本日の三十九夜は、彼女の御期待に添えるかどうか——。兎も角、貴女のモチーフを或る程度借用致しました。今後もしどし貴女のざっくばらんな私信、鶴首してお待ちします。貴女の私信を発表出来ないのが残念です。

辻 村 隆



## 神奈川県児童福祉審議会

### の勧告に対する私見

毛利 三雄

—

貴誌の四月号に掲載された神奈川県児童福祉審議会の勧告を偶々拝見しました。私は貴誌の編集に何んの関係も無い一読者に過ぎませんが、この勧告を見て聊か感ずる処がありますので、以下に私の考えを述べさせて戴き度いと存じます。

最初に念の為、勧告の要旨を記しますと、奇譚クラブはグラビア写真初めその他全般に亘って青少年に有害なものが多いから猛省を促す、と言う事だと思ひます。

先ず私は、審議会が児童福祉の為に色々と心を痛めて居られる事に、同じ人の子の親として感謝致し、其の活動力に敬意を表するものです。それから、勧告に指摘された具体的作品、例えば一月号の「美の凌辱」「黒い手袋」等が、適切を欠くと言われる事も概ね理解出来ます。

勿論これに対して、編集者側としては言い分もあるでしょう。編集手帖にもあった様に、これでも随分控え目にして居る、読者の不興を買い乍ら神経質と言われる位に抑制して来て居る、とのこと。確かに、この点編集側の

主観からすれば、その努力と苦心を称められこそすれ、貶されるところは心外かも知れない。そして、それにも拘わらず、第三者から見ると尚指摘される様な事も起こるのでしようが、これは矢張り編集側に今後共気を付けて戴き度いとお願ひするより外はありません。

処で、問題がただそれ丈の事ならば、別に私がそれ以上申し上げる事も無いのですが、恐らく勧告の意図する処は、私が初めに書いた様に、個々の作品もさる事乍ら、実は寧ろ、凡そ貴誌の様にアブの世界等を対象にする雑誌は、性質上好ましく無い、存在するだけで



目障りだ、と言う思想が根に在ると思われるからです。

私が申し上げ度い一事はこの点についてです。一体貴誌の様にアブの世界を扱っているものは、それ自身有害なのか、どうか。

## 二

私の結論を此処で申して置くと、第一に貴誌がアブの世界をテーマにされる事は一向に差し支え無い。第二にそのテーマの扱い方や表現も、甚だしい行き過ぎが無い限り、許される。第三に貴誌は挑発煽情を事とする所謂エロ本と違って、同好マニアのささやかな交歓、安息の場所であるから、これを取り上げてしまうと、問題を更に別の方に追いやるだけであろう。第四に言論出版の係わる事は、原則として国民の良識と歴史の批判に委せた方がいいので、或る特定の機関が、或る時点に於て、好ましく無いとか害があるとかレッテルを貼る事は、これは、日本でも戦前好んで行われ、外国でも例えばヒトラーのドイツではゲルマンの純潔の為、ムソリニのイタリヤでは青少年の為（特にムソリニは、口を開けば「青少年の為」と言った）、盛んに行わ

れた事ではあるが、この種の遣り方は、仮令やる御本人達の動機や主観的意図は純真且つ大真面目であっても、而も尚これを結果的、客観的に見ると、この種の遣り方こそが、「取り締まれ」た対象よりも、却って社会に害毒を及ぼしてしまつた次第である事―此の四つです。

以下、項を分つて夫々について、申し上げます。

## 三

貴誌の主なテーマである緊縛、切腹、浣腸、禪、同性愛、サド、マゾ……について考えて見ると、緊縛は芝居でも映画でも珍らしく無い事。切腹は昔しから武道の華とも謂われ、浣腸、禪……別にどうと言う程の事でも無い。サド、マゾ、同性愛と言っても、軽いものなら誰でも（自分で気付くかどうかは別として）持つて居る、と言つた位のものです、テーマそれ自体としては格別非難されるものではないと思います。

殊に、昔しはテーマが悪ければそれだけでいけないとされ、接吻さえも穢らわしい、風俗を乱す行為として、それを扱う事自体が禁

圧されたと言う。菊地寛の名作「第二の接吻」が、その題名の故に問題になったり、鍋木清方描く良家の男女の向い合った姿が、接吻を想像させるとて起訴、一二審が有罪となつたり……（これに対して鍋木氏は「見る方が妄想を逞しくするからだ」と反論。大審院で無罪）……其の他推して知るべしである。然し今では、どんなテーマを扱おうが、表現さえ行過ぎなければ良いと言う事になって居る―これはもう常識でしょう（従つて、文部省の大立関に裸像もある）。況して貴誌のテーマ自身、前述の様にそれ程でも無いとすれば、尚更問題無い。

## 四

では、貴誌のテーマの扱い方や表現はどうでしょうか。勧告の言う様に「青少年にとつて極めて有害であり、一般成人向とみても不健全な内容に満ちて」居るものか、どうか。

私の見る処では、別に貴誌が文化の醇化に不可欠だと迄力む要はないにしても、勧告にあげられた様に「変態性欲の極致」「健全な生活、倫理を乱す」「人間性の純潔を傷つける」「犯罪にもつながる」等と、目くじら立

てたり、だんびらを翳して極め付けられる程のものでもないと思います。それは、思い過ぎしか、そうでなければ過大評価と言うものでしょう。(私はこれらの文字から、ふと戦前に特高や憲兵が好んで用いたと言う「国体の尊厳を傷ける」「アカ」「非国民」「学匪」「学匪」「右翼の人達が、美濃部達吉、横田喜三郎、を学的匪賊としてバトウした言葉」「時局の認識を欠く」……を連想した)

成る程、貴誌を手にして、顔をしかめ眉をひそめて御心配になるのは無理もない、これは良く分ります。感覚的にはその通りだと思う。けれども、筋道を立てて静かに考えて見ると、それは杞憂に過ぎない次第がはっきり分る筈です。次にその次第を申しましょう。

先ず貴誌の編集態度は一般エロ誌のそれと違って真面目と言って良いでしょう。これは広く読者の認める処でしょうし、第一真面目でなかったら、こんなに誤解を受け易い割に合わない事を、十何年もやって来られる筈もない(現にその間、どうかと思われる様な雑誌の出現も、二、三に止らなかったが、これ等は弾圧等受けなくても、自然に皆淘汰されてしまった)

次に貴誌の発行部数は知る処でないけれども、頒布の状況から見ても、極く僅かなものだろうと思います。発行の回数にしても、週刊誌の様に後から後から、これでもかと許り出て来るのと違って、月一回でしょう。

更に頒布の方法ですが、これが又至って遠慮勝ちで、一行の広告をするわけでもなく普通の店先に並べられているわけでもない。寧ろ探すのに骨が折れる位限られた書店で、ひっそり片隅で呼吸しているのに過ぎない。これ等の事実から見ても、その影響力とか、青少年への害とか云々される事が、抑々可笑しい位微かな存在だと思います。

それでも、ほじくった見方をすれば、存在する以上、青少年の目に触れる事もあるではないか。それはその通りでしょう。但し、その場合でも、更に考慮しなくてはならない大事な事は、貴誌の様な本は、性質上成人でも青少年でも、興味のない者には通常路傍の石に過ぎないと言う事です。開けて見て、一寸契驚するでしょう。然し、黙って元に戻して置く——これが殆んどの筈である。中には極少数、好奇心で求める者もあるかも知れない。更に愛読、読み耽って行く者も出て来るかも知れない。

分らない。然し、それは最早数としては問題にならない位僅かな筈であり、而もその様な場合は、既にその人は潜在的にか顕在的にか内攻した欲求や悩みを持って居て、それ等を貴誌によって癒やされ慰められて居る人なのである。(この事は、私が想像や独断で申し上げるわけではない。はっきりした事実と根拠に基いて申し上げるのです、その次第は次の項で述べましょう)

## 五

凡そこの種の刊行物に対しては必らず二つの議論が出て来ると思います。一つは息抜きで安全弁だという擁護論、他は勧告に見られる様な排撃論。私は、觀念論としては両方とも成り立つし、大抵は両方の面を持つものと思う。そこで問題は、具体的に貴誌の場合、どちらの傾向が強いかと言う事です。そして、これは飽く迄も、想像や前記の様な悪罵的形容詞でなしに、事実に基づいて論定さるべきものと信じます。

その事実ですが、恰度貴誌の昨年十月号に中谷正夫氏が集められた投書が五十六例載って居る。この事実を分析検討して見ますと、



貴誌によって心の安らぎを得て、仕事にも精が出る様になったと言う傾向の者が圧倒的です。中には、初めは貴誌を見たから悩みが出たのかと思ったが、事実は逆である次第が良く分った、とその経過を書き綴ったものもある。(尚、貴誌が自分に都合の良い記事だけしか取り上げないと言う態度を取らなかった事は、十何年の歴史がこれを証明して居る。それだからこそ、私は貴誌が真面目であると云ったのです)

それで、臆測や観念論は別として、少く共現れた事実に限る限り、貴誌は安全弁の役割の方が強いと断言して憚りません。若し反対に、実害ありと言うならば、先ずその事実が示さるべきでありましょう。勿論薬にも麻酔剤や青酸カリの様に直ぐ効果が出るものと、栄養剤や砒素の様に直ぐは分らないものもある。然しそれにしても、利くのか害になるのか、原因と結果の間の因果関係が突き止められなくてはなりません。ただ見て穢らわしいとかいやらしいとか言う事だけでは、接吻も風俗に害ありとし、或いは又、世界の大多数の人々は海鼠や蛸等醜怪で見るだけでも身の毛がよだつ—と言う類いで、善悪倫理の問

題ではない、趣味嗜好の問題でしょう。

何れにせよ、仮りに主観に合わないものを、怪しからん、悪いものは悪い、つべこべ言うなと極め付けるのでは、戦前の所謂取締側が、己れの氣に入らぬものは悪いとして、前記の錦木画伯が難に遭ったり(その他黒田清輝、朝倉文夫……一々挙げたら切りがない)或いは今の最高裁の横田喜三郎氏、京大学長の流川幸辰氏その他沢山の学者達が、国体の尊厳を傷付ける、アカ、非国民、売国奴、学匪等とレッテルを貼られて、攻撃されたり起訴されたり葬られたりした遣り方と、余り違わない事となってしまう。これは非難された方が正しかったとか、非難した方が間違っていたとか言う様な事は二次としても、抑々先ず非難者側が自分達の主観だけが正しくて、それに合わないものは排除し様としたその態度—その純真にして頑なな態度こそが、非難された思想や作品以上に、国家社会に害毒を流してしまった事を想い出させるに十分でしょう。

## 六

最後に言論出版の自由について述べたいと

思います。私は此處で法律論等するつもりもありませんが、ただ二つの事だけ触れて置きたい。一つは審議会がこの前の様に雑誌社に勧告される事は一向に差し支えないし、時には好ましい事だと思う。但し、巷間伝えられる様に、更に販売ルートに対して(この種の出版物を取り扱わない様)勧告方考慮していただける事が事実とするならば、問題だと思います。これは、憲法で禁止されている検閲と事実上同じ効果を生じる事となり、営業の自由に対する干渉となる恐れもあると思う(勧告には強制力も罰則もない等と言って見ても、現状で業者に対する場合はナンセンス。尚、新聞の伝える様に警察庁に尻たたかれてやっておられるなら、尚更検閲の復活と見られても仕方がない。私はそんな事は信じません)。

私は前回の勧告で効果は可成り上ったと思う。それは、その後の誌面を見れば分りましょう。後は自主的規制に任すべし。これ以上に出て、或いは踏み込んで、息の根迄止めなくては承知しないと言う遣り方は、法律論等別としても、又私がこの稿の初めに述べた様に戦前各国で盛んに行われた事ではあるが、

仮令動機や意図は「純真」であっても、尚且つ危険です。

次に、これ又釈迦に説法で恐縮ですが、児童福祉法は元々明るい積極面を強調した格調高い法律の筈でしょう（此の点、教護法との二重構造には批判もある）。と同時に、福祉対策にしても、「不良出版物排除」等と、取り上げたり奪う事よりも、与える方が先でしょう。与える面がうまく行けば、消極面等自然に解決して行くものです。処が、奪う方は失礼乍ら楽です。一片の通告でも実現出来る。与える方はそうは行かない。金と力が必要。それで兎角安易な奪う方（同時に弱い者いじめ）が先に立つ。然し、そうであってはならないと思います。

処で、今日都会の盛り場には青少年が氾濫して居る。この様な風景は欧米何処にも見られません。何故日本だけこの様な現象が起きているのか。理由は簡単、外に行く処がないからでしょう。外に手軽に楽しめる所、青春を謳歌出来る場所がない。その意味で、福祉委員の石井桃子さんの言われる様な欧米風の青少年に魅力ある図書館（室）を各所につくることが大変結構でしょうし、それから私が

主張したいのは、もっと手軽に旅行出来る様にする事。この種の主張を述べるのは本稿の目的でないけれども、勧告にも関係深いこと故敢えて述べさせて戴きますと、国鉄は次代を担う青少年の運賃を、昔の満鉄の様に五割引にすべし。それも、現在の様な窮屈な学割手続を止めて、出札口で身分証明書（写真入）を提示すれば買える様にする。但し急行は認めない（益々混むから）……その他専門的には色々あるでしょうが。要するに国鉄も職員や家族等国鉄一家だけの無料パス等と言わないうで、次代を担う少国民の為には、この位の発奮はしても良いでしょう。尚現在のユース・ホテルは大変結構ですが、何分数も少なく限られているので、もっと簡易なもので良いから、どしどし殖やす。新設が難しかったら、公共施設の一部を当てがうわけに行かないか。

以上はほんの思い付きの一例ですが、例えばこの様にして都市の内外に魅力ある所が出来て来れば、随分変わって来るのではないでしょう。児童対策の様な事は殊に、あれもこれもと蚤取り眼で対策を並べ立ててみるよりも、二三の重要な積極面を推し進める方が遙かに効果的ではないでしょうか。

話しが国鉄に迄脱線して恐縮でしたが、要するに私の申し度い事は、貴誌を手にして審議会の方々が吃驚されて御心配になる次第は良く分りますが、貴誌は多くの他のエロ本等と違って、その編集態度、発行部数、発行回数、頒布の方法、それから何よりも雑誌の性格それ自身から言って、御心配になる程の事はない、杞憂に過ぎないと思います。それから更に、元々この種の問題は国民の良識と歴史の批判に委ねた方が賢明であり（現に、前記の様にどうかと思われる貴誌の類誌は皆淘汰された）、従って、前日の勧告以上に更に踏み出される事は危険である。他方、それと同時に、編集者側としても、貴誌に公共性があるわけでもなく、影響力も殆んどないとは言うものの、矢張り公刊と言う形をとっている以上、社会に何がしかの責任もあるわけで、従って法に触れなければ良いと言うものでもないことは又明らかで、今後共十分自戒を要する、と言う事です。

（おわり）



告 白 的 隨 筆

## 女 人 紅 記

マダム の 臍



銀座裏酒場街の夜景。

— 筆者撮影 —

須 藤 律 夫

私とそのバーを知ったのは、未だそれ程古い話ではない。最初は友人Kの紹介で、二次会だか三次会だかの流れで寄ったのだが、そのムードが気に入って、それからと言うものは度々足が向くようになった。

銀座、泰明小学校の近くを曲ると、その一角は町並も変って、小さなバーが目白押しに立ち並び、掲載写真のような看板が、之も積み重なるように舗道を照らしていた。そしてその一帯に点在する幾つかのビルも、一、二階の或る部屋はバーとなつて、文字通り酒場とオフィスとが混然としていたのである。

一度昼間通つてみた事があるが、明るいところでは何の変哲もない、極めてありふれた殺風景な一角であつた。

扱、私の馴染んだバー「千明」は一番奥まったところで、店もそれ程広くはなく、ホステスも四、五人足らず、マダムのちあきは陣頭に立っていつも愛嬌を振りまいていた。

彼女は一寸見ると何処かテレビタレントの坪内美詠子に、そのプロフィールが似ている。然し体つきは織賀邦江に近く、笑う度に光る奥歯の金冠が、妙に色っぽさを漂わす。

氣象庁始まって以来と言う異状乾燥が二カ月近くも続いて、久し振りに春雨の煙る或る土曜日の夜であった。私がいつもの様に立ち寄ると、マダムがそそくさと寄って来て歓待した。

『いらっしやい。今夜はお待ちしていたのよ』

『思わせ振りの。何か特別な話でも？』

『ええ、特別も特別、何しろ資金繰りに影響するんですもの』

『投資マダム』と言う言葉があるが、ちあきも御多聞に洩れず、競馬、競輪こそやらなかったが株式投資には大分注ぎ込んでいらしい。と言っても別にギャンブルが好きでない訳でもないであろう。何故なら筋の通った優良銘柄ばかり、然も手固く現物で四、五百万の投資なのだから。

『この前先生に励められた弱電の〇〇社ね、お蔭で三十万ばかり儲かったわ』

『先生？』

『だって須藤さんは株の先生よ。あたしの知っている限りではよ』

先生と言われる程の馬鹿でなし——と、そんな古川柳があるが、株の先生とは妙に揶揄った言葉である。

『でもね、いくら上品な経済用語で粉飾されてはいても、結局「株」はバクチだよ』

『あら、そうかしら』

『つまりだね。茲に一本の線を描いて、上か、下かに賭けるのが株さ』

私はジンフイズの一滴を小指の先につけると、テーブルの上に一線を画して言った。

『今迄先生に訊いた銘柄は、みんな多かれ少かれ儲けて売り抜けたわ。じゃあ運が良かったのかしら』

『尤も、慎重に手堅くやった場合は、投機ではなく投資かも知れないが、先ず七、三のかけ目（確率。つまり安全率七割、危険率三割の意）を超えない事だね。それを超えると、バクチと言って、その場で朽ちる事になる』

『あたしのお友達ですけど、例の〇〇電機で大分損したらしいわ。それ迄蓄めたお金が半分になったってこぼしていたわよ』

『「臍くり三年、株三月」と言ってるね、カラーテレビは空テレビだったって訳さ』

『まあ、洒落がお上手ねえ……』

ちあきは下から見上げる様に、金齒を輝かせて艶然と笑うのだった。

『もう堅苦しい話は止めにしましょうよ』  
その時マダムが席を離れると、ホステスの

二、三人が寄って来て、暫くは醉談に花が咲いた。啄木の歌など想い出して、私がじっと掌を見詰めた時、

『あら、先生は手相も御覧になるの？』

と、としえが訊く。

『手相は余りよく解らないけど臍相ならね』

『セイソウ？』彼女の怪訝そうな顔付きに、恵美子が助け舟を出して説明した。

『臍相学ってね、お臍の人相学よ。ほらこの頃よく色んな雑誌に出てるじゃない』

『ああそうか。でもやーね、お臍じゃ……』  
ビキニスタイルなら兎に角、態々お臍をさらけ出してまで、未来を占うホステスもなからう。

『で、先生、どんなお臍が幸運なの？』

としえは自分のお臍に聊か自信でもあるのか、一寸身を乗り出して尋ねて来た。

『天臍と言ってね、先ず上を向いている事、穴が大きくて彫りの深い事、但し婦人の場合大きさは二の次で、穴が深ければ一応の幸運が約束されてるね』

私は中国の古書など引用し乍らも、結論としては極めて概念的な事を説明した。

『それじゃ、今流行の歌そっくりね』  
『流行の歌？』



『お臍の穴も、上を向いて歩こう』でしょ』  
期せずして爆笑が湧き起った。

『じゃあ、あたしなんかもっと幸福な訳なんだけど。だってお臍の穴迎も深いわよ』

としえが何か食い下がるような口吻で言う

『迎もって、一体どの位深いの?』

と私がとぼけると、

『そうね、一節以上はあるわね』

彼女は右手の人差指を測り乍らいう。

『あたしのはね、ねえ先生』

と、恵美子が乗り出して来る。女とは、こんなところにも競争意識が働くものなのか、その眼ざしは仲々真剣である。

『あたしのはね、こうして両手で展げてみると底なんか見えないの。でも余りいい事ってないわね』

『そう言うお臍は、桃の実型』と言ってね、然し夫婦生活は円満なんだぜ』

『あら、そうかしら……』

その将来に希望を託するのかどうか、夢見るような眼ざしでにっこりと微笑んだ。

それから二、三日して、又ちあきを訪ねた時の事である。その夜も余り客はなく、私はマダムに誘われるまま、珍らしくカウンター

の止り木に腰をおろした。

『先生、今日も一つ、絶対と言った銘柄を教えて頂戴よ』

『弱ったな、そうく儲る株なんて無いよ』

『だってこのところお客がめつきり、でしょ。』

尤も二月、八月は例年の事なんですけど』

『そんなに不景気かね』

『不景気ねえ。売り上げが〇百万じゃ、銀座のバーは成り立たないのよ。せめて〇百万なくちやねえ』

『その差額を株でと言うの?』

『そう言う訳でもないんですけど……』

結局マダムの執拗さに兜を脱ぎ、私はレジヤー株の中、N映画の空売り(か)を勧め、担保には手持株を提供する事に決めた。

『信用取引は余り勧められないんだけど、然し例の七、三のかけ目。私は確率七割と睨んでいるのだが』

『そうお、では明日早速売ってみるわ。でもその後適当に指示して下さるわね』

『明日の寄り付、八十四、五円で売って見るんだね。十円幅は固いよ』

之は読者には余り興味の無い事かも知れない。然しN映画の最近の値動きを説明する

と、十二月から一月にかけて百十五、六円の高値があり、二月後半に入ると百円台割れ、九十五円とジリジリ値を消していた。そして二月二十八日の引値は遂に八十七円にまで落ち込んだのである。私の狙ったのは減配による不当な値下りであった。映画は斜陽産業と言われている。まして動員数は三十三年をピークとして半減している現在、その他の情報ともならみ合わせ、私は減配の確率を七割と睨んだのであった。

翌三月一日、朝からの動きは激しかった。寄付八十五円、寄あと八十二、三円と売り気配、そして揉み合いが暫く続いていたが、その中N証券の纏った買が入り、マダムの売り玉八十五円の指値が決ったのである。午後にはマダムと電話で連絡をとり、後場には早くも七十五円で買い戻しを指示したのである。

総ては恰で絵に描いた出来事のようにであった。私の予想は幸運にも適中して、その日の二時頃、二分の減配説が短波に乗って流されると株価はガラガラと崩落し、遂には安値七十五円を記録して結局七十七円で引けた。

一日、それも僅か数時間で二十余万円の儲け、然も現金は一銭も使っていない、こん

な事が結局株式投資（この場合は投機であるが）の魅力なのであろうか。

三月三日のひな祭りは暖い小春日和に恵まれ、その日は恰度仕事の方も一段落した気安さから、私は又「千明」のマダムを訪ねてみた。彼女を儲けさせた——と言う軽い優越感も心のどこかにはあったのだが、それよりも私には又別の期待があったのである。

「あらッ、いらっしやい先生」（この店で、私はとうとう株の先生にされて仕舞った）

「この間はお蔭様で。今日はゆっくりしてらしてね先生、私が全部おくるから」

「株では損する場合だってあるのに、反対給付として御馳走になるのは心苦しいね」

「いやーね、そんな意味じゃないのよ。それより先生は臍相学とかもおやりになるんですってね。この間M新聞の随筆欄に載ってたの拝見させて戴いたわ」

「今は易学ブームで占いが流行しているが、臍相学は連も歴史の古いものなんだよ。然し確率は私にも未だ疑問だ」

「その、疑問のところは魅力があるんじゃない。（ちょっと声を落して）私も見て戴こうかしら……」

「マダムはお臍を見せる勇氣があるの？」  
「改まってじゃ恥しくて連も駄目ね。でも一緒に風呂に入る位ならそれ程でもないわ」

その時、流しのギター弾きが近ずいて来ると、之もリバイバル・ブームなのか「熱海ブルース」を弾き始めた。想えば戦争以前の、もう二十年も前にはやった歌だ。そして私には訳あって忘れ難い、連も懐しい歌なのだ。

ウイスキーのグラスをじっと覗（み）めていると、忘却の彼方に消え去った想い出の断片が、恰度映画の一駒一駒を見るように泛（う）かでは消えた。そしてグラスの数も識らぬ間に重な（かさ）って行くのだった。

その夜看板後も、私は奥まった部屋でマダムと向い合っていた。彼女も珍らしくハイボールなど重ね、眼の縁（ふち）はもうほんのりと桜色を帯びている。

「先生、もう一時過ぎだわ。これから私のアパートにいらっしやらない？」

これは思いがけぬ言葉であった。まさか投資のアドバイザーに対して、彼女は何事かで報（う）いようと言うのか？ そんな馬鹿馬鹿しい自惚（うぬぼ）れに似た期待もなかった訳ではない。

「こんなに遅く、アパートにお邪魔するのは気がひけるな。アパートってどこ？」

私にはそんな理由も必然性も何も無かったし、それに彼女とは只「マダムとお客」のありふれた間柄なので一応は軽く断った。

「いいじゃない先生。南平台なの、あたしとお手伝いさんの二人だけよ」

「……」私は応答の代りに、グラスを一気に飲み乾していた。

マダムのアパートが高級住宅地である南平台と聞いて、私は行く事に決めた。其処には政界人の私邸やら、某映画スターの邸などもあり、それ等の事が私に興味を持たせたのかも知れない。

渋谷、南平台のアパート迄、二十分とはかからなかった。宮益坂から道玄坂を登る辺りは、でも流石にネオンが瞬いて、連も深夜とは思われない明るさである。道玄坂を登りきって少し行くと、自動車はとある豪壮なアパートの前に止った。この辺りはお邸町なので人っ子一人通らず、鼻をつままれても解らない程の暗さである。

マダムは先に立つと小走りに私を案内して呉れた。夜目にも判然と解る一階七号室、扉



を排すと中は十畳程の洋間になって居り、ソファにはクッションのきいた椅子が三つ並んでいた。

紅の厚い絨氈が部屋一杯に敷き詰められ、テレビ、ステレオ、瓦斯ストーブ等々、総てが私の想像以上にデラックスなものには驚かされた。

傍らを見ると趣味のいい支那人形や壁かけなどが飾られ、奥には右手にキッチンと左手には四畳半の寢室が設けられている。

「先生、ゆっくりしてらしてね」

コーヒーをいれ乍らマダムが言う。

「若しお泊り下さるなら、朝はトーストを作るわ。ハムと卵でいいでしょ」

ストーブの熱に部屋が温まると、マダムはスーツを脱いで、上半身は黒いスリッパ一枚丈となった。

「マダム、仲々快適なアパートじゃないか」

「それ程でもないわよ。あ、それよりお風呂が沸きましたからどうぞ。その間に仕度させますわ」

バスもタイル張り、二坪近くの豪勢なもの、凡そ「アパート」などとは縁遠い感じである。

明日（と言うよりも午前二時近くである

が）は日曜日と言う気安さがあってか、私は伸び伸びと浴槽に浸ると、思い切り四肢を伸ばし、胸をふくらませると大きく呼吸を試みた。何処となく、女が燃やす匂いの様なものが充満して思うに思えた。

「快い酒の酔も恰度辺りの閑寂さと溶け混じって、うとうとと醗が重くなっているのを感じる。と、その時、人の近づいて来る気配を感じた。」

——おや、マダムも一緒に入る積りなのか？ それは全然私の思い設けぬ事であった。

そして、それ迄は余り想像もしてなかった事だが、私は今更の様にマダムの裸像を臉に描いて見るのだった。

彼女は五尺四寸近く、体重も十七貫は欠けないであろう、女性としては大柄の方である。年も三十二、三にはなるであろうか。只パトロンは全然持っていないと、専ら周囲の噂であった。

はっと眼に燃える様な色彩が入口の曇り硝子に映ると、やがてそれ等のものは音もなく脱ぎ捨てられて、同時に蜜の様な女臭が風呂場に充満して行くのを感じた。

翌朝、マダム心尽しの朝食が済むと、彼女

は途中迄私を送って呉れた。道玄坂の中途迄来た時、

「ねえ、あたしに今の商売向いてるかしら。」

先生の臍相学ではどう？」

「水商売は悪くないね、然し投機は控え目にした方がいいね」

彼女は私との同浴により、その臍相を確かめたかたらしいが、私は相理衡真、巻五、臍腹捷徑の事など思い出し、一応の止どめを刺して置いた。

相書に曰く。腹壁ちて垂るるは富貴にして寿。腹、児を抱えたるが如きは四海に聞知す。腹上りて（上腹部が張って）短きは（臍下）飯碗に満たず、腹勢垂下するは名天下に播がる。——と。

又曰く。腹、雀腹なるは貧賤にして屋なし（童面腹の事）腹臍突出するは寿の天促を定む。臍深くしてよく李を容るるは名世界に播まり、腹大にして麤を垂るるが如きは食碌無窮、名声四方に震う——と。

道玄坂の朝の陽差しが眩しく照り返って、坂を下って行く私達の足許を照らしていた。

## 告白 私の趣味

海川幸三郎



私は七、八年近く前からK誌を愛読させて戴いている者ですが、書店に並ぶ数多くのこの種の雑誌中、これ程読者の身に成って企画される雑誌は他に有りません。人

間は、十人十色と申しますが、人には色々の性格が有り、また、人にはいえぬ秘かな趣味が誰にでも有るのではないのでしょうか。それを満して下さるのがK誌で有り、

誰が手に取っても満足出来る程の豊かな内容と充実した企画は、他誌には絶対見られません。その例が読通欄で有り、サロン、或いは続々と寄せられる告白、体験又は、モデル志望者の数々ではありませんか。

正にK誌とは「読者による、読者の為の雑誌」といっても過言ではないと思います。それ故に編集部の方の御努力には、大いに感謝致します。

付きましては、私もマニアの方のお仲間入りをお願いする次第です。早速ですが昨年の十二月号でしたか倉仁氏が読通において「K誌において純正なる女性の乗馬スタイルに関心を持つ人は少ない」といわれましたので、今日迄、毎号氏の記事やその他麻生氏、山本氏乗杉氏の乗馬女性に関する記事を、最大の目的と楽しみにしておりました私には、何とも淋しいお言葉に受け取れましたので、この度初めて投稿させて頂きました。氏をこの様に歎かしたのも、他人の貴重なる経験や資料を拝見するだけで己は名乗りもしない私の如き者が居たからに相違ありません。

実は、私も或る乗馬団体に籍を置いて、口頭馬術をやりながら美しい乗馬女性に御奉仕しております。このクラブに私が紹介した一人の女性と私は良く朝の人の少ない時間に行くのですが、騎乗の際とか長靴を脱ぐ時のお手伝いを楽しんでおります。彼女は、乗馬の方は激しく馬を責めたりしません、チョットしたグラマーです。で、私に足を取らせて鞍上にどっかりと誇った時など、毎度馬の奴が羨しく、一度でいいから馬と代ってやりたいと思うのです。

しかし乍ら未だに残念ながら一度も実現致しません、そこでせめて、とばかり私が早く下馬した時など、自分の靴を磨くのです。そこへ激しくは責めないといっても、長靴を履いて、大きな生物を鞭と拍車で思いのまま動かせて来たので、頗る高潮させた彼女が「私も長靴磨こうかしら」等といったくればチャンスです。

「コーヒー一杯に負けとくよ」位の冗談で、椅子に座って拍車を



外し脱ぎ掛けていた彼女に「そのままそのまま」といって、靴クリムを無理に付けてしまうのです。これには人もいないせいか、彼女も「悪いわ。すみません、お茶飲みに連れて下さる」と、大変恐縮した面持で、長靴を履いた足を私の前に差出します、全く私の方は、こちらが恐縮したい気持ち一杯なのに。

この時の彼女の気持は私には解りませんが、クラブに来る女性の中にも美しいドレスを着ている時は、真にしとやかな女性ですが、一旦乗馬服に着替えて長靴を履けば、馬場の横木や、柵に片足を掛ける様な大胆なポーズを取る人がいますからね。

椅子に座るにも、映画「チャタレー夫人の恋人」中乗馬服のダニエル・ダリユーが森番メラーズの差出す椅子に、長靴を履いた足をいっぱい開けて座り、鞭で床をポンポンと打っていたのと同じ座り方をしますから、気分的には相当の変化があるのでしょう。

スター嫌ひかるも「乗馬ズボンに長靴を履いて馬に跨るのはとて

も勇しい感じ」と、いつてました。詳細は以前のK誌で麻生氏だったかが述べられていました。

また、同じ「チャタレー夫人の恋人」で、夫人と森番の出会いの場面で、森番の小屋に馬で乗り付けた夫人が、森番の姿が見えないので下馬して裏に廻って見ると、井戸ばたで体を拭いている森番の姿を見つけ、再度馬の所迄戻り、馬上に跨って森番に近ずき夫の命令を伝えますが、何故彼女が森番の姿を見ながら、途中から引返し、馬に跨って近ずいたのか？私は以前K誌で読んだ「長靴愛好癖について」の中の記事を思い浮べました。

女性が長靴を履けば、奴隷制下における見廻りや、これに準ずる場合、女性が男性的な勇気と支配慾を持つため、特に不従順且つ力強い逞しい奴隷に心理的圧迫を与えるためである、とあります。それで夫人は馬上から鞭を握って行ったのだと思います。もし森番が口答でもしようものなら一鞭浴せ

るべく。馬上より男を鞭打った映画女優

といえ、パトリシアニールが居ます。この映画で、今は亡き女優ゲーリークーパー扮するところの建築技師が、自分の意志どおりに建てない資本家達に憤怒して技師を辞め、山の石切場で重労働についている所へ、この石切場の持主の令嬢であるパトリシアが、馬に乗って見廻りに来るや、現場監督よりクーパーが新入である事を知らされ、家に帰るや早速暖炉の大理石を、火掻棒で叩き割り、クーパーに修理に来る様命じるのであるが、クーパーは他人に頼み帰路についてしまうので、待っていた令嬢は再度馬に跨るや鞭を鳴らしてクーパーに追つき、「別に私でなくとも」というクーパーの頬を、今まで馬を急がせていた乗馬鞭を振り上げ、力任せに打撃するのです。鞭を振り上げた時のパトリシアの表情といい、頬にくっきりと鞭跡を残したクーパーの顔といい今も忘れられません。

同じ乗馬女性でも、カウガールや中世の横乗は興味が半減しないでしょうか。但しG・ベック、J・コリンズ主演の「無頼の群」で

はコリンズが、終始万の鋭い拍車をつけていたのが印象的でした。

また、最近気にかかることは、アメリカ映画では女性は長靴を履かない傾向になって来ている様に思いますが、倉仁、麻生その他マニアの諸氏は、如何お考えですか？その点フランス、イギリス映画は楽しみです。また嬉しいことに、日本人はイギリス好みとかで後者の様です。だけど女優さんの中には馬が苦手か、この人の乗馬ぶりはと期待して行けば、遠景のフキ替だったりします。ヌードでも同じだと思えます。山本富士子の入浴シーン等と、つい釣られて入ってみれば、何処かのストリッパだった等といった様に。

では最後にもう一つ。日本映画で気にかかるのは、美しい女優さんが乗馬ズボンに拍車の付いた長靴を履き、鞭を握って馬上に跨ったまでは良いのですが、いざ馬腹を蹴り、鞭を当てて山野を疾走するシーンになると、トラックの上の張子の馬と一目で解るのは何とか成らないものでしょうか。

## 長篇 S M 小説

## 「宇宙のどこかで」

或る無期懲役囚の告白から

佐 治 麻 造

## S 八〇二号の話 (三)

——檻に入れられる時、手錠を嵌められないのは全く嬉しかったなあ——

S 八〇二号は鼻鎖についた囚人食を舐めとり乍ら、語り続けた事でした。

彼には主として広い邸内の清掃が課され、時には田畑に駆り出されてこき使われた。使用人達の雑用も遠慮会釈もなく云いつけられ、朝から晩迄息を切らして働き続ける彼の首環の音響器は、絶え間なく乾いた音を立てるのであった。数多い使用人の男女の中には哀れみをかけて呉れて、何かと恵んでくれる人もあったが、意地の

悪い連中も多くて、泣かされない日は少い位であった。そのような呼び方や、扱いは禁じられてはいたものの、一言目には懲役人の癖にと嘲けられ、撲られ、唾を吐きかけられた。使用人達の小件や小娘達にからかわれ、嘲けられて、口返し一つ許されない無念さ。今日も首環に縄を結ばれて、四つ這いになって引摺り廻される口惜しさにカツとなった彼は、縄尻を持って嘔し立てる二、三人の子供を、力任せに引張り倒してしまつたのであった。泣き声に駆けつけた女共の注進でやって来たお松さんに叱りつけられた彼は、全身を鞭打たれて、ヒューヒュー悲鳴を上げて赦しを乞うた。

「さ、手をお出し」

モンペのポケットから取出された手錠が、彼の両手首に冷たく鳴



り、女子供達は笑った。

「当分、そうして働いた方がいいわね」

革鞭が炸裂し、身をよじって悲鳴を挙げる彼を尻眼に彼女は立去った。

「やーい、手を括られてしまいいった」

縄をまだ首環につけられたまま、再び庭を這い摺りかける彼を、子供達は面白そうに囁し立てるのであった。

——五日間ばかり全然外して呉れねえんだ。今から考えりや馬鹿らしくなるけど、何しろ手錠のままで労役させられるのは初めてだったもんで、そりゃ辛かったぜ。ほんとにひでえことをしやがると思うけど、泣いたってものがいたってどうも出来やしねえやな。骨の髄迄、分際ってものを叩き込まれた様な気がしたなあ——

令嬢の冷酷さにも彼はつくづく泣かされた。身分が余りにも隔っている事とて、殆んど諦めてはいるものの、二つ三つ年下のお下げ髪の小娘が退屈しのぎに苛め、からかうのには、彼も時々歯がみしたくなる程であった。

「二十四号。ちょっとここへおいで」

或る土曜日のこと、二、三人の同級生を伴って帰宅した令嬢が、午さがりの縁先から彼を呼んだ。山積した雑用を命じられている彼は、時間が惜しくて歯ぎしりし乍らも、膝で歩いて縁先の地べたにひれ伏さねばならない。遊び疲れたお嬢様達のなぶり物にされなければならぬ我身が悲しかった。投げられるゴムまりを口にくわえて戻って来る動作を何遍となく繰返す彼を、彼女達はキヤーキヤー笑って眺めた。

「ね、よく云うこときくでしょ。」

「ほんと。舌出してフーフー云ってるわ。犬みたい。」

令嬢の命令で、今度は平たい石を両膝に挟み、前に伸ばした両手で円い石を支え捧げて立たされた。

「いいと云う迄、そうしてるのよ、膝の石を落したり、腕を下ろしたりしたら承知しないわ。うちの出す報告で、お前の刑期が長くも短かくもなるのよ。分ってるだろ。いい？」

彼女達は、女中が運んで来た茶菓を飲み食いし、彼は脂汗を垂らして呻くのであった。

「駄目ね。もうへたばったらしいわ、懲役囚の癖にだらしないこと。お松さん、鞭で五つ六つ打ってやってよ。私の命令をきかない罰よ。フフフフ」

ヒーヒー云わされた後、彼は労役に追い帰され、令嬢達は再び遊びに耽るのであった。重い薪割りの斧を振上げる彼の頰に伝わる涙を見たお松さんは、一瞬あわれみの色を浮べたが、黙って革鞭を彼の背に吊って勝手口に消えた。

翌日は秋晴れの日曜日、彼は令嬢達四人のピクニックのお供をさせられた。飲食物を始め、敷物、遊び道具、折畳み式の椅子4個まで積上げたお、こは、ずっしりと肩に喰い込んだ。

「重い様ねえ、おとなしくおともして来るんだよ。」

お松さんがエプロンのポケットから取出した手錠を、さも当然の様に振り上げるのを見た彼は、悲しくなって涙をこぼした。

「おとなしく致しますから、手を縛るのは勘忍して下さいまし。お願いします。」

「そうお。じゃ、どんなに辛くともおとなしくするかえ？」

「ハ、ハイ。それはもう」

軽やかな服装の少女達が、キャッキャッと笑い合って出て来た。

「おや、お松さん、どうしたの？ 早くしてよ。」

「いえねえ。この二十四号が、余り悲しそうにするもんですから。お嬢様、用心のためにお持ちになるだけになさったら？」

「何をなの？ あ、手錠嵌めないで連れて歩くの？ 冗談じゃないわ、此奴は前のと違って三級囚なのよ。きびしく扱ってやらなきゃ駄目よ。私にお貸し。」

お松さんから手錠をひったくった令嬢は、冷たいくぼを頬に浮べて彼に近寄った。

「気をつけをしてごらん。不動の姿勢よ。フラフラしないでちゃんと立って。お前、ずいぶん大きいのねえ。」

お下げ髪の令嬢は彼の肩迄しかなかった。

「それに近くで見ると、とてもいい体なこと。労働する様に生れついているのね。」

彼女は彼の体をジロジロ見回して感心した。

「さ、両手を揃えて前に差出して……」

手錠を嵌められながら、彼は歯を喰い縛った。

「あら、体中を真赤にして唇を噛んだりしてさ、何がそんなに口惜しいの？ 感化所じゃあ毎日嵌められてたんだろ。懲役囚の癖に生意気ねえ。お松さん、この金具の鍵は手錠のと同じなのね」

カチリと音がして無情にも手錠の短い鎖が革帯の腰枷に留められてしまった。

「お松さん、手錠をもう一つ出してよ。それから鞭も。」

「どうなさるのです？」

「ウン、足に嵌めてやるのよ。足首には少し無理かしら？ そりや

体む時だけよ。何ぼなんでもそんな短い鎖じや歩けやしないもの。」  
「お嬢様はずい分きついんですのねえ。そりや、足にだって嵌めようと思えば嵌められますわ。ちよっと取って来ましょう。」

他の三人の少女達も近くに立って彼を眺めた。

「ちよっと可哀想みたい。こんな大きな体してるけど、未だ私達と同年位なんですよ？」

「そうねえ。おとなの奴隷なんかなら何とも思わないけど。涙こぼしてるじゃないの。やっぱり情けなくて恥かしいのね。」

「こらっ。気をつけの姿勢だわよ。身動きは出来ないのよ、お前は。まっすぐに正面を見てるの、フフフ。重いだろうから、少しは前に体を倒してもいいわ。」

再び出て来たお松さんは

「使わずにしまつてあったもんですから、少し錆びてますけど。鍵は同じこの鍵ですわ。はい革鞭。それから曳き縄は、首では荷物が邪魔ですから腰枷の後ろにつけときますわね。」

二米程のロープが腰枷の後ろに結びつけられ、令嬢は

「この手錠、よく磨かせておかなきゃいけないわね。」

と彼の背の荷物の中へ投げ込んだ。

「この鍵は私が持つてるからね。フフフ」

彼の眼前で小さな鍵をクルクル回して見せてから、ポケットにしまい込んだ令嬢は、腰縄を左手に握り、右手の鞭を振り上げてピシリと打った。

「ヒーツ」

「ホホホ。何よ大袈裟な悲鳴ねえ、軽く当てただけじゃないの。さ、とっとと歩くのよ。」



娘達は、縄尻と鞭とを代る代るに持っては、彼を追いついて面白がっていたが、すぐに飽きてしまった。

「鼻環を嵌めてあると面白いんだけどねえ。さ、もう自分で持っておいき。」

自分の腰縄と革鞭を持たせられた彼は、令嬢達のあとを追って野道を急いだ。

六軒程離れた山の上にある有名なお寺が目的地らしく、次第に山道は峻しくなり、彼は重い荷物に汗みどろになって喘いだ。

「ここで少し休憩しましょうよ。」

令嬢達は、彼をしやがませて敷物や飲物を取り出した。

「お前は立ってんのよ。横着したらすぐわかるように鞭を膝に挟んでるがいいわ。」

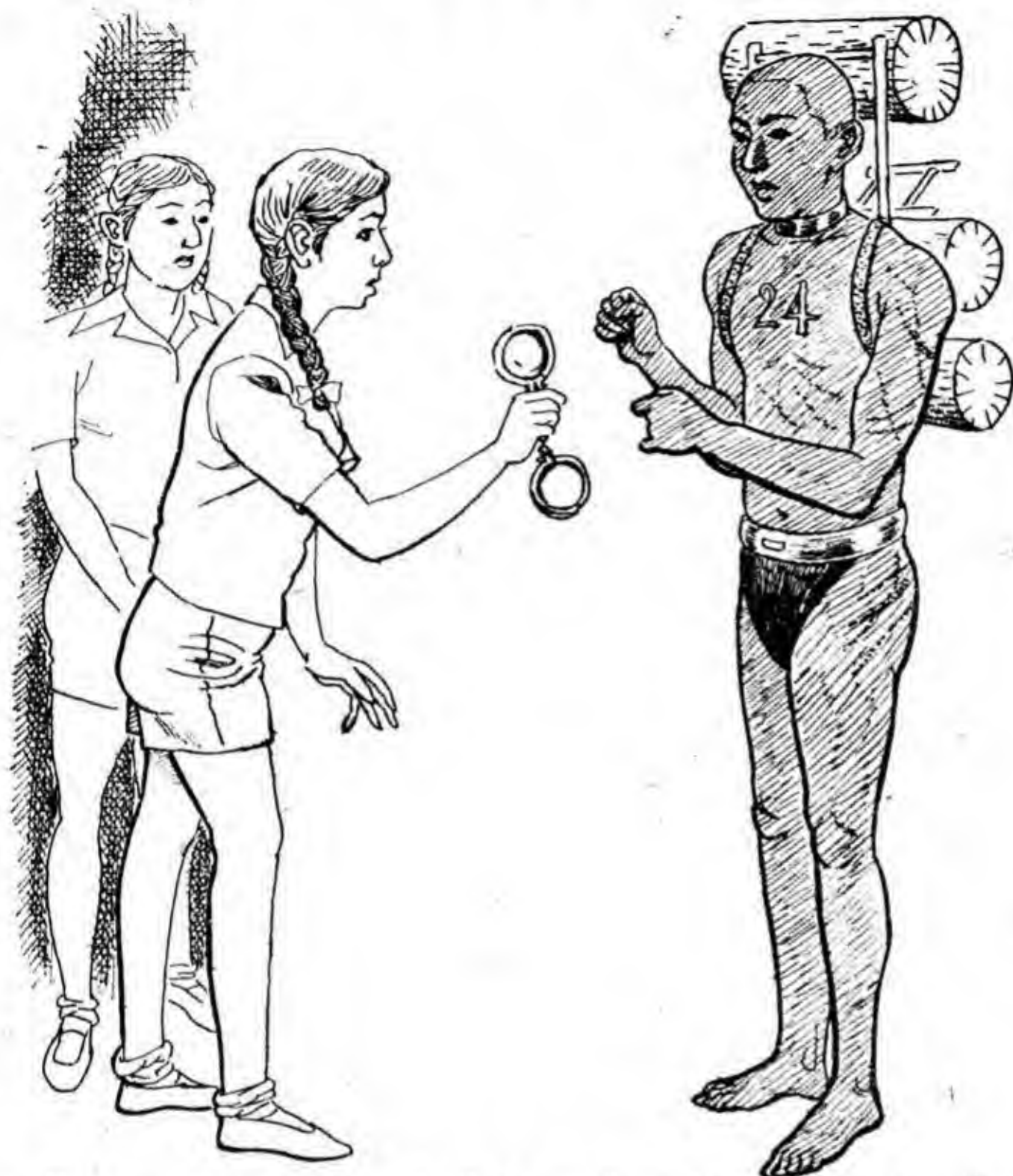
肩に喰い込む重い荷を背に、膝で細い革鞭を落さない様に挟んで、彼は、敷物の上に憩う令嬢達の方を向いて、うなだれて立ちつくした。

反抗しようなどとは露思わないが、令嬢の冷たい仕打ちが恨めしくなり、彼は鼻を吸って涙ぐんだ。

「ねえ、彼奴泣いてるんじゃない？ 少し地べたに坐らせてやったら？」

「駄目よ。甘やかせちゃあ却って為にならないのよ。辛い目に会うのは当り前だわ。囚人なんだから。」

やがて令嬢達は立ち上り、お嬢様は彼の膝



の間から鞭を抜き取って、いきなり彼の背に当てた。

「ヒーツ。な、なぜ……なぜ鞭を頂かねばいけないのでしょうか、お、お嬢様、こんなにおとなしくしていますのに。」

「なんだって!! 鞭のお礼を云わないから叱ってやろうと思つたのに、何と云う口の利き方をするの?」

彼の肩迄もないお嬢様は、頬を上気させて怒り、両手を伸ばして激しいピンタを彼に加えた。

「馬鹿ねえ、本当に。いらぬことを云わなきゃあいいのに。囚人なんだから、鞭位は当り前なのにねえ。」

頬がはれる程揉まれた末、ところ嫌わずしたたかに鞭打たれた彼は悲鳴を挙げた。

「お鞭、有難うございます。ありがとうございます。お、お赦し下さいまし……」

「そうよ、そんなふうには神妙にすればいいのよ。大体、お松さんは甘過ぎるわ。さ、鞭を持って……」

腹の前で合掌して哀願している彼の手錠の両手に鞭を押しつけて持たせたお嬢様は

「おもりを引き摺らせてやるわね。」

と、彼の腰についたロープの先に道はたの石を結びつけ、手伝った友人達とキヤーキヤー云い乍ら歩き出した。転落するような危険のある山道ではなかったが、両手をいましめられ、腰繩に石を曳き摺って喘ぎ喘ぎ登る彼は、時々足を滑らせて転んだ。

——何しろ手をつくことが出来ないもんで、顔や胸、殊に膝小僧なんかひどくすり剥けてしまいがるし、背負った荷物はやけに重たいし。そのまま寝転んで休んでやろうかと思うけど、鞭は痛いし

なあ。ハアハア云って起き上るのを見て、小娘共はケラケラ笑いやがるんだ。癪にさわって癪にさわって。——

目的地に着いたら陽は既に中天を廻っていた。山頂近くの見晴しの良い台地で令嬢達の昼食である。お嬢様は、錠を取出して彼の手錠を外して呉れた。

「さ、荷物を下ろしてもいいよ。支度をおし。」

「アラ、大丈夫? 手を自由にしちゃって……」

「大丈夫よ。腰繩の石を解いて。」

繩尻を左手に、鞭を右手に持ったお嬢様に頬で追い廻され乍ら、彼は太急ぎで座を設け、湯を沸し、椅子を組立てた。動き廻る彼の腰枷にブラ下っている手錠の二個の環が、触れ合つてカチャカチャと鳴った。

「もう、これでさせる事ないわね。」

令嬢達は、腰繩を取られたまま立って居る彼に近寄って、胸や腕を棒切れでつつき乍ら、

「ね、ごらんよ。分厚い胸ねえ。それに首や腕の太いこと。」

「縛っとかなくてもいいの?」

「勿論、括るわよ。今、どう云う工合にしてやろうかと考えてるところなの。」

さんざんこき使われるだけ使われた末、今度はいましめを受けねばならないのが彼には悲しかった。

「おとなしくして居ます。身動き一つ致しませんから、このままで坐らせて下さいまし。お願いです。縛らないで下さいまし。」

彼の哀願に対する令嬢達の嘲笑は、爽かな山頂の風に乗って流れた。



「フフフ、じゃあお坐りよ。あぐらかいていいわ。ウン、そうそう。そしてね、手錠を両足首に嵌めるのよ。出来ないって？ 馬鹿。体を前にうんと倒してごらんよ。ぐずぐずすると……」

振上げられた鞭を背に感じた彼は、腰枷の前部に取付いて居る手錠をわが両足首に無理矢理に嵌めて、腰と足の痛さに呻いた。

「ほうらごらん。その気になればすぐ嵌められるじやないの。ぐずぐずした罰よ。」

鞭が背に三つ四つ鳴り、彼は未だ自由な両手で草を掴んで、悲鳴を挙げて身をよじった。

「ね、ごらんなさいな。見る見る中に赤い筋がふくれ上って来るわね。近くで見ると、ほんとに痛そうねえ。」

「けど、男の人が鞭打つと、もっともっと凄くなるのよ。皮が破けて血が出る寸前と云うのが一番上手なんだって。」

「廿四号。まだ鞭が欲しいの？」

「……ヒーツ。も、もう……堪忍して下さいまし、お慈悲でございませう。お嬢様。」

「フフフ、もういいの？ だったら、何と云えばいいのかぐらい知ってるだろう。」

彼はハッと思いついて

「あ、ありがとうございます。」

「そうよ。そう云えばいいの。分ったかい。そろそろ一つ、ボヤボヤしてた罰よ。」

「ヒーツ。あり……がありがとうございます。」

荷物の中から、もう一つの手錠を取出して来たお嬢様は

「さ、手を後に回すのよ。眼をこすってなんか居ないでさっさとお

しよ。」

後手錠を嵌められた彼の背に更に石が乗せられ、喘ぎ呻く彼の傍らで令嬢達は豪華なお弁当を開いた。無理な姿勢で石を背負われ、身動き一つ出来ない彼は、地べたを睨んで唯呻いて堪え忍ぶだけであった。

「待遠だったわね。おひる御飯食べるかい？」

「……お、お慈悲でございませう。何か食べさせて下さいまし。そして水を一口……」

「ね、あなた。やるのはいいけど、あのままで食べさせられないかしら？」

「そりやちよつと無理でしょ。そら……」

両膝を矢庭に持ち上げられた彼は、悲鳴を挙げて後にひっくり返った。ズルズルと背を滑り落ちた石が鞭痕を苛み、関節は脱臼せんばかりに痛かった。カチャカチャと両足首の鉄環が外され、彼は放心した様に正座した。膝の前の地面に弁当の残りがブチまけられた。彼が苦しみ喘いで運んで来た水は惜しげもなく、地面に注がれて小さな水溜りをつくった。

「さ、お食べよ。」

後手錠は外しては貰えない。水溜りに口をつけて啜り、地べたに転った土まみれの食物を拾い食いし乍ら、彼は涙をこぼした。

「食べたかい？」

「ハイ、御馳走様でした。あの、もう少し水を吞ませて下さいませんでしようか。」

「フフフ、駄目ね。そこで正座しといて。足を括るのは堪忍したげるわ。」

令嬢達は、食後の一刻を秋の湯の山の上で遊び呆けたが、彼がウンウン呻って運び上げた四個の椅子は、遂に使用されず仕舞いであつた。

### S八〇二号の話 (四)

次の土曜日から日曜日にかけて、村の秋祭りであつた。仕事を休んだ使用人達の雑用にこき使われた末、彼は早い目に檻に入れられてしまった。鳴物の音や、人々のざわめきが潮騒の様に夜空に響き、彼は檻の扉に施された大きな錠前を眺めて、身に沁みる悲哀を味わつた。

「二十四号。お前もお祭りが見たいだろ。どうだい？ ちよつと連れてって上げようか？」

綺麗な着物に赤い帯を締め、素足に下駄をはいたお嬢様が檻の前に立って云つた。

「お、お願い致します。」

「そう、じゃ出ておいで。」

彼女が片手に持った手錠を見た彼は、おとなしく両手を揃えて差出した。ついで首環に曳き縄がつけられ、彼はいそいそとお嬢様に曳かれた。小娘とは云え化粧の香りが匂い、素足が夜目にも白く浮い

て見えた。

鎮守様の森の中にはいろいろな店や見せ物等が繰りひろげられ、多勢の老若男女や子供達が楽しそうに行き交つて居た。そして適当な支持物のない所には、感化所の少年囚達が、嚴重に鎖錠を施され頭にアセチレン灯を被つてあちこちに立たされていた。両足には重





い鉄丸がつけられ、胸には大きな木の札をブラ下げて居る。札には「飲食物をやらないで下さい。むやみにいたずらをしないで下さい」と書いてあった。

人々にジロジロと嘲けりとさげすみの眼で眺められ、子供達から石を投げつけられて、ただじっと立ちつくす彼等の頬には涙が伝わっていた。広場の一隅の台上に二人の少年囚が晒し者にされているのが見えた。頭上に横に渡した棒に両手を、そして台上の鉄環に両足を、いずれも大きく拡げた恰好で鎖に短く繋がれ、鉄棒のくつわを噛まされて黒い分厚い革褌だけの彼等二名は、既に成年に近いらしい体つきをしていた。

お嬢様に首繩を曳かれて近寄った彼は、人だかりの後ろから大きな立札を見た。それには

『この両名は祭礼準備の雑役に使役中、拾い食いをした。御希望の方は随意鞭打たれ度い。代金は村に寄付する』

そして一鞭当りの金額と、感化所長の婦人の名前とが書いてあった。既に彼等の全身には至る所に赤い鞭痕が走り、その両眼は人々に対する哀願に満ちて、おそれおののいていた。一人の青年が祝い酒に赤い顔をして台上に上り、若い婦人に料金を払って鞭を受取った。その婦人は彼にも見覚えのある感化所の職員であったが、今夜は一きわ化粧も濃く美しく着飾っていた。

「今度は、右手の囚人の番よ。七十二号よ。」

「こいつだね。七十二と刷ってあらあ。おい、ちょっと性根を叩き直してやるぜ。」

鞭音が響き、哀れな少年囚は身をよじりのた打たせて悲痛な声で喚いた。青年は時々激しく台上を叩いて、その度に恐怖の悲鳴をあ

げて空しい身もだえをする囚人をからかった。

「フフフ、まだ鞭は当ててないぜ。しっかりしなよ。ホラここはど

うだ。」

「ヒーツ…」

「やっぱりちつとはこたえるらしいな。そら、もう一つ。これで勘弁してやらあ。」

青年は無慈悲にも、苦痛をこらえる少年囚の顔に、痰を吐きかけて台を降りた。

「アラ、あんた。二つばかり多かったわよ。」

「勘定してるのかい？ ちえっ、いいじゃないかよ、二つぐらい。

まけといて呉れよ。」

「仕様ないわねえ。じゃ、まけてあげるからこの薬を鞭痕に塗ってやってよ。」

「チャッカリ使いやがるなあ。」

鞭痕にタップリ塗りたくられた治療促進剤の刺激に、少年囚は脂汗を流して呻き、人々はゲラゲラと嘲けり笑った。

「まるで縞馬みたい。けど、あんなに物凄く鞭を当てられたら、ずい分痛いだろうねえ。」

お嬢様は、彼を振り向いて眉をひそめていった。すぐ眼の下に見える彼女の美しい衿足から、ほのかな香りが立ち昇り、彼は頭がクラクラした。

「それはもう…。鞭の痛さなんか、お嬢様には御想像もつかないことでございますけど、とても痛くて、本式に打たれますと、悲鳴が勝手に出てしまう位なんです。」

「そうお。それで文句一つ云える訳じゃなし、お礼迄申上げなくち

「やらないんだから哀れなものねえ。おや、お前何してるの？」  
手首に喰い込んだ手錠を少しずらせようとして忽ち見咎められてしまった。

「ハ、ハイ。手錠が少し喰い込んで痛いものですから、つい…。申訳ありません。」

「フン。まさか外そう等としたんじゃないだろうね？」

「飛んでもございませぬ、そ、そんな…。外せる訳がございませぬです。」

「そりやそうね。まあ信用してやるわ。さ、おいで。あっちの方へ行って見ようよ。」

浅間しい姿で多勢の人々の間を曳き廻された彼は、悲しくなつて檻の中にいた方が良かったと思つた。お嬢様は流石に買い食いもせず、ざつと見物して廻ると家路についた。

「さつさとお入りよ。」

檻の扉がガチャンと施錠され、彼は

「ありがとうございました。分際過ぎた事をさせて頂き、御恩は決して忘れませぬ。」

と合掌して御礼を云つた。

「嬉しかっただろ。」

「ハ、ハイ。とても楽しゆうございました。それで、あの…、手錠、外して頂けないのでしょうか？」

「それがね、鍵持っていないの。取りに行くの面倒だし、お松さんが帰つて来る迄憶えていたら外させてやるからね」

「…ハ、ハイ、お願い致します。」

「けど一晩位、いいじゃないの。べつに仕事させる訳じゃなし、辛

抱おしよ。」

「ハイ…」

「何よ、悲しそうな顔してるわね。私には分らないけど、そんなに辛いものかしら。そりや鉄の手錠だから、冷たくて痛いだろうけどねえ。ホホホ」

母屋の方へ立ち去るお嬢様を、鉄格子越しに見送って、彼は唇を噛んだ。

## S 八〇二号の話 (五)

或日の夕方、庭を掃いていた彼は誰かが吐き捨てた飴玉を見付け、あたりをうかがつて素早く口に入れた。途端に二階の窓からお嬢様の鋭い声が落ちて来て、彼は震え上つた。

「二十四号っ、今何を拾つて食べたの？ 馬鹿。じつとそこで立っているんだよ。」

素早く降りて来たお嬢様の足許にひれ伏した彼は、庭下駄で頭を踏みつけられ蹴り飛ばされ乍ら、必死に哀願して赦しを乞うたが、赦されはしなかった。

「どうしたの？ 何を叱ってるのだえ。」

出て来られた奥様は、お嬢様から事情を聞き、

「まあ、本当に仕様ないねえ。食べるものも十分にやっていない様で、人間きが悪いこと。」

「お、奥様。お、お赦し下さいまし。悪うございました。」

「ねえ、お母様。やっぱりいつでも嵌口具、嵌めとかなくちゃ駄目ねえ。」

「でもね、嵌口具なしでも拾い食いや盗み食いをしない様に馴けて



やらなくちゃ、と思つてね。ま、今夜は勿論食べさせないよ。あ、お松さん。丁度いいとこへ来たわね。二十四号はね、今夜は手足を括って御飯抜きでブチ込んでいてね。」



「ハイ。拾い食いたんですって？ 馬鹿な奴だこと。奥様もお嬢様もお夕食の支度が出来ましたんですけど……。二十四号。お前は牛に餌をおやり。済んだら私のところにおいで。縛ってやるから。いいね。」

泣き乍ら牛に飼葉をやった彼は、夕餉の匂いが立ちこもる台所の土間にひれ伏して鎖錠を施されるのを待った。やがてお松さんが、まだ口を動かさず手錠を二つ持って現われた。

「そら、腹這いになって、手足を後ろへ曲げて。そうそう」

短い鎖を互いにかませ、二つの手錠が両手首、両足首にカチャカチャと嵌められた。

「檻の中に入って待ってるのよ。這って行けるだろ。私はお菓子を喰べてお茶を飲んでから行くからね。」

涙をポタポタこぼし乍ら尺取虫の様にして漸く檻の中へ這いずり込んだ彼は、声を忍んで啜り泣いた。やがてお松さんが現われて、檻の扉をガチャーンと閉めてピーンと錠を下ろし、

「おや泣いてるの？ 可哀想だけど仕様ないわねえ。お前、今日は一日中鍾を曳かされてたんだろ？ さぞひもじいだろうねえ。」

「……ハ、ハイ。朝から晩迄、馬みたいにして重い鍾を曳かされていたんです。ごさいます。お慈悲です。何か一口だけ食べさせてやって下さいまし。」

「ホホホ。哀れっぽい声を出しても駄目よ。奥様のお言葉なんだからね。拾い食いなんかして、それをお嬢様に見付けられたのが運の尽きさね。お前も、甘い物が食べたいだろうしさ、私達なら見逃してもやったんだけどね。」

「……ハ、ハイ。そ、それで、明朝には食べさせて頂きますでしょうか？」

「フフフ、さあねえ。一応奥様にお伺いして見るわ。じゃね、あんまり可哀想だから、せめて匂いだけでも嗅がせてやるよ。ホラ、これはね、私達がさっき奥様から頂いたのよ。ここにおいとくからね。」

彼女は、檻の外、二十センチ程の所にカステラの塊をおいて、笑い乍ら立ち去ったのであった。

鉄鎖に繋がれる以前ですら、滅多に口にした事のないカステラの大きな切れを眼前に見乍ら、如何ともすることが出来ず、まりの様に手足を括られて只喘ぎ呻いている彼の檻の前に、やがて飼犬が現われてうまさうに平らげてしまい、檻に額を押付けて思わず唾を呑み込む彼を、うさんげにジロリと睨んでノソノソと立去った。

翌朝与えられた残飯を、まだまりの様に括られて腹這いのまま、ガツガツと貪る彼の恰好に、女中達は腹を抱えて笑った。一晩中逆海老のいましめのままで過した翌日の労役は辛かった。

「お松さん、そっちの方の用は一応済んだかい？　じゃ今日も借りるぜ。」

今日も又、作男の息子であるこの十六、七の少年に追われて畑でこき使われるのだ。

「キリキリ働ける様にシヤンとさせてやらあ。気をつけえ。」

不動の姿勢を取らされたまま、顔がはれ上る程ビンタを食い、そ

の上に竹の棒でたたか撲られた。齒を食い縛って悲鳴を堪え乍ら、彼は思わず両拳を握りしめてブルブルと震わせた。併し如何に口惜しくとも口答え一つ許されはしない。

「さあ、来い。」

追われた畑の端で鋤の革具を身に施された彼は、細い青竹でピシピシ打たれ乍ら、重い鋤を曳いて堆肥をすき込む労役に喘ぎ続けた。昼食後

「おい、懲役。畑に出る前にちよっと汲取りをしろよ。」

彼の檻の前に汲取口がある使用人用の便所は、人数が多いせいから大きい壺も一週間程で一杯になるのであった。重い天秤棒を担いで遠くの野壺へ何回か往復し、これでお仕舞いだなと考え乍ら、彼が柄杓でドボドボと桶に汲み取っていると、母屋の方の庭先で

「……お嬢様。では、三日ばかり勝手させて頂きます。お土産を沢山頂戴致しまして……」

「ああ。じゃ、ゆっくり帰っておいでよ。御両親によろしくね。」

庭の潜り戸を里帰りさせて貰うらしい若い女中が出て来て、鼻をつまみ乍ら彼の傍らを小走りに通り抜けようとした。彼女は、当然彼が汲取りの手を止めると思っていたのだろうし、彼も注意したつもりではあったが間が合わなくて、桶の液面からはね返りが、彼女の和服の裾に飛び散ったのであった。

「アッ。ど、どうしようかしら、折角頂いたばかりの着物を……」

彼女は悲鳴をあげて色を失い、彼も全身を着くして驚き震えた。恐ろしさに力の脱けた膝をガクリと地面について、唇をワナワナ震わせ乍ら両手を合わせ、叶わぬこととは知りつつも必死にお救いを哀願する彼の前に、お松さんや少年も現われて、口々に罵り叱り



上げた。

「旦那様も奥様も御留守だし、ともかくお嬢様に申し上げなくちゃね。お初さん、あんたは早く着替えてお帰りよ、バスが来るわ。」

若い娘はシクシク泣き乍ら、彼を睨みつけて立ち去り、やがてお嬢様がスラックス姿で現われた。

「二十四号。」

「ハ、ハイ……申訳ございませ……」

「謝まった位で済むとは思ってないだろうね。」

「ハ、ハイ。懲罰をお願い申し上げます。鞭打って下さいまし。」

「鞭は勿論よ。ええと……。お父様もお母様もいらっしやらないから私が決めてやるわ。三ちゃん、ちょっとおいで……」

少年はお嬢様に耳打ちされてニヤニヤ笑ってうなずいた。二十ばかり全身を鞭打たれた後、彼は首環を外されて古い捕縄で縛り上げられた。

「これから何日間も括っとくんだから、手首と足首ぐらいでいいわよ。その代りキッチリと括ってよ。」

後手に括られた両手首はゆるく首に掛けられた首縄にグッと吊られ、正座したままの両足首は更に両手首に結ばれた。

「二十四号。今日から五、六日の間、あの中に入っといで。フフ。」

お嬢様は汲取口を指差して笑った。

「アッ、そ、そんな。おゆるし下さいまし。それだけは……」

少年が素早く彼の口に短い棒切れを噛ませ、両端に縄を掛けてギユッと後頭部で締めつけて結んでしまった。お松さんが、大きく切った絆創膏を、彼の両眼の上からベタリベタリと貼ってしまった。

「そこ入れよ。アハハハ」

少年に引き摺られた彼は、意味の分らぬ喚きを上げ乍ら、大きな汲取口の中へ突き落された。

汲取口は大きいとは云え、潜り抜けるのは漸くな位で、眼の見えない彼は、少年の土足で無慈悲に小突かれ小突かれ、孔の縁に頭や肩を打ちつけて、辛うじて体を入れた。堪え難い悪臭が一きわ顔面に迫り、眼が見えないだけに余計におぞましさと不安を感じて号泣する彼は、ズルズルと壺の斜面を滑って中心に落ち込んで倒れた。彼は必死にもがいて起き直った。壺はかなり深く、正座した姿勢で顔が汲取口に出るか出ないかであろうと彼は考えた。

「それ、頭からブツ掛けておいてやってよ。じゃ三ちゃん、蓋をしっかり締めといてね。アア臭い臭い。私も帰るわ。コーヒーでも飲まなきゃ……」

彼がさっき汲取ったばかりのものが、柄杓で彼の頭上に注がれ始めた。彼は、もう死んだ方がましだ、と思った。

「どんな心持だい？ え？ ハハハハ」

大きな木の蓋がガタリと閉められる音を聞き、彼は、最早涙も出ず、思考力さえもなかった。

## S 八〇二号の話 (六)

囚人とはこんなにもじめなものか。哭き乍ら何時間かの永い時間が過ぎ、嘔吐し尽した空腹を切なく忍んでいると、頭上からお松さんの声が突然降って来た。

「お前まだ生きてるの？ お腹減っただろ。ご飯をあげるから、上を向いて口を開けてごらん。」

やかんか何かに入れてあるらしいドロドロの雑炊が彼の顔面に浴びせられ、やがて狙いが決って口中に注ぎ込まれた。

やがてひっそりと静まり返って、彼は夜になった事を知った。壺の斜面に背をもたせると、両膝で踏張り乍ら、彼は半ば失神状態で眠りこけてしまった。気がついた時は既に朝らしく、女の声の頭上に聞いて、ハッと習慣的に身を縮める。

「生きてるのね。可哀想ねえ。そうだわ、せめて頭だけでも洗って上げようね。じつとしといで。」

彼の頭に冷水が注がれ、顔、首を伝って肩から胸に流れ落ちた。

「辛抱おしよ。可哀想に……」

眼の見えぬ涙は、その声で三吉少年の妹と知り、彼女の慈悲の有難さに咽喉を鳴らせて感謝した。他人の体のように最早感覚がなく、両腕も石の様に痺れてしまった彼は、朝夕二回、口中に注がれる雑炊と、三吉少年の妹が時々浴せて呉れる冷水とをひたすら待って、唯蠢めきもだえるだけであった。旦那様や奥様のお耳に入ってひょっとすれば赦して貰えるかも知れないと云う望みも薄く消えて、二日目も暮れ、三日も過ぎた。疲れ果て冷え切った体を硬直させ



たまま、彼は眠ることも出来ないで喘ぎ抜いた。力も尽き果てた彼が上体をフラつかせて苦しんでいると、突然蓋がガタンと開いた。「だいぶこたえたようね。そろそろ赦してやりましょうよ。三ちゃん、引張り上げてやって。」



お嬢様の声が微かに聞え、棒切れのくつわに何かが引掛けられてズルズルと引き上げられた。

「ハハハ、お陀仏寸前てどこじゃないか。こら、もっと膝をなんとかしないとつかえて出れないぞ。オイ、そんなにもがくとはね、返るじゃないか、阿呆」

首が抜けて骨が折れそうな痛さに呻きつつ、夢中で這いもがいて地上に転がり出た彼は、死んだ様に地上に倒れて喘いだ。

「こっちへ来るんだよ。」

力まかせに引摺られて、少し離れた地面に掘られた浅い穴の中に落し込まれた。

「そうして放つといいたいわ。もうすぐ夕立ちが来る様だから……けど臭いわねえ。」

遠くでお嬢様の声が聞え、彼は土に身を投げ出してボロ切れの様に眠りこけてしまった。

激しく全身を叩く大粒の夕立ちに目が覚めた彼は、甦った様な心地で穴の中を転げ回って全身を洗った。やがて射して来た日光の気持よさを味わい乍らウトウトとして居ると、お松さんがやって来て、捕縄を切りほいて呉れた。

「しばらくしたら来るからね。手足が動く様にしとくんだよ。あ、それから眼隠し取ってもいいけど、じんわりと眼を開けないとつぶれてしまうかも知れないわ。分ったかい？」

暫くして、彼は痛む眼を薄くあけ乍ら、小川に追われて身を洗わされた。投げ与えられた洗濯石鹸のかけらと、古縄とで全身をこすり何度も何度も口中を洗い乍ら、彼は何となしにオイオイと泣けて来た。

残飯を与えられた後、古縄で首を松の根方に繋がれた。日も暮れて入浴を済ませたお嬢様が赤い帯を締めて彼の前に現われた。

「未だ臭いわねえ。フフフとお？ 辛かったかい。」

「ハ、ハイ。骨身に沁みましてごさいます。お赦し下さいまし。」  
お初さんもやって来て、彼の頭を憎らしそうに蹴った。

「もう勘弁してやる？ それとも……」

「もう、よろしうございますわ、お嬢様。」

「そう。気が済んだのね。」

お嬢様はブラブラと立去った。

「お前、ずい分ひどい目に遭わされたのねえ。」

「……申訳ない事をしてしまいました……」

「壺の中でもぞもぞしているお前を見て、少し可哀想だったわ。気をおつけよ。」

「ハイ。」

夜おそくまで松の木に繋がれた彼は、使用人用の風呂場に連れられて、濁ったゆるい湯で更に体を洗わせて貰った。

「湯舟に入ったら承知しないよ。ようく洗ったら、お湯を落して、綺麗にそこら中を磨いておおき。」

湯で体を洗うと生き返った様な心地がした。

「使役期間が済む迄、これからずっと夜は後手錠だって。お嬢様のおいつけよ。さ……」

お松さんが、二つの鉄環を重ねて取出した手錠を見て、彼は両手を後に回してうなだれた。遠くの方で、お嬢様が楽しそうに笑う声が風に乗って聞えて来た。

## S 八〇二号の話 (七)

——三吉って云う奴は俺を苛め抜きやがって本当に癪にさわる奴だったけど、妹の方は全く可愛らしい娘だったなあ。——

或日、彼が納屋で葉を打っていると、彼女が愛くるしい顔をして立ち寄って話し掛けた。

「あんたよく働くのねえ、感心だわ。」

「働かなきゃ鞭打たれますから。」

「ほんとに可哀想ねえ。アラ、手首どうしたの？ すりむけて痛そうなこと。」

「夜になると手錠嵌められるんです。それも後手にね。眠ってる間にもがいてしまうらしくて……」

葉を打つ手を休めずに答え乍ら、我が身の浅間しさをひしひしと感じて、彼は悲しくなった。

「アラ朝迄外して貰えないの？ 辛いでしょうねえ。」

「仕方ありませんよ、囚人なんですから。」

「あと少しでしょ。十日程だって話してたわ。我慢しなさいね。」

「ハイ」

「けど、十日経ったら自由になれる訳じゃないのね。又、牢屋に連れて帰られて鎖をつけられるんですよ。可哀想に。ホラ、これ食べていいわよ。上げる。」

自分も食べたいに相違ない菓子を渡して呉れた。押戴いた彼は思わず泣いてしまった。

「アラ、何泣いてるの？」

「ハ、ハイ。もう、あんまり嬉しくて……」

「そんならいいけど。けれど、皆お前に辛く当ると思うわ。あんただけじゃなしに、私いつも思うんだけど、いくら悪いことした囚人でも、もう少し情けをかけてやってもいいのにねえ。私のお兄さんもよく苛めてる様だけど恨まないでね。」

「ハ、ハイ……」

「見付からない様にお喚べよ。」

立去る彼女の後姿を彼は仄拝んだ。

暫くして納屋を出た彼がフト見ると、近くに積まれてある葉の山に埋まった彼女が、小春日和の秋の陽射しを、あどけない顔に受けて、スヤスヤと眠っていた。こみ上げる衝動に駆られた彼は夢中になって走り、彼女の小さな素足にそっと口づけをしてしまったが、彼女はビクリともしないで、赤い唇を少し開いて眠り続けていた。だが、立ちつくしてその寝顔を見入っていた彼は、鋭い悲鳴に我の境から我に返って飛び退いた。彼女が眼を覚ましたのである。駆けつけた人々に向って泣きじゃくり乍ら、彼を指差して訴える彼女の声を聞いて、彼は自分の立場の恐ろしさに縮み上って震えた。懲罰のおそろしさを思っ心臓が締めつけられる思いがした途端、彼の脚は勝手に動いて、その場から五、六歩逃げ出してしまった。

「あ、お前どこへ行くの？ 逃げ出す気かい。」

お松さんの声を聞いた彼は、脚も萎えてしまつて、ガクリと膝をつき、そして地面にしがみついて夢中で赦しを乞うたが赦される筈もなかった。

「まあ、何と云う奴だろうねえ。」

「囚人の癖に、自分の分際を何と思ってるんだら」

「お松さん、どうするの？」



婦人達は口々に罵しり騒いだ。

「ともかく括らなくちゃ。皆で押えといてよ。」

お松さんは家の中へ駆け込み他の婦人達はひれ伏した彼を囲んで足で踏みつけ、更に口汚なく罵しり続けた。引返して来たお松さんの手で、後手錠を嵌められ、両足にも足錠を嵌められた彼は、カチヤカチヤと食込む錠の音に魂も凍るばかりの気がして観念した。どんな目にあわされることか。

「……お美代ちゃん、いやお美代様。赦して下さいまし……」

「ハハハ、今更何を云ってるんだろ、馬鹿な奴ねえ。」

ボロボロと涙をこぼして号泣する彼を、荒々しく引き起した婦人達は、あざけり笑い乍ら唾を吐きかけて罵しった。

「早く気がついてよかったわね。そうでなきゃ、大変だったわ。」

「ほんとにそうだわ。くつわも嵌めときゃよかったのに。」

檻に蹴り込まれた彼は、ワナワナ震え乍ら永い間放っておかれた。与えられる懲罰を考えると全く臍を噛む思いであった。やがて現われたお松さんは

「旦那様も奥様も、お前をもう見るのも汚らわしいとおっしゃってね。感化所へ知らせたから、じきに連れに来るわよ。」

「……ど、どんな懲罰でも受けます。お慈悲ですから感化所へは云わないで下さいまし。ああ、どうしてこんなことになってしまったんだろ。もう夢中で知らない間にカッとなってしまうて、つい逃げたりして……でも、私はただお札をいたただけで、何もいません。本当に何も」

彼は身をもんで泣き声で哀願したが、彼女は冷たくせせら笑って立ち去った。

三吉少年が現われて、棒でつついたり叩いたりして苛めたが、彼は虚脱した様になってしまつて余り痛いとも感じなかった。

「戒具を施して、檻に入れてあるんですね？」

「そうですよ。こっちですわ。」

お松さんと連れ立って現われた婦人看守の制服姿を見た彼は、絶望と恐怖の叫びを挙げ、檻の隅で縮こまつて震えおののいた。お松さんが鍵で檻の扉を開いた。

「二十四号。出ておいで。」

冷い事務的な婦人看守の声を聞いた彼は、出来ることなら逃げ出したくなった。

「そんなに隅で震えてても仕様ないじゃないの。さっさと出るのよ。手数をかけると……」

ガクガクする膝でいざって、転がり出た彼の後手錠をお松さんが外した。

「フフフフ、えらく震えてるわね。そんなに罰が怖いんなら、何故あんなことしたのさ。馬鹿だねえ。」

捕縄を取り出した婦人看守は、黙ってヒシヒシと本縄を打った。

「さお立ち。帰るのよ。」

足錠を外され、縄尻でピシリと打たれた彼は、ヨロヨロと歩き出し乍ら啜り泣いた。

「泣くのはおやめよ。覚悟はいいだろうね。」

低い山を一つ越した向うの感化所へ曳かれる彼は、地獄に向う様な気がして一步一步が鉛の様に重かった。



△お灸マニアの回想▽

いつかあのころ

水木清一

（みどりさんのパパの船が入港する、ある春霞の日曜日の朝、山下公園のベンチへ腰を下して——。）

「熱いだろう？」

「西にが？」

「お灸……」

「あらノいやだワ」

「恥しい？」

「だって、急にそんなこと云ったりして」

「ママ此の頃、据えない？」

「そりやア、私のミスはちゃんとメモしておいて据えるわヨ」

「その数だけ据えられるワケ？」

「最近では据えられるんじゃなくて据えて貰うのヨ」

「ふうーん——」

「——行いを反省するの」

「エライなアノみどりちゃんは」

「別に偉くなんかはないわヨ」

「——今は泣かない？」

「いやアヨ、もう女学校三年ですもの」

「泣いたネ、小学校の頃は」

「イヤノ知らないワ、そんな話」

「ご免ネ、みどりちゃん。」

「熱くなんかないわヨ」

「だって火を付けるンじゃない？」



「清ちゃんは男のクセに弱虫なのネ」

「みどりちゃんは一寸オカシイよ」

「ナゼ——？」

「だって火を付けられて熱くないなんて」

「そりゃア、火は熱いこと位判っているわヨ」

「強情なんだナ、そうすると」

「そうかも知れないわネ、私」

「でも、家のママはみどりちゃんを褒めて

いるヨ、いつも」

「何にか知らないけど、耐えられない熱さ

の中に、何んとも云えない気持ちがウズいて

来るのヨ」

「ヘエー」

「病気なのかしら？ 私」

「さアねエ。解ンないナア、ぼくには」

「此の頃は、又特にそうなって来たの」

「背中が据えないの？」

「やたらに据えないわヨ、背中なんかに」

「痕が残るとお嫁さんに成れない」

「足の土フマズ」

「誰にも見られないものネ」

「ほかに、二、三個処あるけど……」

「だァーれも判らない場所？」

「私、別に平気なのヨ、お灸の痕なんて」

「ぼくが初めて、みどりちゃんの足の裏の

お灸の痕を発見した時」

「ボタン見たいな物が付いている、なァん

て清ちゃん吃驚したわネ」

「そうしたら、みどりちゃんたら、これ神

さまのお灸なのヨ、なんてウソついたりし

てさァ」

「ウソってことないけど、……やっぱり羞

かしかつたのヨ」

「お仕置って羞かしいもんネ」

「小さい時は、何にか、とってもイヤだっ

たワ」

「今は？」

「それが解ンないの？」

「まァ、女学校三年にも成っては、お仕置

を受けることもないと思うけど」

「なにか、素晴らしいお仕置をされてみたい

わ」

「ヘエー——？」

「うんと恥かしめを受けてみたい」

「クルクルに洋服をシシムいちゃって」

「どうするって云うの。それから？ 清ち

「判んないなァぼくには、……みどりちゃん

の気持ち」

「此の頃は、わざとミスを多く採るため、

ママの気に障るようなお粗相しちゃうの」

「意識して」

「いいえ、心の片隅にいる悪魔がさせる事

なのヨ。……だから私は無意識なの」

「判んないなァ、サッパリ」

「アタリマエ。だァーれも判らないワ、小

さな私の悪魔は」

「悪魔ねエ」

「私、自分でもハッキリ解らないの、……

この気持ち」

「思春期の女の子の気持ちって、ヘンチキリ

ンなものだネ」

「あら、ナマイキノ。どっかのオジイちゃ

んみたいなこと云って……フッフ」

「みどりちゃんこそ、どっかのオバアちゃ

んみたいサ」

「笑ったからシワが出たって云うの？」

「昔からお念仏とお灸はオバアちゃん、と

相場が定まっているサ」

「イジワル。私、シラナイノ……お念仏な

んて——」

(おわり)

## 告白小説

## 住み慣れた地獄を立ち去るために

久遠劫より今まで流転せる苦悩の旧里は捨て難く  
未だ生れざる安養の浄土は恋しからず候ことまこ  
とによくよく煩悩の興盛に候にこそ——歎異抄

福田 久 文

その日も相変らず遅かった。彼女はそれまでも、ただの一度でも、自分がいつけた時間に現れたことはなかったように思う。予定の時間が十分、二十分と過ぎて行くのを、わたしは不安と焦燥に悩みながら耐え忍んでいた。その日は一週間の新婚旅行から帰って、まだやっと五日にしかならぬ日だったのである。

「あんたに、ちょっと話があるねん。六時半にレッド・ローズに来てんか。レッド・ロー

ズやで」

そういうなり電話を切ってしまったのは、かたわらに社員がいたためか、社用であるかのようないいまわしをしたのにしては、声音が冷たく陰にこもり過ぎていた。やはり私の結婚を知ったのだらう。彼女に誘われるままに、このレッド・ローズでお茶を飲み、それから割烹旅館で最初の夜を過したのは、ちょうど三年前になる。結婚の話があつてから数カ月、折りにふれてわたしを脅かしていた日

がついに来たのだという重苦しさ、彼女のどんな仕打ちで裁かれるのだろうかという不安に軽い頭痛を覚えながら、黒塗りの小卓の表面に小さなスタンドが黄色い円を描いているのを眺めていた。

わたしは二十五才になるまで女を知らなかった。わたしが二十五才であつたのは三年前のことだ。少年時のあの香気と気力とは、確かにそのときまでわたしの容貌と胸裡に残っていたはずだ。天真な善意、勤務の余暇を十



九世紀のドイツ観念論や、格調高い英仏の詩文に取りこんでいた充実した生活。それらは彼女によって触発された恥ずべき情熱により次第に焼きただれていった。

ああ、ありし日のわが美形、そもいかにして滅びしを思え、いまもくやしき燃ゆるばかりぞ。

ダンテの地獄に現れる伯爵夫人ピアの言葉を、損われてしまった自分の精神に準えて思い起すのである。

酒食のあと彼女が入浴を誘ったとき、それが何を意味しているかは、瞬時にして了解した。ゆかたを取って彼女のあとに立ち上ったとき、わたしをそそのかしていたのは、厳しい倫理観からは心の姦淫と現実のそれとの間に何の差異がある。すでにしばしば心の姦淫はおろか、自ら汚辱の淵に身を投じてきた自分だ、ここで形式上の純潔を捨てての何のためらうことがあるという愚かな詭弁だった。そしてそれにも増してわたしを捉えて放さなかったのは、やはりわたしのなかにある醜い慾求。わたしの若さに眼をつけた中年の女に対する拒否できない慾求だった。なが

く求不得の渴きを与えてきたものが、いま現実に満たされようとしているのだという強い充足感で、そのときわたしの心は、動作の緩慢なのに反して烈しく動揺していたのに違いない。

離れを出ると、都心を離れた住宅街にあるあの料亭の中庭は、本館の酔客のざわめきが間遠に伝わってくるだけで静かだった。個人の邸宅を改造したものであろう、みる眼をもつて世話する人がなく、うらがれた笹が小高く茂るままにまかせて風に戦いではいるが、石、灯籠、樹木のたたずまいは、やや厳しいままによいものだった。彼女に従って廊下を渡っていった胸中の騒ぎは、もう思いたすすべもないが、眼鏡をはずしていたわたしの眼に、風に揺れる樹間の星がまだ藍色の明るさを失わぬ空に滲んでいたのを憶い出す。

ふたたび離れの部屋にはいったとき、すでに床が延べられて、二つの大きな枕と水差しだけをスタンドが照明していた。そのかたわらの薄暗がりには彼女が膝をくずして坐るままに、わたしもゆかた一枚で膝に眼をおとして正座した。マッチをする音がし、ピースの香りがわたしの鼻に沁むように匂った。顔をあげると、彼女のすこし頬骨だった浅黒いけん

のある顔が、二本の指に挟んだピースをすこしばかり口もとから離して、吸いこんだ煙に軽い波面をつくっていた。煙草の先が赤く光る。その明りに淡く照らされた彼女の顔が薄暗がりに浮き上る。

どれだけの時間が経過したのか、わたしにはよくわからない。わたしのそばで彼女はあぐらをかいて坐り、煙草を手にして独り言をいうように話しかけていた。悔恨が胸を噛むわたしには、その姿はもう魔力を失って嫌悪をしか感じさせない。わたしの気持にはかわりなしに、中年の女の饒舌が続く——ふうと吐きかけられる煙草が喫煙の習慣をもたぬ胸にとおる。わたしのまだ純潔をとどめていた精神は、最初の頻死の呵責を受け、物悲しい呻きを呻いていたのだ。

その二週間ばかりのち、秋もようやく更けた頃、最初の時にも増してショッキングな二度目の逢瀬をもった。タクシーを降り、離れわきの小門をくぐると、中庭の笹はすでに闇のなかに黒々と静まっていた。彼女はお茶を飲み終ると、前もって用意がしてあった次の間へ行った。彼女の手がスタンドのスイッチに触れる。わたしをスタンドの光の届かぬ白いシーツのうえに坐らせて、彼女は後ろへ廻

った。

「手、うしろへ廻し」

タクシーのなかで、今日はお手てをうしろでゆわえたげるといいながら、わたしの両手をX形に交差させてつかんでみせていたからわたしは微笑しながら両手首を腰の方へやった。細い紐が——百貨店などで包装に使う紐だった——手首に十文字に締って、彼女の虫歯を知らぬ鋭い歯が紐の余りを咬み切ると、その縛った手を持ち上げて腰を上げさせ、ゆかたの紐を足首に巻きつけた。間をおいて、まんなかにはハンカチーフを結びつけた手拭いが眼前に差し出されるや、ハンカチーフの部分が口のなかに押し込まれて、手拭いがきりきりと口と後頭部を締めつけた。酒席で聴いた女も、こうして彼女の毒牙を受けたのである。自分はそれよりもひどい苦痛を加えられるのではないか——予感が恐怖を伴って胸を乱す。

自分の言葉にならぬ呻きを耳にしながら、正坐したまま重心を失っていくのを感じた。猿ぐつわに今一度とどめの結びを作って力一杯引き締めながら、彼女はわたしをおおむけに倒した。

縛りおえた加虐の贅、折り畳まれた関節の

ひきつれるままに、喉が詰まるほど顔を反り返えらせている若い男。その表情を見下しながら、ゆかた姿で一服吸いつける中年の女の妖気漂う顔。一瞬人を自失させるほど、それに没入させるものを美しいというなら、確かにそのとき彼女は美しかった。五十に近い年を刻んだ浅黒い皮膚も、やや頬骨だった顔だちも、入念な化粧に輝いていた。

しかし、真実の美はわたしたちからあらゆる意欲を取り去って、一つの観想する主体と化し、清らかな「無」のなかに融け込ましてくれるのに、この似て非なる美しさはますます「有」を求めるものと化した。女は知らず男子にとって、あの清らかな観想のなかに自からの力ではいることのできる心のなかの「貴族」にとって、これこそ彼の精神に加えられた呵責であり、凌辱ではないか。俗世を離れた「無」に身を没して、人間の弱さ、醜さ、惨めさを力強く拭い去って行こうとする「貴族」の顔には、あの顔に見られぬ気品が漂っている。そして天分にじゅうぶん恵まれなかった男子でも、青年期には多少とも「貴族」の面影を宿しているものだ。この気品が彼女自身はつきりと自覚していないのだから、呵責と凌辱の好餌の一つなのではないだ

ろうか。

呵責と凌辱——この言葉の内包を、この夜わたしは知らされた。二本の指先に挟んだ一本のピースは単なる嗜好品ではなく、アクセサリーでもなかった。その灰はわたしの胸に落され、その煙はわたしの鼻孔に注がれたのだ。

隣の間の宴席に両手を縛られたままゆかたを着せられて坐ったのは、それから一時間以上は経過していたにちがいない。すこし遅れて女将が、いまして彼女が使っていたカメラをもつて現れた。あくどい化粧、丸い鼻、やや肥り気味な顔の肉づきに賤しい微笑を浮べている。失心してしまったわたしにビタカンを打って正気に還えらせたのは彼女ではなく、そのとき呼び寄せられたこの女だった。酒の肴に、若い女を賞めて顧客を娯しませるサービスまでする女だという。

いま、照明の暗い茶房の椅子にもたれたわたしを縛っている現実の紐はない。しかし甲羅を経た女が手にした紐よりも、もっと恐ろしく人の心を締めつける無形の枷は世にいくらかもある。あのカメラもその一つだった。その枷を取りはずすすべもなく、わたしはジュースのストローをほどいた。



その後彼女がわたしに渡した二枚のキャビネ型写真のフィルムは、そのときすでにあの高性能の大型レンズの奥に結像していたのだが、それについて詳細を書くことは、その筋の忌み嫌うところであり、また苦い読者には確かに有害無益なことだ。そのキャビネは茶のボストンバッグから取り出した折檻の小道具を使って、こざかしい彼女が構成し、女将が情熱をもって演出した、見るに耐えないものだった。手錠というものは民間人でも持つことができ、被写体の足首に付けて床の間の泣き柱に繋ぐことができるものだった。彼女によって責めさいなまれるのはまだ忍ぶことができる。しかし悲哀と苦痛に責められる心身に、育ちの賤しい水商売の女の、わたしを蔑んだしぐさと言葉には、屈辱の思いが燃えるように胸を灼いた。そしてそれは、傍観する彼女が心ひそかに愉しむところだったのである。

いわれるままに犬同様の格好でものを食べるわたしに、主従二人は征服者の明るさで興じた。さまざまな悪ふざけの終りに、手洗いへ連れて行く代償だと、この前唱った歌を強要した。

春の弥生の花蔭に潮の香高きうまし国  
古城の岡やあの街に頭に白き二筋を  
誇りし頃の汚れなき真白き心帰り来ず  
あの日あの宵あの南に過ぎ  
あの空あの海あの南に帰えらず

わが精神の揺籃の地、南国の旧制高校。そこにつどう真摯で好学の心優しい人々の群。

憶ひ出で給へかし。われピアにこそ。  
シエナ生し、マレマムぞ毀ちたる。

現し身の血と肉をもって訪れた詩人に訴える佳人の瞳を憶う。シエナは夫人のふるさとであり、マレマムは彼女を塔から突き落した伯爵の領地である。わたしの精神にもシエナとマレマムがあった。いま自分の不安と焦燥に伴奏している音量の多いジャズのなかで、わたしの鼻は強い涙の刺戟を押え兼ねているが、そのとき涙はなかった。自分の意志を奪われた奴隷には、自分の感情を殺す用意がある。屈辱のあまり、わたしは酒席で自分を含めた舞台劇の観客になり切って、自分の歌を聞こうとした。

大目に怯えるわたしの肩を抱いて連れ込ん

だのは手洗いではなく、浴室の狭い脱衣室だった。立てた戸に錠がおりるなり、その壁の大きな変見の前で、彼女はわたしを抱きすくめた。酔に赤らんだ臉の閉じるのが鏡に写っている。その力に負けたまま、わたしは一切の感情を失った人形のようにであった。鏡を見る眼も光沢を失って人形のそれのようだったに違いない。彼女は化粧の荒れた顔に眼を据えてわたしをみ、口を開いた。

「これから電話したらすぐ来るんやで。わかっているな。何や」憎々しげにわたしの言葉を真似る。「今日はちょっと事務の都合がありまして」

わたしは眼を閉じて身じろぎもせず、これから先のことを考えていたのだろうか。彼女の持前の囁れた声が高い声に変わった。

「はい、わかりましたといいんか」

手に入れた獲物を抱きすくめている片腕がその体ごと荒々しく震動して、肩の辺りに数枚の爪がその指先とともに刺さった。鏡の面で二人は視線を合せた。写っている中性的な太いつり上った眉毛の下の眼に、責める色が消えて眺めて愉しむそれに変っていたのをみてわたしは目を閉じた。くいしばった歯に短く低い呻きを洩しながら、こっくりとうなづ

いてその言葉を復誦した。わたしにはもうこの女に対して自由はない……  
「はい、わかりました」

「よし、よし、わかったか。可愛い坊や」  
酔の廻った女が優しげな声色をつくる。  
含み笑いととも薄暗い浴室の戸を引いて

酔いしれた足取りでわたしをこづき入れた。  
両足首をハンドルでも握るように持ったまま蛇口の方へ引きづっていき、白いタイルの壁に押しつけた。片足首の手を離し、  
今度は蛇口のcockをつまんだ。途端に十一月の始めの水が打ちつける。避けようと跳く背中を邪慥な足がタイルの壁に蹴り戻す。「往生要集」の古い木版本の美濃紙に画かれた獄卒のように、女が故なき体罰を加えている。マゾヒストの喜悅もなく、「貴族」の自負もないうつろな囚人の胸は、ただその女の酔を恐れた。

足首をタオルで拘束すると、昔、母がしたとおりに湯のなかへ入れた。末っ子のわたしを湯浴みさせてくれた、今は亡き静かな中年の母は、優しい水音を立てて膚を流してくれたものだ。

同じ年頃のこの女は、跳くわたしの顔の面を湯に漬けた。やっと湯から引き上げられると、すのこのうえに仰向けに寝かされて、はみ出した頭と足の裏に、たたきの嵌め石が冷たかった。

わたしは役所へは行って間もなく、夜間の高校に通っているお下げの髪の





小娘に、女性への最初の思慕をいだいた。白哲な典雅な顔に心持ち目の細い物言わぬ少女だった。その少女を瞥見すると、自分に好意をもち、同じ気持ちでいてくれるのだろうかという物苦しきとともに、夕暮れ暗藍の山の端を黄金に染める赤い太陽や、人訪れぬ激流の水際に点々と咲き乱れている山百合にみいるのと同じすがすがしさを覚えたものだ。その悲しみのように胸にとおって行く青春の情感によって、その人が、個性の成長を希願する自己への困難な鞭達を、そのもの柔らかな暖い心で支え励ましてくれる天使のように思われて来た。愛されるよりも、より多く愛しようとするこそその人の値うちというもののなにより、一人立っておれぬ脆弱な個性は、勝手な願望に取りつかれるものだ。

地上の凡庸な少女が当惑したのは無理もない。しかし、一人の青年がその願望を、非凡な少女によって、敬意と謙譲のうちに受け入れられたら、何という幸運か。骨肉をもって地上の人となっているために、身に附けざるを得なかった穢れにかかわりなく、その人を善美の限りに想像できる心だけはせめて失いたくなかったのに、その心まで無残に引き裂いたのはこの小娘の人を蔑んだ氷のような言

葉だった。わたしはほかに受けたどんな侮辱の言葉が、あの惨たらしさをもっていただろうか。

その日、人を発狂の状態に陥れ、それから明けては暮れる毎日を、放心しながらも振り離すすべもない生活の負担を負って歩かせ、ようやく慈悲深い「時」が、血の滴りを止めてくれたとき、お茶ぐらいならいいのでしょ——という彼女の誘いを受話機に受けて、それを退ける力のない頹唐だけが残っていた。人を恨むまい。すべては自身の不徳と不運のせいだ。ようやく天使のような妻を得て身神に印された二人の女の爪跡から回復しようとしている今、過ぎた敬意と情愛を捧げて夫を待ち侘びる人に背き、いつまでもわたしはここに坐り続ける。

雪国の間近に迫る冬山と、大庭園の古式床しい池が、曇天のしたに墨痕鮮やかな山水を画いていた。そのペランダに夜の帳のおりたとき、わたしは妻の美を確認した。梅原龍三郎画伯の裸婦のように、青く透き通る緩やかな隆起のうえを、どんな山桜ももつことができなかった浅い朱が染めていた。レモンのそれを思わせる香わしい体臭が、その輝く膚をつつんで、童女の顔の面を優雅な手が覆う。

不幸だった青年は真実の美を敬虔にみ、少女は献身の愛を秘めて眸を挙げる。

何という幸福な夜だったか、妻の見合の写真がせめて三年早く届いていてくれたら。

忌わしい過去も人の心の枷の一つだ。奈落のような浴室で、ついに「天使」に逢えぬまま、小娘に突き落され、中年女に捕えられて淪落の淵に沈む自分の不運を想うと、鼻孔の奥が、涙を見せまいとするわたしの意志に逆って痙攣する。それを見る彼女の顔は、またその常のけんのある表情を消して口元をほころばせていたにちがいない。それなら——あの小娘の冷笑が、青いタイルの天井からわたしの心に響く。

「これぐらいで泣かんでもええがな。これくらいしっぽり鍛えたげるよってなあ辛抱しい」無情の水が、石鹼を溶かしこんで何度も鼻から喉を通っていった。四年に亘る虐待に、もしわたしの体が衰弱しなかったら不思議だったのだ。

女は、すのこの上の生きたマットに向って屈み込み、その端を両手で持ち上げ、裏返えして、嵌め石の散るたたきのうえに投げ出した。すこし手前へ引いてから、そのうえに爪をおろす。わたしのちよっとした動きが氣に

入らないと、舌打ちとともに突き放して、濡れタオルを打ちおろす。

些細なことにも気が立つのはこの女の性だ<sup>さが</sup>ろうか。もっとも、二、三年来、わたしも些細なことに業者を怒鳴りつけて、温厚な課付事務官を驚かすことがあるが。

彼女はわたしのうなじを足の踝で押えつけ縛りつけた手をこじ上げる。それは、高野聖となつて河水のなかから捉えあげた、ものいえる小魚のような感じではないだろうか。あのグロテスクな昆虫は、汚泥の芦の間に餌食を運んで、血を貪る前に、河原の石の上で跳る餌食を遊ぶ。彼女の体が次第に酒の酔いを追いやつていくのを、嗜虐の饒舌を呑み口を結んだ気配と目つきに見た。わたしも手こそ結えられたままだったが、ゆかたをかけられると、また惨めな期待が息を吹き返すのを覚えた。

中秋の月は、遠く警笛をたてて列車の走り去る物音や、人の酒色のはてりにかかわらず、植込みのうえに大きかった。その下に浮く一筋の雲の白さ。見上げて歩くわたしの後頭を追いたてるようにすぐ後を歩く彼女が、指先で理由なく突き上げる。月かげに翳って踞る石のあたりから、際立って高い松虫の音が響く。

それは湯上りの膚に立つ秋風のなかを、無残に崩れる純潔の挽歌のように耳元を流れた。

離れの次の間に帰ると、先刻と同じように片足首を掴んで引き摺り倒した。それは、床の間の板敷きに立つ絞り杉の柱に背筋を当てさせ、身動きできない暗闇のなかに閉じ込めるためだった。柱の向うで交差した足首に鎖と鉄丸の付いた環のように彼女の手が締る。

「神」にこよなく愛された一人の使徒が書き遺している暗黒のなかに差し入る光明でもなく、ショーペンハウエルが憂鬱に指摘した果しない盲目の「意志」でもなく、わたしにはそれまで、自分の生存に限りがあるなどとはとても考えられない素朴で強靱な現実の永生があった。その意識こそ個性の育つ土壤だったのに、彼女の手におちて以来、わたしはわたしの前途に暗黒の有限を見る。気力なく残るいのちの尽きるのを待って、そのむこうに落ちていく黒々とした線がある。その上に浮ぶ防毒マスクのように頬こけた蒼い女の顔。それは最初の夜驚いて見た彼女の顔の陰画だ。激苦の絶え間に、息苦しい暗闇のなかでそれを鮮やかに表象した。あの幽鬼の影を、一人の少女がよく払ってくれと信じていた

わたしは、まだ少年同様だった。妻もまた千坪の屋敷のなかで口数少く生い立ったほんの少女に過ぎぬ。わたしの秘密を彼女によって知らされたら、自分一人を保つことさえできないだろう。何というわたしの罪か。生れて生きて来たというだけの理由で、人も己も痛く傷つけ合うこの世界以外に、何の世界もないと信じる蛮勇よりも、自力で個性を高める至難の道を、もはや歩める見込みの全くないわたしには、父がそうしているように、また曾祖父たちもそうしていたように「未だ生れざる安養の浄土」を信じ、汚れ多き我体にすこしでもその影を受けたいと、ただ祈りに徹する勇気をこそ扱びたい。すれば、あの恐しい女も、「神」によってわたしが原罪を知るために遣わされた女ではなかったか。また、慈しむべき子供もなく、夫と早く死別して、その資産と事業とを自分一人で守りぬいて来た人を恐しいというべきか。確かにわたしもまた彼女を求めたのである。しかし、その結果、妻はどうなる。

ぐったりと崩れ落ちたわたしの頸筋を掴んで引き起した彼女は、片手に濡れタオルをもったまま、顔を眺めて笑う。

「役所であんたに叱られたときからそう思う



んやけど、あんたの顔、似てるわね」

ある有名な方の名をあげて少女のように声を立てた。

少年の頃、わたしは蔵の文箱から一枚の浮世絵を抜き取った。これから喰おうとしている幼児を、片手で片膝のうえに押し握みにし、長煙草を持った片手を立て膝のうえに置いて嘔く年増の女、自分を握んでいる腕を紅葉の手で握り締めてその女を仰ぎ見る幼児の眼の鋭さが描かれていなかったら、とても山姥だと思えぬ妖艶な女の図だった。眼前で笑う彼女を、さきほどの酒席や浴室での鋭い嫌悪なしに見て、少年時の妄想が現実を満たされている思いだった。

食足りた飼猫は、鼠を捕えると牙から鼠を一時離して、逃げようとするのを捕え直すのが好きだ。再び牙を抜くと鼠は頼りなげに走ろうとする。すかさずまた牙が襲う。牙を抜かれてもう鼠が走らなくなると、虐待に倒れた男をゆさぶる女のように、前肢の一つを持ち上げて鼠をこづく。鼠は立ち上ったただけですぐまた崩れ落ちる。そうして初めて、前肢を二つ揃えて爪を打ち込み、その餌食に喰いつく。しかし喉へは決して通さない。

猫のように残忍な彼女の手のこんだ虐待こ

そ、その手の届かぬ安らぎの床で毎夜のように回想されて、月に二、三回の逢う瀬よりもひどくわたしを疲れさせた。わたしの顔を見る彼女の目つきにこれから加えられる呵責のあくどさを恐れながら、わたしはそのとき手が自由でも、そのままじっとしていたに違いない。しかし、その結果、妻はどうなる。

回想にも疲れた重い頭は、痴呆のように循環した。

「何をしよげてんの」

聞きなれた声が耳にはいったのと、肩を突かれた痛さにうめいたのが同時だった。黒い帽子に黒いオーバーを、男と変らぬ背丈にまとった派手ないでたちだ。仕事と資産とはこの女の顔つきにも、ある種の気品を与えている。降りそうだった夕暮れの空が、いつか小雨を落す夜空に変わったのだろう。彼女はわたしの肩をついた洋傘を床のうえに置いた茶のポストンバッグに立て懸けると、にこりともしない顔付きで向いに坐った。靴まで黒い。

「だいぶ待った？」

情味のある声だった。相変わらずジャズの音が高い。

「いや、すこし」

いつものようにもう待たなくてもよいというほっとした気持ちから、この言葉に明るさと弾みをつけることはできなかった。

「どうしたん。元気ないやないの」口元を綻ばせて続けた。「汚職でもばれたん？」

微笑のままだ視線を逸しているわたしの眼に、ウェイトレスが盆にコップを一つ載せて近づいていた。そのお下げの髪の小娘が、意味あり気に一瞥をわたしに与える。中年の夫妻から受ける懶げな好色の眼つきではなく、好奇といささかの驚きに、すこしばかり蔑みを混えた眼だ。ともに見慣れたものである。

「何になさいます？」

「サンドイッチ二つと」といいかけてわたしの方をみ、「あんた、それでいいの？」

殆んどそのまま残っているジュースを顎でさし示した。わたしは頷いた。僕はサンドイッチはいいといったが、いつものとおりやや甘ったるい声音、しぐさに触れると、彼女は何も知らずに出来たのだという新たな当惑が加わってさらに口を重くした。

「ジュースは一つ」

とまたウェイトレスにいつけてから、シガレットケースを取り出した。わたしはマッチを取り上げて火を点けた。薄暗がりのなか

に白い煙が彼女の口から緩やかに斜めに流れおろる。

黙って彼女は喫煙を続ける。時間の経過が残酷にない。またウエイトレスが側へ来て、注文したものを並べて行った。おおいかぶさる重苦しさを振り払うように、わたしは低く切り出した。

「僕ね、結婚したんです」

すぐには返事がない。

卓上でピースを持っていた手がゆっくりと口の方へ上る。

「いつ？」

言葉とともに出された煙が形を混乱させてからわたしの顔にかかってくる。

「半月まえ」

「ふうん。それで？」

返えすべき言葉はなかった。目の前の小さい灰皿に、爪を延ばして透明なマニキュアを付けた三本の指先が、つまんだピースを揉み消しているのをじっと瞞める。

「挨拶がなかったから、お祝いせえへんよ」

彼女はサンドイッチを撮んで食べ始めた。思ひなしか、いつもと食べる速さが違う。一皿のサンドイッチと一杯のコーヒ―は無言のうちに平らげられて、また一本のピースに火

が点けられた。

「食へんかいな」

そういつてピースを離れた口が、わたしに向って怒ったように突き出された。わたしは黙って義務のように二つめのサンドイッチを取り上げる。

「まだしばらく、わたしはあんたを離すつもりはないよ」

湿った綿のようなサンドイッチを噛むのを止めて、わたしは来るべき言葉が積みかけられてくるのを聞いた。聞き終るとまた忠実な犬のように食べよといわれたものをうなだれて呑み込んだ。サンドイッチを食べるわたしの眼前で「し」の字形に曲って口紅の付いている血灰のピースに、彼女のマニキュアの指が灰を落している。食慾は全くない。残り二つを撮む気がしない。

「はよう食べてしまっうねんがな」

伏せた顔を上げると灰を落し終えたピースが卓上で眩を立てた手の指に挟まれて、細い煙を横に流している。その側に眼を鋭くした彼女の顔がある。

わたしの空ろな眼差しと視線が合うと、彼女は呟くようにいった。

「そうめそめそしなさんな。終電までに帰え

したげる」

いつもの世間話にわたしを誘うことなく、立ち上りざま荒々しくピースを灰皿に揉み消して席を離れた彼女は、広い暗がりのなかを電話のあるカウンターの方へ歩いて行く。外のネオンがさして明るいアーチ型の大きな窓ガラスを背景に彼女のシニエットが立つ。

小銭入れをポケットから取り出して口をあける動作。一枚の硬貨が撮み出されたのである。その手が電話機に移された。暗がりといきれと高いジャズの音が幾重にも重って硬貨の落ちる音は聞えない。話している素振り。

やがてメインストリートから離れた、人目につかぬあの窓のすぐ横のドアの前に、四人のようにわたしを押し込める車が停るだろう。そのとき、わたしはこの足元の貴道具を入れたポストンバッグを持って立ち上らなければならぬ。

今、わたしを繋ぎ留めている拘束具はない。数十分後に必ず襲いかかってくる責苦を避けることは容易だろう。ただ駆け出すだけでよいのだから……。

でも、わたしの足は、萎えたように車の到着を待って動こうとはしないのだ。

(おわり)





切腹体験記の主へ

奥様

私、此度奇ク四月号にて、奥様御体験の御割腹の記事を、興味深く、よまして頂きました。

深々と十文字にかき切られ、あとは御自分で治療されましたとの事です、此度は死を前提としてではなかったので、切口も七糶程の深さに切られたのでしょうか。

私、思いまするに、昔は責任をとって自殺するというような場合、武士又は武家の婦女子の方の割腹は一応誰でもうなずかれますが、現在に於ては女性の割腹は殆ど知られておりません。自殺といえは、鉄道自

## 藤村陵子への手紙

明石満寿男

殺、服毒、首吊りと相場はきまっております。

しかし、あながち、そうとばかりは限らないことは、現に或る若奥様が路上で割腹を遂げられた例もあります。又、当地では肉屋の奥さんが肉切庖丁で真一文字に深々と割腹したという新聞記事も出ていました。先月号の奇ク愛読者欄に週刊誌の記事として、割腹を遂げられた奥様や、同じく先月号で、夫の不倫に抗議して妊娠した腹を十文字に切りさかれた奥様のことも載っております。

これ等の自害をなされた女性の心の奥には昔から流れる武士の魂が人知れず伝っていたのではないのでしょうか。奥様の此度の割腹は死を前提においていられますでしたが、女性の方々にも切腹に願いをかけていられる方は、一般女性とは違った覚悟を秘めておられ

いざとなると、男も及ばぬ壮烈な割腹を遂げられ、日本女性の真の誇りを鼓舞されるのではないかと想像されます。

奥様、此度なされましたことが、一時の擬態であられましようとも、いざという時にはそれこそ壮烈なる割腹を遂げられる奥様でないかと思えば、私の胸は高唱るばかりです。

奥様もいざという時になれば、七糶ほどの深きでなく、切先六寸程の刃先を腹部に突きさされたまま十文字にかき切られることは、今の奥様の御心境から押して当然のことと、私には思われます。

世の眠れる人に、女性にもいざとなれば男性以上の壮烈なる覚悟をもってありますぞ、ということを知らせて頂きたいものです。

世間では切腹愛好者を一種の変質者と見ている様ですが、切腹愛好者の身体には日本古来の武人の血が流れているということをお弁えず、一概に言いきることは大きな間違いと存じます。

奥様、奥様の御返事を首を長くして待っています。一日も早くお返事下さいませ。



## ガン作・マニヤのノート

(私のバーでの会話)

芳野眉美

### A 鼻紙

アベックの女客が鼻をかんだのを見て、小声で

「とやまさんのノートには、よく美しい女性が捨てた鼻紙のことがでてるけど、マスターは興味ないの」とN。

「とやまさんほど大層じゃないから」と私。

「そうでもないでしょう」

「とんでもない、まだまだ」

「すみません」と、その女客が言った。「これ捨てて下さい」Nが

おやという顔をした。まるめられた鼻紙を私は女客から受取った。

「慣れたものだ」とN。

「何がです」

「紙を受取るのが」

「ああ、商売ですから」

二人の会話は、アベックは気がつかない。それどころではないらしい。女客は素人ではない。

「気になりますか」と私。

「うむ」

「あとであげますよ」

「有難い。下に捨てたら、あとで拾おうと思っていた」

「それはそれは」

「俺もパーテンになれば、よかった。」

「そうですね」

「冬中、美女のかんだばかりの鼻紙には不自由しまい」

「その人によって違いますかね。」

下に無造作に捨てる人と、捨てて

くれという人と、そっとポケットなりハンドバッグに始末するんとセームセームですね」

「そうすると、三分の二は手に入るわけじゃないか。それも三分の一は、かんだばかりの、まだ温いやつを、美女がお手ずから下さるわけだ」

「なんだか、おいしそうに聞えるな」

「とやまさんじゃないけれど、甘美な蜜ですよ」

「女の子はみんな美女に見えるんでしょう」

「そうそう」

「ここは殆ど、キャバレーの女の子たちですよ」

「本当に興味ないの」

「まあね」

「宝のもちぐさだかな」

「残念でした」

### B 落花

「トイレがぼこぼこいってるよ」



とN。

「つまったんですよ」と私。「年に三回は下水掃除をやらないと、つかえますね」

「アレかい」

「ええ、女連れの客が多いと、どうしても、そうなりますね」

「入れ物があるのにね」

「入れる人と、捨てる人と、やはり捨てる人が多いですね」

「恥ずかしいのかな」

「そうなんでしょう」

「あと始末は誰がやるの」

「私」

「夏なんか、すぐむれるから大変ですよ。新聞紙に包んで捨てていただきますが」

「汚れたやつをね」

「トイレ掃除はバーテンの仕事。いくら自分の店だからって、女の子にはさせられませんしね」

「本当にバーテンになればよかった」

「そうですね。先生みたいなバー

テンだったら、トイレが綺麗すぎて困るかもしれない」

「それほどでも」

「この間ね、白い便器に赤い花びらが散ったんですよ」

「ほう」

「ちょっと詩的でしょう」

「誰のかわかったの」

「その時、女客は一人しか居なかったから」

「でえ？」

「そっとふきましたよ」

「なんで？」

「なんでって？」

「はっきり言えよ」

「トイレ掃除はいやがる人が多いから、一人でよく掃除している人は、結局、店主に認められて仕事をまかせられていますね」

「こいつ、はぐらかしたな。まあいいや、趣味が出世の糸口になることがあるわけ」

「そういうこと」

「女性のアレはすぐわかるな」

「そうですね。それにはっきり言いますよ、この頃の人には。」

「メンスパンドで猿ぐつわをしたグラビヤは好きだな」

「あれは最高」

「ぬめぬめしたゴムの感触、あれだけでもいいな」

「アベックがようやく帰って、散らかったカウンターから、めぼしいものをNの前に運んだ。」

## C 唾 液

女客の飲み残したビール

食べ残したオードブル

吸いかけのピース

ビールのコップとピースを手

取って、

「紅がついてる」とN。

「安物らしいですね」と私。

「このほうが有難い」

「ちよっと待って。そのビール、何か浮いていますよ」

「彼女の唾液だろう、かまわん」

「おいちぎられたチーズを手でつ

まんだ。

「見ろよ。これ。彼女の歯型だ」

その時、また女客があった。

「ブランデー頂戴」

「もうキャバレーの終る時間ですか」と私。

「ひまだだったの。寝る前に一杯」

チャーハンがとどけられて

「失礼。バーでたべるの、悪いわね」

「どうぞ、どうぞ」

「もういいでしょう」とNに「御満足ですか」

「うん」

「ひとつじゃ多いな」と、その女客が言った。

「半分たべてね。およろしかったら？」

「バーテンはいいな」とNが言った。

「美女のたべ残したものを公然と目の前でたべられる」

「あらッ」

「スープぐらい、俺のほうにまわ

してもいいだろう」

## 妻の体験

## 被 虐 の 春

西 田 仁

## 錆びた仮面

私はまず、ひとつのことを白状しなければならぬ。

もうずいぶん前のことだが休刊直前の「奇譚クラブ」たしか三十年の三月号に、白木近子なるひとの「弱者劣者にサジズムを感じる女性からの通信」という一文が載ったことがある。

それは、当時グラビアで大活躍していた春日伊吹両嬢のコンビに熱烈なる拍手を送る三

十才の人妻という自己紹介にはじまり、つづいて終戦直後、戦災孤児収容の施設に勤めていた頃、Y子という白痴の女児によって誘発されたおのれのおさましい嗜虐の性癖を語り日夜繰り返した残酷な行爲を、さいわい人にも覺られずに長い勤めを終え、今は幸福な家庭生活にはいつているが、偶然書店で「奇譚クラブ」の存在を知ったものだ、そのときの驚ろきを、他の初めての読者とおなじように述べて結んだ文章である。

なにを隠そう、これは私の書いた文章であ

る。先日私は、小説も書くある著名なマゾヒストに会ったのだが、彼がこの一篇を憶えていていつとき二人の話題となった。しかし私は、これがじぶんの手に成ったものであることを、ついいいそびれてしまったのである。そしてこういう古いものが、この人の記憶に残っていたのをいささか意外に思った。そういえば発表直後、やはり同傾向の長瀬昭子さん等から「読者通信」での呼び掛けがあったが、思えば私の書いたものが「読通」に採り上げられたのは、この時一度だけのような気



がする。

ただ一ト言おことわりしておきたいことは私ごとさらに女名前を使って投稿した理由だ。これはけっして読者や編集者の興味をそそろうとしたからではなく、当時私がいっしょに暮らしていた女——妻というよりこういう呼びかたのほうがふさわしい近子（まぎらわしさを避けるため名前はやはり近子でいう）から聞いた話を、ほとんどそのまま書き記したものだからである。しかしその後、匿名送稿の気易さを捨て、本名で告白原稿を書き綴っている私は、これからどうしても近子の話をまとめておきたいと考え、ふたたび筆を執った次第である。

### 悦虐御免の女たち

銭湯で見てきたことを聞きたがり

という川柳が、原比露志編「現代未摘花」という本に採録されている。けだし穿ち得て絶妙の句というべきだが、夫婦のあいだでこうした会話が平気で交されるようになったらそのときには良人の尊厳も妻の謹慎もまず失われ、家庭生活は本能のおもむくままに墮落しつつあると考えて間違いはないだろう。

近子が、その異常な嗜好を臆面もなく私に

語ったのは、ちょうどそうした時期にあたっていた。

前年の大整理で、勤めていた駐留軍をクビになった私は、毎月ゴロゴロしながら近子の働きに頼っていたのだが、そういうある夜、近子が近所の銭湯で見聞したことを、寝物語めいた雰囲気の中かで私に伝えたのだ。そのとき、思わず体ががたがたと震え出すほどの興奮を抑えることができなかったのを、私はいまでもはっきりと憶えている。

おなじアパートのちやうど私たちの部屋の真上に陣取っている安原さんの邦子夫人。三十がらみの典型的な若夫人だが、これが七つになる娘を連れて来ていたそうだった。ところがこの子、どうしたものかお河童の襟元を刺っでもらうのをいやがって、懸命にママの手から逃れようとものがくのを、

「ダメよ、そんなに動いたら。手許が狂うじゃないの」

若いママは安全カミソリを片手にふりかざし、もういっぽうの手で、じぶんの膝のうえに小さな体を押えつけようとするのだが、

「いやよいやよ。この次にして！」

子供のほうは頑強に抵抗してはねまわり、なかなかママのいうことをきかない。そんな

にいやがるものを無理に剃らなくてもいいと思うのだが、どうもお互の経験に徴しても明らかなお互い、とかく母親というものには、自分の決めたことはなんでもやり抜こうとする心理があるらしく、きれいで優しいはずの邦子夫人もとうとう怒り出してしまった。そして、

「勝手になさい！」

というなり矢庭に片膝立てになると、子供の体を無難作に捕えて、膝で挟み込んでしまったというのだ。近子の見たところ、それはなんのためらいも感じさせないごく普通の動作で、顔の色ひとつ変えていない。湯槽に身を沈めていた近子の胸が高鳴った。

江戸川柳には

中剃りの子は股ぐらに挟まれる

というのがあり、中剃りというからには男の子だろうが、むかしから子供はあたまを洗ったり髪を刈ったりするのを嫌うために、けっきょくは腕ずくで、母親のほうがまるでトドメでも刺すようになっこうになってしまわなければ思うようにならないものなのか。そして、そんな子供の姿にひどかな羨望を感じるマゾヒストというものが江戸時代にもいてこんな破礼句を作ったのかも知れないと、近

子はこの方面に学のあるところを見せた。

しかし、いくら空いているといっても他に五、六人ははいつている銭湯で、若いのにあられもない姿態を衆目にさらして恥じない邦子夫人に、なんだか近子のほうが恥ずかしくなり、湯槽のなかからそっと他の人たちを眺めまわした。しかし、みんな平然たる顔つきで、じぶんを磨きたてるのに余念のないようすだ。

こんな場面を見て、思わずぎよっとするのは、やはりじぶんが、あんな川柳などをいつまでも忘れないでいるような変った性癖を持つ女だからか。ふつうの人にとっては、ありふれた日常の茶飯事なのかも知れない、と近子は思った。

そればかりか、ちょうど邦子母娘のとなりに、これも子供連れで陣取っていた角の荒物屋のお内儀さんなど、

「おやおやお嬢ちゃん、とうとうママにハマってしまいましたね」

なんて、お愛想半分に冷やかしている。

「ええ。ほんとうに世話を焼かせるので、困りますわ」

邦子夫人は、中流サラリーマンの奥さんらしい淑かさで返事をしながら、しかしそれと

はまった、別人のように、あいかわらず厳しく子供の口由を奪い、用心深くカミソリを当てている。

「じっとしていないと、お耳が落ちちゃうわ

よ」

子供の頸をじぶんの膝に据え、その肩から背中へかけてもういっぽうの足を乗せかけているのだから、そういわれなくても子供のほ





うは身動きできず、可哀想に目をばちばちしながら、母親のなすがままにされている。こんな子供がいるくせに、ご主人からはいまだに「クンちゃん」の愛称をもって呼ばれている彼女は、一見すっきりとしてきゃしゃに見えるが、その実、ソフトなポリウムを感じさせる白い体の持主だそうだ。

「でも、女のお子さんはおとなしくて、いいですわ」

荒物屋のお内儀さんがいった。「これなんかあんまりいたずらがひどいので、ちょいとお仕置してやりましょうと思って、とても私の手にはおえません。この頃はお姉ちゃんにだって向っていくんですからねえ。どうせしまいにぎゅうぎゅうって目に遭わされて泣かされてしまうくせに——」

「ちょっと話中だがね。——私は確かめるようにいった。——荒物屋のお姉ちゃんてのは、あの子かい?」

「それはそうでしょう。他にはいないもの——」

と近子は答えた。

荒物屋へはたばこを買いにいくので知っているが、その娘さんならはたちぐらいの、声の優しいおとなしそうなひとだ。しかし、ぎ

ゅうぎゅうの目に遭わせるというからには、きつとその小さな弟を組み伏せてしまつて、わんわん泣き出すまで許さずに責めるのだらうが、もしそうだとすれば人は見かけによらないもの。

しかしなんといつてもそこはまだ娘さんのことだから、まさか邦子夫人のようなあからさまな姿は見せないだろうが（近子曰く、いえもつとひどいことするかも知れないわよ）すくなくとも姉弟の母親であるお内儀さんは、目の前にそれを見ていながら、かならずしも娘の所業を否定はしない口吻を洩らししている。それから察するに、娘はかなり低い気になって、半ば公然と弱い者いじめを繰り返していることは確かだろう。

近子がそんなことを考えていると、

「ほほほ」

襟を剃る手を休め、邦子夫人が荒物屋のわんぱくにいった。

「ボクはまだまだお姉ちゃんには敵わないわねえ」

孤児にまたがる女たち

話がこれだけで済んでしまえば、私としては二人の美しい嗜虐女性を身近に見たことになり、朝夕の挨拶や、たばこを買いにい

くのにも秘かな楽しみを添えられるにとどまつたのだが、あにはからんや、恐るべき第三のサジステンはいまにも身近にいた。

戦時中に育つてその頃二十三才。なにも知らない近子に、この倒錯したふしぎな欲びをそれとなく教えたのは、施設の先輩である斎藤房子という、三十ぐらいの戦争未亡人だった。

事情をきけば、房子も気の毒なひとであつた。十九で結婚した良人といっしょに暮らしたのは、わずか三年足らずだったというのである。いかにも農家の出身らしい充実した体格を持ちながら、戦死公報が遅れたばかりに長いあいだ空しく留守宅を守ってきた淋しさが、底に在ったのだろう。どんなに虐待されてもそれをどこにも訴えることができない子供たちを、心のまにまにしいたげることが、恵まれない生活を送ってきた彼女の、たったひとつの楽しみであるようにさえ思われた。

近子が着任したときもまず開口一番、「同情は禁物よ。いい子ばかりはいないんだから」

と申し渡し

「遠慮なくビシビシやってもらつて構わないわ。縄で縛ったり棒でぶつたりしてはいけな

いけれど、ある程度の折檻は止むを得ないものとして認められているんだからね。診療所の看護婦なんか優しそうな顔してるくせにずいぶん酷いことするけれど、それも無理ないの。このあいだ子供に撥ね飛ばされてベッドから落ちた人もいたんだからね。もっとも年とった看護婦だけどさ。若いものならそんなヘマはしないよ。あっぱっは」

「まあ」

そしてこういう不幸な子供たちに対する近子の娘らしい憐愍の情を、世間知らずのおセシチだと一蹴して耳も藉さず、そのつづきを喋るのだった。

「女の子やちっばけな坊主なんか、ころがしといて首根っ子を押えちまえば動けないけど大きな男の子になるともうそれじゃダメ。馬乗りになって本気で締め上げないと、なかなか降参しないのよ。その看護婦なんか、お上品ぶって膝も掛けなかったって女医さんがいってたわ」

年令的にもいちばん悪いところにさしかかっている房子だった。

「でもいっぺんそんな目に遭わせておけばあとがラグさ。腕力で歯が立たないと思えばいうこともきくもの」

「でも可哀想ねえ。あたしにはできそうもないわ」

「なあに、あんただっていまにそうせざるを得なくなるわよ。どんな優しい保母さんだつて、子供をぶつたことないひとなんていないんだから」

たしかに房子の言葉のとおり、近子もやがてY子を得てこの道への眼を開いた。しかも近子の場合、相手は運動神経のきわめて鈍い精薄児なのだから、どんなことでも思いのままになり、そのことが近子を深みにひきずり込んだともいえる。

たとえば四つん這いに突きのめしておいてまず背中にもたがり、それから細い棒の先にイモの一本もぶら下げたものを、襟っ首にさしこんでやる。するとY子は、それをなんとか啜りたい一心で、必死に部屋じゅうを這いまわるのだった。

しかしいくら足掻いてみたところで、じぶんが運んでいるイモとの距離がちまろうはずがない。

サルグツワの手拭いを手綱代わりにとって締めつ緩めつ、

「フッフフ」

と含み笑いを洩らしながら、近子はこの哀

れな人間馬をぞんぶんに責めることができたのだ。

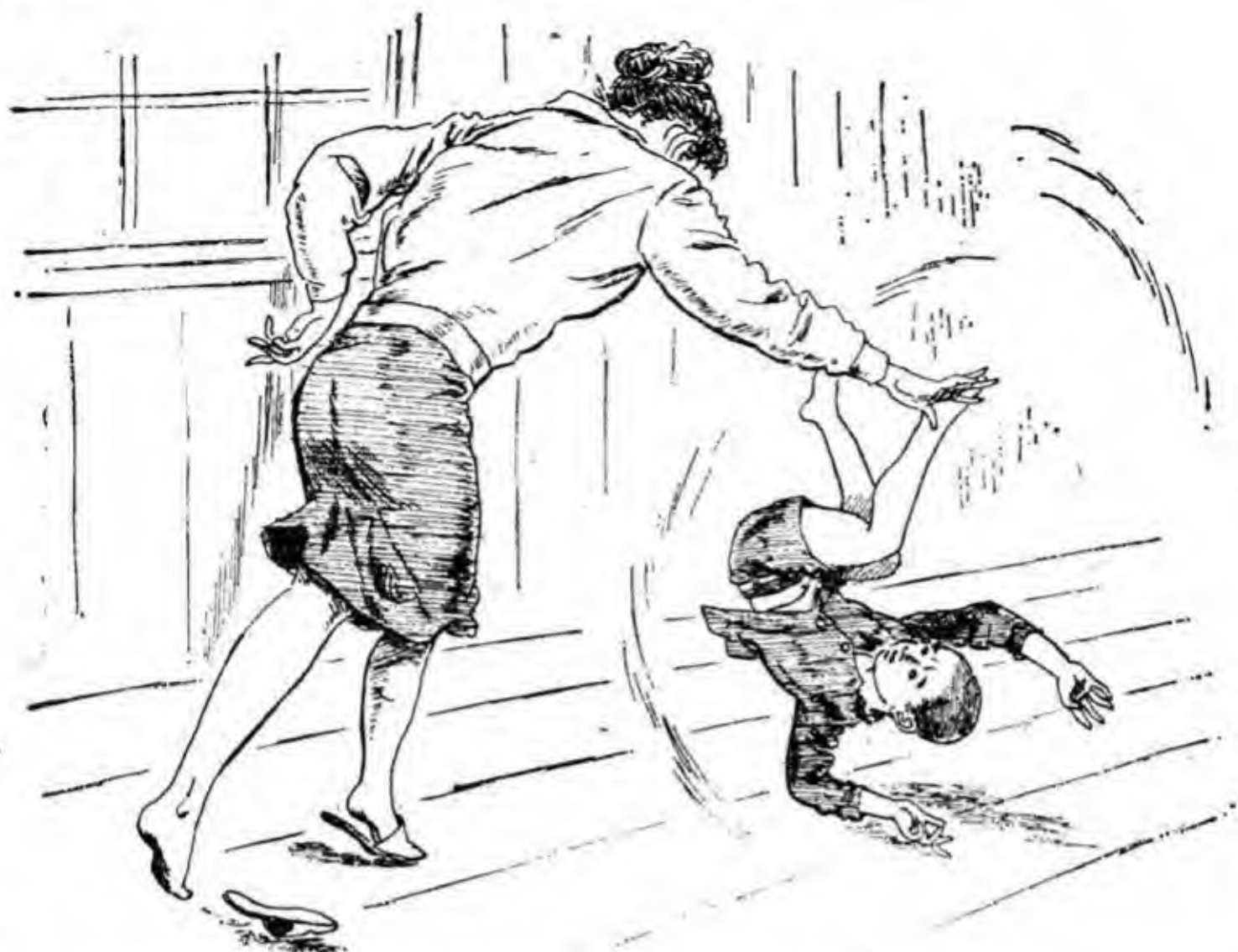
そしていい加減力の尽きた頃を見はからって、その「エサ」をポーンと遠くへ投げてやる。慌ててそれを拾おうとして背中に載せた重味を忘れ、思わず前肢——いや両手を空にさしのべるところを狙って、ウム、とばかり力を入れれば、あとはもう二十三才の重圧にまともに押しひしがれたY子が、硬い床に脂汗を滴たらせながら呻吟することにきまっていた。

近子はまるで、知能検査でもするように、この方法をなんべんも繰り返した。が、結果はいつも同じだった。Y子には、この単純な詭計がどうしても見破れないらしかったのである。

他の子供たちに対するお仕置は、大先輩の斎藤房子が一手に引き受けているように見えただが、もう一人の係員である羽柴啓子が、巧妙な方法をとっていた。

彼女は自分が当番である夜を選んで、深夜の見廻りのときにその子を起こし、充分に時間をかけてイジめるのだった。近子はある夜トイレに起きたとき、ちやうど許されて啓子の部屋から出てくるひとりの女兒を見た。床





に撒布してあるD・D・Tの白い粉末が顔いっぱいについており、半袖シャツの露わな腕がすっかり血の氣を失っているのを見て、この子が啓子にどんな折檻をされたかを察したのだ。それは、じぶんのY子に対する経験に照らしてみれば明らかだった。啓子はおだやかな口調でいう。

「斎藤さんのように、場所もなにも構わずやったらダメよ。ご本人は見せしめのためだなんていって、子供たちが見ていると、いっそうひどいことなされるけれど、けっきょくは鬼婆アなんて悪口いわれるだけじゃない？ あたしたち、そんな噂をたてられたらお嫁にい

けなくなっちゃうわ。時間をかけて、じっくり論ずのよ」

「でも、そのあいだ、おとなしくしていますこと？」

近子は意地のわるいカマトト質問をした。「聞かせるの！」

近子の真意を叫びてか知らずか、啓子はこともなげにいい放った。「何しろ相手は皆、こんな子供なんだから、いざってときにはこうしちゃうのよ」

啓子は両膝をちょっと曲げ、手で首を締めようになかったこうをして笑った。

ああ、このひとにして然り。女の心にかくも根深く果敢う嗜虐の本能に、近子はあらためて慄然とする思いだった。しかし、幹部の職員のおいだでは啓子の評判はよかった。平生の彼女は誰にでも優しくしたし、彼女に叱られるのは叱られるほうが悪いのだという雰囲気、なにも知らない子供たちのあいだにさえ芽生えているようであった。これは啓子の思うツボだった。子供たちでも恥ずかしいことは知っている。だからそれを他の仲間に喋るようなことはしないのだ。

こんな環境のなかにいて、近子は「悦虐御免の女たち」とはことかわり、もっぱらY子

だけを相手にしていたのは以前の日記に書いたとおりだが、長い勤めのうちに、ただの一度だけ乱暴な男の寸を取り押えたことがあったという。

## 板の間 巴

それはある夏の日の夕方だった。近子が風呂からあがって流し湯で体を拭いていると、とつぜん出入口のガラス戸が手荒く開かれ、同時にどこかかという乱れた足おとが、脱衣場の板の間を踏み抜くばかりに聞えて来た。なんだろうと思つてそつと覗いてみると、あの鬼婆アの斎藤房子が、ひとりの男の子の肩を掴まえ、薄笑いを浮かべながらはいってくるところだった。

男の子はきょうこへ送られて来たばかりの関根幸夫という小学校の六年生。房子はこれによって新人児童に示威懲戒を加えるつもりらしく、うしろ手に戸を閉めると直ぐに幸夫のバンドを掴み、いきなり腰投げを喰わし、ものの見事に床板にたたきつけた。傷み切っていたス・フの半ズボンがびりりと裂けて陽に灼けた脚がむき出しになった。ものすごい腕力だ。そうしておいて房子はゆうゆうと倒れた相手にちかずき、起き上りかけた上半

身をまたいで、そのままぐつと仰向けざまに押し倒した。

「素直にしないから、こういう痛い目に遭うのよ。わかった？」

親に死に別れた痛手がまだ癒えていない子供たちは、たいていこれで気を吞まれてしまひ、泣く泣く許しを乞うのが普通だ。が、幸夫は気性のきつい子供だとみえて、夢中になつて足をばたつかせ、起き上ろうともがきつづける。あまり見事に投げ飛ばされたのさ口惜しくてしょうがないらしく、血相変えて跳ねまわっているところから察するに、おそらく学校でも鬼大將で威張っていた子供だろう。しかし今日は相手がわるい。幸夫が抵抗すればするほど房子の心は煽られるらしく、起きられるものなら起きてみるといわんばかりのなめ切った表情で、うすら伸びかけた幸夫の髪を両手に掴み、ふかふかと喉をひらいている。ばったのように強靱な幸夫の脚が、ばたんばたん床を蹴る。

それを見ている近子のあたまたに、ふと羽柴啓子の言葉が浮んだ。曰く、「子供は骨がやわらかいから、あまり胸のほうに重心をかけ過ぎると、ぐるっと足を挙げて体を曲げ、逆襲することがよくあるの。だから、俯伏せに

倒して、利腕を背中の方へ廻してしまえばカンペキよ」

啓子ほどの心得ももたずに、ただ腕力にまかせて子供たちを取りひいてきた房子が、幸夫のためにその手を喰つて肩を蹴られ、ふだんの強気にも似気ない悲鳴を挙げてひっくりかえったとき、近子は相手の少年に対する激しい怒りを胸の底に感じたという。

いい気味だ、と房子を笑う気持になれなかったのは、やはり同僚意識というものだろうか。いずれにしても、傍観しているだけということはできない立場であった。そこでタオルを腰に巻きつけるや、一足飛びに二人のそばへ駆け寄った。そして、

「この子！」

と叫ぶより早く、倒れた房子から脱け出そうと身悶えている幸夫の首筋を掴んで引き起こすなり、その左手を捕えて力任せに捻じ上げたからたまらない。

「うわッ」

房子のお蔭で相当に参っていたところに、更に若い新手が不意打ちを仕掛けたのだからいくら鬼大將でも敵うはずがない。たちまちきりきりと海老のようにうずくまる幸夫の両手を濡れたタオルで縛り上げ、ぐるりと仰向



けに反転させた。

そしてさっきの足業を食わないよう、じゅうぶんに用心しながら、

「先生に向ってなんてことをするの！」

と厳しく問い詰めた。幸夫はしばらくきょとんとして近予を見上げていたが、やがてじわじわと襲いくる苦痛に顔をしかめて泣き声を挙げる。それもそのはず、うしろ手に縛された腕にじぶんと近予の体重がそっくり懸っているのだから、骨も砕ける痛みだろう。

「斉藤先生にあやまりなさい！」

近予は素知らぬ顔でなおも構わず重圧を加えながら、精いっぱい威嚇をもってそう命じた。あとでなにをいわれようと構わない。人に見られても構わない。近予は夢幻の境をさまようようにこの折檻に没頭した。「斉藤先生」はそのときになってようやく氣を取り直し、

「浮浪児！不良！思い知らせてやるから」

およそ施設の職員にあるまじき罵声を発しながら、脚のほうを押えつける。まずこれで一安心。

「いててッ」

幸夫は歯を食いしばりながらも、

「フ、不良じゃねえや。おれなんにもしねえ

のにその女が——」

「まあ、なんて口のききよう？」

近予は威丈高になって唇のはしをきゅうつと抓った。少年は黙った。房子には桶ついても、現在こうしてやられている近予には屈伏せざるを得ないらしい。もし反抗すれば監をミシミシいわせてやる。施設の女職員たちが暴力主義に陥りやすいのも、こういう子供が多いからだ。近予の怒りはまだおさまらなかつた。

「さ、あやまりなさい」

「だっておれ——」

「いやなの？ それならあやまるまでこうしているから。あとで腕が動かなくなっても知らないわよ」

「——」

「だいいち。男の子のくせに、女に組み敷かれて動けないでいるなんて恥よ」

この一ト言に、幸夫の頬がみるみる紅潮しやがて潮念したように両眼を閉じた。羽柴啓子に教えられた止どめの文句だった。幸夫の唇がもごもごと動いたが、それは声にはならなかつた。

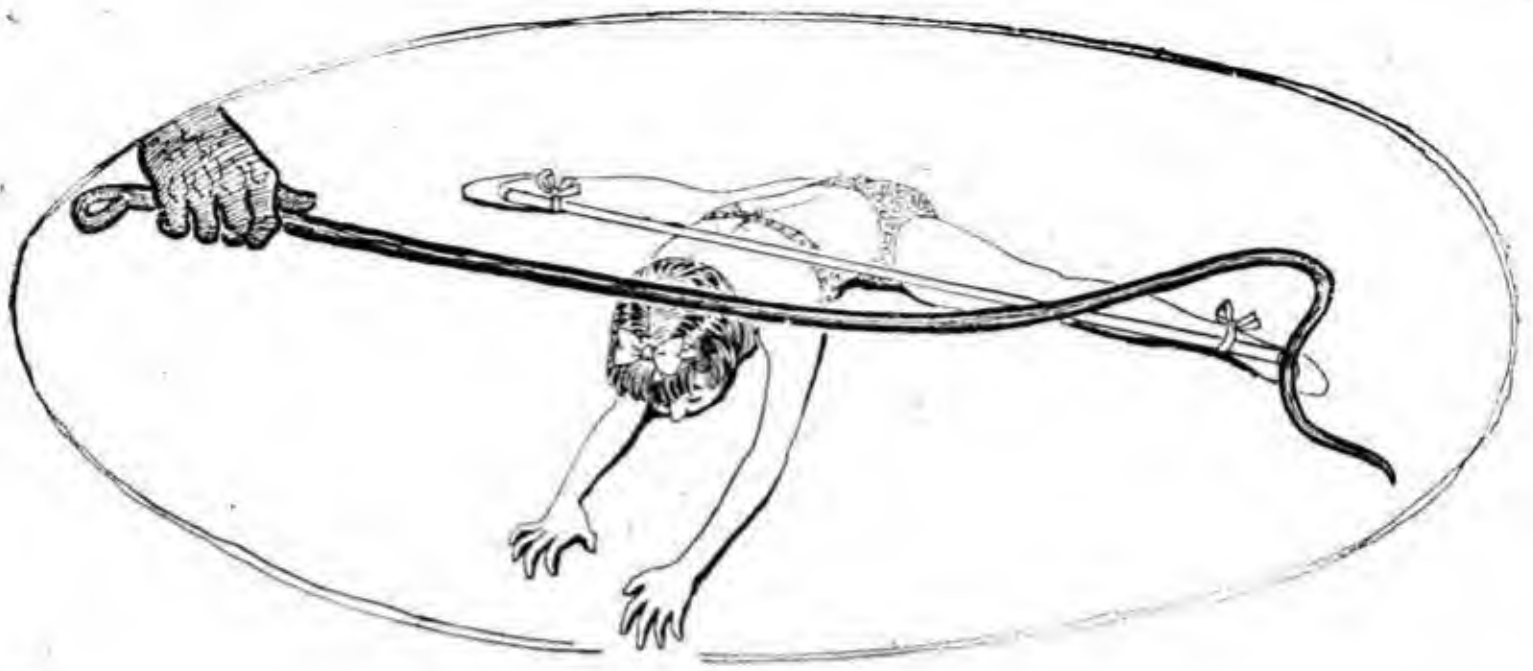
## 屈伏の記憶

安原さんの邦子夫人や、あの荒物屋の娘さ

んが、七年後の今日どうしているか私は知らない。ただ、その気まぐれな嗜虐の対象にされた子供たちが、やがて成人したのちに、そのことを思い出し、往時の母や姉の心身の状況を忖度することがなければ、さいわいと思う。いやこの子供たちばかりではない。

その後、私はあるレストランに拾われ、仲間うちでは多少文字のあるところを買われて生活も安定しかけたのだが、そうなるどころかはふたりの仲が、近予のほうからくずれ出した。しかも崩壊の原因は、さきに近予の手記として発表されたもののなかに予言のように書きこんであるという皮肉な結果になっている。つまり、社会的には小児同様の状態に陥没していた私をそのように錯覚して、おのれの異常な性癖をあますところなくさらけ出してしまった恥ずかしさに耐えられなかったのだと考えるのは、私の自惚れだろうか。近予のその夜の告白と、二人でともに暮らした時期の哀歎とを、なんで私が忘れるものか。

関根幸夫くんにしても亦然り。いまいくつになつて、どんな暮らしをしているのかは知る由もないが、私は思う。彼の不幸な少年時代のある日、突如としてその身を襲った春の嵐。それは施設の若い女職員から与えられたこの世ならぬ屈辱の想い出とともに、生涯彼の脳裡を去りやらぬことであらうと。



アクロ・ダンサーの告白

## 曲馬団の娘

上田隆子

「さあ、始めよう」

男はわざと大きな声をかけてマリ子の後ろへ立ちます。両脚を真横に開いて床へ密着させ、マリ子は前の床へ目を落したままの姿勢です。男は幹めに突き出した棒に両手を掛けてグウツと下げます。

「ううツ、むーん」

マリ子は床に両手を突いて、うめきます。棒に固定された左足首は、床を離れて棒に抑えつけられている首よりも尚一層高く上ります。男は下げた棒に片足をかけて抑えようと、反対の右足首に棒の端を近附けます。

二回、三回、弾みをつけて出来るだけ近づきます。その度に棒を踏みつけた男の足に力が入り、マリ子の上半身は首筋から棒で押えつけられて、床へ着く位に弾みがついて揺れ動きます。棒が、ぐーん、ぐーんと踏みつけられる度に、マリ子の左足が床から離れて宙に踊り、押しつけられた首の下から、「ああッ」「あーッ」と泣声が上るのも哀れです。

大体の見当のついた処で、右足首が棒の先端に括りつけられます。流石に此の方は足首と棒を固定する迄はゆかず、括ったバンドが延びて空間を作って居ります。

マリ子の両脚は逆の八の字に開いて身体の



真横から頭の後ろの線迄、一杯に伸されて拡がって居り、両手は床をかきむしりながら僅かに上体が前へ倒れるのを防いで居ります。

「うーん、うーん」

切なく苦しいうめき声を洩らして苦しみに堪える女体を見下して、男二人が満足気な笑いを浮べて居ります。

「旦那、未だ無理ですね。本当は棒が真一文字になって、脚も逆八になる処が、棒が未だ幹めになって、脚の開き具合もおかしいですねえ。」

「まあ、此の程度の子なら、こんな処さ。流石に春子に絞られていると見えて、仲々素直だし、具合も好いじゃないか」

「そりやねえ、春子の仕込は定評がある位ですからね。あいつは若い女の子と来たら、あの手この手で音を上げさせて喜んでゐるんだから、マリ子も苦勞している事でしよう」

「こわしたら大変だからね。そうだ。鏡を持って来てくれ、切角の素晴らしい型を御本人が見られないよ」

調教師が部屋を出て、間もなく大きな姿見を運んで来て少女の前へ据えます。

「おい、マリ子、身体を起して目を開けろ。ほら、素晴らしい型だぞ、ほら」

マリ子は心死の力を両手に入れて、上体を支えながら、ジリジリ起してゆきます。

「う、うッ」

身体の奥底から湧き上る間断ない苦痛に加えての屈辱に、若い女の堪え切れない悲しみが低いすすり泣きの声と交ってゆきます。

「唄え、唄え。もっと唄うんだ」

男は狂ったように怒鳴って、女の周りをグルグル回りながら、床を鞭でピシピシ叩きつけます。時々鋭く飛んだ鞭の先が身体に当たると、少女の口から「ヒイーツ」と泣き叫ぶ声が高く上ります。

先程からの苛酷な訓練の効果を更に高めるには鋭い鞭の音と、少女の高い悲鳴が必要なのです。仕込の最中には出来るだけ堪える処を、逆に苦痛の表現を強調して、高く叫び、泣きわめくことは、此のとび入り訓練士(?)である中年男の惨忍性を満足させ、高価な玩具として合格する早道なのです。

一刻の狂宴が終ると、マリ子の脚の縛しめが解かれます。

「そら、よく唄った。休みにしてやる」

男の声に両脚を開いたままの姿勢から、上体を前に倒して俯伏になり、脚をジリジリと狭めます。長い間、限度一杯までに拡げられ

ていたのを旧に戻すには、相当の苦痛が伴うのでしよう。「ううん、ああッ」と苦痛を訴えながら徐々に脚を伸してゆきます。そうして、そのままグッタリ伏せたまま肩で荒い息使いを示して居ります。

「何だ。案外、意気地がないな。斯んな位で参ったんじゃ、先が思いやられるぜ」

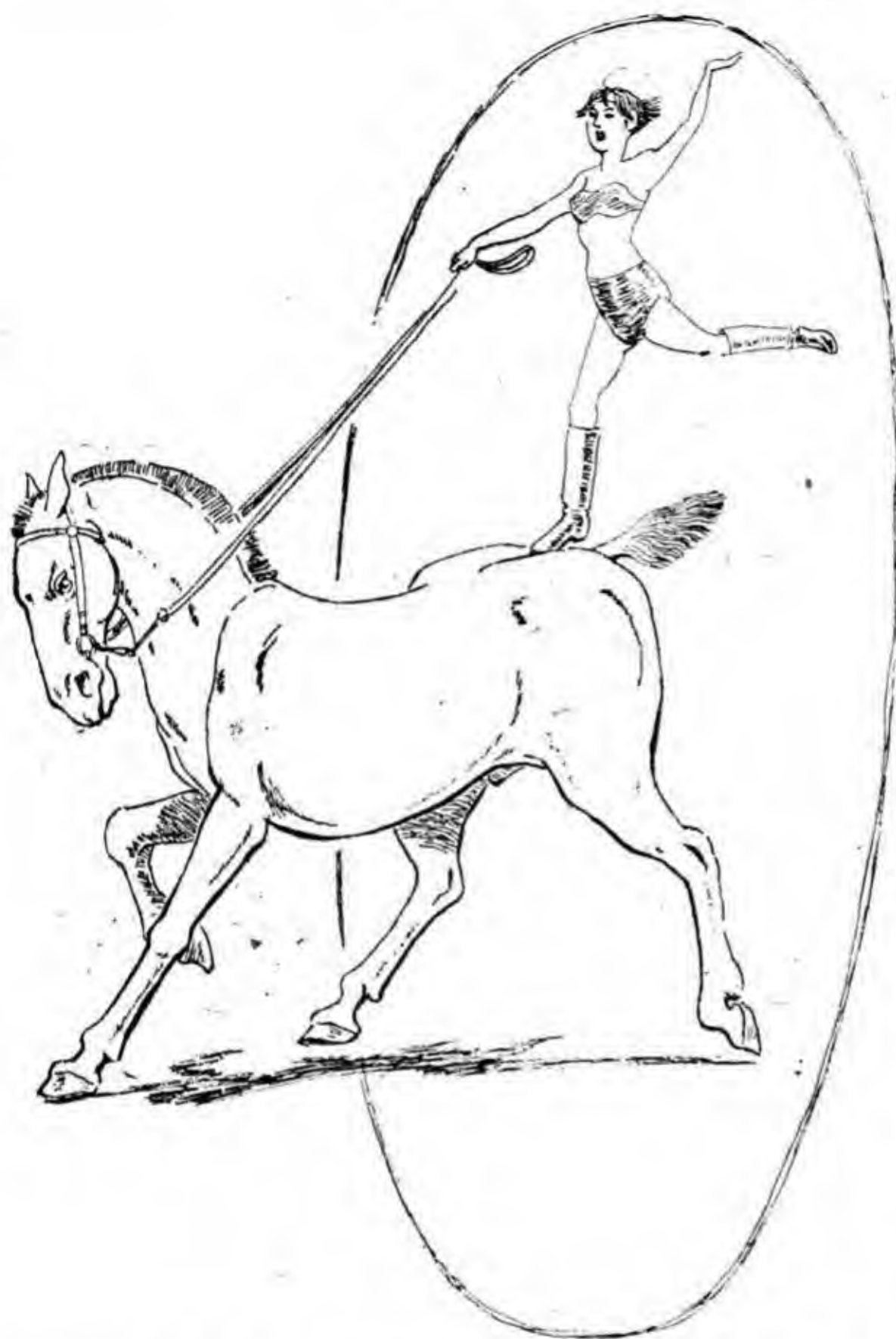
「でも旦那、此の位の娘にしては上出来ですよ。流石に春子姐さんのお仕込だけ有って、大分、程度は進んでいますよ。此の位じゃ、まだまだ棒は使えない処ですからねえ」

二人は少女を前にして勝手な事をしゃべっています。彼等に見れば哀れなこの少女も、彼等の振う革鞭におびえ、悶え、従う、一匹の白い女獣と。何ら変りはないのでしよう。

団長が入って来ました。

「マリ子。大分唄っていたな。何しろ、此の小父さんのお相手じゃ無理もないで。此の一座で田中さんに唄わされない娘は一人もないんだからな。お前が仕込まれている春子だって、お前位の年頃にゃ随分やられたもんだ」

「そうそう、春子は此の位の頃から意地っ張りだったねえ。余り唄わないんで、ギューギュー締めつけたら、氣絶した事がよくあって



ね。その度に団長に叱られたもんさ」  
ぐったりと倒れ伏している少女を挟んで二人の話が続きます。

「どうだろう。私が考えるのに曲馬の舞台はどうも色気が少いように思うがね。近頃はお

色気の時代になっているのに、曲馬だけが何時迄も昔ながらの形でいる事はないだろう。曲芸がアクロバットと言われる世の中だ。舞台姿にしても、白いシャツに長い靴下、胸当もタイツも大きい。出来るだけ肌を出さない

衣裳だ。切角、曲馬や軽業で鍛え上げたピチピチした体を、わざわざ隠して置くなんて勿体ない話だよ」

「成程、そう言えばそうですね。レビユーなんて言うのは照明や装置で見た目もきれい。

それに若い娘が裸で脚をピヨンピヨン上げて踊る。それに較べて曲馬団が十年一日のようにやっていては、切角長年かかって鍛え上げた芸も見栄がしないという事になりますね」

「そうだよ。それに俺に限らず男は皆、女をいじめて喜ぶという本性がある筈だ。尤も俺みたいに激しいか如何かは別として、確かに男ならその気持は有る筈だし、女だって此処の春子みたいなのも居る。又逆にいじめられて喜ぶ女もいる。斯ういう処を舞台で、警察などで絞られない程度に現しても結構面白いものが見られるとも思うがね。」

「よく判りますよ。それで田中さんに何か名案でも」

「うん、まあ近頃考えついたんだ



が、どうもお互い日本人として扱う事は却つて見物の反感を買うし、此処では一つ支那の姑娘クニヤンという事に仕立てる。なに髪形を変えて、衣裳をそれらしくすれば、セリフが有る訳じゃないから結構いけると思う。それに只芸をさせるだけでなく、本当に舞台で叩く訳にもゆかないから、道化に鞭でも持たせて、口上の中でそれらしい事を言ったり、床を打ったりして娘の打たれる処を連想させる。曲芸の中でも、時にはわざとトチらせて、手をねじ上げて楽屋へ入れるなんていうのも、見物に、あとから何をされるかと想像させるだけでも楽しいじゃないか。

衣裳も最初は支那服で、口上が終つて芸に移る時にパツと脱ぎ捨てる。真白な身体に真赤なタイツと胸当てだけ、それもなるべく短くしてね。道化の鳴らす鞭の音を合図に芸にかかる。口上にしても『姑娘の芸、段々難しくなる。今度はこれ。しくじったら皮の鞭でお尻を沢山叩くあるね。姑娘、痛い痛い泣く、可愛そうあるね。一生けん命しくじらないようにやるよろしい』というようにしてね。芸をしている娘の身体の傍を鞭で叩いて音を出したりする。もちろん、実際に叩いたりしては面倒になるから、それらしい感じを出すこ

とさ。要するに女をいろんな手を使って責め立てる。これを舞台に現すことだよ。こいつは受けるぜ、全くの話が。此処に転っている女の子を此のまま舞台に出して、仕込の様子をそのままやってみせたい位のものさ」

「なる程、そういうもんでしょね。早速やってみましょう」

「処で大分長話になってしまった。もう一働きしてもらおうか」

長く延びていたマリ子の傍の床板に、激しく鞭が鳴ったのを合図に、再びマリ子は身体を起します。

「ほらほら、上った、上った」

鞭の先で追い立てられて再び仕込台に立ち上ります。

「前曲り、続けて」

流石に厳しく仕込まれたマリ子の身体は柔軟で、私のそれとは比較にならない位よく曲ります。

「仲々いける子だねえ、虎さん。一寸手伝えよ」

男が台上上ってマリ子の足先の方へ立ちます。一瞬、前曲りを停めたマリ子の顔が、サツと緊張しました。再びその身体に加えられる怖い責を感じたのでしょう。

「ほら、虎さん、後ろへ廻って頭をうんと押えてくれ」

言われた通り、虎さんがマリ子の背後から容赦なく前に曲った頭を抑えて、頭が台に着く迄押しつきます。男は、台に膝をついて両手でマリ子の両足首を握ってジリジリ前へ押します。それにつれて、ふくら脛が台から離れて膝が立ってゆきます。

「おい、棒だ棒だ」

男は棒を握んでマリ子の膝の下へこじ入ると、上下に揺って首筋へ通し、更に反対の膝の下へと通してゆきます。

「あッ、あッ」

流石にマリ子の締め切った顔も苦痛にゆがんで、可愛い紅い唇から悲鳴がほとばしります。

「ほえろ、ほえろ」

男の眼は怪しく輝いて、尚も棒を動かします。

マリ子の丸く前に曲げられた身体は、更に一本の棒で、頭が完全に両膝の下に押えつけられて居ります。

(未完)

## 手記

## 禪

(ふんどし)

白山緊

禪、この字は、なんと意味シンで我々の胸に動悸を起こさせる字か。衣へんに軍隊の軍、いくさと云う遅いそして最も野生的になれる瞬間の男がつける白い帯。もちろん赤フンもあるが、なんと云っても一般的なのは白フン。しかし私は思う。あの強烈な夏の日に赤銅色にやけた海の男は、やはり六尺の赤フンでないと調和がとれない。

禪、私はこのために如何に困難をはらい、如何に情熱をかけて資料を集めたものか知らない。十何

年間も写真を取り続け、近ごろはフンドシをしめた筋骨逞しい男の動きに興味をもつて、8ミリにも収めねばならないまでに夢中になった。集めた写真は古くは支那事変の軍隊時代のものから、新しいものは最近の風呂屋のものまで、ありとあらゆる機会と困難をはらった写真類も無数と云う字に近くなお飽くなき蒐集欲にかられるのも、あのなんとも云えない力強い男性美、そしてフンドシをしようとする男の気持の逞しさ、当然それと合った真の荒々しい体勢。こ

れに私は力づけられるのである。

禪、私はこれに三つの要素が加わったのが好きである。それは、野生的、逞しさ、そして素朴さである。禪は女性のそれと違って優美繊細はいらない。ではこの三つの条件を備えるものは、それは六月の風かおる初夏の田園に白禪一つになって田植をする男。上にコソンのハッピを着け、あさぐろい尻にきりりとした純白のフンドシは、まわりの緑と調和して最も本能的な、そして禪のもつよさを一番良く表す状態であろう。

又昨年の夏であったが、中年の漁師が六尺禪一つになり、舟の舵をあやつり、そして網を曳く逞しい動き、自然の雄大な静と、その体の動きとがリズムカルに調和して、なんともいわれぬ気持にかられ、夢中で写真を取りまくったものである。後にこの人と親しくなり、話の様子で共に禪愛好者であることがわかり、快く私の写真のために種々のポーズをとってくれたが、天にも登る気持で、その雰囲気を楽しんだものだ。

禪、なぜこの世で一番合理的でそして実用的なフンドシを今の若者はきらうのか。日本古来のこの美しきもの。若者の禪姿には逞しさとその意気が感じられ、中年の禪姿にはどこか野生と素朴を宿した逞しさが現れている。しかし写真に撮ろうとするモデルは、かなり辺鄙な漁村か、山奥の農村でないと、これはと云う禪姿に逢わないのはなぜであろうか。もっと身





近かで、進んでモデルになってくれる禪愛好者のいないのが誠に残念である。

禪、これと似ている感じを与え、股引、或は半タコと云われるものにも、私は禪と同様、異常な位のよさを感じる。共に緊くしめ込まれている感じがフンドシと似ているからであろう。股引は大体に於てコンの色を持つ日本古来の布地であるが、日本人の肌には昔からよくコン、或はアイの色が合う

ものである。半タコは白がだんぜん多いが、これはどちらかと云うとフンドシに近く着物の下に多くつけるので、禪と同様下着の性格をもつものである。祭りの若衆は大抵これで、ピタリと脚に密着した半タコは言うに言われぬ魅力を持つものである。

半タコはだいたい直接につけるが、股引は禪の上にさらにつける場合が多い様で、私が多く見聞した処では股引の下フンドシは大

抵越中禪であった。これが六尺禪でないのは、多分、六尺禪の場合はそのみでかなりの嵩をもつので、一寸まずいということかも知れない。しかしこれについては私はまだ充分な調査をしていないので、ただ想像の域を脱しない。

さて最後にフンドシの使用感であるが、これはなんと云つても勝負でいう「緊禪一番」と云うこの字に現れよう。勿論古くからの習慣によって、ただ単にフンドシを

日常の下着として使用するほかに多分に緊縛という趣味的な、あるいは遅しい男一匹の意地と云うか意気と云うものをフンドシ一本に托して、堂々と白日の下にその荒々しさ、強さを示すのに絶対のものであると信ずるからである。

その点では日常使う越中禪もよいが、なんと云っても六尺禪が一番である。多くの禪愛好者は前後どちらから見てもY字型に緊縛するのを最上としている。これはこの型にしめるのが一番使用感が良いからで、見た目にもイキで、イナセな感を受けるものである。

禪、この一片の白い帯があるからこそ、我々禪愛好者は、明日という日も生きられるのである。私は如何なる困難と情熱をかけてでも、フンドシのためにより多くのものを得るであろう。

次の機会には「禪と祭」「禪といれずみ」について詳しく書いてみるつもりである。

## 女相撲思い出話

—第二話—

津谷 正春

文と画



昭和四年の春、私は旅行中、静岡県三島町で女角力の小屋が掛っているのを見付け、汽車に乗る予定を延して見物することにした。十本足らずの織りが立てられていて、絵看板には、太った女横綱の土俵入り姿が描いてあ

った。確か、高玉女角力興行団とか記憶している。見物人は四、五十人位バラバラと入って居り、それも年寄りが多かった、当時まだ若かった私は一寸恥しかったが、靴を提げて前の方へ坐った。

二年前に矢張り同県のK町で見た時と同じように白い木綿のシャツとサルマタを着けた上から黒い褌を締めていた。髪は角力髪に結うて総勢が十人位であった。

中にまだ入団して間もないのか、一人の若い女が、仕切りの仕方よく出来ず、姉弟子達にもっと「腰を落せ」とか「そんなヘッピリ腰でどうするんだ」とか散々叱られたり、投げとばされたりしていた。それでも、サンバラ髪を撫ぜ上げもせず、投げられては又組みついて行く熱心さには、感心させられた。よほど角力が好きに違いないと私は思った。

五人抜きと云う取組みがあった。弾みをくって大きく、廻転して土俵に転がり、次第に一同昂奮して上気し、若い女の身体から発散する妖気とも云うのか、そういったものがムンムンとんでこちらへ迫ってきた。

「ヨッ」「ヤア」「コン畜生め」「野郎来い」とか叫び、ハアハア息をついて、互にしがみつき揉み合うのは仲々の壮観である。

色々の取組みもあったが、力士の四股名も記録してもおかなかったので皆忘れてしまったが、三十五、六才の色黒の、おかみさんと云う感じの小太りした女力士が居て、見物人に向い「おっさん、あたいを応援して呉れ、



キット勝って見せるヨ」等と言う、顔は甚だまずいが愛嬌のある女があった。

この女が若い女と取組んでの勝負に、四つに組んで吊り合うて決まらず、土俵の真中で組んだままお互いの顔を相手の肩にのせて、バラバラの乱れ髪はからみ合うて、肩で大きく息を吐いていた。

兩人共全く本気のように、私も思わず眼を見張った。若い方が、再び前陣を両手に攜んで吊りにかかった。年増は腰を反らして吊られまいとするのを、シャニムニに若い方が吊り出そうとしたので、陣がずり上りざまシャツが少しハダけた。「畜生!! 何するかヨオ」と叫ぶと、年増女はいきなり若い女の髪

を片手で掴むと同時に、片手で顔をヒツカいたようだ。若い女は「ヒイッ」と云ったように聞えたがドサリと尻もちをついた。行司もあわてていたようであった。

「あたいが勝ったのさ」と年増女はサツサツと引上げてしまったが、一体これはどうした事だったろう。

(了)

# △短信往来△

## 女 相 撲 実 録

伊 万 里 進

久しく奇くに御無沙汰致しておりますが毎月楽しく拝読致しております。最近私と同好の女相撲愛好者が盛んに投稿され、御誌もページをさいて掲載してくれて居る事に心より喜んでおります。同封してあります切めきは、四月十一日の毎日新聞の雑記帳欄で伊万里市で行われた女相撲の記事ですが、これは、全く興行的なものと性質を異にした立派な行事で、それだけに参加する女性角力も漁師のおかみさん、娘さん(年令的にはほとんど三十才以上)達で、

半袖シャツにステテコをはき、漁村らしく帆布で作った褌をしめております。やはり稽古も各自の家で先輩格のおかみさん、時には旦那様も加わってはげしい稽古をやっており、男性プロと変わったところはあります。

長崎県に正月行われる女相撲があります。これは伊万里市のに比べ争闘の点で迫力があります、と申しますのは、技で相手を土俵に砂まみれにしても「この勝負あずかり」といって引分けられるので、女体相打つといった相撲場面が殆どないからです。

ただ我々が想像する様な、素裸に「しめこみ」といったのはみられません、白い

しかし、いずれにしろ、女体にしめこんだ褌、そして何ともいえない女性独特の色気一杯にして戦う女相撲は、見るものを

して、只々感嘆させられます。

# △毎日新聞△雑記帳

◇伊万里市波多津町浦区に三百年前から伝わる女相撲「写真」が五年ぶりに復活し、十日午後二時から同町高尾山(標高二百メートル)の金比羅神社境内で行なわれた。この日は同市長選挙の告示日、また近づく参院選のために、この女相撲が公明選挙の宣伝に一役買った。

◇この女相撲は地元漁師のおかみさんや娘さんなど総勢十八人、最高齢者は四十年前から女相撲で鳴らし、いまは「呼び出し太郎婆さん」こと塚本ミツさん(七十二)最少年者は塚本春子さん(一七)。

◇「浜勇」「波の音」などりりしい化粧回しの上に「公明選挙」の文字をつけ満開のサクラの下ではなやかな土俵入り、観衆もやんやのかっさい。

(伊万里)

# 当代女武勇列伝

相原登志子の場合

諸岡 堅雄

「だいぶん前の話だけど、相原医院に強盗が入ったことがあったわね」

「そう。もう五、六年になるかな」

「あのとき、あの二人組を抑えたのは御主人だということになってるけど、実際はあの女医さんがやったんですってよ」

「ほほう。たしかあの人、剣道三段とかいってたね」

「そう。赤胴よ。そこまではいいんだけど、最後はおならで止めを刺したんですって。プウッか、スウッか知らないけど……」

そう言って妻は、いたずらっこのようにケ

ラケラと笑った。

「でも、本当かしら？ あのお医者さんがはやるのを、同業者のだれかが妬んでとばしたデマじゃない？ あんなきれいな人が、まさかねえ」

妻は半信半疑であつたが、僕にはありそうなことに思えた。

「美人だっておならはするさ」

「それやあ、するわよ。でも、ここぞと思うとき都合よく出るもんじゃないわ。体質にもよるけども……」

「体質によっては無理にひり出すこともできるけど、彼女の場合は、不覚にも洩らしたと

いうことにしておこう。彼女の名誉のためにもね」

「だけど本当かしら」

妻は、どうしても信じられないという顔付である。

「だってさ。真相を知ってるのは、あのご夫婦と二人の犯人。まさか本人が、じぶんの口からしゃべる筈はないし、ご主人だって口外しないと思うわ。そんなことしたら、患者さんが来なくなるものね。とすれば犯人が警察か、刑務所の仲間に話したことが、どこからとなく伝わってきたということにもなるけどどっちにしても臭い話で、あの美人女医には



「お気の毒だわ」

「僕は本人がしゃべったと思うな」

「まさか」

「仲のいい友達にしゃべる、ということがある。親兄弟に言わないことでも、友達には打ち明けるもんだ。君だって、あの女医さんと同じ位の年頃には、仲間同士で随分きわどい腕自慢をしていたじゃないか。『こうぐいッ』と組み敷いた途端に、『ブウッ』と出ちゃったのよ。なんて」

「おほほ……。そんなこともあったわね。だけれど、止めを刺したことはないわ」

「相手は凶賊だよ。おならが出たからって、『あら、ごめん』と起ち上るわけにもいくまい。そのまま抑え込んでいるより仕方がないじゃないか」

「それもそうね」

「おそらく彼女が、大学時代の体育部の連中とビールか何かを飲んだときにでも、武勇伝のいくさりを、得意満面になつて話したんだと思うよ。それが、伝わり伝つて君の耳にも入ったんだよ、きっと……」

「ぼくのこの推理にまちがいはなかった。相原登志子さんは、親友の山岡夏江、大河内順子両女医に、その時の模様を詳細洩れなく話

していたのだ。

主人の清隆氏は骨格もよく、柔道の心得もあった。それに見るからに強そうで、世間でも美人女医の用心棒という噂だった。だから「夫妻協力して賊を取抑う」という新聞記事をみても、主役はもちろん清隆氏と思つたし「習い覚えた柔道が役に立って……」という本人の記者団への談話が、それを裏付けてもいた。

しかし実際に戦端を開始したのは登志子さんであり、清隆氏は愛妻危しと見て助太刀役を買っただけというのが真相である。事件後彼女は、女優の河内桃子そっくりの顔をほころばせ、「ほんとうに主人のおかげで助かりましたわ」と見舞客に挨拶していた。

## 二

当夜忍び込んで来た二人組の賊の一人は二十五、六の若者。もう一人は十七、八の少年だった。寢室の薄暗いルームライトの中でもはっきりとそれが分つた。近所ではついぞ見かけない顔なので、流しのタタキにちがひなかった。夫妻はパジャマ姿のまま、寢床の上に並んで坐らされ、二人組は短刀のようなものを眼前に突きつけながら、その前に立ちはだ

かっていた。

登志子は、神聖な寢室に無礼にも土足で踏込んできたこの無法者に、無性に腹が立ったが、それ以上に恐怖が全身を捉え、口ががたがたと慄えた。

『こんな筈じゃない。こんなあたしではなかった筈だわ』と幾度か思い返したが、慄えはとまらないし、足は萎えたように力がなくなっていた。隣に坐った夫が若者と二、三、押問答しているようだったが、それも耳へは入らなかった。

そのうちに全身がぞくぞくし、不意に尿意を催してきた。これはだれにもよくあることで、極度の緊急感がそうさせるのだ。登志子も学生時代、薙刀や剣道の進級試合のとき、何度も何度も便所に立った経験がある。しかも今夜はまずいことに、就寝前に少しビールを飲み過ぎていた。だから生理的要求は抑え切れない極点に達したのである。

「おトイレへいかせてよ」

じぶんながらだらしがないと思えるほど声は慄えていた。

「チエッ。しょうのねえ奴だな」と年嵩の方が言い、少年に向つて「おめえ、便所へついてってやれ」と促した。

便所は寢室を出て鉤の手になった廊下の突当りにあった。力なく足はふらついたが、我慢のならない生理的要求が彼女の歩行を早めた。スイッチを捻り、夢中で扉をあけて中へ入った途端、少年が声をかけた。

「おいー 戸は締めるんじゃないやねえぜ」

「えッ？」

彼女は思わず、ひるんだ。

「窓から逃げ出すって、手もあるからな」

「だけど……」

「だけでも糞もねえ早くやれ！」

「じゃそのスイッチ消して！」  
スイッチを入れたことが不覚だった。しかし長年の習慣で、手が自然にそこへいつてしまったのだ。しかしそのために便所の内部は皓々と照らし出され、暗い廊下からみれば真昼のようである。しかも具合の悪いことには、西洋式の腰掛け便器は扉の方に向って腰かけるようになっている。



「早く、スイッチ消してったら！」

「だめだ！」

「礼儀知らず」

と罵ったものの、夜間の闖入者に礼儀があるう筈もない。

それよりも切迫した要求は強く、これ以上問答を重ねる余裕がなかった。もう一瞬の猶予も許さなかった。羞恥で身もちぢまる思いだったが、パジャマのズボンに手をかけた。

登志子はそのうちに、不思議に気持が落ち着いてきた。

「馬鹿ねえ。お前も……男なら向うを向いてるものよ」

相手をたしなめるこの言葉が実にすらすたと出た。

「お前とは何だ！ 偉らそうな口を利くな」

「じゃ、何んといえればいいの？ 名前をいえば「さん」づけにしてやるわ」

「止せやい。タタキに入って名前をいう奴があるわけねえじゃ



ねえか」

「それもそうね。じゃ強盗さん？」

「止せやい」と言ってから、「しかし小母さん、きれいだね。それにグラマーだし、イカスよ」

「小母さん？ いやあね、その言葉……。もっとも強盗さんからみれば、あたし一まわり以上も年上ね」

「止しなったら。強盗さんなんて言うのは……」と喋りながら、思い出したように「さあ早くしなよ」と催促した。

こうした問答を重ねているうちに、登志子はすっかり落着き、日頃の彼女に立ち返っていた。

ところが少年の方は最初の警戒心がいまはほとんどなくなり、この美人の小母さんに甘ったるい妄想さえ抱きはじめていた。それが証拠に言葉付きも初めのようにぞんざいではなくなっていた。

「そっち向いてて」

すると少年は素直に向う向きになった。

「感心ね。いいっていうまで、そっち向いてるのよ」

彼女は勝ち誇ったようにこう言った。もう恐怖心のカケラもなかった。

『どうしてやろうか』と考えた。

剣道三段の腕前でこの少年を倒すのはわけはない。当身をくれて、あの短刀を取上げてしまふのだ。物音に驚いてきつとあの兄貴という奴がやってくる。しかし一対一、小太刀の使い方も知らない素人に負けるあたしじゃない。だが待てよ。その前に清隆がやられる心配がある。

『さて、どうしたものだろうか』やはりこのままおとなしく部屋へ帰ろう。そして隙をみてあいつに飛びかかってやろう。取っ組み合いになれば清隆も助けてくれるだろう。いつもあたしに馬にされてる清隆だが、決して弱いわけじゃない。あの人だって大学時代には柔道部の選手だったんだから……

そうそう。結婚前のことだけど、武蔵野の原っぱで四、五人の不良を二人で叩きのめしたことがあったっけ。

あのとときあたしは最後に逃げおくれた奴をわけなく組伏せ、馬乗りに跨って散々に痛めつけてやった。おもしろいように虐めてやった。とくに胴絞めが効いたようだったわね。ぐいと締め上げると「ううッ」と唸って、苦しそうにもがいたっけ。

清隆が息せき切って駆けつけて来て「トシ

坊、大丈夫かい？」と声をかけたとき、あたしは完全な制圧態勢に入っていた。「これの通りよ」胸をそらして昂然と言ひ、清隆の差出した煙草をくゆらしたもんね。下敷きにした奴の口を灰皿代りにし、最後に額で煙草をもみ消してやったら、あいつ奴、ちよっと火傷したようだったわ。

今夜も何んだか、あのとときみたいにやれそうない気がする。

彼女は盛り上げる自信で武者震いした。

### 三

寢室へ引き返すと、さっそく蟬声がとんて来た。

「おい！ いままで何してやがったんだ」

年令の割にはサビのある、ドスの効いた声だった。それは少年を怒鳴りつけたというよりも、むしろ登志子をなじったように受取れた。

「きまってるじゃないの。オトイレよ」と言いながら、薄暗がりを通して清隆の方を見やっていたが、あのとときから膝も崩さず、同じ姿勢で布団の上に坐っている。

『キヨの意気地なし。これからあたし暴れるけど、しっかりするのよ』

「長葉たれる奴にロクな奴はねえ」  
「余計なお節介よ。ロクでもないのはお前たちじゃないか」

これではまるで、相手の兇暴化をけしかけるようなものだったが、じつは登志子の作戦だったのだ。

案の定、若者は「何んだって！」といきり立ったが、同時に、この登志子の意気込みは賊の前で神妙に坐っていた清隆にもピンと反響した。

彼は「登志子はやるつもりだな」と直感したのである。瞬間、彼の脳裡には、過去における彼女の数々の武勇伝が浮び上ってきた。

彼もまた、武蔵野の原っぱの出来事を、きのうのように思い浮べた。

あのとき不良どもの喧嘩を最初に買ったのは、僕よりもトシ坊の方だった。一人が刃物を持っていたが、トシ坊はその男の手許をかくいくぐると利腕を逆にとり相手が痛さにひるんでポロリと獲物を落すと見るや、目にもとまらぬ早業で男を投げつけていた。これが乱

闘のキッカケとなった。

しかも乱闘となっても右に左に飛び交い、僕がたった一人を相手にもたついている間に彼女は残りの奴らをほうり投げていた。美事なものだった。

あとになって「君は柔道もなかなかもんだね」といったところが、「あれは柔道じゃなく、戦場の組打ち業なの。柔道ではああ巧くはいかないわ」と言ったものだ。そこで「剣道じゃ組打ちも教えるの？」ときいたところ、「そう。普通は教えないけど、あたしは習ったの」と言った。「剣道もスポーツとしては面、小手、胴、突きの四つしか認めてないけど、武道としての剣道では竹刀で足を払

ってもいいし、体当り、組み打ちも必須科目よ。戦後女子の高段者も随分ふえたが、感心するのは竹刀さばきだけ。下半身はまるで無防備だわ。それに鎧迫合いになると審判はすぐブレークしてしまうでしょ。詰んない。あたしだったら瞬間足を掛けて相手を倒し、組敷いてお面の道具を外しちゃうわ」とも言った。

ところで、登志子はやるとなったら最後までやるだろう。

「おれも男だ。黙って見ているわけにはいかない」

久方ぶりに清隆の体内にも闘志がもりもり湧き上ってきた。登志子の作戦はまさに図に当たったのである。

「おめえ女のくせに、でっけえ口を利くじゃねえかよ」

若者は詰め寄ってきた。しかし彼女にはもはや恐怖はなく、ドスを握った男の右手首だけを注視していた。

「おい。こいつを縛り上げてしまえ」

若者は顎をしゃくって少年に命令した。しかし少年は、





「えッ。この小母さんをか  
い？」と当惑したように問  
い返した。彼はもう彼女に  
たいし、完全とっていい  
ほど敵意をもっていなかつ  
た。しかし、それをきくと  
若者は激怒した。

「小母さんだって？ ふざ  
けるな！」左手が少年の頬  
にとんだ。

「この野郎！」とまた唸る  
ようにいって殴りつけたが  
しかしこの隙を逃がすよう  
な登志子ではなかった。

ひらり身体が動いたとみ  
るや、飛び付きざま若者の  
右利腕を両手でとり、左足  
を外側にとぼして左方へ刈  
り倒した。若者の身体は大  
きく弧を描いて畳の上に落  
ちた。

「痛え、ててて……」

いうまでもなく男の声だ。組敷かれた上に  
手首を逆にとられたのだ。

「刃物を離せ！ 離さんか」



膝下にぴたりと抑えつけながら、彼女は男  
みたいな言葉でそういった。

「くそ、離すもんか」

「キヨさん。早く刃物を取上  
げてよ」

彼女が叫んだのと少年が清  
隆にとびかかったのと同時に  
あった。「あッ」それは清隆  
の叫び声であった。少年の刃  
物でどこかをやられたらしい  
のだが、いまはどうすること  
もできない。男は意外に手強  
いのだ。しかし早く片づけて  
清隆を助けねばならない。気  
の焦りも手伝ったのか、彼女  
は素早く向きを変え、相手の  
右手を両足で挟むと、咽喉を  
締めつけながら、じぶんの身  
体を仰向けに倒した。この攻  
めは柔道の腕ひしぎ十字固め  
とよく似ていた。

この攻めで刃物はポロリと  
落ちた。すばやくそれを拾い  
部屋の片隅に投げつけたが、  
瞬間そこに隙ができた。男は

身をよじり、はじき返すように彼女の両脚を  
突きのけると、逆に上から馬乗りにはじめつけ  
てきた。垢だらけの古いズボンはずえたよう

な異臭を放ち、彼女はいまにも吐気が来そうだった。

下に抑えつけられていても登志子は平気だった。素手の組打ちなら「こんな素人に負けてたまるか」という自信があったし、いまでも、相手が身をかがめて攻めて来たら、下から突き上げてやろうと待ち構えていたのである。しかし、吐気の来そうなのこの異臭は耐え難かった。

が、急に男の身体が浮き上り、すうっと軽くなった。清隆が後ろから若者を引倒したからである。

彼女は腰をひねると海老のように跳ね上った。と見ると、清隆は若者を後ろから引きづり倒しにかかっていたが、しかしその背後からは少年が組み付いて、清隆を倒そうとしている。

「えい！」裂帛の気合で少年の鳩尾（みぞおち）の辺りに一撃くれた。「ううッ」と他愛なくかがみこんだところを、足を上げて蹴倒した。そして素早く上からのしかかり、相手の肘関節を逆にとり、胸板にどっかと跨った。もう磐石の態勢である。だが気にかかるのは清隆だ。

「キヨさん、どうなの？」

馬乗りの姿勢を固めながら声をかけた。

「大丈夫だ！」という返事。みると、彼は若者を抑えつけ、袈裟固めに入っている様子。

「キヨさん、怪我は？」

「大したことはない。擦り傷でいどだ」

「そいつの刃物は？」

「取上げちゃったから心配ない」

「うん、そう。あたし、こいつを片付けてから、そいつの止めを刺してやるわ」

「ううん。僕一人で大丈夫だ。抑え込んでいるから……」

「そう。しっかりやってね」

「心配ないよ」

「じゃ、あたしはじっくりとこいつを責めることにするわ」

闘争のピークは過ぎた。もう勝負はついたも同然だった。

しかし緊張が緩むと、登志子はさすがに羞恥で全身が凍る思いだった。しかし忽ち羞恥は一転して怒りに変わった。矢庭に拳を固めると、頬骨も砕けよとばかり殴りつけた。

一つ、二つ、三つ、四つ、五つ……少年は右腕を制せられているので左手で防禦するより他なかったが、それでは激しい加撃を防ぐことはできなかった。跳ね返そうにも五十六

キロの体重はびくりともしないのだ。

物凄い衝撃が顎骨にきた。骨が微塵に打砕かれたようにさえ思えた。痛さで脳天が痺れ眼が眩み、顔が醜く歪んでいくのが分った。

抵抗は無駄な努力だった。

登志子は相手が抵抗を諦めたと知ると容赦なく上体を乗出し、両膝で相手の肩口を抑えて、下から眩し気に見上げる少年を睨みつけながら、

「どうだ、小僧。少しはこたえたか」

と乱暴に言い放った。

「少しはこたえたか」これは少年を折檻するとき、継母が好んで使った言葉であった。幼年の頃いつもこうして継母に責められたことが、少年の脳裡に走馬燈のように思い出されてきた。継母はただ殴るばかりか、咽喉を絞めつけてきた。「それにしても継母とちがって、何んとこの人はきれいなことか。物語に出てくる女王さまだ」

彼はいつの間にか抵抗するどころか、この状態を喜ぶ気持になっていた。女医の彼女には、その気持はすぐ感じとれた。「情けないやつね。こいつマゾヒストだわ。こんな奴にさっきは脅されたなんて……」また腹立たしさがこみ上げてきた。



そのとき声がかかった。清隆である。

「こいつ、とうとう音をあげたが、そっちはどうなの？」

「いま拷問にかけてる最中よ」

「なんなら、代って僕が泥を吐かせてやろうか」

「いいのよ。あたし、いまにこいつをおなら

責めにしてやりたいの」

「おならで止めを刺すつもりか？」

「そうよ。懲らしめのためにね」

そういうのと一陣の疾風が少年の頭上に吹きつけたのは、ほとんど同時であった。

「あらッ！出たわよ」

鳥の囀りにも似た女の声を、少年は天上は

# まぞ川柳自註

## 海 辺 に て

西田 仁

海辺にて一念発起パッドフェチ

涼しきは比翼仕立てのショーツなり

夏きたる。今年の水着の流行は「ネーブルカット」と地獄耳。シングルの水着にはどうしてもパッドが必要だが、なにがなんでも脱ぎたがる婦人がたのために、裏にレースをつけた比翼のショーツパンツなどはどうや。げに逞ましき商魂なり。

十里風腥きまでの仕置なり

無人思えらくおれは継子かな

寒いといえは父親が井戸端で水を掛け、不味いといえは母親が毎日そのお菜をつける。かく育てられた武人の一面は、芥川の

「將軍」斎藤少将の「獄中記」などに描かれ、先頃の週刊誌では狂人説まで流されたが――。地下の軍神は黙して語らず。

庖丁をふりあげたとき孟子逃げ

いくら親孝行の孟子でも、教育過熱のママさんがこともあろうにいきなり庖丁をふりあげたのには、おどろいた。が、さすがにわが子へは斬りつけず、織りかけの反物ををざくり。これが「断機の教え」として後世に伝えられる。

比翼Ⅱ和服の襟元や袖口を、重ね着に見

えるようにこしらえたもの。

るかの夢心地の中で聞いた。

「とうとう止めを刺したの？」と清隆は言った。「しかし音はしなかったようだな」

「風ですもの。聞えやしないわ。ドイツ語でこのことをウィント（風）って言うわよ。でもさっきおトイレで出し惜しみしたおかげでとっても効果的だったわ」

「そいつ、ショック死しなかったかな」

「だいじょうぶ。医者にあたしに手抜きはないわ」

「もうそろそろ夜が明ける。こいつら縛っちまおうじゃないか」

「そうしましょう。それから朝風呂に入ってさっぱりしたいわ」

## 四

「フーン、そう」妻は、さも感じ入ったように呟いた。「やっぱりねえ」

僕は、その真相を彼女の親友、山岡夏江女医から聞かされた時に、女医の眼に光っていた一種異様な輝きを、いまの妻の眼にも見取って、女性に共通する何ものかのあることを確認した想いに打たれた。

(終)



女形役者の回想告白

## わたしの青春

阪 東 妻 三 郎

人にはそれぞれの生い立ちがあつて、その顔かたちが皆違ふようにその性格にも種々あるもので御座います。わたしの場合は白粉の匂いに魅かれ女形に憧れて生れて来たような一人でありました。それにしても本当に小学

時代から相当以上の早熟であつた事を、わたし自身充分思い当るところが御座いました。

四年生の中頃には、もう大人の恋愛映画や文芸映画の面白さも、意味も殆んどわかり、「小杉勇と夏川静枝主演の『海つばめ』」という映画などはその頃の作品としても相当な名作であつた事を賞えております。当時の初

期の洋画はタイトルがついていましたが、弁士が喋っている筋書きとは相当に違いのあつたこと、人が笑つて見ている映画が、意外に愁いの満ちた文芸芸術作品であつたことなども知りました。

映画の話になりましたが、わたしの少年時代の妖しい夢を育てはじめたのは、実にその目で見、声で聞く薄暗い映写画面であつたので御座いました。その頃は大体に時代ものの現代ものの二本立でしたが、わたしは自分の好みで子供らしく時代劇のかかるのを楽しみにしました。当時、時代劇映画女優に木下双葉

(現在東映の仇役阿倍九州男の夫人)後年若くして死す)という仇っばいのがおりました。時代劇女優としては全く群を抜いた美しさ。

大東映画、極東映画、新興映画、それに日活松竹、東宝PCLなどの各社の中でも、北見礼子、飯塚敏子その他、美女の数多かつた当時で、わたしの好みは木下双葉にぴたりだったので御座います。

その主演映画のかかる日は朝から夜一回の上映を待ち兼ねました。少くともその頃からわたしの半生に異色の旅まわり劇団を体験させた「白粉の魅力」へ誘い込まれ始めていた



ものか……と思われます。

当時のチャチなベタ塗り化粧で登場する女優の中でも、木下双葉は一際わの濃厚さ。殊にやくざの女房役などの適役は、粹で鉄火な堪らない仇っぱい美しさ。そこへ昔の撮影レンズが暗かった為か、自然女優さんの化粧も濃くせぬと鮮明に写らなかったもので御座いましょうが、仲々のベタ塗りでした。

特に肌も露わに乱れた女優のスチールやポスター写真で氣にいと、矢も楯もたまらず人目を盗んでは切りぬき、自分の室でのぞき見では、猛烈な憧れを抱くようになりましたが、何も知らぬ両親は、単に映画の好きな子供ぐらいに想ってか、映画料金を持たせて呉れたものでした。

× × × × ×

さて、わたしが女形というものに憧れ始める少し前までは、以上のような当時の映画女優の妖しい魅力につかれていたと同時に、その肌を飾る白粉の不思議な雰囲気にもそろそろ愛着を感じ出していたのでありました。

田舎とは言え、濃化粧の首筋で出歩く女もよく見ましたが、矢張り白粉とは、大体顔を粧するのが主になり、その延長として襟までか……としか考えなかった年頃。

そんな頃に観た二流もの天勝魔奇術の一行の中で洋装の女たちが舞台に見せた姿態は、映画以外へ出なかったわたしの秘密の輪を一挙に押し上げたよう御座います。胸あてと寸のつまった色とりどりのスカート、それに金色のハイヒールだけの美女が、その見える限りを白く化粧で粧い包まれていたのを舞台の目近かく発見した時でした。もはや種の知れた魔術に驚き騒ぐ同年の子供たちが哀れなくらい、いや彼等に想像も出来まいわたしの早熟の好奇心がそそれはじめ、演技の進行は問題外に、夢中でその美女たちに見とれるのみでした。

この日以来わたしには俗に言う薄化粧のものに殆んど反応がなくなって来ましたが、それでも化粧とは女のするものとの当然じみた理性を充分心得ていた筈なのです。この白い魅力あるものの真価を知ったのは、天勝一座を見てから一年程も後のことでした。

冬ま近く肌寒い日、久しぶりに地方の人氣を持って渡り歩くらしいドサ廻り忠臣蔵一座が、ここに掛かったのです。人間の好き好きは人も共に知るものか、劇場の親父がサワリ場の印刷されているチラシを見て立ったわたしへ「坊っちゃん、今夜おいで。入れて

あげるよ」と言いました。お蔭で花道によりかかる舞台寄りに、暖かい席を貰い、顔なじみのおばさんは小さい箱火鉢さえ呉れたので棚ボタの気持で御座いました。だが、この夜の芝居見物が、わたしを芝居の旅まわりにまで発展させる運命への、一番最初のきっかけだったとは……。

かねて忠臣蔵の筋書きは映画的なものも、仮名手本の数段にわけた古風なものも、充分知っていました。この夜の進行は若干の変化が興味でした。

愈々定石の松並木で勘平とお軽の道ゆきとなり、花道へスポットされた男女二人の登場でした。揚幕から出た二人の役者、この時、わたしの心理に不思議な動揺がはじまったので御座います。それ迄の各場に出た老優の白塗りの老女や赤姫（紅衣装役の事）にさっぱり不感症だったのに、田舎まわり一座がドン運んだ忠臣蔵の中で、全く突然な花形の出現なのです。さあこのお軽役者の出来の美しさ。花道で勘平のいたわりに座した辺り、すぐ目の下にいたわたしには、その女形の息づかいまでが女になっているのを感じ取ったのです。しかも、ついさつき迄を大石主税で凛々しい若者ぶりを踏んでいた役者が、この

花道にあつては信じられぬほど、女の愁いが溢れ、紅の墨を美しく眼にふちどり、耳わきまでも刷かれた練り紅の冴え、濃い唇に切ない熱っぽい艶が光る……わたしのすぐ目の高さのところ二尺前に打ち伏したその濃い練白粉の匂いで、のぞく背の奥のはてしない白さ、女ではないのに女になって、何か言うやら泣きどくさまの強烈な異常美。やがて舞台にかかり歩くところへ、二階席から酒気を帯びた大きな声で「やいやい!! わりやあ男か女か!! まよわせるぜ、チクショウめ!!」と野次が飛ぶと、道行きにはない艶かしい仕草で、そのお軽の振りかえった時は、もうすっかり女の顔の媚のさま!! わたしは客席の笑い声の中で、いつしか陶醉しきっていたので御座いました。

この日から、男が女の世界に生きる、芸の果てない誘惑が、その濃い白粉のかもす雰囲気とまざり合つて、わたしの心の中へ広がりはじめたのであります。

× × × × ×

ここで少年らしい生活の中の幾つかの秘密が始まりました。家人の留守中にまだ若かった母の化粧品を引き出して顔を白くし、あやしい手付きで紅を使い、少しでも女の子に近

づく表情を粧つては満足しましたり、その脂粉の匂いが家に散らぬよう大変な悪智恵も働かせるのですが、一度は顔をザッと洗ったただけで用事に出かけ「小さい子が女みたいないをさせるじゃないか」と怪しまれたりしました。けれど子供ながら次第に化粧なれして来まして、鏡の中を見とれる日もありましたものの、流石に顔以外の事は実行しませんでした。

幸いに、家でも学校でも未だ秀才少年で通りましたので、至極平穩でございましたが、この間にも例の劇場に二つ三つの旅芝居も来ました。中でも、新派の一座がかかり、これはわたしの病気(?)を前にもまして、狂うほどに深めたので御座いました。と、いうのは、この時、好奇に堪えかねて楽屋をのぞき見をしたのです……。

×本橋大蛇因果(?)、なにかそんなのが売り狂言になっているその一座では、主人公の女形が始めから終幕まで、仇っぽい姿で出ているのでした。その筋書きはよくある伝説で、大蛇の本態をもつ美しい若小姓と不図して知り合う若い豪農の一人娘が、親にも言えぬ恋仲となり、やがて蛇身の邪計にかかり泣く泣く娘を嫁がせる。女はみごもって家に帰

えり、家人には絶対のぞくな!! と断つて別室で声をあげて苦しみつつ、盥の水へ蛇の子を生み放つ。のぞき見た驚きの両親や村人の目の前で、二度と現世に戻れぬ業を抱き、巻きあがる大蛇(こしらえもの)にひきしほられる悲しみの涙の中で幕が下りる……。不思議と、こんなのが当時の人気を取ったので御座います。

この娘役から人妻になり蛇身と共に立ち狂う迄の演技をする女形のことですが、第一幕はさほどのものは感じませんが美しい事は勿論で、最初から息をのむほど。筋が進んで人妻になってからが凄まじいのでした。お涙頂戴劇だけあって、女形の出場面は殆んどが泣く、身をもむの愁嘆場となり、男の扮する限界をこえて客の気持をゆする態に、わたしの心は狂いきってしまったのでした。

幕あいにわたしは楽屋へ行きました。戸口から覗くとせまい楽屋で座員の衣がえや顔なほして大混乱でしたが、正面奥にあの凄まじい女形がいたのでした。最終幕に近づく準備もかねて、丁度「カゾラ」を外したところでしたが、姿そのままが女なのです。一座の目の前で脱ぎかえる褌袴……その瞬間のわたしは魂も飛ぶほどに驚きました。いかに女形と



はいえ、化粧はそんなに深く塗るものでしょうか。手も胸も、背は腰あたりまで、役者特有の純白パッチリの匂いに咲いた人形のよいうな肌。おまけに女の居ずまいで喋ったりしているのです。

驚ろきの眼をみはっている内に彼女？は入口のわたしを見つけてしまい「まあ、どこの子かしら、きつと小屋主さんとかね。ちょっとこっちへおいでな」と真白い指で招きだしました。わたしは思わず身をひいて、楽屋からはなれましたが、あの人はあんな所でも男じゃあないのか。ああ、あの女になり切ったさまはどうしたのか……と、それから頭がうずくほどのほてりに、泣き出したい位いで御座いました。

四幕目の一部は里帰えり、別室でのお産となりましたが、囃し部屋のうちろから見ているわたしの眼に、袖幕に入ったあの女形が座り、舞台で親がのぞき見る仕草に合せて、陣痛の声になるところが変な角度で見えました。客席の目からかくれて座した女形が、手伝いさんの手で胸や腹へ腰紐をまかれ、力をいれて紐をしばり上げたり、何かでくすぐられるらしく「あーッ、うーッ」と身をよじっては女のうめきをするさま。このうめき声が

客にはお産の苦しみを想像させる仕掛けとはよく考えたものと思います。

やがて家人の騒ぐ声が始まりますと、袖幕の女形のうめきは最高潮になって、身をよじっていじめられます。そして不意にうめきが止んで紐がとかれ、耳まで赤くなった女形が舞台へよろけ出たのですが、舞台あかりに汗のしたたりが光り、それは本当に難産の態を表わしており、客は割れるような拍手で湧き立ちました。

わたしは、遂にそのまま劇場を飛び出したものの、又々、不思議な正体のない出来事を一つ重荷のように負った訳で御座いました。この重荷の何かは知らねど、その異常なるものの値打は確かに火の玉の勢いでわたしの脳裡へやきつけられたのです。

後日、風呂屋から洩れ出た話で、役者の中でも最後に入った女形一人で、広い浴場が真白い水で溢れたということですが、それを聞いたわたしは、又もやあの光景をマザマザと想いかえされ、一人で苦しまねばなりませんでした。

× × × × ×  
中学を卒業する頃に至るまでに、いろいろと興行はかかりました。勿論映画も相当な進

歩をとげ、発声方式が田舎の小屋に出廻りはじめ、洋画はスーパースター（タイトルが横に出るもの）されて登場しましたが、もはや満州の戦雲も只ならず、わたしの苦しみ悩む心理の一方では、中学校での軍事教練で少しづつ健康なものが甦りかけて来るので御座いました。

それでも女装した青年が踊る盆踊りを見たリ、芝居を追って隣村まで期待にふるえつつ夜道を出かけたりもしていますのに、こうした事はかえって、わたしの美しい女形へのイメージをぶち壊されるような女装を見る羽目になるのです。やはり女になる以上は、たとえ男とは判っても、総べてが女へ入魂する条件が揃わねば駄目だ。それに何よりも美しくなければ……と、その都度に少年らしい女形の定理を噛みしめて、わたしは自分の理性の正しいことに、変な慰さめを持ち続けたよう御座いました。

一、二度はあの女形の姿の思い出にひかれて、昼の間を人目を避けては休館中の楽屋へ（床下の階段はわたしにとって都合がよかった）入りこみ、室中にしみこんだ脂粉の匂いに溺れたような姿で、座って見た事があります。

わたしの悶々とした心理の中に、理想的な女形を求める欲望が育って来たのは、少年期から青年期への脱皮を意味するのかしらと迷っている頃でした。そんな頃、その欲望が最高に満たされる機会が訪れて参りました。

「吉崎寺の嫁おどし、肉付きの面の由来」という、伝説にしても余りに有名な物語り。福井県の永平寺附近にある「吉崎ご坊」に実在する因縁劇の一座の来演で御座います。

御承知の方も多いと思いますが「新嫁の仏信心と息子への嫉妬心から、夜道で嫁の一人歩きを鬼面で驚かし、仏罰でこの面が老婆の顔に貼りついて取れず、村中が大騒ぎする。嫁女と××上人の念仏で老婆の顔の血肉を附したまま鬼面がおちる……」というものでして、同寺で今日に至る唯一の宝物とする面の由来劇。この二幕目の嫁いびり場面が、わたしの心の隅に望んでいた舞台に於ける女形責めに類するものであったし、あとで申上げる、幕あいの奈落での夫婦喧嘩も、当然その女形責めの部にはいるもので御座いました。

旅まわりでは、土地の人気とりの手段で舞台の筋書きの順序をかえたり、

つけたしたりすることがよくあって、役者衆も慣れていて上手に対応するものなのです。から、当時この地は工事続きで土工さんも多いのを狙った、一つの舞台構成のものだったかも知れませんが……

前記の例で悪いくせが出て、そっと楽屋のぞきもやりましたが、これからの幕あけの準備で、それこそ、わたしのぞきこむ事も邪魔にならぬかと気をつかう位いの忙がしさでしたが、一応の舞台まわりも済んだと見え、殆んど扮装の出来上った各々の役者たちが鏡台の前にくつろいでいる処で、別に前回の楽



屋のぞきに見たような刺激的な光景ではありません。二、三の村娘になる人たちはいましたが、ありふれた顔だちでさっぱり興味が湧きません。わたしの胸の中で求めているのは一目で女形をこえた限界に住みついた女形の姿でしたし、その村娘役者の一人は女優さんとも思われるもので何の意識も起りません。女優が女の役をやる事は、当然の話なんですものね。

とに角、いささか気をおとして客席へ戻ろうとしました時、奥まった楽屋便所の戸があらいて出て来たのが主役の女形さんでした。女形さんとはすぐには解らない位いなんです、濃い紅の唇に塵紙の束をくわえていたのですぐ想像したんです。真に女になり切った女形さんほど、新、旧派を問わず殊さらに塵紙などを口ではさんだりします。

わたしの直感はやはり間違いない、それがこの一座の花形女形なのでした。奥まったところに座長席があり、それから一、二の入口より座したその女形が「ゾラ」を一寸ずらしてかむり直すとき、男の襟が見えたのです。

と待っていたように、幹部らしい人が



便所へ入りましたが、すぐ顔を出して「師匠もつと気をつけてくれなきゃあ。こんなに汚しちゃ皆が困らあね」と言いました。するとそれに向って、その女形がびっくりする程の蓮っぱな口調で「あたしじゃないのよ。第一あたしが汚す訳ないわ。あたし女よ、しっかりしてよね」と答えたものです。どつと楽屋が笑い声になったのに、わたしは笑うどころか、考えてもいなかった世界の深さを知って驚いてしまったのです。

そうして幕が始まりました。第一幕目であるの久しぶりに見る美しい入魂の演技。その若々しい素振り、濃い化粧の素晴らしい出来栄え!! それに少しかすれた女の声の妖しさ。わたしはまたもや舞台へ引きこまれました。

美しい嫁の立居振舞い。姑の目をぬすむ仏信心の控え目な女らしさ。夫と姑の間にあつてオロオロと身をもむ風情の豊かさ。こうして二幕目に姑が嫁のセツカンになります。

「あれ：おっ母さん、許して。あー、かんにん!!」と必死に声をあげて身を反す女形の襟がくずれ、仰向けになると肩までのぞく。真白い化粧。腕をもがくと脇までも刷いた濃化粧。これを舞台中央にひき倒し細紐で二重三重に手早く捲いて、真白い腕をうしろへ引

きしばって締める。裾を崩して身をもむのへ老婆は持った煙管をピシッと打ちおろす。「あれえー」と声をしばらく女形の油墨で書いた襟足へも遠慮のない力で叩きつけ、はては吸口で突きたてる……それはもう演技というより、責めて楽しむ、責められて嬉しいという二人の姿でもあったようです。

この女形が、その肌の見ゆる限りの白き粧いが、続けて打たれる煙管にゆらりゆらりと波をうって、横たおしに悶える演技は、わたしの魂を完全に擱んでいました。

ここへ慌てて婿どのの登場となって事は終り、一応は暗転となります。割幕の落ちた舞台から駆け出て、花道に崩れ伏す嫁女の演技では、例によって花道にしがみついていたわたしは目の真上あたりに、しゃくりあげながらようやく声を細め、舞台の灯りへ顔をむけた凄艶な女形の横顔を近々と見、濃いその化粧の眼ぱりと紅墨の眼に本当の涙を見たものです。それがキラと光って頬まで伝う表情の媚びた有様は、果してわたしに凄まじく満足感を与えました。わたしは暗転の間に女形と相手役が引きこんだ花道の出口へ、追いかけるように飛びこみました。女形の衣裳替えを見る積りで御座いました。ここから楽屋へ出

るには奈落を通らねばなりません。もう誰もいないとばかり思ってたソツと曲り角に来ますと、さっきの女形の絶え絶えの咽鳴が聞えてきたのです。

ドキッとして覗きますと、どうで御座いましょうか、五燭電球が灯ったせまい板すこの通路にあの女形が倒され、乱れたヅラを横に転がして頭だけ男になった女姿が、相手役になっていた役者にドンドン足蹴にされているのでした。身を転がすたびに乱れた着物はますます乱れて、暗がりに息をこらしているわたしの目の前には、その女形の真の姿もだえが展開されていたので御座います。

男の足蹴が本気である事は申すまでもなく何やら叱っては激しく蹴りたてていました。女形はその度に「ヒーヒー」と悲しげな泣き声を挙げて転げ廻るです。勿論、わたしには何が原因だかわからう筈はありませんでしたが、恐ろしい男の見幕にドキドキしながらもその女形の、こんな場合にでも女の仕草で悶えているさまに、不思議な想いと強く魅せられる奇妙な憧憬を覚えて、身じろぎもしないで凝視し続けたもので御座いました。

× × × × ×

わたしの説明し難い、女形への憧れは、や

が隣村にかかった一座を見て決定的となりました。究極の美をもった女形を発見したのです。その一行が「錦糸一座」でわたしの発見したのが「美也師匠」で御座いました。座長はもとは一流の舞台人であり、美也師匠は男役を一度もやらず、持ち役の大半が芸妓風のもの。わたしの見とれた舞台も「湯島の白梅」のお薦でした。

女形とはそうしたものと信じこんでいたわたしの目に、女形の美と優しさと品位で、満員の客を心から酔わせ、泣かせる本当の新派俳優というものの姿が師匠とするには充分すぎると思つたのは当然といえましょう。わたしの本心ではやはり倒錯に酔う事が女への芸域とする考えを嫌っていたのを知りました。こうした美也師匠に、いつか一度は女形としての倒錯に狂う事が起るとしても、それはわたしが見たような舞台でのものではないであろうと確信出来たので御座います。それ程に同じような濃化粧の中に生きて女になり終せながら、女には恐らくは描き出せない情感が雰囲気となつて、わたしの心を澄ませて呉れました。

此の日の数幕は、一座が本当に旅まわりの悲哀も喜びも共に分かち合う様な、息の揃った

役者衆である事をも知らせてくれたのです。本当の芸が見せる仇っぱさも、鉄火な紅灯の巷に生きる女の意地もしみじみと此の美也師匠の舞台からにじみ出て来るのです。立つても伏してもそれは既に女のその姿であり、悲恋の哀れに溶けこんだ白い背へ、「ヅラ」の襟たばの裏を白くすらせて肩をゆるする肢体にも、女の魂があるように客席を共に酔わせてしまうので御座います。

原作は既に読んでいたので、その文字がそのまま舞台に写しだされたほどにまで見とれてしまったわたしで御座いますが、終演まで呆然として、打ち出された時、その入口に貼られたポスターに美也師匠の写真があったので、夢中で、そつとむしりえぐって持ち帰りました。

あああれが本当なら、あの女形の芸の側でいつも見ていたい。そしてあんな風にいつかはわたしも。倒錯だけに酔うのが本当のものではないとは何という奥の深い女形の世界だろうか……迷い悩みが一晩中つづいて、この決心が遂に、翌日、わたしを宿に訪れさせてしまいました。宿の主人は不審そうな顔をしました。別は何とも言いませんでした。

舞台からはなれている美也師匠は、想つた

通りの男らしい人でした。わたしより、二つほど年上なのにその口調と落着きはもっと年上のようにも感じられます。舞台で練った人格とでもいうものでしょうか。習い性となつたような優しい物腰も見え、座長と共にわたしの大体の生い立ちや心境を微笑しながら聞き、ある時は座長と顔を見合せては似たような話だね……と言葉を交したりしていました。「あなたは役者になつて女形さんになりたいの？」と念を押された時には、本当は自信もないので迷いました。

学校の成績などいさめてくださった時などは、何となく兄のように身近かな温かみを感じましたし、この人が一たん舞台上に昇れば悲恋に泣き崩れて客席まで共に泣かせ、それで明治、大正を背景に生きる時代の女をも画き出す、凄麗な女形になりきるとは信じられぬほどで御座いました。わたしの望んで信じこんでいた女形のイメージも、この美也師匠からはおこらず、清々した気持ちで話合えるとはどうした事なのでしょう。

この人も若い昔の悩みはわたしと同じだったとは聞きましたものの、座長が美也師匠の顔を染めて押しとどめるのも構わず話し出した美也さんの青春の一駒は、又、大変なもの



だった様子で御座いました。踊りの名取りだったと言う母親の依頼で、当時の私よりもっと若い頃に此の一座へはいった美少年。最初の頃の師匠は早く一人前の女に生れかわりたがって、それこそする事、為す事が熱心な女の修業ぶり、座長もとうとう舞台で一役つけて見る気になって、一座で打合せて演しものに綾を加え、主役女形さんの（当時は別に女形さんがいた由）付け役にして使いはじめたのが、美也師匠売り出しの端緒になったらしいので御座いました。しかし意外な処で、危く舞台で穴をあけかけるほど演技以上にはげしい責めを求めたりして困らせた時代があったとも、座長は笑い乍ら話しました。特にはつきりとはかわりませんが、思い切った女の魂へふっきらせるために、楽屋で「舞台ならし」をしたという話は、わたしに全く新しい事柄のある予想をも抱かせたもので御座います。Ⅱ（後年、わたしがその舞台ならしを師匠姐さんに助けて貰って行って戴いたのでした）。それ以後美也師匠の芸風が変わり、一種の悟りが開かれたものようです。わたしの目標も、やはり最初はわたしのような悩みに苦しみぬいた由。この人達はきつと本当の女形を育てて下さる不思議な力を持っている……わたしは信じました。

その夕方、座長の手荷物を持たせて貰って列車にのりました。

もはや遠い昔の思い出になりましたが、一途に少年期の好奇心を追いかけてきて、吾が目で確かめた妖美の世界へ飛びこんでいったあの頃のわたしの心理。見たところは何事もなく、将来へ少なからぬ期待もされた筈の秀才神童が、突如、この村から消え失せた日は約十八年前、中学校卒業直後で御座いますから十七、八才の時の事ですね。

入団して丸々二年ほどの旅まわりの経験の間には、さすがに想像していたよりも多くの苦勞も御座いましたし、思い出しても身のすくむような想いを覚えた日も御座います。旅まわりの悲哀というものに心から泣いた夜の事。美也師匠と共に喜びを分けあった幾つかの出来事。あんなにも心の通い合って、その割りに恵まれなかった一座もないでしょうにそれは本当に楽しい事のほうが多かった一座でも御座いました。

入隊して、異った幾つかの男の世界での秘めごととも見聞きしたのに、其の頃にはもう阪東秀美は女形への悟りじみた神経の持ち主となっていて、師匠ゆずりの舞台と、それ以外での気持ちの割り切り方が出来てしまっていて、わたし自身には余り変わった事は起りませんでした。

不思議なもので、軍隊当時は逆に女形じみた者へのある種の誘惑を覚える立場にさえあったように御座います。これは、白粉（それ

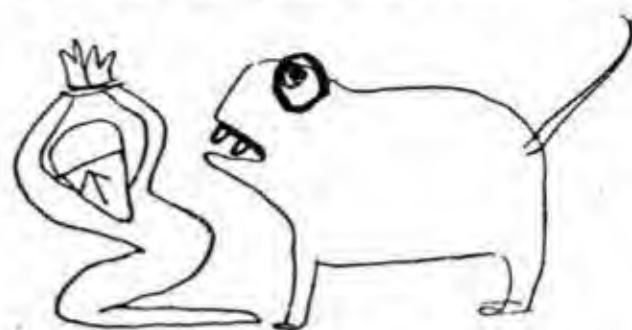
も濃い化粧の妖美）からほど遠い、規律の中の暮しではやはり男でいられる師匠の精神教育に、充分の感化を得ていたものの御かげでは御座いますまいか。

終戦直後、又もや不思議な倒錯の時代に周囲が移りつつある時、わたしは又してもあの少年時代と似た気持ちが起り始めたように思われます。それ以来、濃い化粧の魅力に酔ってみる事も往々に御座いましたが、いかにせん軍隊からあとの秀美は、もとの様な身も心も女の中へとけこめる体つきでなくなったのは悲しう御座います。それでいて、折にふれて真白い脂粉を見ると、強い女への情感が湧くのは、もはや、少年時代にしみこんだ脂粉の膚に自分から希う宿命からは脱けだせなかったという事で御座いましょうか。

加虐、自虐に没入する女形の限界をこえた女形が今でもいるものならば、それはやはり当時のわたしの憧れと同じように、今も強い秀美への誘惑を引きおこすに違いない御座います。わたしは恐らく生涯、この異常な世界に住む人々をいとおしく思い、はげまして行かねばならない運命かもしれませんね。

男が女になる。殆んど半生を狂ったまま過ごした秀美が、今さらこんな青春記を綴るのは、やはり、あの匂う魔ものからはなれられないからでも御座いましょうか。

（掲載写真は筆者の近影）



## 下着マニヤの夢

## 洗濯夫の幻想

秋元悦男

「そんなに女の下着が好きなら、一生、それで苦しめてあげるわ」

女子独身者アパートの管理人は、そういうと、僕をひき立てるようにして地下室の洗場へつれてゆきました。乾燥器のムツとする熱気と一しよに、床一面にひろがっているシュミーズやパンティから発する女の汚れもののすえた臭いが、ムカムカと胸をつきました。

女主人は洗濯機にしがみついている骨のようにやせた少女にこう言いました。

「キミ子、お前はもうその仕事をしなくて

もいいよ、今度は上の仕事をしなさい。今日

からはここに居る坊やにさせるからね。こい

つ、屋上の物干台からあたしのパンツをぬす

もうとした奴さ。さあ坊や、お望みの品よ。

これから死ぬまで、これを奇麗にするのよ。

シミなんか、すっかり奇麗に洗っとかないと

ひどいよ。破いたりよごしたりすると、お仕

置するよ。それから、ここへは女の子の汚れ

ものが、日に五、六百枚はくるのだから、毎

日キッチンと洗って乾してアイロンをあてて積

み重ねておくのよ。お望みの通りに、これか

ら、お前の好きな女の下着と暮せるのだから

私の言いつけ通りにするのよ。いいかい？  
わかったわね」

僕は山のように積まれた女の汚れものの山を前にして呆然としていました。パンティを盗もうとして女主人につかまり、散々油をしばらくされた挙句、自分の性情をいちいち告白させられ、そしてしまいは………。僕は自分のおちいった境遇を一体どう考えていいのか、迷いました。

「さあ、何をぼんやりしているさ、早く仕事にかかりなさい。あ、ちょっと待って、汚い服を着てるのね、そんな汚いなりをしていては不潔だから裸におなり。早く。どうせ、ここは暑いし、それに死ぬまでここでこき使ってやるのだから、別に服なんか着ていなくてもいいわけね」

僕はハッと事態の悪いことに気づき、思い直して、ここを逃げ出そうとしました。「ゆるしてくれ。出して、出してくれ。ゆるして、ああっ」

けれども僕は、大岩のように肥った女主人におさえつけられて、傍の柱にしばらくつけられてしまいました。

「何をあばれるのさ。お前の好きなように



してやるというのにさ、一体何が不足なんだい？」

「出してくれ。ゆるして」

僕は大声を出して許しを乞いました。

「まあ、大きな声。うるさいわね。今更何さ。ちょっと、静かにしないかい。おキミ、手拭およこし」

忽ち僕の口の中には黒い布のかたまりがおし込まれ、その上から手拭でしっかり猿ぐつわがかまされてしまいました。

パンティ泥を見つかったとき、許して貰いたいばかりに、自分の性情を正直に告白したのが今更悔まれてなりません。しかし、このように洗濯場の柱にしばりつけられている方が、警察へつき出されて恥をかきよりまだましかも知れません。

しばらくすると、口の中がむんむんムレて、独得の匂いで一杯になっているのに気づきました。

どこかでおぼえのある匂いです。僕は思わず頭がくらくらとして、しばらくたまま気が遠くなってゆきました。

どのくらい時間が経ったのか、いや、少しも時間が経っていないのか、自分ではわ

かりませんでした。ひきつるようなわき腹の痛みに気がつきました。吊り下げられているのです。女主人は僕の前に仁王立ちになって、缺で僕の着ているものをズタズタに切りさいていました。

「あッ」

僕は自分の下着が見えはじめると、無意識のうちに身をよじりました。女主人もちょっと驚いたようでした。

「フーン、成程ねえ。余っ程好きと見えるわね。全くお前のお望みどりの仕事じゃないか。うんと精を出すのね、そうしたら可愛いがつてやるわ」

といいながら、僕のシュミーズのストラップを外しました。

「それにしても、中々せいたくなものを着ているわね。こいつは記念にとっておくわ、話の種になるからね」

僕はイヤイヤをしましたが、女主人は非情です。すそからまくりあげられると、コルセットをつけた腰がみえはじめブラジャーがあらわになりました。

「へえ、コルセットなんて、この暑いのにねえ。男のたしなみかね、誰かに見せてやりた

いところだわ」

ストッキングを外すために、女主人の指先が伸びて来ます。

「そんなに女の下着が好きなら、一そのこと女になったら、どうなんだい。そうしたら、堂々と女のもの着れるわよ。そうだ、いいことがある。ここんところなんか、もう少し肉づきを豊かにすることができのさ。こいつあ、面白い実験だわ」

女主人の指先がお尻のところをコルセットの上から、パンパンとたたきました。ヒップにいたパッドはもう汗がしみてジクジクするようです。

「コルセットの下に女もののパンツなんかはいてさ、用便のときはどうするんだい。」僕はわきの下を汗がダラダラ流れはじめました。さつきいた女はさげすむように、あわれむように僕の哀れな姿を息を殺してじっと見ています。

僕はもう、どうにも我慢のできないほどの激しい屈辱感をこらえることだけがせい一杯で、もう他のことは何も考えることはできませんでした。



△告白▽

# バックナンバー

川端多奈子

自動車ショーが開かれている日曜でした。

私は彼を誘って久しぶりの日曜日を雑踏の中で過そうと思ったのです。若い二人が自動車ショーなんか見たって、しゃれではなくショーがないのですが、暗示に弱い私が、車の運転手になってみたらと或る人にそのかかれ、わざわざ浪花自動車学園というところへ学則を買いに行ったりしたことある私なのです。勿論、月謝が高いのとなんだが大変むつかしうなので、運転手になりたいなんて夢は一ぺんにしぼんでしまいました。一度

はそんな夢を抱いた私でした。そんなわけであるんな自動車を身近かく見てみたいという気持と、それに、もう一つ、今日こそ彼の心をためしてみたいという、算段があったのです。彼とは、すでに半年ぐらいの交際をしています。私にはなんだか彼が好きになれな

いでいました。私より四つ年上で小さな染工所に勤めている平凡な工員。私にとっては、いつも指を染料で青や赤に染めている真面目そうな彼にひかれるものは何一つとしてありませんでした

が、唯一つ、彼が正式に結婚しようといっているのが、ここらあたりで身を固めたいと思っている私には魅力といってもよいのでした。逢うたびに「結婚しよう」と囁やく彼に、私は、いつしか、彼と結婚したら？と考えるようになっていました。

一目見たときから私が好きだという彼も外見上の私を見ているだけで、複雑な私の心の中なんか、何に一つ知ってはいないのです。話をしていると、三人兄弟の末っ子だという彼の甘えっ子ぶりがよくあらわれていて、映



画とかプロ野球のこと以外は、なんにも知らないウブさなのです。私より年は上でも、逆に弟と話しているような気がするときがある位です。だから、彼の私を見る目も、自分と同じか、或はそれ以下ぐらいにしか思っていないのでしょうか。

私が友達と二人で借りているアパートを訪ねてきた彼と連れ立って市電の停留所まで歩いてゆきました。そこで電車に乗ってしまったら何事もなかったのですが、中々電車が来ないので次の停留所まで歩いてゆくことにしました。次の停留所は交叉点になっていて西から東からも北向きの電車が来るのです。停留所が目の前という所で、一軒の大きな古本屋が目につきました。急ぐこともないので、私はふと立ち止まって店先に積まれた古雑誌の山に手をやりました。彼もつられて店内へ入って、棚の単行本を見えています。

平凡、明星、講談倶楽部、月おくれの雑誌が店の中央の台の上に並んでいます。その奥に、貴重な品物でも納めるように奇譚クラブのバックナンバーが十数冊置かれてあるので、思わず手が伸びて中の一冊を手にとり、頁をくついている中に自分のヌードの緊縛ポーズがグラビアになっているのが目に入りまし

た。今まで、何度となく見た写真でありながら、このような新鮮な刺激で目の中に飛び込んできたのは初めてでした。

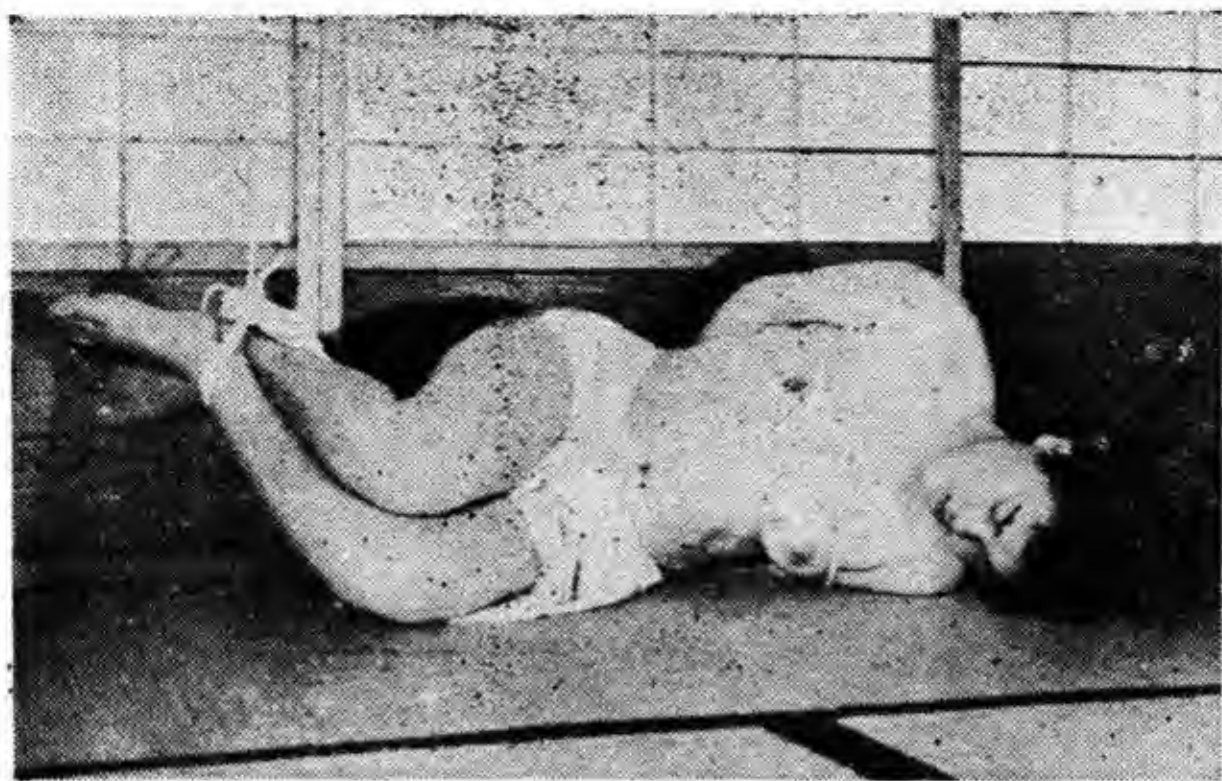
目の前で、パチパチと火花が散ったように思うと、ほうと霞んで恍惚とした一瞬の夢のような時間でした。只、雑誌を持った手だけが、わななくように慄えているのが、自分でも不思議なくらいでした。以前、印画紙に焼付けた自分の緊縛写真のかずかずをハンドバッグに何枚も忍ばせていたこともありましたが、分譲写真の百態百枚の小型写真を特に頼んで貰ったこともあります。その頃は、これまで衝動を受けたことはなかったのに、今日は一体どうしたっていうのでしょうか。

今まで何度となく見ている自分の縛られた写真、それも雑誌の口絵に載っているのを見て、このようにまで心の動揺を受けるといふのは、一体どうしたっていうのでしょうか。私は自分の心を静めるのに、しばらく、じっとそのままにしなければなりません。今、下手に動いたりすると、目まいがして、ぱったりとその場に倒れてしまうかもしれません。生理的に云えば強いショックによる一時的な軽い脳貧血の状態だったのでしょう。「どうしたの？」

ほんと肩を叩かれて、私は夢幻の世界から現実へひき戻されました。私は古本屋の店先で奇譚クラブの旧号を手にしたまま、じっと立ちつくしていたのです。彼は不審に思ったのでしょう、私の手にした雑誌をとろうとしました。その時の私の動作は、自分でも判断がつかない位ですから、彼には一層疑惑の念を抱かせたのも無理はありません。

私はいきなり彼の手を払いのけるなり、す早く雑誌を積まれた本の下の方へ押し込み、彼を押し出すようにして外へ出たのです。外は晴れた空からはまぶしい陽が、隣りのカメラ店のウィンドに映えていました。びっくりしたような顔付の彼をせきたてて、車中の人となりました。朝の出かけには、自分から自動車ショーを見にゆこうと言いついて、快活にふるまっていた私でしたが、あの古本屋の店頭をのぞいてからというもの、人が変わったように無口で不機嫌になっていました。

結論から先に言いますと、その日の自動車ショーの見学は、一週間も前から楽しみにしていたにも拘らず、二人は口喧嘩と言い争いの末、雑踏にもまれて別れ別れとなり、遂に一緒に逢うことなしに、別々に家へ帰る始末となっていました。いつものくせですが



そんなとき、自分から事情を説明したり詫びを言ったりすることの出来ない私ですから、彼には、大きな疑惑を持たせたまま別れてしまったのでした。

当然のことながら、私さえイエスと返事す

れば結婚しようと思え決心していた彼のこと、ですから、あの古本屋へ再び訪ねて行って、私のかくされた秘密をすべて探ってきたことでしょう。どうせ、わかることなら、何故あの時、あんな変な態度をとらずにはつきりしなかったのだろう。それが彼を苦しめない一番よい方法だったのに。いや、第一、あんな古本屋なんかへ行かなかったら、よかったのに。そんな気持を持ちながらも、本当の私というものがわかって愛想をつかすのなら、それでいいじゃないか。という捨鉢な気持で、殊更、彼のことは忘れようと努めました。

三日経ち、四日経っても、彼からは何の連絡もありませんでした。何の末練もない彼とは思いつながら、何の反応もないとなると、何か気の抜けたようで、荒縄でひしひしと括りあげられてみたい、強い刺戟を待つ心がしきりに起ってくるのでした。

あの、自分のヌード緊縛写真を見たときの痺れるような恍惚境、あんな境地が、ただあの雑誌の口絵を見ただけで味わえるものならもう一度眺めてみたいという誘惑にかられるのでした。いや、あれは古本屋の店頭という特殊な雰囲気だったからだろうか。たしかに自分の部屋でゆっくり手にとって眺めるとい

うのとはスリルの点で隔段の差があります。古本屋の主人も、この目の前の娘が、この雑誌の口絵に裸にむかれて縛られている主人公だとは夢にも思わないでしょう。

私はサンデルの買物姿で近くの古本屋めぐりをはじめました。沢山の雑誌の中で奇譚クラブを探し出しただけで、胸がドキリとしました。妖しく手がふるえました。しかし、あの彼と一緒に日曜日のような強い衝動は感じられませんでした。ああ、やはり、彼がいなからなんでしょうか。若し、私の正体を川端多奈子と知っての彼であつたら、どうだろうか。

仮りに彼が私の部屋を訪ねて、部屋中を探しまわったとしたら「川端多奈子」という名刺の一枚でも出てくるかもしれない。破りすてたつもりでいても、読者から貰った手紙の一通でも残っているかもしれない。

そんな私の危惧と期待をよそに、それから一週間経っても十日経っても、訪ねてくることは愚か、彼からは連絡さえありませんでした。それにも拘らず、私の古本屋漁りは続いていました。あの時のあの全身がしびれるような恍惚感を味わいたいために、午前中のひっそりとした店の前に立つ私でした。



しかし、どうしたっていうのでしよう、あの時のスリルや恍惚感は二度と起ってはこないのです。いくら古本屋の前に立ってバックナンバーを繙いてみても駄目でした。私は自分のこの奇妙な性癖に対して半ばあきれ、半ばあきらめて、古本屋通いも遠のいた頃、突然彼が私の部屋にあらわれたのです。

会社の帰りなんでしょうか、疲れきったやつれた様子で、部屋の扉を開けた彼を見たとき、私はさすがになつかしき胸が一ぱいになる思いでしたが、いつものくせで私はそれを露骨に口に出したり動作にあらわしたり出来ませんでした。

「あら利夫さん。しばらくね。一体何の用なの？ 今頃」

と冷やかに言ったのです。彼にはそれが極めて冷胆に聞えたことでしょう。しかし、私としては、「馬鹿野郎、それが久しぶりにやってきた俺に対する言葉か！」とどなりつけて頬つべたの一つもぶん殴ってほしかったのです。そして、あの口絵に載っているように縄でぐるぐる巻きに縛られたとしたら……。私はきつと、しおらしい娘にかえっていたことでしょう。

しかし、彼の口から出た言葉は、私にとっ

ては意外なものでした。

「この間は済まなかった。僕もあれからいろいろ考えてみたんだが、やはり君とは離れることは出来ん。どうか頼むから、今まで通りつきあってくれ、頼むよ」

彼は蒼白い顔に真剣な表情をみなぎらせていました。そんな彼の態度を見ると、むらむらと持前の天邪鬼が頭をもたげてきます。

「私、なにも貴方とつき合わないって云わないわ。只、貴方が今まで来なかっただけじゃないの。急に頼むだなんておかしいわ」

あんなに彼の訪問を心待ちにしていた私。

そして、今の今まで、突然訪ねてきた彼をなつかしく思った私。それなのに言葉はそんな心とは裏腹に冷たく空廻りするのです。彼はそんな私の態度を見て、まだこの前のことを怒っているのだと思ったのでしょうか。いろいろと弁解したり、しました。しかし、その言葉の端々には、やがて自分の妻する女の過去に対する疑惑が、遠慮し勝ちにちらちらとあらわれるのです。

自分の愛人が、自分と知り合う前に縛りのモデルをしていた、ということは純心な彼にとっては大きなショックだったでしょう。何日も何日も、きつと悩みに悩んだことではし

う。彼のやつれた顔つきからもそれは容易に判断されました。それでいて大きな声を立てて私をなじらない彼に、私は一種の歯がゆさのようなものを感じていました。

その日の二人は、とりたてて口争いのようなことはしませんでした。なんとなく奥歯に物はさまったような気まずい別れ方をしました。彼を送り帰したあとの私は、もう何をする気力もなく、只ぼんやりと机に向って新聞の活字に見るともなしに視線をやっていました。焦点が合わない活字がぼうとくすみ、瞬きをする、字ははっきりとします。でも、見ようという気力さえありません。

やはり近眼のせいかな、と思い洋服ダンスの抽出から眼鏡をとり出してきました。二年前何の気なしに目をはかってもらったところ両眼とも〇・六だというので無理矢理に買わされた眼鏡なのです。でも平常は掛けるといふことはなく、時折映画を見るときなど、ハンドバッグに入れていった位のものです。

眼鏡をかけた顔を鏡台にうつしてみて、明日から眼鏡をかけてみようかな、とそんな気まぐれなことを思いついてみるのです。そうしたら、心気一転して元気に暮してゆけるかもしれない。そんな気持ち、もう一つは

何か強い刺激が自分の身体を粉々にしてしまふようなことが起らないかな、と思ったりするのでした。そして、急に、例の口絵がむしように見たくなくなってたまりませんでした。

どこの本屋のどこには何月号に何月号が積まれていて、それは上から何番目だ。あそこ本屋は奥の棚の前に十冊束に括ってあって

一年分十二冊の中、七月号と十月号が欠号になつてゐる、などということが、鮮やかに私の頭の中に映像としてあらわれてきます。

私は自分の部屋には一冊のバックナンバーも持っておりません。でも、見たいときにはいつでも、古本屋の店頭でそれらを手にすることが出来るのです。そんなことを考えると

いつも私の口はからからに乾き、喘ぐように呼吸が荒くなつてきます。もうあの頃から数年も経っているのに、私の心を捉らえて放さない縄の魅力、私は夢遊病者のように、フラフラとすでにネオンのついた街の中へさまよい歩いてゆくのでした。

## △短 信△ 吊 責 め へ の 誘 い

中 田 明

KKのグラビア頁に強烈な吊責めがあると身振いする程嬉しくなる、と云われる津利さん。

私からあなたに吊責めのプランのプレゼントを差しあげましよう。

は思いません。

然し読者通信の文面からは、あなたが異性であるのか同性であるのか、判断がつかねます私としては女性であつて欲しいと期待し、何となく断定してはお先き走り気味ですが、的が外れたからと云って吊責めプランのプレゼントを撤回しようと

さて本年度既刊五冊の奇ク誌上で吊責めが掲載されたのは、新年

号の五枚組写真、梨若悠紀子さんの「逆手足吊りの変化」三月号で絹川文代さんのフォト二葉「手吊りのポーズ」と梨花さんの「吊りへの移行」三葉。四月号では同じく梨花さんの「後手吊りの変化」「宙にうかぶ美体」というそれぞれ妙味あふれたグラビア頁の数々でしたが、私の最も好んでピンアップしたのは、新年号所載の「逆手足吊りの変化」中、最後の「吊

り上った瞬間」と三月号所載の「

吊りへの移行」中の見開き左頁の分が好きです。つまり私もただ芋虫のように転がしておく緊縛ポーズより、吊られる事によって完全束縛を意味し、逃亡不可能でしかも屈辱感増倍の吊責めが最も興味をそそられるものである訳です。

あなたにしても、昨年六月号所載の、梨花さんのポーズによる「猪吊り」のアイデアを応用した責めや、プレイを空想されるだけでも興味湧くに違いありません。私はあなたを郊外へ誘って本格

的な吊責めを加え、そして、その瞬間々々を余さずカメラにお

さめ、記録と追想の鑑賞に役立つようなフォトやスライドの作製をしたいと思うのです。快い興奮と疲労が求める休息に立寄る旅館の一室では、ブラッシーや絵筆を責具としてソフトなタッチでのプレイを、あなたがあなたの求める被虐に感泣し、最大の欲びを知る迄、悦虐に時を過すことでしよう。そして悩みを消しあい、再び静かな社会生活の秩序の中に還って行けるなら、これに越した喜びはありません。





## S M 対 話

## 社長と女秘書

中 野 三 郎

◇

社長「節子さん、重い。うう苦し  
い、降りて……。」

女秘書「ダメ、私、今日という今  
日は許さないから。」

社長「苦しい……。」

女秘書「起き上れるなら起き上っ  
てごらん。」

社長「ううう、胸の骨が折れそう  
だ……。」

女秘書「十八貫の重みをたんと味  
わったらいいわ。どう？降参する  
の？」

社長「降参」

女秘書「無条件降参するか？」

社長「する」

女秘書「私の命令に一切服従する  
か？」

社長「服従する」

女秘書「今すぐ五百万くれるか」

社長「五百万？」

女秘書「残りの株全部売れば丁度  
五百万位になるでしょう。どうな  
の。くれるの、くれないの。」

社長「胸の骨が折れてしまう。」

女秘書「私、五百万くれないうち  
は絶対に降りないわよ。胸の骨が  
折れたって私の知ったことじやな  
いわ、どれ煙草を一服。」

社長「おいおい許してくれ、この

ままじや死んでしまう。」

女秘書「勝手に死んだらいいわ」

社長「出す、出すから降りてくれ  
よ、株は全部売るから。」

女秘書「そう、それじや許してあ  
げる。」

◇

馬吉「君はよくも僕を欺したな」

節子「うふふ、社長をクビになっ  
たからって、そうおこる事もない  
でしょう。」

馬吉「あの二人が仲が悪いだなん  
て、真赤な嘘をついて、よくも僕  
に株を売らせたな」

節子「アッハッハハ、今ごろにな  
って気がついたか、このウスノロ  
野郎。本当の事教えてやろうか。」

野郎。本当の事教えてやろうか。」

二人はもう親戚同然さ。専務さん

いや今はもう社長さんね。社長さ

んの娘が近く大株主の山本さんの

息子と結婚するの。うふふ」

馬吉「君は、奴らとグルだったの  
か？」

節子「アッハッハ、それからもう  
一つ。私と専務さん、いや社長さ

んの息子とは前から婚約してい  
て、来月結婚するの。分った？  
うふふふ。」

馬吉「君はよくも僕を……。」

節子「欺じたっていうの。何を言  
うのよ、私の足の裏を舐めたり馬

になったりしておきながら。ほら  
どうした。どうせ私には敵いっこ  
ないのよ。ハハハハ」

馬吉「……。」

節子「もうお前には用はないけど  
お別れの印に顔にキズをつけてや  
ろう。上を向いてじっとしてな。

ハイヒールの踵で力一杯ふんづけ  
てやるから。それ」

馬吉「ギャッ」

(了)

# 法 谷 四 郎 論

中 康 弘 通

哲学者西田幾多郎氏が文豪谷崎潤一郎氏の作品を評して、人生如何に生くべきかが書けていない、と云われたのは有名な話である。

小説が、必ず人生如何に生くべきかを書かねばならぬかどうかは一応措くとして、ストーリーを展開するに当り、読者が感じる、何故? の疑問が解決されて居らねばならぬことは、云うまでもない。

その意味で法谷四郎氏が昭和二十九年八月号の本誌に発表された『切腹曼陀羅図絵』はいわゆる小説の範疇に入るかどうか、厳密な意味では判定しがたいものがある。

そうした否定的な要素を考慮に入れても、この作品が持つニュアンスは、一種、蒼古と

した幻想の世界に引き入れられた読者の眼前に、万華鏡のように繰り広げられる哀婉悲傷の物語として、そう、小説というよりも物語として、その存在価値を保有しているように見える。

ストーリーは、ベッドに端座した少女が、涙を払って思い切りよく双肌を脱ぎ、まさに切腹しようとするところから始まる。彼女は主である少年に対する申訳に切腹をするのである。

夕刻彼女が、少年の愛玩する鴉を死なせたとき、少年は鴉の腹を割いて示し、お前もこの様にして腹を切ったら許してやる、と厳しく叱責した。彼女は即座に、切腹しますと応

えて自室に引き退ったのである。

二十才にも満たぬ少女が「白桃のようにピチッと張り切った」腹に力一杯、短刀を突き立て、「おぼっちゃま、許して」という悲痛な呻き声を立てたとき、「腹を切っている少女よりも苦しそうに喘ぎ」つつ窓外から「切れ長の瞳で」少女の切腹を見ていた少年は、少女の部屋に走り入って彼女の手を制めた。はいや、妙子は死ぬのVという少女の手を彼は必死に抑えたのであった。

少年が少女の切腹を制したのは、しかし、彼女の少年に対する愛を感じ、共に生きようとするためのものではないことが、やがて判る。少年は畢生の事業でもあるかのように



一帖の絵草紙を書き続けていた。

それは、鳥の子和紙を厚く綴じた第一頁に切腹曼陀羅図絵と記された和綴の書物で、挿絵と文章により北の庄唐獅子城にまつわる伝説をまとめたものであった。蒼古な描画と擬古の文体とが相俟って、妖美悲傷の雰囲気を保つ絵草紙は、その書出しに、

昔、北の庄、唐獅子家の姫君、或る夜愛猫を殺せるかどを以て己が身を慕う美貌の小姓に罪をきせ、申訳は之にてせよと一振の短刀を与え給う。姫を生命にかけて慕う小姓は寧ろ欣然と自室に退って自ら腹を割く。其の時姫は、つと小姓の部屋に入り血まみれの手をとって罪を許し（下略）とあった。

少年は絵草紙を妙子に読ませた。姫が、「妾が止めなんだら、突立てた刀を其儘に右腹迄一文字に引き廻して仕舞った事であらう。」

と小姓を慰撫し、両端が刃になった奇妙な短刀で、小姓と向い合って腹を切り合う条りであった。

物語に描かれているのと同じような、奇妙な短刀を取り出した少年は、八私達の事を書いてあるようなVと感想を告げる少女と、絵

草紙の記述を真似てみるのだった。

やがて数日後、部屋に籠って傷の癒えるのを待つ間を、妙子は独り呟くのだった。

「おぼっちゃまは私を愛して下さる、死ね迄……。私はきつとおぼっちゃまと一緒に死んで行く事だろう。赫い焰がめらめらと燃えて居るあの世へ、私はおぼっちゃまと一緒に旅立って行くのだ。」

私が死ぬ時、私はおぼっちゃまをこんなに愛している私の心を、お腹を切ってみんな見て頂こう。（中略）

きつとおぼっちゃまは私の心を見て、そして死ぬ迄、私の事を愛して下さいさう。私は、きつと見事に切り割いて見せる？」

そう、悲痛な決心を少女が独語するとき、少年もまた独り呟いていた。みずから描く絵草紙『切腹曼陀羅図絵』の姫君と小姓を、自分と妙子になぞらえて、悼ましいみずからの死を決意しているのだ。

「妙子。本当なのだ、お前も私も時代を誤って生れて来て仕舞ったのは。」

私は昔の大名達の生活が羨しくて仕様がなないのだ。あの惨酷な首斬り、火攻め腹裂き、戦に破れ火に包まれ乍ら崩れて

行く落城の美しさ。其の断末魔の火焰の中で黒髪を乱し、白装束を朱に染めて自害するいたいけない女達。腹十文字に掻切って果てる若い城主と側近、或は又言葉一つで一片の義理で腹を切る侍達。私は之等の血生臭い陶酔の夢から脱れる事が出来ないのだ。

そしてお前も又不思議に其の通りの女なのだ。だから妙子、私達はこの物語りの儘に死んで行く事だろう。」

少年は、己れと妙子の生命をかけて、絵草紙の筆を執るのだった。幾日かの後、あらゆる切腹の絵図を挿んで、百枚ほどの絵草紙が今宵完成するという日が来た。

妙子は白絹の小袖に赤い扱帯を締め、薄化粧さえして部屋の中央、小高く白布で覆う畳の上に、花片の散る様に坐った。少年も水色の死装束で少女の傍に坐る。

少年の読み聞かす物語によれば、唐獅子城の姫と小姓は、その秘密の切腹遊戯が主君の耳に入り、小姓は打首、姫は謹慎の厳重が下った。然し姫は気丈にも、二人して腹切って果てたいと云う。折から外国の使節来り、この国の武士が腹切って死ぬとは嘘であろうと嘲るのに、主君は二人の切腹を示して応えよ

うとする。やがて当日が来る。

嗚呼、太平の世に稀有の腹切りを見んものと主君、奥方、使節、侍、腰元等、手を握り膝を押し進め綺羅星の如く立ち並び、固唾を飲んで見守る最中、大広間には何時しか雪洞がともされて周囲は昼を欺むくばかり。

白装束に身を固め前なる三方に乗せられたる腹切り刀を黙然と見守る兩人の姿は一對の芍薬の花よりも愛とし氣に、哀れ骨肉の情に堪えかねてか主君、奥方は思わずほっと袖をば濡らし、又美貌の小姓と姫とに愛恋の情を寄する者は思わず溜息をつくばかり。

然し乍ら覚悟の兩人、今はいささかも動ずる色も無く、漸て時移つてはと短刀を右手にヒタと持つ。小姓は顔をあげ、「恐れ乍ら、本日は夷人の前にて吾が国人の死様御覧に入れようとの御意。介錯人は御免こうむり、思うが儘にかき切つて、真の武士の腸を酒の肴に御覧にいれよう。唯、姫には女子の事故介錯人をお頼み申す」

と云えば、姫も又首を振って、「妾も介錯人は要らぬ。女子なれども武

士の娘、きつと、切つて見せまする。」

との覚悟の声に、満場居並ぶ人々も、さこそとばかりに汗を握り、じりじりと膝を押立て、雪洞の灯りも声無き声にとどと揺ぐばかりなり……

△その先は？と先を急ぐ妙子の顔を見つめた少年は、雪洞に火を入れ、金屏風を廻らし赤毛氈に鎧具足、仏像を並べた中に、白布を敷いた腹切り場所で、更に読み続けた。

——漸て白装束の衣を惜し氣も無く打ち払い、臍の下あたり迄双肌脱いだ兩人の姿の美しさ。とりわけうら若き姫君の天女の如き柔肌は漂々と霞む雪の如く柔らかに、むっちりとした下腹は吐く息吸う息毎に艶めかしく波打つて、固く突立つ乳房は苦痛を前にかすかに打震うとも思わぬ。

愛する者と共に腹切る喜び、愛する人の前に雪白の己が腹を裂いて見せる歓びしかも衆人環視の最中腸くり出して吾が国人の意気はこうよと見せる悲壮な幸福感到うたれて姫も小姓も目もくらむばかり、この歓喜の前に腹断ち切る苦痛もものかわ、あわれ見事にこの柔肌をかき被つてよと九寸五分を握りしむ……

ここまで読んで少年は妙子と共に双肌を脱ぎ、短刀を握らせた。

——漸く時移つてはと兩人は白布巻きつけた九寸五分を逆手にとって、降り積る雪よりも未だ清やげな左下腹にヒタと当つ。居並ぶ面々思わず手に汗握り、ハツと息を止める間、唇を切れるばかり噛みしめた姫の手は、こうよとばかり力を籠めて下腹深く突立てる——。

揺らぐ雪洞の光の蔭に、螢火の舞うが如く幽暗な室内には、妙子の氣の迷いかとも思えて「しみ入る様に衣ずれの音、腹を切る深い姫の呻めき声が聞え」るようであった。身を固くした少女の目に「白い衣を押下げて、腹切り刀を握りしめふくよかな下腹をギリギリと右へかき切つて行く姫の姿が」「はつきり見たと思う次の瞬間」、幻影は去り、腹切り刀を左腹部に当てがう少年の姿を少女は認めた。

「よく御覧、その姫君は、妙子、こうして切つたのだ」

云いつつ少年は両手を柄にかけ、深々と刃を突立てた。

「ムムッ、た、妙子、そし……そして小姓も……」

少年が二寸余り腹をかき切ったとき、少女



## (法谷四郎論)



武

も今はこれ迄と、腰のあたりを強く締め直し脱いだ衣を膝の下におり敷き、見苦しくない様に、と心にいい聞かせ、短刀を腹に当てがった。力一杯柄を押し、息を呑むと両手で柄の碎けるほど握りしめ、真一文字にかき切ってしまった。

少年は少女を抱き、彼女の投げ棄てた短刀で己が傷口を探り、臍下一寸のところを一文字にかき切って行った。やがて二人が息絶えても、二人の鮮血が『切腹曼陀羅図絵』の最後の頁を、一字ずつ、一行ずつ書進めて行くかのように彩どるのであった。

以上が『切腹曼陀羅図絵』の大意である。

氏はこののち三年近い沈黙を破って、昭和三十二年四月と七月の本誌に『続切腹曼陀羅図絵』を寄稿した。

それは、北の国、越前は唐獅子家に伝わる腹切丸なる銘刀をめぐる悲話の数々である。

唐獅子家の若君誕生を祝う守刀が、二人の刀工に命じられた。実秀と菊宗は実秀の弟子だったが破門されて今は師と争う仲である。

実秀の娘まみは従兄の小長慎之介と婚約の仲であったが、父の刀比べと同時に慎之介も隣国藤原家と弓の試合に赴くことになってい

る。慎之介は若し敗れたら、毎年の例と同様生きてはいまい、と思えば、まみは己が十八才の生命を縮めても慎之介に勝たせたい思いを念じていた。

思いがけず実秀は刀を打上げて病死し、その刀と菊宗の刀とは、優劣つきがたいとなった。斬れさえすれば、という菊宗の言を家老が信じたからである。

菊宗は、松の丸太を一刀で切って見せた。まみ殿は？ とせせら笑う菊宗の顔を見て、まみは咄嗟に決心した。次の間へ刀を提げて立った彼女は、襖の蔭で帯を解き、腰紐を下げると、冷たい切先を左の脇腹に当てて、足を踏みしめた。両手で刀身を抱え、深々と突立てると襖を開け放った。

驚く人々の眼の前へ、刀を腹に刺したまま彼女は進み出た。

広間中央に端座し、握り直した刀を両手で右へ廻した。身をよじって叩きつつ右まで掻切ると、誰か介錯を……という家老に、「しばらく。刀比の議は、切味は」と切れ切れに悲痛な声を立てるまみであった。

しかも、只然と息を呑む家老に、「お答えなければ今一度、この通り」とまみは腹十文字にかき切ってしまった。

このときから守り刀は腹切丸と名付けられ実秀の名譽とまみの壮烈な割腹が唐獅子家の語り草となったのである。

既に隣国に使いしていた慎之介は、家老の計らいで、まみの首と腹切丸を齎らされ、悲しい結婚の式を挙げた。その前日、藤原家でも早月という小町娘が、薙刀の試合に敗れ、帰途の駕籠の中で、いさぎよく腹を切って死んでいた。

こうした緊張した空気の中で通し矢が競われ、慎之介の有利と見えたとき、毒茶をすすめられて慎之介の弓勢は忽ち衰へた。最後の一矢を残して立腹を切った慎之介は、みずからの鮮血で血塗った矢で最後の一矢を射放し、勝負を引分けに持ち込んで果てたのであった。

鍛え上げた刀の切れ味を腹切って試す、という設定は幸田露伴の名作「一口剣」に於てぐうだらな刀工が女房に逃げられ、はじめて吾に返って鍛えた一刀を、切れるかと問われみずからの腹を丁と叩き、切れ是を、と叫ぶところで使われているが、この作品の娘が見せる壮烈悲愁の世界はまた独自のものである。然し、是が力作であるにもかかわらず、

正篇に比して幽玄の妙に欠けるのは何人も認めるであろう。

切腹曼陀羅図絵を読み終えて、大方の感銘の集中するのは、何と云っても「愛の象」であろう。

少年と少女の愛は少女の献身によって明らかに貫かれている。成人にとって、愛とは、生きて愛し合うことである。然し少年と少女の場合、愛はしばしば象を変えて理解され表現される。秘密を分か合い生命を相手に捧げることが愛であるということは若さ故の錯覚に他ならないにもかかわらず、少年も少女も何ら疑がいを挟まない。何れもが死に耐える己れの姿を最高度に美しく表現することによって、愛を確かめ合い、完成させるものと信じている。つまり、少年と少女とがそれぞれの、理と生理に於てお互いに感じ合う唯一の手段が、それぞれに切腹しその切腹の姿を見せ合うことである、と二人は信じてやまな

この物語を読み直すと、戦後の混乱した世相裡に、斯くひっそりと旧家の奥深く少年が召使いの少女と二人切りで暮らしているというところに、疑問を抱かない人は少ないであろう。



う。

そこには、人間の生活のかけらさえ描かれていない。

何故、この二人がこうした日常を送らねばならないのか。また送れているのか。

何故、少女は生命を捧げて悔いないほど少年を愛しているのか。

何故、少年は切腹曼陀羅図絵を書き続け描き続け、その揚句に、みずからも切腹せねばならないのか。

何故、同時に召使いの少女をも、切腹せしめねばならないのか。

何故、彼女は少年の切腹と同時に、みずからもまた切腹せねばならないのか。

更に小説の構成から見て、何故ものがたり  
の姫君は、現実には少年となって現われねばならないのか。

そこには、性の意識のあらゆる要素の原型が、性とは直接のかかわりを少しも持たず、ただ切腹という悲痛な状態にのみつながって描かれているのではあるまいか。

然し、こうした疑問のすべてを彼方に追いや、ただただ、幻想劇の舞台に見入るような、それも二つのストーリーがダブルエキス

ポーズしてかもし出す妖しさにのみ、読者は魅き付けられてゆくのだ。比較的息の長い文  
体も、また劇的效果に与かって力あるのでは  
ろうか。

受身型の少女の純情可憐な行動と心理が、  
劇中劇では、能動型の、然し清麗な姫君のそ  
れと重なって、女性像の妖しい美しさを描き  
出すことも、また作者の意図だったのであ  
ろか。

何かのテーマを捉え、そのテーマの効果性  
のために登場人物の切腹を描く作品は、従来  
拙稿文芸切腹史に於て、次々と解説を試みた  
のであるが、ただ単に切腹の相そのものをテ  
ーマとして描かれたフィクションも、また本  
誌に数多く発表されて来た。然し、あらゆる  
試みを超えて法谷四郎氏の切腹曼陀羅図絵は  
ある。

続切腹曼陀羅図絵の序において、法谷氏み  
ずから解説して、

切腹の図絵をめぐり、宿命的な縁につ  
かれた或る少年が、愛する少女と共に自  
ら腹切って果てる様を描いた

という説明のみで、吾人は満足すべきであ  
ろう。

その純粋なテーマ追究の真摯さと、哀愁妖

美の雰囲気満ちた力作は、然し法谷氏の優  
れた筆力を以てしても、再現は困難なのであ  
ろうか。

その後も氏は、三十三年十二月の本誌に『  
機上切腹』を、更に三十五年三月『割腹した  
ファクション・モデル』等のフィクションを  
発表された。

前者は藤山秀緒氏の亜流にすぎないが、後  
者は、ミスに選ばれながら偽りのスキャンダ  
ル故に、栄光の雪辱の機会を悲壮な立ち腹に  
堵けるという物語で、いずれもが力作には違  
いないが、その声価に於て処女作を超えるも  
のではない。

是は常に、一つのテーマを追究するものの  
常なのであろうか。氏の全精力はこの一作に  
殆ど尽くされたかのようにあると思うのは、  
果して筆者のみであらうか。

そしてまたこの筆者の受ける感慨は、同時  
に、切腹曼陀羅図絵が示した世界の愴美感を  
ますます深めるものに他ならないのである。

法谷四郎氏の御高作を論ずるに先立って、  
氏の御諒解を得たいと思ったが、御連絡の方  
法もないのでここに氏の御悔容を乞う。

## 私の開病記

泣きボクはのめ

島崎 収



私は瀬戸市の陶磁器会社で働いていた。三年前の夏も終りに近づいたある日、作業をしていると、隣りにいた中田さんが「あんだとうかしたの、顔が腫れているみたいよ」といったので、鏡を見たら少し腫れているようだった。そういえば三日前、名古屋で行なわれたラジオ修理技術者の検定試験を受けに行った時、何となく気分が悪くて顔が重かった。

次の日、近くの医院で診察を受けたら、「これはジン臓病だから安静にして、塩気のある物を一切食べないように」と言われた。私はその通り塩気のある物を絶対に食べず、水っぱい物ばかり食べていた。

近所の方達にトウモロコシの毛や根を煎じて服むとよく効くとか、茄子の木やシヤクナゲの葉が良いとか言われて、それらを煎じて

服用してみたが、一向に効き目はなかった。ある人はカマキリやカタツムリの黒焼きを服んだら治る、と言われたのでカタツムリを捕まえて黒焼きにした。それを服もうとしたが何となく気持が悪かった。それでも「これで治るものなら」と思って目をつむり服んだ。おぼれる者はワラをも掴む、とは、こういう時の気持だろう。

このようにしていても良くなる処か、少しずつ悪くなるような気がした。今まで浮腫は顔にあるだけだったが、そのうちに足や腹にまで及ぶようになった。医院では「一カ月もかかれば治るだろう」と言われたが一カ月過ぎてても良くならなかった。こんな状態では治らないと思ひ、他の病院で診察を受ける事にした。

大きい病院なら入院して治療を受けられるだろう。こんな悪い病状では通院して治療することは困難だ。入院して治療が出来れば家の者も安心するだろう。

## 入院

そしてこの病院で診察を受けたら「これは入院の必要があるから入院の用意をして来な



さい」と言われたので、「入院する予定で来たので用意はしてあります」といったら、直ぐに病室の方へ案内して呉れた。その時には身体中が水腫れになっていて、体重は六十五キロ、腹の周囲は八十センチもあった。歩くのにも股の処がすれて歩き難かった。病室の廊下にいた人達が、私の身体を見て驚いていた様子だ。入院した日は、あの怖ろしい伊勢湾台風の前日だった。

主治医の森先生は「急性ジン炎なら早く治るが、ネフローゼだと二年も三年も要る」と言われたので「ネフローゼでないように」と祈っていたが、診断の結果は、私の祈りも空しく、そのものズバリのネフローゼだった。このネフローゼという病気は、急性ジン炎のように尿毒症を起す危険はないが、一進一退の病勢が長く続くので、やっかいな病気だそうだ。先生は「気長に療養しなければならぬ」と言われた。これから二年も三年も病院で暮らすのか、と思うと目の先が真暗になった。前途失望とは、この事なのか。ネフローゼは直接の危険はないが、余病を引き起こすと怖ろしい結果になるとの事だ。それに未だネフローゼのようなジン臓病には良く効く薬はなくて、どうしても昔から行なわれている

食餌療法で、自然回復を待つより治療の道はないそうだ。

この日から一日塩分三グラムの塩減食療法を続ける事になった。診察が終ると、看護婦さんから「便所に蓄尿ビンがあつて、名前を書いてありますから、そのビンの中へお小便を入れて下さい」といわれた。「なぜビンの中に小便を入れるのですか」と聞いたら「一日に、どれだけ尿が出るかを調べるのです」といわれた。

便所へ行ってみるとジン臓病の者が何人かあるらしく、蓄尿ビンが二十個ぐらい並べてあつた。赤や茶色の尿が入れてあつた。自分の名前が書いてあるビンを見ると目盛りが付いてあつて、その目盛りで一日の尿量を計るようになっていた。

入院した次の日は、朝からいやな天気だった。夕方頃から風雨が強まって、病院内の電灯は全部消えて真暗になった。鼻をつままれてもわからない。看護婦さんが懐中電灯を持って、入院患者を安全な場所へ避難させている。重症の者は担架で運んで行く、軽症の者は歩いて避難した。外では風雨がますます強くなって、窓ガラスの割れる音やカワラの落る音が、強い風に混って不気味に聞えて来る。

る。入院して次の日、こんな恐ろしい目に会おうとは思わなかった。それでも九時頃から風も納まって静かになったので、やれやれと胸を撫でおろした。しかし、とうとう朝まで眠れなかった。

恐ろしかった一夜が明けると、外は嘘のように良い天気になって、私は日射がとてまぶしかった。手元のラジオは、名古屋地方で被害の多かった事を知らせていた。幸いにもこの病院では大きな被害もなく、窓ガラスが割れた程度だった。それでも、ただでさえ水腫れで歩き難い身体を引きずって避難した時は、まったく生きた心持はなかった。

しかし、日が経つにしたがつて、このように苦しい状態も少しずつ解消されていくのだった。入院した日の尿量は五百CC位だった。普通は少なくとも千CC以上は出なければならぬのだ。次の日は少し増えるかと思つたが昨日と同じ五百CCだった。三日位同じ量しか出なかった。主治医の森先生は「尿の量が少ないなあ、薬を代えよう」といわれた。その夜からプレドニン(PR)という高貴薬を服む事になった。この薬は副ジン皮質ホルモン剤で用途が多いそうだ。PRを服むようになってから一日毎に千CCから二千

CCと尿量が増すようになった。多い時は一日六千CC出た日が三日もあった。この時は用足しの回数がとて多く、三十分置きに便所へ行くのは、とてもたまらなかった。夜も眠る間もなかった。このような事が続いて一週間で体重が二十五キロも減った。入院して三週間で腫れは完全に消えた。今まで関取りのような身体をしていたが、一変して細くスマートになった。そして今までは用足しだけだったのが、少しずつの散歩や軽い運動も許されるようになった。もっと長い間苦しまなければならぬかと思ったが、意外に早く苦しみは去った。

### 同病者相哀れむ

入院した日の夜、隣りの部屋から若い女の歌声が聴こえて来た。うたっているのは、私の知らない歌なので、何とかしてこの歌を覚えたいと思った。次の日、窓の外をながめていた。窓の外は道路になっていた、健康そうな人達が何人か歩いて行くのが、うらやましく私の目にとび込んでくる。

「ああ、病人はつまらないなあ」と、一人言をいっていると、誰かが私の肩をポンと叩いた。誰だろうと振り向くと、隣りの部屋の

娘さんだった。

この娘さんは佐藤さんといって私と同じ病気で、もう二年も闘病生活を送っているといつた。そして佐藤さんは、今までの闘病生活の苦しさを話してくれた。私は佐藤さんの話を聞いていたら、これから先の事が不安になった。佐藤さんは今まで二年間もつらい塩減食を続けているのだった。よくも一日塩分三グラムの食餌で我慢したものだ、と感心せずにはいられなかった。

佐藤さんは「私一度でいいから味噌汁を飲ませて欲しい」と悲しい顔つきでいった。同病者相哀れむといわれている通り、同病者の佐藤さんとはすぐ仲よしになった。佐藤さんと話していると佐藤さんのお母さんが来られた。佐藤さんは一人っ子でとてもお母さんに甘えている、私はとてもうらやましく思った。私の母は私がまだ幼い時に亡くなったので、お母さんのある人を見ると悲しくなるのだ。病気になる前はそれほど思わなかったが、病気になるってみると母のない淋しさをしみじみ感じるのだ。

佐藤さんに「あんたは、いいお母さんがあって幸せだね」といったら、佐藤さんはにっこりと笑っていた。おばさんは「病院にい

る間は、私をお母さんと思って甘えてね」といつてくれた。

私は、入院後三週間で浮腫は完全に消えたので今は腫れていないが、佐藤さんは、時々浮腫が現われて今でも腫れているといつて、私の見てる前で足を押えたら、押えた個所がペコンとへこんだ。私はこの頃、毎日千五百CC位づつ尿が出るが、佐藤さんは千CC位しか出ないといつていた。

### 泣きボクロ

病氣の話ばかりしていて忘れていたが、ふと思ひ出して佐藤さんに「あんたがいつもうたっているのは、何という歌なの」ときいたら、佐藤さんは「あれは泣きボクロの歌といつて、ラジオで覚たの」といって、いつもの歌をうたい始めた。「僕もこの歌を覚えたいなあ」といったら、佐藤さんは紙にこの歌の歌詞を書いてくれた。

大きな目をした 一人っ娘

小鳥が逃げて 涙ぐむ

ぬれて可愛い 母さんゆずりの

泣きボクロ

私はこの歌をすぐに覚えた。そして佐藤さんと声を合わせてうたった。



私はこの歌をうたいながらふと佐藤さんの顔を見た。佐藤さんの顔には泣きボクロがあった。この歌は佐藤さんのことを歌にしたのではないかと思った。それから二人で毎日泣きボクロの歌をうたったり、面白い話をしてりしていた。ある日佐藤さんの話だと、佐藤さんは婚約者があり、治ったら結婚する事になっているそうだ。婚約者は佐藤さんが全治する日を、どんなにか待っているだろう。佐藤さんの顔がいつも明るいの、このような希望があるからだろう。

私の病状もずっと良くなって、健康な時と同じような気分になった。気分がよくなると退屈なので、泣きボクロの歌をうたうのだ。うたっていると気がまぎれるのだ。しかし、この歌が悲しい思い出になるうとは何という運命のいたずらなのか。

## 一進一退

浮腫の現われない状態が二カ月余り続いたが、再び少しずつ浮腫が現われ始めた。今でもPRを服用しているのだが、もう余り効かなくなったようだ。このような病状の中で、私は二十才の誕生日を迎えた。病院で誕生日を迎えようとは予想していなかった事だ。や

がて三十四年も暮れようとしていた。病状は少しずつ悪化して、尿の量は入院当時のように五百CC位に減った。そして腹には水が溜り始めた。

三十四年も暮れて新しい年三十五年の正月になった。病院で正月を迎えるのは初めてだが、病院のお正月なんて、お目出度い事はない。正月ぐらい、家で美味しい雑煮を食べたいなあと心の底から思った。ジン臓食の雑煮は、まずくて食べる気もしない。正月を過ぎても私の病状は一向良くなかった。腹は少しずつ大きくなって、やがて妊婦のようになっちゃった。女なら完全に妊婦と間違えられるだろう。「赤ちゃん産むの」などと、冗談をいう人もあった。そしてこの頃から、足に細かい亀裂が沢山現われるようになってきた。

この亀裂は、ネフローゼのように浮腫が強くなると現われるそうだ。これは妊娠した時お腹に出来る妊娠線と同じものだ。そして、この亀裂から少しずつ水が浸み出るようになってきた。日に何枚ガーゼを取り換えても、すぐにガーゼが水浸しになってしまふ。下着はびっしょりぬれ、布団までもぬれてしまった。とてもいやな毎日だった。入院する前よりも

悪くなった。毎日こんなに苦しまなければならぬなら、死んでしまった方がよいと思う日もあった。

二月のある日、回診で森先生が「こんなに腹が大きくなつては、苦しいだろう。水を取ってやろう」といわれた。私は「どのようなして腹の水を取るのですか」と聞いたら、先生は「穿刺針を腹に刺して取るのだから簡単で苦痛もない」といわれたが、何となく心細かった。こんな時母親が生きていたら看病してくれるのになあと淋しい気持ちになった。その日の夕方腹の水を取り出す治療を受けた。ゴム管の先に針が付いていて、この針を腹の中に刺すのだ。麻薬が射つてあるので針を刺しても痛くはない。

腹の中に針を刺したと同時にどっと生温い牛乳を淡めたような色をした水がゴム管を通じてビンの中に溜り始めた。看護婦さんが私の手を取って脈を数えていた。三十分位で四千CCの水が出た。「よくこんなに沢山の水が入っていたな」と自分でも驚いた。水を取ったら今まで妊婦のようなお腹をしていたのが、一遍に板のようなペシャンコになってとても楽になった。

先生に「どうして入院して治療を受けてい

るのに、このように悪くなるのですか」と聞くと「この病気はまだ原因がハッキリつかめなく、良くなったり悪くなったり病勢を繰り返しながら長期間かかって治るのだ」と先生はいわれた。



丁度その日は節分だった。佐藤さんが「今日は節分だから、豆まきをして病気を追い出そうね」といって、私の部屋で豆まきをしてくれた。佐藤さんは嬉しそうに「福は内、病気は外」といってまいている。「ありがたい僕とても嬉しいよ」といって思わず涙が出て来た。病院内で豆まきをしたのは佐藤さんしかなかった。

それから十日位過ぎて、又腹に水が溜ったのでもう一度水を出してもらったが、この時も四千CCもの水が出た。それ以後も、少しずつ又水が溜り始めた。

「今度は腹の水を出さずに、小便のよく出る薬を使おう」といわれ、エデマトリンという利尿剤を毎日注射する事になった。この注射をするようになってから、尿の量がぐんと増えて、二千CCずつ出るようになった。おかげで、腹の気持はとても楽になった。

十日余り注射を続けたら、それ以来腹水の溜るような事もなくなり、あれほど苦しんだ亀裂から出ていた水も止った。後で気が付いて腹をよく見たら、腹にも亀裂が出来ていた。やがて寒い冬は過ぎて一日毎に暖かくなって来た。病室の窓から見える桜もチラホラ咲き始めた。もう入院してから半年になるのだ。病気でなければ花見に行けるのに今年は病院の桜を見て暮らすのだ。健康な時は一度ゆっくり寝てみたいと思ったが、病気になってから考えれば健康な時の有り難さがよくわかる。病人ほど哀れな者はないだろう。それにジン臓病はまずい物を食べて辛い開病生活を送らなければならないのだ。

### 特効薬があつたなら

ある人が「新興宗教に入れば早く治るが入らないか」といったが「宗教なんかで病気が治るものなら医者や薬なんか要らないではないか、信心は精神の統一をはかるのであって病気を治すものではない」といったら、その人は黙って帰って行った。新興宗教で病人を迷わすなんてとんでもない事だ。新興宗教は強い人を相手にしなくて、病人のような弱い人を相手にするのだ。それ以来私に宗教の話



をする人はなかった。

それからでも時々腫れたが腹水は溜らなかつた。ある本で読んだがネフローゼは一年位腫れるが、それ以後は蛋白尿だけが続いて、完全に治るのには三年から十年を要するもので、これは主に小児の病気だ。と書かれてあった。食餌療法を要する病気の中で塩減食ほど辛いものはないだろう。昔から甘いものも塩加減といわれているように、塩気の少ない物は食べられるものではない。このようにまずい物を食べなければならぬのは、未だに良く効く薬がないからだ。結核や胃腸病等には良く効く薬が出来て早く治るようになったが、ジン臓の病気には、どうして良く効く薬が出来ないのか。先生に聞いたら「未だにあまり研究が進んでいない」といわれた。昔から行なわれている塩減食もあまり長期間は続けられないそうだ。あまり長い間塩分を摂らずにいると、逆に悪くなったり抵抗力が弱ったりするのだ。昔はジン臓病で死ぬ人が多かったのは、長い間塩分を摂らせなかったからではないか、昔はジン臓病の治療には塩減食と薬草等を煎じて服んだりしたそうだ。

シャクナゲの葉やとうもろこしの毛や根、山雪の下やウワウルシの葉等の薬草を煎じて

服んだり、カタツムリやカマキリの黒焼きを粉末にして服んだりしたそうだ。

今でも新聞や週刊誌の広告によくこれら漢方薬がある、漢方薬は浮腫の強い時には良く効くが、浮腫がなく蛋白腫だけの時には効かないようだ。いわば利尿薬だ、昔は浮腫が消えてしまえば治ったと思っていたのだろう。

私は医者や薬品関係の方達にもっとどしどしジン臓病の研究を進めて、一日も早くジン臓病の特効薬を発明して、私達のようなジン臓病で苦しんでいる者に明るい希望の光を与えて下さい、と訴えたいのだ。

### 佐藤さんの死

どんな病気でも治療をしていれば治めの方行に真直ぐ進むとは言いい切れない。治療していても余病が出たり逆戻りして悪化する事がある。

ジン臓の病気が一番恐ろしいのは余病を引き起す事だ。最近ではジン炎やネフローゼで死ぬ人はかなり少なくなった。昔は余病を起して死ぬ人が多かったそうだ。今では殆んど余病を防げるのだ。

七月のある日佐藤さんが何となく元気がない様子なので「どうかしたの」と聞いたたら「

何だか風邪を引いたらしくて頭が痛いわ」と重々しい口ぶりで言った。私は「風邪なんかに負けては駄目。もっと元気を出して」といって佐藤さんを励ました。おばさんはとても心配しておられた。しかし夏の風邪は治り難い。佐藤さんの風邪は良くなる処か少しづつ悪くなるようだ。そして高い熱が出るようになった。佐藤さんは苦しそうだ。佐藤さんは風邪から肺炎を引き起したのだ。もう私がいくら話かけても、私の方を只じっと見つめているだけだった。ホクロが余計哀れに感じられる。長い間親しくしていた佐藤さんと話す事も出来ないで悲しくなつて涙が出るのだった。心の中で「早く今までのような元気な姿になってね」と祈った。やがて佐藤さんの部屋は面会謝絶になった。

両親や婚約者の心配や私の祈りも空しくあつた。朝早く亡くなった。その日は丁度お盆だった。「この秋に退院するわ」といっていた佐藤さんはもう永遠に帰えらないのだ。風邪は万病の因と昔から言われているが、私は改めて風邪の恐ろしさを知った。何だか今でも佐藤さんが生きていたような気がする。そしてあの泣きボクロの歌が、どこからか聴こえて来るようだ。そんな時私も佐藤さんに負けず

形身として残してくれた、泣きボクロの歌をうたうのだ。「佐藤さん、安らかに眠って下さい」と毎日手を合せて祈った。

## 赤ちゃん

ある夜、私はこんな夢を見た。自分の傍に亡くなった母が、にっこり笑っているのだ。母は私を赤ちゃんのように可愛がってくれた。そして私は赤ちゃんになっていて、母の乳房にすがっていた。母は私の頭を撫でながら「早く治れ、早く治れ」と言っていた。私は母の顔をハッキリと覚えていないが、夢では母の顔が現われた。

夢に現われた母の顔は佐藤さんのお母さんに似ていた。母は泣きボクロの歌をうたってくれた。入院して今まで母の夢なんか見た夜は一度もなかったが、どうして母の夢を見たんだろう。先日亡くなった佐藤さんが私のことを母に伝えたのだろうか。夢の中で母が泣きボクロの歌をうたってくれたのだから、そうとは思えない。

あくる日一通の手紙を受け取った。手紙には近く中学当時の同窓会を行うと書かれてあった。私は病院生活なので同窓会に出席する事は出来ない。同級生の中で病院生活をして

いるのは、自分一人のように思われた。そして同級生の元気な姿が、目の前に浮かんでくるのをどうする事も出来なかった。

## 健康保険に感謝

ある日会社の事を思い出した。もう病気で会社を休んでから一年以上になる。一緒に仕事をしていた人達はどうしているかなと考えていると会社から手紙が来た。手紙の文面は会社の都合により健康保険を打ち切りたい、と書かれてあった。若しここで保険を打ち切られたらどんな事になるか、高い治療代を自分で支払わねばならない。

私の場合一カ月に二万円以上の費用が要るので、とてもこんな多くの費用を支払う事は出来ない。そうなれば、完全に治らないうちに退院するか、民生委員の世話になって医療保護を受けるかなければならない。しかしこれは私の考え違いだった。今のままだと働いていなくても保険料を支払わなければならぬが、会社を退職した事にして保険を打ち切れば、保険法第五十条によって、保険料を支払わずに継続療養を受けられるとの事だった。保険制度は有り難いものだ。自費や国民健康保険で入院している人達は一カ月に多額

の費用を支払っているが、社会保険だと千円の費用で治るまで治療が受けられるのだ。社会保険で入院している者の中には、どうせタダだから、と軽はずみな態度で医師や看護婦の言い付けを守らない者もあるようだ。しかし患者のみではない、個人病院では健康保険の患者と国民保険や自費の患者を差別待遇する所もあるそう。公立の病院ではこのような事はない。

## 初めての味噌汁

悲しい出来事があった三十五年も暮れて新しい年が明けた。一度ならず二度も病院で正月を迎えようとは思わなかった。今でもまだ一日塩分三グラムの塩減食を続けているのだ。いつになったら塩辛い物を食べられるようになるのか、隣りのベッドの人が美味そうに味噌汁を飲んでいるのを見ると、うらやましくなって自然に涙が出て来た時もあった。

その頃の献立は次のような物だった。朝は野菜とタマゴの煮付とのりに牛乳、昼は目玉焼きとさつま芋のきんとん、夜は焼魚と野菜の煮付、これらはどれも塩気の少ない物ばかりなので食べ難い。「一度でいいから味噌汁を飲みたいな」と思う日はかりだったが、少



しずつ塩分が増えて今までの三グラムから五グラムとなり八グラムになった。十グラムになると味噌汁が貰えるのだ。やがて十グラムになった。待望の味噌汁を飲めるようになったのでとても嬉しかった。天にも昇る気持ちだ。入院して初めての味噌汁だが普通の人より淡い味になっていた。それでも一年半ぶりの味噌汁は美味かった。味噌汁を飲んだら佐藤さんの事が頭に浮かんで来た。「一度でいいから味噌汁を飲みたい」といつていたが、その願いも叶えられなかった。

佐藤さんのお墓詣りに行ったら、美味しい味噌汁を供えてあげるのだ。佐藤さんもどんなにか喜んでくれるだろう。普通の人は一日約二十グラムの塩分を摂るが、摂ジン臓病者は、その半分しか摂れないのだ。塩分が増えるのも浮腫や尿中の蛋白の量によって決まるのだ。この項、蛋白の量は五%ぐらいになっているので週一回の検査がとても楽しみだ。蛋白の量が一%以下以下になれば退院出来るそうだが、その日はいつ来るのか。

## 楽 器

もう病院生活は二年になる。入院した頃は「これから二年以上要する」と言われた時、

二年という月日は長いように思われたが、過ぎ去った二年間は短かった。今は毎日の闘病生活がとても退屈でたまらない。面白い話をしたり将棋を指したりして遊んでいるが、それでも退屈だ。

ある日どこかの部屋から何の楽器か知らないが、とても美しい音色が聴こえて来た。私はその部屋へ入ってみた。その楽器は私が今まで見た事がなかった。「何という楽器なの」と聞くと「これはずっと以前に流行した大正琴という楽器だよ」と教えてくれた。今はあまりこの楽器を見る事は少ないのだ。私も欲しかったので大正琴を買った。この楽器の音色はとても美しく澄んでいる。弾いていると退屈な病院も忘れてしまうのだ。長い間闘病生活をしているものはじっとベッドの上に寝ているだけでは日々がとても長く病院ノイローゼになってしまう。楽器は病気で暗い心を明るく晴れ晴れした心にしてくれるのだ。

## 気長に療養

ある天気の良い日に空をながめっていると、白い雲がポッカリ浮かんでいた。この雲は私の方をじっと見つめているような気がする。

「病気もあの雲のように私の身体の中を去っ

て行かないかなあ」と一人言をいつていたらそこへ先生が回診に来られた。「もう大部分良くなったからあと二カ月位で退院するか」といわれた。あと二カ月で退院出来ると思うと何となく嬉しかった。この事を佐藤さんに知らせあげたいと思った。先生は「今日から塩分を十五グラムにしよう」と、いわれた。十五グラムといえば、塩減食の中では最高なのだ。入院した時は三グラムの塩分だったが二年余りで五倍になったのだ。十五グラムになればとても辛く感じる。しかし何事も予定通りにはならないものだ。

二カ月過ぎたが退院の許可は出なかった。そして遂に三度目の正月を迎える事になった。もう家の事などすっかり忘れてしまった。それでも桜の咲く頃には退院出来ると思っている。正月はどこかの家でも雑煮を祝うが、この病院でも正月三が日は毎朝お雑煮が貰えた。しかし家で食べるような美味しい雑煮は食べられない。ああ正月は家でゆっくり過したいなあと思うのだ。健康な人は私達病人の事をあまり考えてくれないだろう。ネフローゼという病気は気長に療養しなければならぬのだ。

ある日山田さんという人が盲腸炎で私のい

る部屋へ入院した。山田さんは「あんたどこが悪いの」と私に聞いたので「ネフローゼでもう二年以上も入院している」と私がいったら、山田さんは私の顔をじっと見つめながら「二年ぐらいの病院生活なんて短かいものよ、私も以前にあんたと同じ病気に罹った事があるわ」といった。「どれくらいかかったの」と聞いたら「短かい間に治せるものではないわ。何事も忘れて気長に療養しなければ駄目よ。私なんか五年かかって治ったのよ」といっていた。山田さんは話をしながら盲腸の傷跡を「ああ痛い」といって押えていた。

山田さんが五年闘病生活をしたのに比べれば、自分はまだほんの短い期間にしか過ぎないのだ。山田さんも塩減食の辛さを話してくれた。それに焦れば焦るほど失敗するのは何事も同じだ。これまでに良くなったので、ここで失敗してはおしまいだ。山田さんの体験話を聞いてから「よし自分も山田さんのように五年かかってでも良いから完全に治すのだ」と心に決めた。山田さんも少しずつ起きあがれるようになった。経過は良好だがそれでも「手術した跡が痛いわ」といっていた。どんな辛い闘病生活でも山田さんは笑顔を忘れなかったそうだ。今でもその通りだ。盲腸手術

後の麻酔が切れて痛み出しても笑顔を見せていた。闘病生活にはどんな不安や悲観があっても笑顔を忘れてはならない。

よく一年の計は元旦にありというが、その計画を立てても実行出来る事は殆んどないであろう、闘病生活も予定通りにはならないものだ、山田さんに気長に療養ということを教えられた。

## 退院近し

寒さは一段と加わるようになったが、もう大寒だから当然だ。私達ジン臓病の者には冬が一番いやな季節なのだ。というのは少しの事で風邪を引きやすいからである。

ある寒い日何だか風邪を引いたらしく、背筋が水をかけられたようにゾクゾクとして鼻水が出て寒気がした。いよいよほんものだと観念した。あれほど絶対に風邪を引かないようにしなければと思っていたが、遂に風邪を引いてしまった。風邪からふと佐藤さんの事思い出して恐くなった。

私ももし佐藤さんのようになったらと考えたら、余計熱が高いような気がして今にも息が止まるような気がした。

三日ばかり熱が下らなかった。その夜佐藤

さんの夢を見た。「あんたも風邪を引いたのね。風邪なんか何でも無いわ」と佐藤さんはいった。

しかし佐藤さんのように私の風邪も重くなつた。佐藤さんがいつも私のベッドの傍にいて、私を励ましてくれているようだが、私を手を伸ばすと佐藤さんはかなり遠くにいるようだった。どうしても佐藤さんの手を握る事は出来なかった。

佐藤さんは「私のようになつては駄目よ」といいながら、遠ざかろうとしている。「私の手を握ったらもう助からないわ」といっている佐藤さんと手を握った、と同時に目が覚めた。「ああ、よかった」それは夢だった。

いつしか風邪も治った。佐藤さんは風邪に耐える抵抗力がなかったのだが、私は佐藤さんと違って抵抗力を持っているのだから風邪には負けんぞと心を強くした。夢は逆夢といわれている通り、悪い夢を見れば良い事があるのだ。これからどんな良い事が待っているか楽しみだ。

佐藤さんの夢を見たので一度お墓詣りに行ってあげなければならぬ、春分の日に行つてあげようと思う。そして私の元気な姿を見せてあげるのだ。



逆夢のおかげか、節分を過ぎた頃からすっかり病勢は日ましに良くなって、検査の結果も良好となった。

私がこれまでに良くなれたのも先生や看護婦さん達、それに病院で働いておられる方々のお蔭だと感謝している。けれど一つだけ

残念なのは、ジン臓病には良い特效薬がないという事だ。  
(以上名前は仮名を用いました。)

### 本誌最近号在庫一覧

新装10月特大号 (35年10月号)

定価百四十円

グラビヤ——緊縛艶姿五十態

口絵物語——暗黒集団(四馬孝)

新装11月特大号 (35年11月号)

定価百四十円

画集——被虐の白い花びら

グラビヤ——夢の緊縛アルバム

新装12月特大号 (35年12月号)

定価百四十円

写真——恍惚女体ハイライト

画集——吊責遊び方教室

新年増大号 (36年1月号)

定価百五十円

画集——新妻教育(こんな愛し方)

方)

アルバム——表情とアツプセレ

クシヨン。蛇倉の恐怖

新装二月増大号 (36年2月号)

定価百五十円

絵物語——瀬降りの男。グラビヤ——美しいましましめ、珠玉の餌物

新装三月増大号 (36年3月号)

定価百五十円

口絵写真、緊縛女体ポートレート特集。読者の声と通信。口絵——美と幻想の構図

新装四月増大号 (36年4月号)

定価百五十円

グラビヤ、華やかなモンタージュ。口絵——異常光線の綾

新装五月増大号 (36年5月号)

定価百五十円

口絵——吊責めの種々相

写真——甘美と清潔の構成

新装六月増大号 (36年6月号)

定価百五十円

グラビヤ——清美と艶容の造形色刷口絵——美女力士の激突

新装七月増大号 (36年7月号)

定価百五十円

グラビヤ——醜化と婉曲美の探究(写真による散文詩)口絵——傑作畫画特選、倒錯繪卷選

新装八月増大号 (36年8月号)

定価百五十円

グラビヤ——余韻の陰微と断面

緊縛フォト撮影の実際(亀甲縛

りの一例)

新装九月増大号 (36年9月号)

定価百五十円

グラビヤ——アブ・シーン・アラカルト。緊縛フォト撮影の実際(高手小手縛りの一例)

新装一周年記念号 (36年10月号)

定価二百円

告白特集——偏執記録の断層。グラビヤ——SMMの組写真集。緊縛フォト撮影の実際(ゴムの感触とフェチ好み)

新装十一月特大号 (36年11月号)

定価二百円

特集——私を責めて下さい(雑踏の中の孤独)グラビヤ——緊縛美の祭典、アブ双曲線

新装十二月特大号 (36年12月号)

定価二百円

特集——読者通信の女性を縛る(ひろ子緊縛記)緊縛フォト撮影の実際(前手縛りと縄抜けの一例)

新年特大号 (37年1月号)

定価二百円

特集——カパー・ガールを縛る

グラビヤ——美しき緊縛。

緊縛フォト撮影の実際(逆エビ縛りの一例)

二月特大号 (37年2月号)

定価二百円

グラビヤ——責められる女。組写真II女性の血紅切腹。懸賞百枚読切小説「契約書」

三月特大号 (37年3月号)

定価二百円

「嵌口に憑かれて」人間馬の調教「女性の切腹」緊縛フォト撮影の実際(水責めと煙草責めのテーマ)

四月特大号 (37年4月号)

定価二百円

グラビヤ——「縄と紐の恍惚」緊縛フォト撮影の実際(首懸賞応募作品——「マミと私」)

五月号 (37年5月号)

定価二百円

グラビヤ——「悦虐の表情と縄のアツプ」M「屈伏への序曲」完全なる屈伏

六月号 (37年6月号)

定価二百円

グラビヤ——「濡れた塑像」読切小説——「裸形の賂」M的小説「鉄の指」

定価二百円

「濡れた塑像」読切小説——「裸形の賂」M的小説「鉄の指」

定価二百円

「裸形の賂」M的小説「鉄の指」

定価二百円

「鉄の指」

定価二百円

# 新聞記事の

## イメージによる小品

桐野次郎

毎日配達される新聞の社会面を読んでいると、いろいろの事件が載っている。殆どは極めて簡単な筋書きだけのような報道であるがそれが簡単なだけに、私の空想は極めて大きく発展してゆく。ここに新聞記事をもとにして、私の馳せた空想のストーリー若干を御紹介することにしよう。

### 一、看護婦を縛る

井上医院の忙しい一日も、やっと終わった。静かな住宅街の端にあるこの医院は、真夜中の闇に包まれ、厚いカーテンの隙間からもれる灯も、今は、居間だけからとなった。その居間には、看護婦の幸江と、妹の友江の二人が、楽しい一刻を送っていた。院長先生は、近所の友人の家。さして広くない医院だが、夜、一人の留守番は心細い。しかし今日は、夕刻から用足しかたがた妹が遊びに来

たのを、これ幸いと、無理に泊るように引き留めた幸江だった。

明日は日曜日、学校も医院も休みで朝寝が出来る、話がはずんでしまったが、ふと時計を見ると、午前二時を少しまわっている。

「あら、もう二時過ぎだわ。一寸喋り過ぎたわね。」

「ほんと。もう寝ましようか。」

「友ちゃん、先にお風呂に入ったら？」

「そう。じゃ、お先に入れてもらおうわ」

友江のセーラー服に包まれた若々しい体が身軽に立ち上った。小麦色に日焼けした、肉付きの良い肢が幸江の前にさらされた。友江は思いきりのびをすると、障子を開けて出て行った。

「あの子は、会う度に大人になって行くわ。」

幸江は、そう思うと、ふっと淋しい気持ちになったが、自分もまだ若いのだから、と思いつき、友江が風呂から出てくる前に、とテールを片付け、布団を出そうと押入れを開けた。幸江はまだ、白衣をつけたままであった。薬の匂いがするとくつろげない幸江だったが、今日は白衣をぬぐ暇も惜しく、妹と話し込んでしまっていたのだった。

押入れを開けて布団に手をかけた時、幸江



は風呂場の方で何か聞えたように思い、手を止めて、耳をすませた。……が、その後、何も聞えてこない。幸江は気のせいかと、再び布団を敷き始めた。

幸江が一息ついた時だった。慌しい足音が聞えたかと思うと、障子がいきなり開けられた。幸江は思わず息をのんだ。障子の開いた所から、パンティ一枚の友江が、はじかれるようにして部屋に入ってきた。しかも両腕を後にねじ上げて縛られた上、猿轡をしっかりと噛まされていた。この哀れな友江に続いて友江の縄尻を取った少女が一人、入ってきた。一見した所、友江と同じ年頃の少女だが、おかつぱのこの少女は、顔をふく面でかくし、びったりと身についた黒のセーターを着ていた。その少女は幸江を見ると、友江の体をぐっと抱きかかえ、片手で、ナイフを、友江の左の胸に押し当てた。

「静かにしないと、この子が怪我をするよ。」可愛い、落ち着いた声だった。

幸江は友江が入って来た時から、あまりの驚きで、何も考えられなくなっていた。乾いた唇をなめながらうなずいた幸江に、少女は「向う向いて、手を後へ回すのよ」と命令した。黙って、後を向いた幸江の後に近付いた

少女は、友江の縄を引き、敷かれてあった布団の上にころがすと、ブルージンのポケットをふくらませていた細紐を取り出した。ふるえながら後で重ねている幸江の手に巻きつけ始めた。

ずい分と、ぎこちない縛り方であった。重ねられた手首に紐を巻きつけ、矢鱈にぐいぐいとしめつけた。たちまち幸江の指先は感覚を無くして行った。

両手をしっかりと縛り上げた紐は、白衣の上から胸に巻きついて行った。白衣を通して豊かに盛り上った胸にも紐は喰い込み、幸江は、奇妙な痛みに思わず唇を噛みしめた。

幸江はさらに縄尻を引かれ、部屋境の柱を背にして、改めて縛りつけられた。その上、風呂場から持って来たらしい手拭を、齒の間に噛まされてしまった。西洋式の猿轡のかませ方である。

ひきずられた時、白衣の裾が乱れたが、幸江にとっては、手首と胸に喰い込む縄目の方が苦しかった。齒の間に噛まされた手拭を力一杯噛みしめて、少しでも縄目をゆるめようと、もがいてみたが、それは必要以上に苦痛を憶えるだけと気がつく、ぐったりと力をぬいて、柱によりかかった。目の前には友江

がうつ伏せになっていた。幸江に似て肉付きの良い友江の体に、細紐は深い窪みを作って喰い込んでいた。日頃露出している肢と腕は健康そうに日焼けしていたが、他の膚は白く、はり切っていた。背中に組まれた手首に、縄はきびしく巻きつき、友江は両手をしっかりと握りしめていた。布団に埋もれて、幸江の目から隠されてはいるが、柔らかいふくらみを見せる可愛い胸にも縄は喰い込み、丸い頬にも、幸江と同じような猿轡が喰い込んでいた。

幸江は少し気持が落ち着くと、賊の姿をよく見た。黒いセーターを持ち上げた胸のふくらみ、ブルージンの下で張り切っている腰のはり、よく延びた肢体、ふく面の上で笑っている可愛い目。

視線を少女から哀れな友江に移し、さらに自分の、まくれ上った白衣の裾や、細紐の噛みこんだ胸や、腕に走らせているうちに、幸江は不意に、不思議な感情が湧いてくるのを覚えた。

まず、目の前に、縛られて横たわっている中学生の友江が、今迄以上にいとおしくなりそのままの姿で抱きしめてみたくなった。自分の縄目も苦痛が薄れ、淡い喜びを感じるよ

うになり、猿轡も、可愛いものになって来た。さらに、この少女に鞭で思い切り、打たれてみたくなった。診察室のベッドに大の字にはりつけられても良い。そうしたら、責める器具は色々揃っている。この少女になら、どんなに激しく責められても良い。又、天井から両手首を吊られて、鞭打たれても良い。鞭は、背中を、いや、ところきらず打ち降ろされるだろう。又、この少女の事だ、激しい操り責めを加えるかもしれないし、友江も同じような目に合わせるかもしれない。幸江は、縄目に身をゆだねながらいつしか、うっとりとした表情になっていた。

(完)

△イメージの根拠になった新聞記事▽

看護婦しばり奪う

空巣にはいられた腹いせに強盗

(三月十四日付読売新聞夕刊)

十四日午前三時四十分ごろ西宮市鳴尾町二の一五、恒川耳鼻咽喉科医院に恒川潤一院長(四八)の便所の窓ガラス(五十センチ四方)をはずして賊が侵入、看護婦寢室に一人で寝ていた看護婦兵頭紀江さん(二二)の頭をサンダルで数回なぐり頭と右手に約十日間のけがをさせて首をしめたうえ、手で口をふ

さぎ「金を出せ、騒ぐな」とおどした。兵頭さんがそばのカルテ台の箱の中の治療費二千円を差し出したところ「もっとないのか」といいながら玄関に連れて行き錠をあけさせたあと、再び診察室にもどり、ねまきのひもと注射のとき使うゴム管で兵頭さんの両手と両足をしばり「静かにしている」と言い残し玄関から逃げた。

兵頭さんは足のゴム管をはずし、両手をしばられたまま裏の院長宅にかけ込み一一〇番に急報、兵庫前警パトカー九台と甲子園署員が出動し、同五時十五分ごろ恒川医院から約百五十米東の同町二の二〇五に建築中の文化住宅二階便所内にいた男をパトカー尼崎七号の井上哲男(二四)京田耕(二二)両巡査がみつけ、職務質問したところ犯行を自供したので強盗傷人現行犯でつかまえた。

尼崎市上坂部高江四三三、「あかつき荘」

内工員小野道秋(二二)で、約一週間前、自室にどろぼうにはいられたため腹を立て、強盗を計画、十二日夜、神戸市灘区王子公園附近民家を物色中、職務質問され、尼崎に引き返し、阪急電鉄塚口駅前の民家にはいったが、夜が明けたためにも盗らずに逃げた。十四日朝は二年前に鼻の治療を受けたことか

ら勝手を知っていた恒川医院に押し入ったといっている。小野は三十四年九月にも、あき巣で芦屋署につかまり、保護観察処分を受けている。

女子中学生が白昼強盗

ピストル(オモチャ)をもって

質屋に押し入る

〔松本〕十九日、長野県松本市内の質屋に十三才の中学生の少女が「ピストル強盗」にはいり、松本署で動機について調べているが、おもしろ半分にやったとのべており、関係者に衝撃を与えている。

「スリル」もとめて

同日午後二時ごろ、松本市西町、質店湯沢清一さん方におかっぱ姿の強盗はいり、右手にハンカチをかぶせたピストル、左手にハンカチで包んだナイフを持って構え妻好子さん(五一)に「金を出せ」とおどした。好子さんが「ドロボウ」と叫んで表に飛び出したすきに女は隣のへやにあったガマ口(約百円在中)を奪い、裏の板ベイを乗り越えて逃走した。松本署は約一時間後に同市新町、少女(二三)「中学一年」を調べたところ「ピストル強盗にスリルを感じ、おもしろ半分にや





った」と自供。ピストルは市内で四百余円で買ったおもちゃ。ナイフは日ごろ学用品とし

て使っていたもので、この日は学校を休み、約四〇〇メートル離れた湯沢さん方にねらい

武雄

をつけて出かけた。少女の両親は、自由労務者、五人きょうだいの長女で、いままで二回盗みで同署に補導されたことがある。

× × ×

則子は、もうとっくに指先がしびれてしまっていた。助手達は今、最後のヒロインを、地上に横たえられた十字架に縛りつけている所だった。ハイ・ティーンはこのヒロインを演じている女優は、体の線が美しいことで、すでに相当名前が売れていた。今日の姿も、両手足を、つけ根迄、すっかり露わにした服を着ている。この女優にかかる迄にすでに多数の男女が十字架に縛られていたのだ。特にエキストラの則子は初めに縛られたので、すでに縄が腕に喰い込んでいた。助手達も、エキストラには手心等加えることはない。それだけに、撮影迄、体が保つかと思われる程の苦痛だった。しかも陽の光が露わになった素肌に痛い。則子は、浴衣の様な着物を一枚着ているだけだ。裾が、わざとはだけられ、自信を持っている脚が、揃えて縛り合わされている。

則子は縛られる事がたまらなく嫌だった。それなのに、このフィルムでは縛られてばかりだ。ここに連れて来られる時も、後手に縛られて引き立てられて来た。素足に、砂利が痛かったし、それ以上に、被縛の姿にささる人々の視線が痛かった。後手にされた両手を、しっかりと握りしめていたが、そんな事で、屈辱感を押える事は出来なかった。そして、今、最も無防備な姿を人目にさらしているのだ。左の袖は付け根からちぎられているし、右は二の腕の半ば迄、まくられている。そのむき出しになった二の腕と、手首に荒縄がしっかりと喰い込んでいた。視線を落すと、豊かな胸のふくらみが、半分位、はだけた襟元からのぞいていた。

則子のすぐ横には、十二、三の少年が縛られていた。なわは相当強くからみついていたが、少年は苦痛は見せず、むしろ楽しそうな表情をしていた。

やっと、ヒロインが十字架に架けられた。十字架が立てられると、美しい体が、高くそびえた。あさましい姿にされていても、その体は矢張り美しく見事だった。その被縛の姿からは、惨酷な感じは少しも感じられなかった。むしろその姿は、快楽と美そのものであ

った。大空をバックに、両手を左右に思い切り広げ、両脚をびったりと揃えて縛られている姿は、さすがにヒロインを演ずるだけの値打はあった。

カメラがまわる。ヒロインは天にめされる喜びと、せまりくる苦痛の表情を巧みに表現していた。顔だけではない、体全体から、喜びと苦しみを感じられた。それを感じた則子は、矢張り自分はエキストラでしかないと思う。肌を噛む苦痛と相まって、首をぐったりとたれてしまった。その時、カメラが近付いて来た。

映写機の音が止った。場内は急に明るくなった。則子は顔が上げられなかった。自分の姿のアップ。二の腕や、胸に喰い込む縄目、さらに、故意に乱されたカヅラの鬚、叩きのめされたような自分の姿がすっかり刻明に写されていた。長い髪が乱れ毛が風にゆれると、表現の出来ない悲想感をただよわせた。

ヒロインの演技や、美しい肢体よりも、このシーンの方が、すべてを物語っているようだった。そして、後日、この場面のステイールが、好事家の間で珍重されるようになる事など、則子は想像だになかった。そのステイールには、二の腕に深々と喰い込む縄目

と、半ば露わになった胸のふくらみの磨たげられる白さが、はつきりと焼き付けられていたのだ。

(完)

△イメージの根拠になった新聞記事▽

これぞ大島の「残酷手法」

大友、丘あわや丸焼け

東映「天草四郎時貞」の極刑シーン

(三月十八日付新夕刊)

大島渚監督の時代劇「天草四郎時貞」(東映京都)がこのほど完成した。いままでの時代劇製作のカラーを完全に打ち破った演出方法は、多くの話題を呼んでいる。なかでもその中心は、お得意の「残酷手法」。「時代劇残酷物語」といわれるその数コマを紹介しよう。

〔抱き石〕△写真①▽島原城内石牢(ロウ)

シーンの一つ。裏切り者のため城方の圧政者に捕えられたキリシタン農民が「抱き石」の酷刑に処せられる場面。鋭い山形(のこぎり形)に刻まれたカシの板の上に正座、そのひざの上に六十センチ四方、厚さ十五センチの石を乗せ、この重さにたえるというシーン。朝九時からこの刑に処せられた演技者の足は紫色にハレ上がり、夕方アップのころには、一人で立ち上がれない有様だった。



「逆吊り」△写真②▽同じく石牢シーン。こ  
んどは、がん丈そうな男をクサリで宙づりに  
し、頭を、下の水にザブザブとつける動きを  
何度も何度もくり返す。このテストだけでも  
三十数回、本番に十数回と、しめて五十回。  
これには「血が頭に全部集まってしまい、何  
がなんだかわからない。目はまわるし、降さ  
れてからでも、しばらくは夢ごちだった」と  
いう。

「引回し」△写真③▽こちらはキリシタン農  
民の一人を雑兵が引きずりまわすというムゴ  
イ場面。砂と泥のセットの中を三人がかりで  
グルグル走り回る。「痛いッ、痛いッ」と悲

鳴をあげる男も、まんざら芝居ではない様子。  
ついには雑兵にかわり、馬が引き回し役を引  
き受ける。ぼろぼろになった着物の間からは  
ほんものの血がにじみ、からだ中いたるところ  
になまなましいスリキズをこしらえて「こ  
れじゃ、いくらガン丈なからだでもたまりま  
せんよ」

「十字架」△写真④▽大友柳太朗、丘さとみ  
がラストシーンで十字架にくくりつけられ、  
火あぶりの刑に処せられる場面。シバをうず  
高く積み、ガソリンをぶっかけ、火をつけて  
効果をあげようというもの。だが天下の大ス  
ター大友が猛火の中で刑を受けるとは、大島

演出ならではのシーン。メラメラと燃え上  
るホノオは大友、丘を赤く照らし出すが、こ  
れは熱のためにほんとうに赤くなったもの。  
一時間もテストを続けて危うく丸焼けになる  
寸前に、用意してあった消火器が火を消す。  
大友と丘のカズラはほんとうに焼けチヂレて  
いた。

その他、妊娠婦を丸ハダカにして池の中に  
つけるシーンや、娘を逆ずりにして拷問する  
シーン。ハリの山責めなど、ジョッキンゲンな  
場面が数多く登場する。

(おわり)

### 奇譚クラブ旧号の在庫案内

復刊第5号	(昭和31年6月号)	定価二百円
復刊第21号	(昭和32年10月号)	定価二百円
復刊第24号	(昭和33年2月号)	定価二百円
復刊第25号	(昭和33年3月号)	定価二百円
復刊第27号	(昭和33年5月号)	定価二百円
復刊第28号	(昭和33年6月号)	定価二百円
復刊第29号	(昭和33年7月号)	定価二百円
復刊第32号	(昭和33年9月号)	定価二百円
復刊第33号	(昭和33年10月号)	定価二百円
復刊第34号	(昭和33年11月号)	定価二百円
復刊第35号	(増刊号青い魔院)	定価二百円
復刊第36号	(昭和33年12月号)	定価二百円

復刊第37号	(昭和34年1月号)	定価二百円
復刊第38号	(悦唐小説と緊縛写真)	三百円
復刊第39号	(昭和34年2月号)	定価二百円
復刊第41号	(昭和34年4月号)	定価二百円
復刊第44号	(昭和34年6月号)	定価二百円
復刊第45号	(悦特第一集)	定価三百円
復刊第46号	(昭和34年7月号)	定価二百円
復刊第47号	(昭和34年8月号)	定価二百円
復刊第48号	(昭和34年9月号)	定価二百円
復刊第49号	(昭和34年10月号)	定価二百円
復刊第50号	(昭和34年11月号)	定価二百円
復刊第52号	(昭和34年12月号)	定価二百円
復刊第53号	(昭和35年1月号)	定価二百円
復刊第54号	(悦特第三集)	定価三百円
復刊第55号	(昭和35年2月号)	定価二百円

復刊第56号	(昭和35年3月号)	定価二百円
復刊第57号	(サド特集第四集)	三百五十円
復刊第58号	(昭和35年4月号)	定価二百円
復刊第59号	(悦特第四集)	定価三百円
復刊第60号	(昭和35年5月号)	定価二百円
復刊第61号	(悦特第五集)	定価三百円
復刊第62号	(昭和35年6月号)	定価二百円
復刊第63号	(昭和35年7月号)	定価二百円
復刊第64号	(昭和35年8月号)	定価二百円
復刊第65号	(昭和35年9月号)	定価二百円
別冊1号	(告白、手記、体験)	定価三百円
別冊2号	(長篇悦唐小説)	定価三百円

特に定価の半額に奉仕いたします。

(第一号より第六十五号迄の内、本欄に欠号の分は全部売切れしました。)

## 地下第三特高調室の女

△太平洋戦の前の時代に、国家主義の権力を背負った日本の特高警察が、どんなものであったか。勿論これは、戦前の話で、現在の民主警察とは全く別なものであることを、最初にお断りしておく。▽

高 宮 良 一

S署特高刑事室で主任と部下の刑事との対話。春先の曇り日の午後。

「下田みよ子は今朝送ったね」

「ええ、一件書類も別便で送検しました。本人の身柄は、もう小菅へ着いている頃です。どうも意外にすらすら吐いてくれたんで、張り合いがなかったですね」

「久しぶりの上玉だったんで、相当楽しめるかと思っただがなあ。いきなり吐かれてしまっっては、やり様もないさ。しかし、一人の娘、これがお目当てさ。あの娘にや気の毒だが、本物の下田よりはもっと上等だし、こ

れは吐くも吐かぬもない、はじめから白と判っているんだから、面白いやな」

「主任も凄いいもんですね。単にあの女子党員の隣の部屋に住んでいる女子大生で、本人と友人だったのは事実だけど、党とは何の関係もないし、全くの白だと知っていながら、ゆっくりと責めようてんだから。どの位、あと置いとくつもりなんですか」

「そうさな。もともと白なんだから、あまりシッコクはやれんだろうな。あと二日もやって、疑いがはれたから、どうも気の毒なことをした、で釈放さ。本人は恥しいから泣き寝

入りだよ。跡を残さないでおくのが肝要だな。我々としちゃ、見るだけの放楽、目の正月という処だ。第一、長い時間をかけて、それで白だったってんでは、署長がウルサイ」

「判りました。お手柔かにやりましょうや。で、何時に？」

「そうさな。今夜は君が当直だし、今夜だ。八時頃からか。俺は一寸本庁へ行く用があるが、それまでに戻って来るよ」

その夜九時頃、主任は帰って来た。

「おい、そろそろ始めようか」

「仕度しておきましたよ。第三調室です」





「えッ、もう入れてあるのか。第三は地下だから静かで良いな。それで……あの女子大生、何ていったかな？」

「平野あや子、廿一才、処女、F女子大英文

科三年生、ですか。ハハハ」

「特徴、ショートカットの断髪、美人、大柄東京生れか。女党员にはろくなお面のはいいし、カサカサな女郎ばかりだが、これは新

鮮、ピチピチの生きが良い獲物だということろだ。下田みよ子の隣室に、よいのが住んでいたというわけだな。それで、入れてあるっていったが……」

「ええ、主任には悪かったかも知れませんが、裸にむいて縛ってあります。準備OKというわけです」

「なんだ、もう括ってしまったのかい。俺はね、女の子がイヤイヤをするのを、無理やり色々とアヤをつけるのが好きなんだよ。それを君、先に括ってしまったては困るね。まあ良いさ。どんな具合に縛ってあるんだ」

「なにね、後手ですよ。釈放の時に署長がうるさいから、あんまりひどい曲芸もさせられんと思っただけ」

「いや、手首でも足首でも、何か手拭のようなもので巻いた上を固縛りにすりやいいんだ。音は？ 泣きが聞えると、一寸拙いぞ」

「口はふたしておきました」

「どんな具合に？」

「口の中へつめましてね、救急函のガーゼでさ。ゆっくり時間をかけて、口一杯に入れました。それから、細い布切れを噛ませ、一番上を手拭の猿グツワです。豆絞りゆきたいところでしたが、あり合せのやつです」

「御丁寧なものだ。それじゃ、唸るだけか。それも大して響くまいね」

「ええ。本人はね、サルグツワをしないと、もうクークー泣いていましたけれど、扉の外では、一寸も聞えていませんでしたよ」

「だが、本泣きは、又一段と張り上げるぜ」

「大丈夫ですよ」

「どうだい、良い身体をしてるかね」

「そりや。まあ御覧になれば、主任だって若返って、どうしようもなくなるんじゃないですか。私なんか、独り者だから、とてもじゃないがたまりませんや」

「そこが又、こたえられんのだろうさ」

「それよりもね、主任。中野あや子は、中々こった身なりですよ。これが見ものです」

「こった身なり？　むいてあるんだらう？」

「いえね、裸は裸でも、一寸色どりは残してありますよ。さっき主任が言ったじゃないですか。イヤイヤをムリに何とかってね」

「へへえ、そりやどういことなんだ」

「下着ですよ。スリッパは取っちゃいました。が、パンティだけは、はかせたままです」

「いいねえ、そろそろ地下へ行くか。弁天様を拝みに、それも縛られ弁天か」

地下の第三調室。

八畳間位の大きさ、電燈は明るい。木の椅子や卓子、調べに使用する縄や天井についている鉄環など。〃調べ〃とは、はじめから拷問のことである。

主任と刑事が鉄扉をあけて入ってくる。

「うーん、なるほどね」

「どうです、只簡単に括ってあるだけです。本縄は、主任、あんたやって下さい。」

「そうか……。オイ平野あや子。お前は隣の黨員下田の友人であるだけだと申立てているが、こっちにや、ちゃんと調べがついているんだ。おまえも最近入党している筈だ。先ず、それを正直に白状しろよ。でないと、どんな目に会うか判らんぞ」

（その娘の声）「ムムム、ウウフフ」

「言わないね。主任、こりや中々強情だ。それ位の強情で声が出ないことはないんだ。言えよ。ハッキリしなくても、大体判りやいんだ」

「言わないな、さっぱり返事が聞えやしないじゃないか。言えよ」

娘の唸り声、かすかに、「ムムムウ」

「よろしい。じゃ、牀に聞かす。おい君、椅子を使おう。立ったままじゃやりにくい」

「椅子へ、どうします？」

「正面を向かせてな。後ろ手がそれじゃ、楽すぎらあ、高手小手とゆこう。それを椅子の背へ吊り上げるよ」

「よし。おい、こっちへ来い。それ、椅子へ掛けるんだ」

「それから足だ。グッとひろげさせて、椅子の両脚へ縛れよ」

「うーんと。それ、もっと開くんだ。力を入れたってだめだよ。こうですか、主任」

「拙い方がたらないね。まあいいか。それでこりや又、ずい分色気のあるパンティだな。近頃の女子大生ってのは皆んなこうかい」

「若い女の子のことは一向に知りませんがね主任、高手小手、両脚ひらき椅子しぼり、サルグツワ、当年二十一才の太りじしの生娘。どうです。こら辺りで泣かせましょうか」

「いたい目をさせるのは、素人のすることだよ。痕を残さぬようにすることだな」

さて、此処で、可憐ないけにえ平野あや子の光景を描こう。

あや子は、そのポップカットの髪をふり乱して首をふっていた。それだけが動かせる体の一部だった。上半身は、その両腕を背に回され、両手首を固く括られて胸乳に回した縄尻にグッと引き上げられ、高手小手。



Y組六十集 大名刺判(9×6.5) 印画紙焼付

つきたての餅のような真白でやわらかな足の裏に、執拗な鳥の羽が、こちよこちよと擦りつつけるのだ。足の拇指をくの字に曲げて懸命にくすぐったさをこらえるのだが、がちりと足首を椅子の脚に括られているので、悪魔の触手から逃れることはできない。

乳房、胸、太股、両腕、腹が細かな波のようにあえぎ、のた打つ。

つらい。擦りたい。たまらない擦ったさ。叫ぼうにも、固い固いサルグツワ。

二人の刑事は、ギラギラと輝く目で、彼女の悩乱をじっと冷たく見すえながら、彼女の足の裏の指のつけ根のところから、土ふまぜにかけて、執拗にくすぐり続けた。

(おわり)

Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y
60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	
エビ責めの表情	聖壇のさらし者	股間縛開股の絵	前手錠全裸像	膨隆突出した臀部	緊縛女体の開陳	カメラに晒す全裸	不行儀姿態の美	柱縛り観念の図	手吊り裸身の乱舞	ワンピース縛り	長襦袢後手しばり	振袖令嬢後手責め	全裸寝台羞恥責め	全裸後手壁ハリツケ	後手立木縛り	全裸変形時間正面	あられもなき開股	艶艶ハダカ縛り	
(絹川文代)	(絹川文代)	(絹川文代)	(大塚啓子)	(絹川文代)	(絹川文代)	(大塚啓子)	(絹川文代)	(絹川文代)	(絹川文代)	(花坂道子)	(花坂道子)	(花坂道子)	(花坂道子)	(愛川悦子)	(村井知可子)	(大塚啓子)	(大塚啓子)	(絹川文代)	

# 緊縛フォト撮影の実際

△モデルと読者の便り▽

塚 本 鉄 三

(館典子の均整のとれた縛られポーズ)



## 撮影の要領

- 一、モデル……………大塚啓子、梨花悠紀子  
絹川文代、愛川悦子、館典子、竹野ひろ子
- 一、撮 影……………塚本 鉄三
- 一、カメラ……………各種まちまち
- 一、フィルム……………ネオパンSS
- 一、現像液……………D76並にD72
- 一、印画紙……………シーガルF2・3・4
- 一、照 明……………自然光並にリフレクタ  
ーランプ、時にストロボ・ライト。

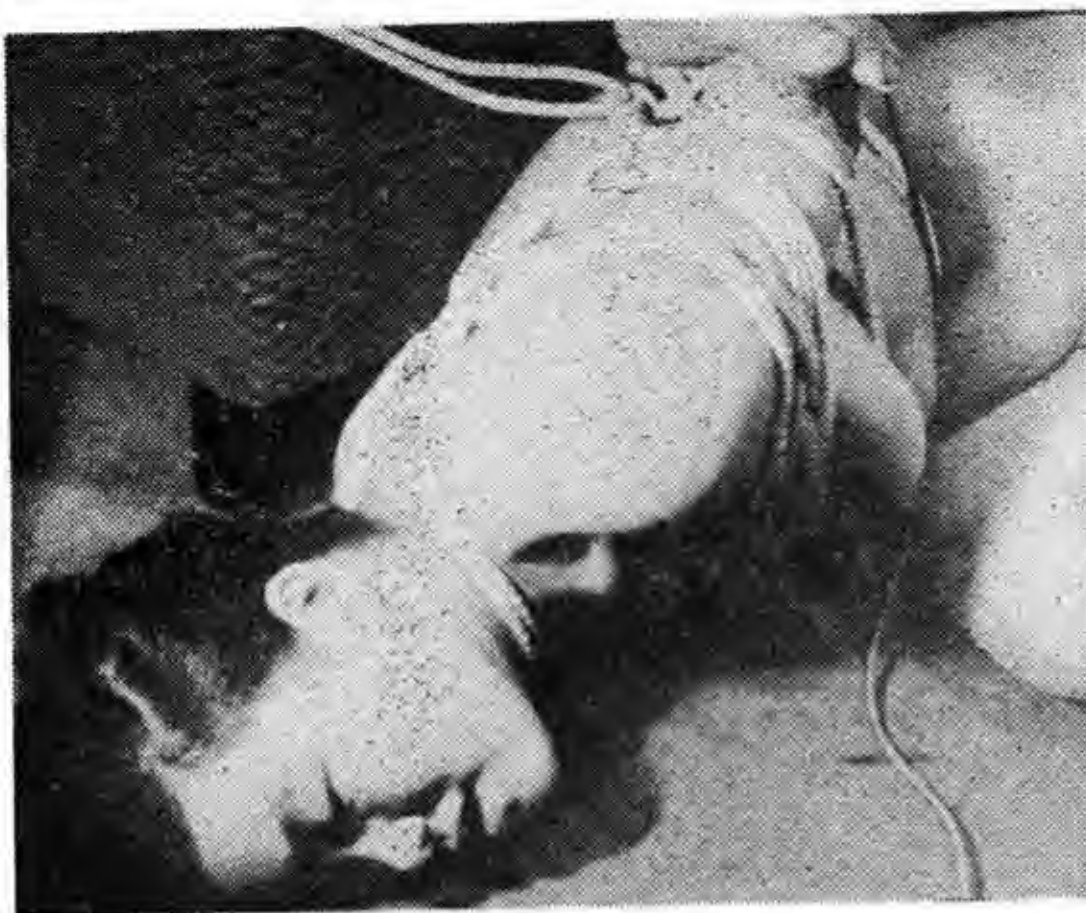
## 読者からの便り

この「緊縛フォト撮影の実際」もここ二月ばかり休ませて頂いた。その後、熱心な読者の方から、楽しみにしている「撮影と実際」だけは是非続けてくれという通信が沢山寄せられてきている、というので、とにかく此処に再開することにした。

実は先々月号の分としては、愛川悦子嬢をモデルとして既に撮影も終り、印画紙の焼付も済んで掲載できるばかりになっていたのだが「縛り初めから猿ぐつわを掛けるまで」といったテーマは、時節柄誤解を招くおそれもありこの際適当ではないという編集部の見



(大塚啓子の悦虐の表情)



だったので、一応保留となっていた。

早速他のアイデアで撮影し直すことになっていたのだが、実のところ私も出鼻をくじかれた恰好で気のりもなかったし、それに他に頼まれた出張撮影の仕事なんかも忙しかったので、ついこのびのびになっていたというわけである。

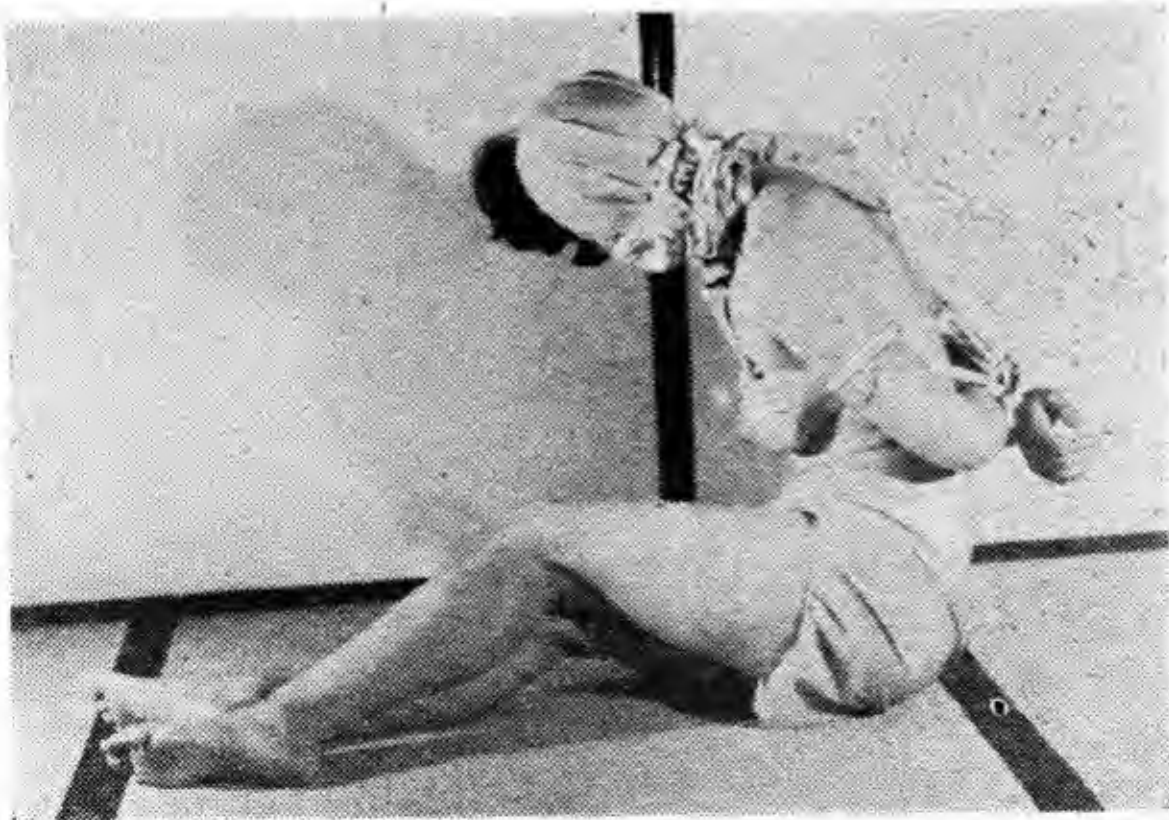
けである。

休載中も読者の方々からは私宛の私信などもいろいろと頂き、中には既載の写真を材料に懇切なアドバイスをして下さる方や、或は御自分の体験や資料を提供されるなど、大変啓発もされ、又大いに参考にもさせられた。自分としては拙い雑文で恐縮に思っているのだが、これによって慰められ、新しい生活の張り合を感じるというようなお便りに鞭撻され、更に一層充実したものに、御期待にこたえたいと思っている。

「緊縛フォト撮影の実際」という題名であるから、読者同好者の方々を親しく実際に撮影の場面にお招きして、具さに鑑賞していただく、といった気持で御紹介したいと考えているのだが、なにしろ平常は余り持ち慣れない禿筆を馳せるのであるから、うまくリアルに描写することも出来ず、美しく表現を飾るといったテクニックも知らず、つい自分の独りよがりの文章になってしまって、いつも印刷

されてきた雑誌を見ては、内心冷汗をかいている始末である。

まあ、多くの読者の方々からの通信に力を得て、辿々しく書き綴っているといったのが



(ゴムマニヤの竹野ひろ子のポーズ)

(魅惑的なまなざしの梨花悠紀子)



対する回答などを織り込んで、今月の「緊縛フォト撮影の実際」の稿をすすめてゆきたいと思う。

### モデルらしからぬモデル

本誌の口絵では今までに何十人かのモデルが活躍しているが、同好者の方々にも、それぞれの好みがあつて、どのモデル嬢にも、それぞれ熱心なファンというものがある。

それは、奇クサロンあたりに「モデル嬢への便り」といった文章でその渴仰の意志を表しているが、それはほんの氷山の一角であつて、本当は夥しい数のファンレターが寄せられているらしい。

分譲写真なんかでも、或る特定のモデル嬢のものばかりを集めている人もいるということとを聞く。自分の趣向に合ったアイデアのもの、例えば「猿ぐつわ」とか「吊り」とか、「鼻責」とかといった狙いでコレクションする

人もあるだろうし、大塚啓子さんの黒髪を膝あたりまで垂れているのが好きだからといって、彼女の髪を中心に集める人もあるという



(セーラー服姿の梨花悠紀子)



ことも、うなずけることである。

簡単に分けて、肥った人が好きとか痩せ形の人が好みに合うとか、人それぞれ趣向が違うのが当然である。絹川文代嬢の脚線美を愛する人もあるだろうし、高くツンとした鼻を虐めてみたいと思う人もあるだろう。

梨花悠紀子嬢の吊りを中心とした強烈なフアイトに同調する人、或は哀愁を帯びたマスクに責めの醜態を感じる人。桜井葉子さんの膨大な乳房に永遠の女性を思う人、愛川悦子さんの野性味の中に捕獲された野性猫の精悍さを愛する人、辻村隆氏の開拓された竹野ひろ子嬢の初々しさの中に、モデルらしからぬモデルの美しさを発見し、そのゴム偏執への共感から第一番に推す人もある。

アバタもエクボという諺があるが、自分の好みにあったものは、最大級の賞讃の仕方をするが、好みに合わないものは、クソミソに云う人がマニヤの中によくある。それが自分では、そう極端な云い方はしていないと大真面目なのだから尚更始末が悪い。

モデルらしからぬモデルとして挙げた竹野ひろ子嬢は、本誌の読者通信からの縁でカメラの前に立って、初めて縛られ姿を現わしたわけではあるが、もともと、そういう雰囲気

に対する願望と期待とを持っていたのであるから、ビジネスオンリーのモデルではないが第一回目の撮影は、その点容易に導入できたことと思う。

本誌の口絵に活躍するモデル嬢は皆それぞれに個性を持った美しい人であるが、或る年輩の読者の方が、通信で言われた如く、殆ど全部の人が家庭婦人になられたときは、本当の意味でよい妻となり、理想の配偶者になれるような気がする。モデルらしからぬモデルといわれるが、専門のモデルというのは一人もいない。その点、モデルらしからぬ、というのも当然といえよう。

### 撮影と季節

一年を通じて一番条件の悪い季節は、七、八月の盛夏である。野外室内を問わず、この盛夏の候は、撮影する側もモデル側も、全く暑さにいかれてグロッキーになってしまう。

室内では先ず冷房がないことにはライトの熱でシャッターを切らないうちに、双方とも先に参ってしまう。その点、どちらかといえは冬の寒さの方が、撮影者にとっては結構だと云いたい。大体、モデル嬢は寒さに対しては強い。短時間だったら、二月の寒風吹きすさぶ室外だって辛抱するモデルもいるし、肌を刺す寒風が一種の刺激になるのか、自分からすすんで、申出るモデルもいる。

しかし、そんな無理をしても、苦勞した割



(端正なポーズで坐する絹川文代のサポーター)

に余りいい写真もできないものだ。今年の冬雪中の縛りヌードをとろうと、わざわざ琵琶湖北岸まで車を飛ばして見たが、出来上った写真そのものは、大して迫力のあるものではなかった。写真そのものよりも、撮影の苦心の方があとから見て楽しかったし、モデル嬢にしても、猛吹雪の湖岸をドライブして、縛られた裸を雪の中へ転がそうと大騒ぎしたところの方が面白かっただろう。

やはり、一年中で最もよいコンディションの季節は五月に指を屈するだろう。摂氏二十度という気温が裸になる適温だそうだが、お天気の良い日だったら室内でも窓を開け放って、すがすがしい五月晴れの空気を部屋いっぱいに吹き込ましながら、ファインダー・グラスを覗いていると心がたのしい。

四月ではまだまだ肌寒い日があるが、五月になると野外の撮影でも最上のコンディションに恵まれる。第一、光線の具合がよい。しかし、ハイキングのシーズンになるので、山の中なんかでのんきに撮影していると、思わぬところからハイカーが飛び出してきて慌てさせられることがよくある。

嘗て六甲の山中、北麓にて絹川文代さんをパンツ一枚にして立木で荒縄でぐるぐると縛

りつけ、ピントを合せているところへ、突然目の前にアベックのハイカーが現れたのには驚いた。二抱えもあるうかという大木だったので辻村氏との二人がかりで十数分費した縛りだけに、急に解くわけにもゆかず、どうしようかと一瞬躊躇したもののだが、その時、

絹川さんの「私はいいいから、早くそのまま撮って頂戴」という言葉にはげまされて、撮影続行をはかった。

アベックの二人は、そこがコースになっていたらしく、手をつないで前を見ないようにうつむきながら繁みの彼方へ消えていった。やはり五月の晴れた日だった。

溪流に沿った道端に、新緑の楓が余りにも美しかったのでモデル二名、撮影方三名の計五名にて、急拠撮影を開始したことがあった



(縄によって誇張された愛川悦子の乳房)

が、なにしろ道路の上なので早速、若い男が通りかかった。溪流沿いにモデルを配し、反対側の土手の上にカメラを配して、すでに連続撮影に移っていたので、途中で中止するわけにゆかず、そのまま続行していたところ、その男が顔を真赤にしてマゴマゴしていたのは気の毒だった。

ブラジャーにパンツというビキニスタイルの二人のグラマーが五月の皆さんと降りそそぐ陽の下に忽然と現れていたもので、きつと



びっくりしたのだろう。我々もその場面の撮影が終わると、ライトバンに乗り込んでそうそうに立ち去ったことであった。

### モデルと縛りのムード

誰しもモデルとして初めて縛りを受けることは、大きな不安を感じるに違いない。これ

は自分からすすんで希望してきた人にしても同じだと思う。だから辻村氏が嘗て言っておられたように、最初は不安がらせないためにそれを納得させるのに非常な努力を払ったのであったが、最近では慣れるに従って、そういう努力もおこたり勝ちではないかと、いささか反省させられる。



(竹野ひろ子のホータイ猿ぐつわ)

今でこそベテラ

ン中のベテランとして、吊り責めをはじめとしたあらゆる強烈な緊縛を申出て、かえって我々の方が辟易するくらいの成長を遂げた梨花悠紀子さんにしても、一番はじめの撮影のときは胸がドキドキして、とても耐えられそうでなかったようである。しかし、一度、二度、三度とカメラの前に立って

るうちに、自然に縛りのムードの中に溶け込んでいって、やがては自分の美しい被虐ポーズを多くの人に見られたいという欲求が湧いてくるのであろうか。俳優商売は人間の露出症欲のあらわれだと云われるが、モデルにしても、そういう微かな心の奥底の求めが、撮影の雰囲気の中に兆していることはよく見受けられるのである。

新しいモデルの発掘について読者の方々からよく訊ねられるのであるが、或る程度全身の表情にムードを出させるに至るまで、相当の時間と費用、それにたゆまぬ努力が必要であって、いつの機会にか、全く新しいモデルの成長の過程を刻明にフィルムに印して記録してゆきたいものだと考えている。

幸いにして、よきモデル候補者を得たならば明日にでも着手したいものだと思っている次第だ。

× × ×

愈々一年中で最も撮影に好条件の、快適のシーズンを迎えることとなります。野外に、室内に、美しい緊縛ムードをいっぱいにふりまいて、皆様の目を楽しませたいと思っています。

(おわり)

# 今月の新版代理部分讓品

## 女体切腹フオトの部

### 一、血紅女体自害

大手札 五枚一組 四〇〇円

略号(ひち) 大塚 啓子

白鞘の短力を豊満な下腹へぐさりと突き立て、きりりと臍下を切りさいてゆくと、溢れる血汐が膝までしたたり落ち、凄まじい光景の中にも美しい白肌が刃物によって裂かれる女体切腹の醍醐味が展開されてゆく。やがて左乳下の急所へ刃を当てて抉ぐると、血汐が飛び散り、最期の絶叫が放たれ断末魔の苦悶に全身がけいれんし、ぐったりと床の上に横倒しになり、白眼をむいて絶命する。

連続的な女体自害絶命のシーンを沢山の血紅を用いて真迫的に順を追って描きだした写真。血紅の使用に新工夫をこらした傑作。

### 二、女体切腹マンダラ

大手札 五枚一組 四〇〇円

略号(あま) 甘木春子外

これは本誌の読者の或るマニヤの方が、若い同好者の女性(二十才)をモデルとして野外にて撮影した女体血紅フオトです。この五枚の切腹写真は、全部屋外でしかも女性は自分の手を煩すことなく、その皮下脂肪の発達

した下腹部をマニヤ氏の手によって、きりきりとかつさばてゆかれるのです。

虚空をつかむ苦悶の表情、双の乳房を自ら握りつめて苦痛にたえる姿、背後に回った男の手にした刃物によって、自分の柔肌が無惨にも切られ、溢れる血汐がせい惨です。今までの趣向とは全く変ったこの写真の構図は、きつとお気に召すでしょう。

### 三、悲愴女体自決

大手札 五枚一組 四〇〇円

略号(ひい) 大塚 啓子

真白い肌と氷のように輝やく九寸五分の脇差の刃先が、この緊迫した空気を一層冷ややかなものにしてゐる。えいっという絹をさく気合と共に刃は下脇腹へぐさりと突きささり思わず「うっ」とのけぞる白い顔。ジリジリと真一文字に臍の真下まで引きまわし、やがて右脇腹まで思う存分に切る。額からにじみ出る汗。左掌にて左の乳房をかかえ上げ、心の臓めがけて、ぐさりと最期のとどめ、最期のとどめとしては、更に両手にしっかと握った刃を、咽喉元めがけて力いっぱい突き立てる悲壮な顔つき、若き女性の自決態勢をあますところなく、露呈した作品。

### 四、哀艶女体割腹

大手札 五枚一組 四〇〇円

略号(かつ) 梨花悠紀子

自らの手で自らの命を断たなければならぬ境遇に陥ったうら若い女性は、その哀愁を帯びたフェイスの持主であるにも拘らず、雄々しくも切腹によって、二十の花の蕾を散らそうと決心するのであった。

### 五、凄惨血紅女体立腹

大手札 五枚一組 四〇〇円

略号(ひさ) 大塚 啓子

柱を背にして立った若き女性が壮絶な立腹を演じるさまを初めから最後まで十数枚の連続フオトとして撮影した血汐淋漓たる立腹フオトの中から、特に中心的役割を持つもののみを選び出した素晴らしい一組。全身の屈曲からにじみ出る苦悶と哀切の表情。切りさいてゆくに従って、次第次第に量を増してゆく血汐を刻明に描写して一層の迫力を持たした。

### フェチ・フオトの部

### 一、バンド着用フオト

大手札 五枚一組 四〇〇円

略号(めい) 梨花悠紀子

メンスバンド・マニヤ特製のバンド着用の



ありさまを刻明且つ鮮明に美しいモデル嬢を煩して撮影しました。バンドは替ゴムの部分を着用して、はっきりと大きく見えるように位置ポーズ等に注意し、且ついろいろのバンドの着用しつつある順序の過程も、マニヤの興味ある構図でもって撮影しました。着用し終ったものばかりでなく、穿きつつある途中のシーンも極力狙いをつけました。バンドフェチの方の絶好のコレクションになるものと自信をもっておすすめします。

## 二、バンドの縛り（後手）

大手札 四枚一組 三〇〇円

略号（めろ）梨花悠紀子

後手高手小手に縛り上げられて、メンスバンドを着けた女性が、猿ぐつわとして口も鼻も一緒に掩ってしまう替ゴムが、ムンムンとするゴム特有の臭気を発散して、思わずこの女性に同情の言葉の一つも吐きたくなるというバンド縛りの妙味。その他独特のいろいろなポーズ趣向を盛り合せています。後手に固手されて自由にならないために、一層バンドの締めが足の爪先まで、よく現れております。

## 三、バンドの縛り（前手）

大手札 四枚一組 三〇〇円

略号（めは）梨花悠紀子

この四葉四種のバンド・フオトは、珍しい前手しぼりで、バンド着用の部分をクローズアップで極鮮明に、四種さまざまな脚挙ポーズによってキャッチしています。従ってこれはまさにメンスバンド中心のSフオトで、変化のある下肢の動きは、モデル嬢の伸びやかな姿態によって美しく描かれています。

## 四、女性の六尺禪

大手札 五枚一組 四〇〇円

略号（ろく）大塚 啓子

女性の六尺禪姿を愛する方は、そう沢山いないと思いますが、その限られた人たちの要望にこたえて、ここに全裸に晒の六尺一本という若い女性のポーズ五態を作成しました。正面、背面、横臥、側面、とフンドシ着用の女体を各角度から狙いをつけて、あたかも眼前に手にとるように見て頂けるように構成しました。

## Mフオトの部

### 一、足で戴く珍味

大手札 二枚一組 二五〇円

略号（くさ）絹川 文代

足の拇指と中指とで挟んだ最中を、そのまま口で直接戴くのはマゾヒストの夢にまで描いた幸福の構図である。絹川さんの白い足

の指にあやかりたい方は、先ずこの一組によって果されるだろう。

### 二、靴の下に蠢めく

大手札 二枚一組 二五〇円

略号（くつ）絹川 文代

鋭く尖ったハイヒールの靴先が、或は踵が口の中へぐっと押し込まれる汚辱の瞬間。床の上にじかに転った顔を踏みにじめるように迫ってくる靴の裏、鼻も唇も押しひしゃがまれてざらざらとした感触にむせび泣くM男。

## 特殊Sフオトの部

### 一、縫袢浣腸責

大手札 四枚一組 三〇〇円

略号（せち）大塚 啓子

ガラス製三〇CC浣腸器、エネマシリンジを用いて浣腸を施したモデルに縫ゴムのオシメカバーをつけさせ、後手に縛っておいておくと、忽ち七転八倒の苦しみが襲ってくる。その有様を執拗にカメラは狙ってゆく。

### 二、乳房責

大手札 三枚一組 二五〇円

略号（とい）梨花悠紀子

ヒョウタンのように根本でくびられて、もうこれ以上大きくならないと思う位虐げられた乳房の大写し三態。女性の乳房に関心を持つマニヤに捧げるフオト。

昭和三十六年

十一月特大号 (定価二百円)

目次裏「川柳、マニヤ幻想句」「リンチに遭う小鳩」第一グラビヤ「緊縛美の祭典」第一口絵女相撲（外掛け）。スケを張れ。坊主の嫉妬。車輪とムチ。深夜のオフィス。悪童日記。学生馬。殉死。第二グラビヤ「アブ双曲線」第二口絵「雑踏の中の孤独」

奇クの性格について……………衣軍一  
奇譚三十九夜物語……………辻村隆  
東映、最近の縛りシーン……………東山映史  
野に散る花（女学生切腹）……………黒木誠夫  
生涯の灯は何処に……………小林京吾  
女斗美絵巻「熱戦譜」……………雪崎与志夫  
シナリオ「ジエラシー」……………丘本英二  
緊縛フォト撮影の実際……………塚本鉄三  
猿轡考……………原白  
切腹実見記と雑感……………田地原規雄  
フアンタジャ・マゾヒスティ……………力山本節夫  
切腹と白足袋と女装……………桜恵之助  
女相撲物語……………雪崎京人  
連載宇宙のどこかで……………佐治麻人  
創作異教徒……………草薙久風  
奇クサロンII作者名について……………浣腸他  
詩。私の描いた賣画。切腹……………榎村。奏  
創作樹の壁……………真村。浩  
ぜいに……………北村。二  
大奥裸女血斗の果て……………吾嬬。博  
灸責め熱海の一夜……………保田。徹  
わが甘美なるもの……………とや。ま  
手記。私の実験……………笹生。緑  
麻生保氏の生活と意見……………恒川。文彦  
おまじない……………中平。靖  
告白。足の美しい女……………三好。謙  
「火星への招待」……………読者通信

十二月特大号（定価二百円）

目次裏「川柳・情緒日本調」「獣人街  
の競り市」「第一ウラシヤ」「緊要美の登

典。第一口絵雨中の折檻。カラス蛇の  
 鼻。高慢な鼻を灼く。奇怪な湯浴み  
 場。マゾ画廊。アクロバット・ダンサ  
 ー。第二グラビヤ「美しき女囚吊り」  
 他。第二口絵「緊縛フォト撮影の実際  
 」。前手縛り縄抜けの一例」  
 千草氏の論理……宇宙人  
 告白「廣医者」……渡辺 かね人  
 女斗美絵巻「引落し」……雪崎 京人  
 体験告白「黒いコート」……宇野 一  
 思ひ出すことども……中康 弘通  
 奇譚三十九夜物語……辻村 隆  
 マゾ小説 奴隷哀歌……獅子鼻  
 わが身を灼く屈辱感……とやま 明  
 創作 ミシンを踏む女……三条 卓史  
 レボ「ひろ子緊縛記」……辻村 隆  
 女性切腹「凶礼式」……数寄 良人  
 マゾ通信 馬と女性……鞍 咲  
 おむつカパー「試作室レボ」……関根 彰  
 創作 老画家の手紙……榎本 秀彦  
 女形の想い出 仮装の一夜……阪東 秀美  
 平家の馬場秘聞……桂 牧次郎  
 奇クサロン「泥中の蓮たれ」……灸責 フォト  
 思いつくまま。絵画と写真のアイディ  
 ア。私の好きなネル。倒錯のための倒  
 錯行為。私の切腹。あるカメラマンの  
 自伝。連作（少女）。花嫁の靴。お尻  
 頌歌。サドと呼ばれる出戻り娘。他  
 連載 宇宙のどこかで……佐治 麻造  
 浣腸雑記……北沢 操  
 日本アマゾン記「遠淡海」……二俣 志津子  
 旅と女と縄と……南方 佳男  
 続・白足袋のこと……木下 明美  
 梨花悠紀子と猿轡……藤本 謙久  
 体験小説 愛のブレイ……志麻 二  
 絵物語「嫉妬夜叉」……杉原 虹児  
 読者通信……

昭和三十七年

一月特大号（定価二百円）

目次裏「悦唐川柳ムード集」「少女大相撲」第一「グラビヤ」「美しき緊縛」第一「口絵」泰安祈願の生贄血。踊子の訓練。奇妙なドレス。尻の玉屋。新年歌。多留。取り。重量感。人妻椿。十五夜。第二「グラビヤ」「捨てられた人形」他。第二「口絵」続・ひろ子緊縛記。おしめ。第二「口絵」ガール」「緊縛ブオート撮影の実際」逆エビ縛りの一例」

懸賞応募「うつばかずら」……翼 羊三郎  
告白 女の復讐……石井 章造  
女体切腹小説「十五夜」……山岸 操  
告 女の復讐……長 濱 文章  
体 女装生活の幸福……恒 川 彦一  
マゾ放浪記 美しき脅迫者……水 波 清一  
少女のお灸折檻……江 波 好子  
私の楽しみと浣腸ブレイ……佐 治 太一  
連載 宇宙のどこかで……森 麻造  
ヘルニヤ少年特別検診……北 潤  
創作「雷賣抄」……倉 仁 成人  
馬化狂通信 乗馬風流譚……と 倉 仁 成人  
わが生涯の良き日……と 倉 仁 成人  
奇サロンK誌はエロ誌か。……白 肌  
と網。巷に拾う「浣腸」の絵。他。……白 肌  
体 釜ヶ崎の女……長 田 景三  
御土産女相撲……円 山 京人  
女斗美絵巻 あわやの一時……雪 崎 四郎  
蛙腹のアイディア……瀬 沼 芳一  
川端多奈子嬢に……近 藤 一郎  
体 験 小 説「禪(さいじ)」……久 我 芳一  
麻生保氏の生活と意見……辻 生 隆保  
奇譚三十九夜物語……東 村 一郎  
白い部屋の片隅から……須 藤 一  
針とお臍と……須 藤 一  
創作 体液銀行……角 田 三郎  
体 験 小 説 夜の告白……村 田 雪夫  
絵物語 狂熱の鞭……岡 田 千春  
読者通信……岡 田 千春

二月特大号(定価二百円)

目次裏「風流いろは歌留多」「珍魚吊  
り第一口絵九な初雪。香水のかおり

あはら家。珍妙ビール飲法。迷える小  
羊。柱と鏡。晴衣の令嬢。懐槍のイメ  
ーシ。グラビヤ。粘着する嵌口具。他  
第二口給女相撲図絵。四馬孝新作賣圖  
集。「緊縛フオト撮影の実際」

K誌はマニヤ誌である……………南村俊平  
小論、私の希望……………四季春彦  
淡い想い出「賢母」……………西田仁  
或るおむつマニヤの夢……………赤井茂  
奇譚三十九夜物語……………辻村隆  
フアンタジヤ・マゾヒスティカ山本節夫  
創作「絆」……………近藤一  
わたしは牽仕がしたい……………とやま  
連載「宇宙のどこかで……………佐治麻造  
女体切腹「百舌鳥」……………石井章造  
提案「私は訴える……………高崎勉  
通信「洋画の縛り映画……………東山映史  
女斗美絵巻「芳汗淋漓」……………雷崎京人  
奇クサロン「悩みに答える。天声虬言。

奇ク論争に寄す。最高のキス。未知への  
恐怖。私のサド遍歴。樺について。  
M謎々。女体と縄の反応。船倉の少女  
首締め。ある女とある男。「女禪」へ  
のあこがれ。竹野ひろ子様へ。メンズ  
の数学。アブ誌探点表。韓信の股くぐ  
り。まぞ川柳自註。アブチック・アブ  
リカ。奴隷の一日。切腹のSM性。他  
懸賞入選。黒い夢を抱いて……………京信司  
願望告白。ドレイ・ボーイ……………津久井毅  
「こんな映画をつくりたい」……………南方佳男  
空の流腸器……………山岸悠子  
妄想「少年モデル訓練所……………杉俊夫  
妊婦の切腹。絢爛たる復讐……………黒木節夫  
百枚読切「契約書」……………北村浪々  
色頁。魅せられた舞台……………柴里雷九  
読者通信……………



六月号(定価二百円)

巻頭口絵。重量テスト。蠟淚文字。橘の  
 袂の仕置。海の幻想。逆手。物置小屋  
 の花。あくどいいたずら。或るビジネ  
 スガールの自害。グラビヤ「濡れた塑  
 像」。「板の間の艶姿」。「黒蛇」他。遥  
 創作。裸形の略。体験。……松本瑤智子  
 告白。小説。鉄の指。……西田和夫  
 M小説。銀幕の残酷シーン。……吉田一夫  
 女優記。身悶えるあけみ。……近藤悦代  
 解剖異聞。哀恋腑分奇談。……伊藤高志  
 和解趣味。或る妻の記。……牧佐治  
 連載。宇宙のどこかで。……南方佳男  
 不浄なる聖物。……と南  
 フアンタジヤ・マゾヒスティカ山本節夫  
 小説。牧神の饗宴。……香椎隆彦  
 奇クサロ。網ネルの感触。四月号。……女相撲後感。い  
 出話。女子寮の争い。……ガン作  
 外国映画にみるS Mシーン。……ガ  
 マニヤのノート。社長と女秘書。夏  
 夜の夢。私はしもべ。まぞ川柳、わ  
 知り。女装愛好家へ。……京町柳一郎  
 モデル嬢へのお願。アブ散歩、何  
 も書こう。鼻はかわい。愛玩物。ア  
 ストラクト。竹野嬢への私感。他  
 「錠」について。……近藤一  
 奇譚三十九夜物語。……辻村一  
 映画「肉体市場」を觀て。……近藤  
 足についての文献と記録。……木村  
 告白。刺青マニヤの弁。……田中  
 マゾヒズム天国。……田沼文男  
 体験小説。愛實記。……斎藤醜男  
 体験記。学校保健婦として。……渡辺京一  
 告白小説。悪の半生記。……日影狂太郎  
 女性のお腹（英雄芸者）。……数奇宏  
 おむつ憧憬。……高原の一夜。……多摩  
 読者通信。……





春らしくなりました。御社の御発展を心から御喜び申し上げます。編集部の皆様、お元気でいらつしゃいますか。私は数年前の貴誌に一度、告白文を載せて頂いたことがあります。その後はずっと読ませて頂くだけで御無沙汰いたしました。今度又々お恥しい拙い告白を文にしましたのでお送りいたします。どうかお目通し下さい。よろしければ、此の次には御誌にある責絵やお写真、又読物を夫と共に研究させて頂いて、

告白文を書かして貰います。又写真もとってもよく撮れていますので、お送りしたいと思いますが、写真の誌上発表は夫に差支えがありますので、躊躇いたしてあります。毎週土曜日の晩は悦唐遊戯の時間と定めております。ぐっすり眠りまして、目が覚めました時は、日曜日の朝の光線が、雨戸やカーテンの隙間から、居間の壁に縞模様を描いて写っています。夫は、かすかないびきさえかいて、まだ夢の中をさまよっています。私は明るい陽ざしのさす机に向って今このお便りを書いていきます。同封の告白文は、私達の悦唐遊戯のことを何のかくしたでもなしに、あからさまに書き綴ったものです。文章があまり上手ではないのでお読みづらいこととは存じますが、すべて本当のことばかりです。その点だけは信用して読んで頂きたく存じます。写真も同封すれば尚一そう信用して頂けると思うのですが、夫がとても納得しないと思いますので、今回は文章だけにいたしておきますが、いずれ次の告白文をお送りするときにも、一応お見せするだけでもしたいと考えております。今後、よろしくご指導下さいますようお願い

いたします。(東京八坂井美知子)

奇クを愛読してから一年半程に成りますが、特に「宇宙のどこかで」は最初から楽しく読ませて頂いて居ります。私も皆様の御便りに刺戟されて初めてお便りさせて頂きます。五月号で拝見の中村武志様の「ドレイボーイへの手紙」で貴男の様な強い崇拜出来る方が居られるのを喜びと致します。小生三十二才、小企業ながら社長と言われる身分ですが、未だ完全なブレイを楽しんだ事は有りません。中村様如何でしょう。私の年令では飼って頂けないでしょう。か。もう一匹馬を飼う積りで是非私を使役して下さい。食事など残飯でも又豆腐のオカラでもなんでも結構です。現在迄生活的に余り境遇に恵まれて居ります為に何一つ出来ません。体重も二十四貫とデブで動きの無い私を牛馬の様に鞭で追廻し酷使して頂けたら、私は貴男に合掌して隷属を誓います。暇も有る体でありますので、月極め奴隷として契約させて頂き。必ず御満足される家畜奴隷と成る様に努力致します。尚他に御主人と成って頂ける方は、男女どなたでも結構ですが、年令は

なるべく若い方又は中高大学の学生さんでも宜敷いのです。年令的に年下の御主人に鞭で追い廻される私は想像致す丈でも血が高鳴ります。然し家畜にしても生きもの故に、余り虐待致しますと逃亡の恐れが有りますので、逃げられない様に万全を期すか、又事前に充分訓練して馴らすか、尚其の様な気配が見られる時は容赦なく処罰して頂き、其の為には首輪、鼻環、クツワ、手錠、足鎖、焼ゴテどんな御仕置も甘受致します。鞭はなるべく尻に御願ひ致し、其の他の所は外見上出来る丈さけて頂き度いのですが然し家畜奴隷の身でありますので、それも勝手は申しません。存分にして下さい。どうか中村様又はSの男女性の方、御連絡下さい。私の御主人様に成って下さる御方に五体全部捧げ奉仕致します。農家で若い娘さんに鼻環を引廻され、後から男性に鞭で追われて居る牛を見る度に、人間と生れて来た事が悔まれます。どうか望みを一日も早くかなえて下さい。又西村良子様、私で宜敷ければ御連絡下さい。(東京都荒川区八山崎生)

私の楽しみは女装です。しかし



私の女装振りが上手か下手か自分ではわからないので、同好の方に見て欲しいのですが、残念ながら友達がありません。以前にもこの頁を借りて私と交際して下さるよう書きました。どなた様でも結構ですから同好の方で私と交際して下さる方はいないでしょうか、お願い致します。そのかわり御希望条件等がありましたら応じます。本誌三十六年六月号の私の女装遍歴にありますように、赤い腰巻の色気に魅せられて以来女装を楽しむようになりました。女装同志で女言葉で話し合ったり、一緒に外出したり、映画館等へ行けたらどんなに楽しいことでしょう。私は独身ですからいつでも好きな時に女装できますし、誰に気兼ねする必要もなく気楽です。女装マニヤの方で家人の手前自宅で女装できない方や、場所がなくて困りの方がありませんら遠慮なく私方をお使用下さい。旧式ながらカメラもあ

## 代理部分譲品総目録 完成

お待たせいたしました代理部分譲品目録が出来上りました。写真入りの総目録です。あらゆるマニヤ向分譲品を網羅いたしました。御希望の方は十円切手同封の上お申込み下さい。早速お送りいたします。

りますから様々ななまめかしいポーズをお撮りになっては如何でしょうか。私は夜外出する時にはピンクガラスの眼鏡をかけます。これは男の眉と眼のいかつさをかくし、女らしく見えるからです。着物の下前を少し折返して着付ると裾さばきがよいし、風が吹かなくても少し裾が開いて真紅の長襦袢が白足袋の上にチラチラこぼれ散ります。(横浜市八伊佐正幸)

一度でいいから載せてほしい、載せてほしいと思つて書いた自分の手記でしたが、いざ活字となつて雑誌に組まれていたのを見ますと、穴があつたら入つてしまいたいような恥しきで身体中が真赤になつてしまいました。素裸の自分が、白昼の太陽光線の中で沢山の人たちから、じろじろと眺められているような恥しきでした。その日、自分の部屋で一人っきりになつた私は、姿見に自分の顔をうつ

して「晴子のバカ、晴子のバカ」と、鏡の中の自分に向つて罵倒しました。本当に唾でも吐きかけてやりたい気持ちでした。私の心の中には、二人の晴子がいる。そうです。身体はたしかに一人なのですが、心は二人なのです。鏡にうつっている晴子と、ここに座っている晴子と——。それからの私は、おこりが落ちたように正常に戻っていました。或は一人の晴子の露出症癖と自虐症癖とが、告白を奇クに載せていただいたのを、きつかけに、すっかり満足してしまつたのでしようか。暫くは平穩な心の日々が続きました。時折は、四月号の雑誌をとり出しては、自分の文章の載っているところを開いては、今更のように心のやすらぎをおぼえるのでした。しかし、あの文章を何度も何度も読みかえしている中に、自分の実際にやってきたことは、あれだけではなかつた、という気持ちが強く起つて、な

でも、いくら晴子にでも、そこまではよう書きません。いや、はじめてのお手紙では、恥しらずの女と思われくらゐのことまで、あからさまに書きましたが、編集部の方の手で削られて四月号のあのようになつたのです。それで私はまたまた下手な手記をばつぽつと書き初めました。とても皆さまに読んでいただけようなものではございませんが、これも自分のペールをはいで素裸の自分を見せたいというはかない欲望のあらわれだと思つております。今日も私は一人住居のアパートの部屋で、華やかな空想の中に包まれて、ちよつぴりのプレイジミタ控え目の行動の中で久しぶりの休日を通しました。(和歌山人水口晴子)

KKの皆様、初めて投書致しますが、一年程前、貸本屋で見つけて一度に愛読する様になり毎月出るのを待ち構えて読んで居ます。特に浣腸欄になると胸はずく感動します。私も常時浣腸して居ますが、女性の方に多い経験の事と申します。外出して小用現象の時、其処此処トイレを探し歩いて、やっと見つけたところが満員



で、待ちに待って用を足した満足感に似た気持、又私が子供の頃赤ん坊のお守りをさせられた時、背中によく小便をかけられたことがありますが、その時の気持が忘れず、今でも小用マゾとでもいうのでしょうか、そんな性質をもっています。その後、近所のA子と隠れん坊遊びをしていた時、狭い材木の間で一緒にかくれていて、ふと何かの拍子にA子に小用を足にかけられたときのあの生温い感触が忘れられません。長じてA子とは無二の友達となり、浣腸ごっこの耐久力を競ったりしたこともありましたが、そのA子が交通事故で亡くなってからは、一人ぼっちになってしまい、淋しくて暗い毎日を送っております。どうか、Kの皆様、私もお仲間に入れて下さい。(京都八郷原時彦)

初めてお便りします。小生、女斗美の大ファンで特に土俵四股平氏のものに多大な興味をもっておりました。氏の女斗美考現がなくたって久しいのは実に残念でして是非限定版等で出版下さる様御願ひして頂きたく存じます。雪崎京人氏のものも実に結構ではございますが、女性同志が一騎打して勝

負をつけるのは矢張り乳房とか急所とかが攻防の主体とならないと充分な緊迫感が出ないのではないかと思います。別に長瀬昭子様の御手記がないのは残念です。宜しかったら三隅千恵子様と長瀬昭子様の勝負が行れる様に望みます。もしお二人がこちらの方でしたら御援助を惜まぬ心算です。どちらも自信満々の様です。きつと凄艶な争覇戦となると存じます。東京の方で上月ふみえ様にも是非文通したく存じます。出来れば試合を拝見できれば之にまさる幸福はございません。申し遅れましたが、小生は二九才の男子で病院の医師をしております。(東京都文京区八生)

読者の皆様、御元気でいらっしやいますか。号を重ねる毎に益々立派になる奇ク、本当に楽しみです。ございします。主人と共に二人で奇クをかこみ乍ら人に知られざる楽しみをじつとかみしめてささやかな生活をつづけております。奇クのお蔭で或る御夫婦とお友達になれ、いい方です。お互いの作品も見せ合ひしたりしています。どんな方でも普通の人間ならば他人のことが知りたい……そして出

来たらひそかにのぞいて見たい……こんな不逞な気持が心のどこかにひそんでいると存じます。私共も同じです。でもこれらのことが夫婦生活により新鮮な刺激を与えて更に円満な生活が営まれるのなら敢て間違ひでもないし寧ろ秘密さえ守れるものならば或る程度まで許されてよいというのが主人の口ぐせです。私もそうだと思つて居ります。勿論これは良識と信用が前提条件です。程度問題だと存じます。……最近では先方の御希望で同じアイデアやポーズで作品も作ってみて交換し合ったり、恥しいことですが下着類その他も交換し合つてみています。その中お会いする御約束も致して居ります。何と申しまして秘密こそが私共の家庭の鍵です。これだけは誰にもお渡しすることは出来ません。間借生活です。お手紙も奥様のお名前を頂いて居ります。文通交換とかで私はその夫の方と、主人はその奥様の方と夫々御手紙の上で御交際していろいろブレーのことや一切のことを御話しもするのです。これらのことが本当に強い興奮を私共に与えて私共のSMブレーや夫婦生活はより円満になったとさえ主人は申し

て居ります。私共と致しましては、出来れば、もう一、二の方のお友達を作ってみたいのです。何だか欲張っている様な云い方ですけど本当です。読者の方で次の様な条件の方を希みます。①、秘密と信用の守れるいい方で夫婦又は恋人同志の関係の方です。特に奥様や女の方とお話がしてみたいです。②、双方の作品交換などが可能な方、DPなら御協力できます。思ひきつて再びお便りさし上げましたけど内心ビクビクものです。本当は気が小さい私たちなんです。それから前回申し上げましたけど主人の気も変り信用しているからとのことです。男性の方でいい方なら御文通ぐらいならお友達になつてもかまいません。前にあることで一寸文通してとてもひどい方だったので私も正直なところ、独身の方でこわいんです。乱暴な方がいるんです。でもやさしい方だったら何か少し位御協力出来ることならさせて頂きます。御便りは一応まことに勝手ですが編集部の方には御迷惑でしようけいれど、編集部気付で御送頂きたいのです。大変いろいろとお恥しいことばかり書いてしまいました。が、これ位にしてペンをおかせて



頂きます。桜も咲きよい季節となりましたが、益々編集部はじめ皆様も御健やかにお過ごし遊ばされるようお祈りいたします。(香川県 山崎美代子)

奇クの皆様、はじめておたより致します。私、数年前から奇クを知っており、特に女性のふんどしの記事を持っており私自身もふんどしを愛用しております。女性がふんどしを着用するのは何か特異

に聞えますが、ある風俗歴史の本によりますと、昔の女性はお腰の下に大抵ふんどし様のものを着用していたのだそうです。パンティなどがなかった時代に生理時或は激しい運動をする時などに女性が

男性同様にふんどしを締めたのは当然と思われます。つい最近まで生理用にT字帯が用いられたのはその名残りだと思えます。奇クにも現われている様にふんどしを着用している女性はかなり居るよう

# 〔新版〕女体緊縛フォトオンパレード

R組 百花撰

大手札判 (印画紙9×13種)

各組一枚一組 (全部送料共)

一組一枚	一〇〇〇円
五組五枚	四〇〇〇円
十組十枚	七五〇〇円
二十組二十枚	一四〇〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇〇円
七十組七十枚	四〇〇〇〇円

R 10	鎖しはり晒責 (萩千恵子)
R 11	股間しはり正面 (伊吹真佐子)
R 12	女学生制服しはり (須川令子)
R 13	尻立後手しはり (萩千恵子)
R 14	開股しはり (川辺登子)
R 15	猿ぐつわの魅力 (伊吹真佐子)
R 16	トイレでの縛り (須川令子)
R 17	立木野郎しはり (村田那美子)
R 18	緊縛横臥 (厚狭春江)
R 19	足湯椅子セメ (伊吹真佐子)
R 20	いたふり (春日ルミと伊吹)
R 21	帆立しはり (萩千恵子)
R 22	強烈な椅子セメ (伊吹真佐子)
R 23	逆さ本吊りセメ (伊吹真佐子)
R 24	逆さ本吊りセメ (伊吹真佐子)
R 25	後手吊りセメ (中家文子)
R 26	股間しはり後手 (伊吹真佐子)
R 27	逆さ本吊りセメ (加賀利江子)
R 28	高小手しはり (加賀利江子)
R 29	変型足手しはり (萩千恵子)
R 30	松樹後手しはり (村田那美子)
R 31	くさりセメ (伊吹真佐子)
R 32	薄羅の後手緊縛 (加賀利江子)

R 33	股間タテしはり (中富綾子)
R 34	首逆股間しはり (坂口利子)
R 35	手足逆吊り (伊吹真佐子)
R 36	和服の後手しはり (藤田節子)
R 37	仰向全裸悦責 (加賀利江子)
R 38	後手首縛シメ (村田那美子)
R 39	乳房下しはり (伊吹真佐子)
R 40	肉体美への折檻 (伊吹真佐子)
R 41	お灸セメ (春日)
R 42	後手猿ぐつわ (伊吹真佐子)
R 43	松樹縛り晒責 (村田那美子)
R 44	コルセット縛り (中家文子)
R 45	股間しはり (萩千恵子)
R 46	手と足と緊縛 (加賀利江子)
R 47	後手しはり (萩千恵子)
R 48	御開帳 (川端多奈子)
R 49	くさりセメ (須川令子)
R 50	折檻の魅力 (須川令子)
R 51	全裸の股間しはり (大塚啓子)
R 52	逆立の折檻 (大塚啓子)
R 53	開股椅子セメ正面 (花坂道子)
R 54	腰元の吊り責 (村井知可子)
R 55	ヌードしはり (愛川悦子)
R 56	本縛しはり (田中芳代)
R 57	股間しはり (田中芳代)
R 58	落花狼藉の緊縛 (川辺登子)
R 59	樹間のハリツケ (益田房子)
R 60	帆立舟のセメ (益田房子)

R 61	逆エビ責め (愛川悦子)
R 62	変形全裸股間縛 (花坂道子)
R 63	ヌード縛り (村田那美子)
R 64	全裸横臥緊縛 (萩千恵子)
R 65	ハイヒール (須川令子)
R 66	湖畔の宿にて (村田那美子)
R 67	尻立逆しはり (大塚啓子)
R 68	下着の色模様 (田中芳代)
R 69	目隠し開股縛り (花坂道子)
R 70	後手高小手 (愛川悦子)
R 71	乳房しはり (萩千恵子)
R 72	開股ベツド縛り (愛川悦子)
R 73	全裸床柱縛り (大塚啓子)
R 74	亀ノ甲縛り (愛川悦子)
R 75	ヌード股間縛り (愛川悦子)
R 76	全裸乱れ髪 (大塚啓子)
R 77	ガンシガラメ (愛川悦子)
R 78	腎臓責め (中家文子)
R 79	後手股間しはり (伊吹真佐子)
R 80	腹丸出し猿轡 (伊吹真佐子)
R 81	破れたシユミーズ (坂口利子)
R 82	女学生しはり (須川令子)
R 83	仰向開股しはり (萩千恵子)
R 84	乳房くさりセメ (川辺登子)
R 85	野外バンド責め (村田那美子)
R 86	トイレ正面排せめ (伊吹真佐子)
R 87	開股正面しはり (伊吹真佐子)
R 88	乳房縛りセメ (佐賀美智子)



に思われます。私が考えますのに女性があふんどしを好むのには二つの大きな理由があると思います。一つは女性特有の露出症を満たしてくれること。もう一つは体をぎゅうと締めつけることによる緊縛感を挙げる事が出来ます。前者については、裾の長いズロースからパンティに、さらにスキヤンティ、ビキニパンティと下着が変遷していることなどによってうなづけることであり、後者はしばられることに快感を覚えることでもわかることです。私のお友達はブラジャーで胸を締めつけることがたまらなく、寝る時でもブラジャーを外さないそうです。私があふんどしをつけはじめたのは、やはりこの二つの理由によるものだと思います。はじめは越中あふんどし、もっこあふんどしなど着脱の容易なものを用いていましたが、これらは緊迫感が非常に欠けております。私は現在六尺あふんどしばかりを着用しています。色は下着である以上派手なものが良く私は真赤なものと水色のを三本ずつ持っています。私の場合、あふんどしは下着であると共に緊迫感、露出願望を満たす道具でもありますので巾は最小限に止め僅かに五センチです。

したがってあまりゆるく締めておくと股間から外れてしまうので注意しなければなりません。女性の場合には胸も緊縛感を望んでいる部分なのです。ブラジャーもいいですが、あふんどしに対しては不向きです。私はあふんどしと共布で胸を巻き背中を結んだブラジャーの役目をさせています。はじめから背中で結んではきつく締めませんので前で結んでから結び目を背中に回しています。これもあふんどしと同じく巾五センチの布ですから乳首を覆うだけで、この胸当てとあふんどしでは体の露出面積は最高になります。奇巧の昨年十月号の井上真澄様もこの様にしていられたようです。さて、このような下着による緊縛感には自分一人でも十分味わえるものです。しかし露出症としての満足を得るには素裸と大差のない自分の姿を意識させる相手が必要になってきます。これは恥しいと同時に私には何となくやってみたい衝動にかられます。私は次のようにして露出症を満足させています。先ず私はこの胸当てとあふんどし以外に下着を全然持たないことにしたのです。冬は保温用に長めのズロースやシャツを着ますが、夏などはこの上に直接ブ

ラウスやスカートを、特にタイトスカートをつけます。タイトスカートは少しきつい位のものをはき、スカートの上からあふんどしのふくらみを強調させています。勿論ブラウスの上からは胸当てが透けて薄く見えます。こんな姿で外を出歩くのは、はじめは夜だけでしたが、最近では日中でもこの恰好で動き回っています。かがんだ時などタイトスカートの張り切ったお尻の部分にはつきりとあふんどしの位置がわかるそうです。又和服のときは胸当てはつけず、お腰も用いないので下着はほんとのあふんどし一本になり、満員のお風呂屋で勢い良くゆかたを脱ぎ捨てた後、水色の六尺あふんどし一本の姿になった時はスウッとします。本当のあふんどし愛用者は、お風呂屋にまであふんどしを締めてくるべきではないでしょうか。この点、井上様はすばらしい私の大先輩です。(東京八小倉いくよ)

○ 僕は褌マニヤの一人です。赤銅色にやけた尻に、くっきりと白い六尺褌が喰い込んだ男性美は、僕の最も得意とする処であり且つ又最も魅力ある事と思います。前々から男性美のシンボルである六尺

褌を主題にした本を方々の書店にあさって歩きましたが中々見当らず、残念に思っておりましたが、今月はじめ貴社発行の奇譚クラブ三月号を一店舗に見出し喜んで早速購入しました。僕は元来異性には全然興味がなく、唯々真黒にやけた男性美と褌、これが僕の本命です。三月号に載せられていました僕の褌日記の「ウイクリー褌」及び読者通信に記された東京KK兄の能登半島での褌一本での生活全くうらやましき限りと十回位読みふけりました。東一兄のウイクリー褌、面白きアイデアと小生も近々ウイクリー褌を逐次実行にうつそうと計画しております。若し機会があれば東京KK兄と東一兄の六尺褌の男性美を是非拝見し、共々褌讀美に就て語りたと思います。東一兄の「緊褌会」の様なグループが札幌にもあれば真先に加入したいと思っていますが、もし札幌近辺にもその様なグループ或はモデルとして彫刻家アトリエ等あればお知らせ頂ければ幸甚に存じます。残念な事に札幌には(小生の周辺)褌愛用者が少く銭湯に行った時など赤銅色にやけた小生の裸身に真白の六尺褌のコントラストは珍しく注目の的に



## 斯道愛好家に贈る

## 悦虐写真集決定版

定価 一〇〇〇円

(略号「プロ」)

## 出演モデル嬢

絹川文代、桜井葉子、愛川悦子、梨花悠紀子、平野笑子、大塚啓子、須川令子、東浦ひかる、加茂良子、花本京子、四方清美、若原明子、竹野ひろ子、熱海容子、花坂道子、田中芳代、田原美佐子、岩井知子の諸嬢。

○本誌モデルの中、最近活躍した諸嬢の緊縛姿態の最も優秀なものばかり百二十八姿を集録いたしました。全く素晴らしい緊縛写真集の決定版です。

○書店売りは一切いたしませんので、御希望の方は直接天星社へお申込み下さい。

みて「すばらしいなあ」と感嘆の声をもらします。初めての通信にて、とりとめなく書きましたが、今後心境及び体験談等お知らせしたいと思っています。(札幌市八森昌行)

私は二十二才の公務員ですが、どなたか年上の女性の方で、文通して頂ける方はいないでしょうか。私は高校の頃からふとしたことで浣腸に興味を覚えはじめ、その後

一時中断していたのですが、最近アパートの一室で独りで住むようになったため再び浣腸の魅力のとりこになりました。誌上で同好者の方の記事を読むとたまに共感を呼びますが、只今の私には町の薬局でイチジク浣腸を買うのが精一杯の勇気です。でも、一度勇気を出して女性の方とプレイしてみたいし、大量浣腸も経験してみたいと思います。それと異性に浣腸してあげたり、その排泄物を始末したりしたいとも思います。又、誰か年上の女性から海老縛りにされて、手足の自由を完全に奪われてから大量浣腸されてみたいなどと、夢みています。夜、アパートの一室でそのような想像をするときが一番楽しみです。どなたか、私のような者でもお友達になって下さる方はありませんでしょうか。(大阪府八安田進一)

益々御発展にて愛読者の一人として喜んでおります。奇クサロンに出ております美加輪生氏の鼻輪通し、千枚通しで貫通する写真。鼻責フォトとしては素晴らしいのですが、写真が鮮明でないのが残念です。毎号「鼻いじめ」のことがほんの少しずつ出ていますが、も

っと大胆にはっきりさせて頂きたいと思えます。いつか前に「鼻いじめ」にて反省させられ懲罰を受けている記事がのせられていたが、その後も私は「鼻いじめ」を欠かさず受けて楽しませていただきます。私は毎晩、その日、柔順に働き奉仕しなかったという理由で責められます。最近では鼻責めに「鼻柱ちようちん責め」という拷問が案出されて苦しめられています。今迄鼻障子に大きく穴が開けられて居て、それに牛の鼻環をはめられて責められていたのですがその鼻障子の奥に更にもう一つ千枚通しにて(軟骨の部分なので通す時痛く感ぜず簡単に貫通します)穴をあけ、それにカードを綴る環(大きいもの直径四センチ)を通しておきます。そして今迄にあけられている大きい穴に牛の鼻環を通して二貫一三貫目の石を下げさせられます。鼻翼が牛の鼻環で引き下げられるのでカードの環は反対に上方に引き上げられることになり鼻翼はカードの環にて一杯にひろげられて、提灯の様にふくらみます。そして鼻翼は白く変色し、鼻孔からは止め度もなく透明な液体が流れ出て苦痛の為に涙を流して苦しみます。実に奇妙な

鼻になって面白い責めです。(千  
葉八古田義郎)

○ 関根様の「襦袢抄」(三月号)

に、私は五体の熱するのを押え  
ることが出来ない想いで、何回も  
何回も読み返したものです。これ  
は私ばかりではなく、同好の諸兄  
姉も同様であつたろうと考えてい  
ます。初々しい新妻が浴衣地のオ  
ムツとゴムのオムツカバーを用い  
て、大きな赤ン坊を演じる姿が眼  
に見えるようです。その上、浣腸  
を併用してのプレーはオムツ愛好  
者のみを知る楽しさでしょう。最  
近はおムツを必要とする大人が増  
えたようです。その証明は、薬局  
などで、比較的容易に大人用オム  
ツが入手出来るようになったこと  
だけで、充分肯けると思います。  
しかし、あのヌメヌメしたゴム製  
のものは余り取り扱われていない  
ようなのが残念です。やはり大人  
用ともなれば実用本位で、子供用  
のようにスマートな可愛さはあ  
りませんが、子供用の二倍以上も  
大きなカバーを見るのも楽しいも  
のです。私は短い期間でしたが、  
ある大きな病院で療養生活をした  
のですが、やはり病院では、大人  
用のオムツカバーを干してあるの

をよく見かけました。ことに私の  
病室の隣部屋で、クリームゴムの  
ピンクナイロン地に両脇スナップ  
のカバーを使っている病人が居た  
らしく、窓際によく干してありま  
した。一緒に干されている衣類か  
ら想像して、女性であることは確  
かなのですが、幾つぐらいの人か  
どんな病気だったのか訊く機会も  
なく私が退院してしまいました。  
病気で必要とするオムツと、私が  
憧れるオムツは一緒にはなりませ  
んが、大人がオムツをするという  
ことに、何とも表現しがたい魅力  
を覚える私にとっては、どんな豪  
華なものよりも素晴らしい衣裳の  
ように思えるのです。この素敵な  
下着を好む女性と共に生活できた  
ら、それこそ、素晴らしいかな人  
生、というべきでしょう。私はい  
つも、こんなことを夢みて、種々  
のニュースタイルのオムツカバー  
を描いては、ひとり楽しんでい  
るのです。(赤井茂)

○ このような報告を書き且つ種々  
御教示願いたいと決心したにつ  
きましては随分躊躇もし迷った末の  
ことでありますが、私「奇ク」の  
存在は既に五、六年前より存じて  
おり、しばしば読みふけたもの

であります。しかし実を申すと私  
自身、それ程異常な性格でもなく  
サド・マゾ或は浣腸等考えただけ  
で、時に嫌悪さえ覚える程で貴誌  
所載のいろいろの方のいろいろの  
文章も失礼な言い方ですが、大半  
はただ退屈しのぎに、半ば疑いな  
がらもひろい読みしていたに過ぎ  
なかつたのであります。しかし敢  
てこのような告白を決心致しまし  
たのは、一年程前より私自身に重  
大な変化がおこり、それ迄想像も  
しなかつた世界を知るようになって  
たからであります。一昨年の夏、  
私はある女性と知り合い更にこの  
女性と姉妹以上に親密と想像され  
た今一人の女性と交際するように  
なつたのであります。この手紙を  
書くにあたっては、あくまで三人  
の秘密として絶対に他人に洩らす  
べきではないという意見も当然あ  
り、発表するしない盛んにもめ  
たのであります。結局誰かに話  
して更には私共三人の遊戯(こう  
私共は称しております)に対して  
今迄奇ク誌上にあらわれた浣腸愛  
好者の方々から何かの参考意見で  
もあれば聞かせて欲しいという図  
々しい考えがこうして押切ったわ  
けであります。私のこの文をお読  
みになりました編集者お一人の胸

男性マゾ・フオート

大手札型印画紙焼付

- (たも) 拷問 三枚一組 三〇〇円
- (たせ) 切腹 三枚一組 三〇〇円
- (たこ) 鞭 美 三枚一組 三〇〇円
- (ひあ) 御み足を載く男 二枚一組 二五〇円
- (ひめ) 芳香に泣く 二枚一組 二五〇円

の中にしまっていただきましても  
又読者通信欄か或は他のどんな形  
式にでも誌上に公開されましても  
一向に差支えありませんが、私共  
三人の名譽の為に勝手乍ら仮名を  
名のらせていただきます。住所は  
東京西部とのみでごかんべん願  
いなく存じます。私が弘子という女  
性を知ったのは私の郷里の又大学  
の先輩でもある或る人の記念祝賀  
会の席上でありました。弘子はそ  
の先輩夫人の教え子の一人とだけ  
申しておきます。私共はその後時  
々話し相手として会うようになり  
ました。そのうち弘子の短期大学



での二年後輩というあい子にも紹介されたのであります。私共は暇があれば三人で映画へ行ったりお茶を飲んだり共通の話題について議論したり、ありふれた、しかし楽しい日を過ごしたのであります。そのうち私は弘子に対して甚だ莫然としたまだ形にははっきりつかめない程度の愛情を感じるようになったのであります。この気持はしかしだんだんはつきりしたものに、なり半年経た一昨年のクリスマス

マスの夜、おはずかしい話ですが酔いも手伝って又弘子の私に対する気持の上での或る程度の自信も感じて積極的に出たのであります。が、しかし弘子は異常な迄に拒み無残にも私は打ちひしがれてしまいました。しかもその夜、弘子に私に驚くべきことを告白したのであります。肉体的には完全な女性であるにも拘らずとても普通の結婚生活に入るだけの自信がない、精神的な不具者だと泣きぐずれた

### 分譲浣腸フオート

(ちよ) 女体浣腸連続フオート  
モデル 愛川悦子 九〇〇円  
大手札 12枚 組 三〇〇円  
(ちふ) 女体浣腸風景十二態  
モデル 大塚啓子 九〇〇円  
大手札 12枚 組 三〇〇円  
(ちせ) 浣腸フオート  
モデル 絹川文代 三〇〇円  
大手札 四枚 組 三〇〇円  
(ちあ) 浣腸責アツプ  
モデル 絹川文代 三〇〇円  
大手札 四枚 組 三〇〇円  
(ちい) イルリガールトル浣腸  
モデル 大塚啓子 三〇〇円  
大手札 四枚 組 三〇〇円  
(ちえ) エネマシリンド浣腸  
モデル 大塚啓子 三〇〇円  
大手札 四枚 組 三〇〇円  
(ちか) 硝子製シリンド浣腸  
モデル 大塚啓子 三〇〇円  
大手札 四枚 組 三〇〇円

(かさ) 浣腸責め  
モデル 桜井葉子 三〇〇円  
大手札 三枚 組 三〇〇円  
(はへ) 排便強要  
モデル 桜井葉子 三〇〇円  
大手札 三枚 組 三〇〇円  
(しか) 嘴管挿入  
モデル 梨花悠紀子 三〇〇円  
大手札 三枚 組 三〇〇円  
(まる) 便器使用  
モデル 梨花悠紀子 三〇〇円  
大手札 三枚 組 三〇〇円  
(しめ) おしめ使用  
モデル 梨花悠紀子 三〇〇円  
大手札 三枚 組 三〇〇円  
(りか) 浣腸図絵  
モデル 梨花悠紀子 三〇〇円  
大手札 三枚 組 三〇〇円  
(むつ) 襦袢図絵  
モデル 梨花悠紀子 三〇〇円  
大手札 三枚 組 三〇〇円  
(くみ) 便意苦悶  
モデル 梨花悠紀子 三〇〇円  
大手札 三枚 組 三〇〇円

弘子が、しつこく問いつめた私にポツリポツリと明らかにした言葉は私によくこれだけのことを話してくれたという満足感から私の弘子に対する愛情を不動のものにした。同時にそれ迄想像もなかった世に私をひき入れてしまったのであります。学生時代から弘子はい子と異常なまでに親密ないわば同性愛的な感情面を持っており、或時あの子が腹痛を起した時、なだめすかして文字通り純粋な気持ちで浣腸をしてやったのだそうでありました。私、それ迄浣腸というこ

同時に楽しむという通常では考えられない遊戯がはじまったのであります。しかし、約一年にもなる現在に於いてさえ、あい子は別問題としても弘子は浣腸以外のことは決して許そうとは致しません。このことは私にとりまして当初はむしろひどい苦痛でありました。回数を重ねるに従い浣腸の底の現れない神秘感に完全に魅入られ現在では弘子もあい子も私にとって文字通り掌中の珠、浣腸以外のことは考えなくなりました。その意味では変な云い方ですが私共三人の関係は純潔そのものであります。現在ではこの目的のために月に一度三人で集まることにしているのですが、三人居れば随分いろいろの遊戯が出来ます。人間いろいろ欲が出るもので三人の外にもう一人加われば更に楽しい遊戯が出来ることと此頃あい子が口に出すようになりました。弘子は三人以外に絶対に反対だといっているのですが、たとえばもう一人同好者が現れたとしても問題が問題です。ので秘密保持という点でなかなか難しいことと存じます。ただあい子からのたつての要求ですので最後に書き加えますが、私共三人、月に一度、第二土曜の午後0時半



から7時迄の間に落ち合うことにして居ります。場所はいつもまちまちですが、一昨日四月十四日は新宿で待ち合わせ箱根へ行っていました。いつも旅館とは限らないのですが、来月五月十二日は西武池袋駅改札附近に集合することになっております。又六月九日は渋谷東横線文化会館へ通ずる場所附近で落ち合う予定であります。万一是非ともとおっしゃる方がありましたらカーネーションの花を一輪手にもっておいでになってみて下さい。私共は6時半から7時迄に集まります。以上はい予の要求をそのまま書いたものであります。しかし、真に勝手ではありませんが、現在のところあと一人仲間にお入れするかどうか、前にも書きましたように決定はしておりません。従って折角来ていただいたのも御期待にそい得ないこともあり又それまであと一人加えろと決まりまして失礼ですが私共の納得のいく迄お人柄を観察させていただきます。尚男性女性はいません。(東京都下M市八山本正夫)

編集部の皆様、次から次へと新しい写真を見せて下さって本当に有難うございます。小生は一度で

もよいから豊満な肉体の女王様から背中に馬乗りに跨っていただけならと思っておりますが、中々その機会がありません。貴誌専属のモデルさんに小生が馬にされたところを写真にでもしていただけたらと望んでおりますが、いけないでしょうか。ここに、その時のことを空想して、絵を書いてみました。女王様の今脱がれたばかりのバンドでふくめんされた小生が、女王様を背中におのせして部屋中を歩きまわるときの光景です。メンスバンドは黒色、又はゴム製のもの。それから仰向きになった小生の口の中へバンドをねじ込む女王様。この時あばれないように咽喉首へ女王様の膝頭をあてがって押え込むような恰好になる。この時の女王様のモデルの方はパタフライにブラジャーだけか、キャルマタだけのビキニスタイルに近い服装。小生は禪又はショートパンツ着用。(岐阜八阿居植男)

サジストのご婦人の方で、小生の女主人として厳しく訓練し命令して下さる方の出現を望みます。小生三十三才、市内在住者です。日頃からご婦人の方にいたがられたいと願っていますが未だに機会

にめぐりあっていません。ご婦人の方のドレイとして下着のせんだくを命ぜられたり、足舐め、足蹴や人間馬、人間犬として厳しく調教されたり、後手に縛られてムチ打ち、エビ責めやくすぐり責にされたり人間便器等として使用していただけたら、どんなに幸かと思っております。この様な哀れな男の頭を冷やしてやろうと思われるときとくにご婦人の方がおいででしたら、お呼びかけ下さい。うさばらしに小生を使用して下さい。特に中年のご婦人の方を望みます。(名古屋市八服部生)

五月号の川下様の通信嬉しく拝見いたしました。女性の無惨絵マニヤの出現は同好の者にとつては大きな喜びです。無惨絵マニヤの私はやはり生首マニヤでもあります。首をもてあそびながら踊るサロメの図に異常なあこがれを抱き晴雨、芳年の無惨絵を蒐集することにつとめている私は奇巧の記事特に切腹に関するものをむさばるように読んだものです。殊に女性にそれと異常な興味を抱くようになったのは、ここ五年來のことです。旧号の切腹に関する記事、挿絵、口絵はすべてスクラップして

あります。特に畔亭数久氏の切腹幻想はすぐれた作品でした。その中の刺青姐御の立腹図は私にもっとも強い印象を与えています。背一面の見事な刺青、白い晒のふんどしをきりりとしめ、腹巻を巻いて大刀をぐきりと突刺して切先が背まで突通り、白い晒の上に鮮血がにじみ出ている姿にぞくっとした美しさを感じたものです。女性切腹は介錯人が首を打つところも欲しいと思ったのですが、これはまだ見つかりませんね。川下様も同様に感じておられることでしょう。美しい女が首を打ち落された瞬間の凄艶な図を望みます。「大奥裸女血斗」そのの続篇ともいうべき「血斗の果て」も是非続き絵にして欲しいものです。大奥の女中達がふんどし一つしめただけの姿で演ずる血みどろの無惨絵模様は、私のみならず他の幾人かのマニヤを生み出している程のすぐれたアイデア乃至はイメージだと思えます。「大奥裸女血斗」の白禪の女が黒禪の女を討ち果して首級をもてあそぶ態は京洛生氏の筆でいきいきと描かれています。このような絶好の画材があるに拘らず未だに具体化していないのは川下様はじめ私にとつても大変残念







CCしか入らず、それ以上は自分では加減してしまうので作業不能になり、とても苦しくて撮影どころでは有りません。失敗に終わりました。同好の女性の方に全裸で身体の間々まで鑑賞され乍ら逆吊りにされてエネマで充分に注入されたらはずかしさでかなり我慢できるのではないかと思います。そこで素早くカメラに収めて戴けたらどんなに嬉しい事でしょう。パートナーになって下さる方おりませんか。又腸内洗滌後アルコール類の液体その他固体の挿入にも感激してしましますが気体は嫌です。私は酒類は余り好みませんが、人工注入に依る酔心地は話すことのできない素晴らしきです。(東京都豊島区八津利V)

私は以前、貴誌を古書店で発見して以来緊縛に興味以上の興味を覚え、今では完全にその魅力のトリコになってしまった青年です。毎晩一人になると裸になり細い紐や太い縄、縛れるものなら何でも集めてきて、足からぐるぐるまきに縛り自由のきかなくなつた体を見つめて満足していましたが、どうも一人でする事には限度があり最近では物足らず思えてなりませ

ん。貴誌で知つたのですけど、私のような者をマゾといい、逆をサドと云うのですね。私もたまには女性を思うままに縛ってみたいと思ふ事もあります。(出来ぬ事とあきらめていきますけど) ちよっぴりサド気もひそんでいるのでしょいか? 近ごろでは両方を満足出来るようにカメラを用いています。大変難しいですが、自動シャッターにしてすばやく縛り、転げながら写る所まで行くのです。これも初めは良かったのですが、いつも同じ縛りしか出来ず両足を強く縛ると写る場所へ行く迄にシャッターがおり、なさけなくなります。同封の三枚の写真は自動シャッターでとつた苦心の作品です。しかしこれでは本当の緊縛も味えず勇氣を出してペンをとつたしだいです、私のような者でも縛って下さる方はいらっしゃいませんか? 身長一六八センチ、体重五六キロの痩せ型ですが、体は弱い方ではなく弱いのは気の方です。マニヤといつても、まだ一カ月足らずのはやはやですが思うようにマゾ男なり奴隷男なり、一人前の男に飼育して下さい。大阪市内なら詳しくですからどこへでも行きます。誌上での便りをお待ちします。ど

うぞあわれな男の望みをかなえて下さい。(大阪府八尾市八石原由岐夫V)

初めて当読者通信に筆をとる四十才になる未亡人で御座居ます。どうぞよろしく。さっそくですが六月号での通信のページに居られる中山梨津子さん。私とても貴女に興味を持てます。失礼な云い方でごめんなさい。でも本当なの。私も恥しいことです。エネマファンの一人です。貴女とぜひ一緒にプレイしたくてなりません。私は異性には余り興味が持てません。同性との浣腸プレイが素晴らしいですわ。きつと貴女とお逢いできたら幸福だと思います。私は今たつた一人です。梨津子さん、もしおさしつかえなかったら御住所御連絡下さい。又同性の方で出来れば年輩の方(三十五才から四十六才位)で同好の方はお友達になつて下さい。(浣腸マニヤ、伊集院かほる)

六月号の「宇宙のどこかで」が少し軟か過ぎて何だか物足りなく感じますので読者一同淋しがっていますから一寸御知らせ申し上げます。次に各方面の警告が誌面に

緊縛写真 大手札型 印画紙焼付

(れん)	愛川悦子	12枚	八〇〇円
(あめ)	愛川悦子	五枚	四〇〇円
(きよう)	花坂道子	五枚	四〇〇円
(ふさこ)	益田房子	五枚	四〇〇円
(もん)	村井知可子	五枚	四〇〇円
(いた)	春日、愛川	三枚	三〇〇円
(ねや)	田中芳子	五枚	四〇〇円
(しん1)	愛川悦子	四枚	三〇〇円
(しん2)	愛川悦子	四枚	三〇〇円
(しん3)	大塚啓子	六枚	四〇〇円
(しん4)	大塚啓子	五枚	三〇〇円
(しん5)	田中芳子	五枚	三〇〇円
(しん6)	田中芳子	五枚	三〇〇円
(ます)	益田房子	五枚	四〇〇円
(りよ)	川辺砂登子	五枚	四〇〇円
(はり)	大塚啓子	三枚	四〇〇円
(まい)	竹野ひろ子	三枚	四〇〇円
(まる)	竹野ひろ子	三枚	四〇〇円
(ふし)	桜井葉子	三枚	三〇〇円



出ていましたが、編集部御一同様の御努力の程、改めて身にしてみても嬉しく思っています。日頃如何に皆々様が御苦勞なされて居られますことかと心配でなりません。我々読者は常日頃貴誌の御発展を心から御祈り申し上げているのですから何卒他方面からの圧迫に屈せず我々の心からの支援のもとに益

々御繁栄あらん事を重ねて御祈り申し上げる次第であります。それにしても宇宙のどこかだが、四、五、六、と段々と俗に謂うどきつさが無くなつていく様に思えますが、もっと奇巧誌の最も自慢とする処の意気を發揮して下さいます様御待ち申上げます。表紙のデザインは実に見事です。色合いも誠

## 奇譚クラブ臨時

### 増刊号

#### 「サディズム特集号」

各定価三五〇円(特価一八〇円)

#### 第一集 緊縛艶姿特集

△売切

#### 第二集 被縛女体特選

△売切

#### 第三集 狂い咲く稀花

△売切

#### 第四集 湧き上るムード

△S四

本誌の臨時増刊号として異彩を放つサド特集号は、各集とも堂々百数十葉を越える麗美きわまりない美人モデルの緊縛フォトを満載独自のサド風を醸し出しています。

## 別冊奇譚クラブ

各定価 三〇〇円

(特価一五〇円)

### 第一集「告白、手記、体験」特集

△リクエスト画廊

△グラフィック希望写真集

△須川令子独演集

## 既刊号紹介

残部僅少

乞御申込

### 「悦虐小説と緊縛写真」

特集号

各定価三〇〇円(特価一五〇円)

#### 第一集 緊縛女体特集

(悦一)

#### 第二集 悶悦姿態特集

(悦二)

#### 第三集 嵐を慕う蝶

(悦三)

#### 第四集 拘束美態特集

(悦四)

#### 第五集 緊縛風景120態

(悦五)

本誌全盛時代の昭和二十七年から昭和二十九年にかけての悦虐小説の傑作力作を網羅してその集大成を集録しました。

に立派で申し分ありません。其の為か六月号も中々売れ行きが早くて本屋でも評判が非常に良く私達も喜んで居ります。(東京八中田比佐夫)

○

春はいいものです。なぜかって？もちろん女性の服装が厚ぼったいオーバーから解放されて、見るからに軽やかになるからです。全く若くて美しい女性が身も心もそして着衣も軽やかに街に野に山にと溢れ出てくるのを眺める時、春というものを心の底から味わうことができます。本当に春はいいものです。そうした若々しい肢体を軽やかな衣服に包んで街を闊歩する女性は、見るだけでも楽しくなるものですが、困ったことには見るだけでは満足できないという男も多々あるもので、春の訪れと共に痴漢もあちこちにうろつき出す模様です。春と女性と衣服と痴漢とは相互に密接な関連があるものと思われれます。かく申す私も心で思うだけなら軽度の痴漢であること否定するわけにはゆきません。電車の窓から外を眺めている私の眼は景色よりも物干竿に春風を受けて揺れているパンティやズロースを求めてそれに向けられている

からです。白、黒、ピンク・サックスから赤やブルーに至る色とりどりのそれを見るにつけて眺めるのは楽しいものです。それに時には満員の電車の中や乗降の際にさりげなく若い女性の胸やお尻に触ったりした経験もあります。しかも私自身、Mだけではなくフェチやナルシスの傾向もあり最近では白、黒だけではなく各種各色のパンティやスリマーを集めて毎日着用している始末です。これではもはや立派な痴漢といわざるを得ないでしょうが、全部自分で買いためたものばかりです。一枚として盗んだり、脅してとったりしたものはなく、またそのようなことをしたいと考えたこともなく、誰にも迷惑をかけるわけではなく、一人です。こっそり人生を楽しんでいるだけのことで、敢て軽度の心の痴漢と自称することも許されるものと考えている次第です。(愛知県八身柳輪生)

○

知崎美左子さん、繩にあてがれしよせんすて切れぬ物と思ひますとありますが、貴女こそ私の多年求めていた人です。私は男性でもあり繩に対するあこがれも鞭に対する希望も貴女とは立場は全く相

反していますが、カップルとしての共通点を見出しました。貴女の性格、今迄の事情、事情に対する心のギャップ（これは誰にもあるアブマニヤの弱点）何から何まで私に似ている、そして貴女がMなら私はS。私は当年三十三才、都内に住む或る事業に失敗した男（店舗住宅を持つ）千葉といえはそう遠くありませんし、知崎さんを心ゆくまで責めてみたい、といっても余り残酷なのはきらい。あくまでバラエティに富んだ責め方が好きです。私は現在の家では孤独故全ての秘密は有りません。どんな手紙でもブレイでもかまいません。又貴女の秘密は厳守いたします。（東京八四宮欣二）

その後御無沙汰いたしました。近藤一さまからのおすすめもあり私の体験しましたことなど、いろいろと書き綴りましたが、生来の筆下手のためにろくなものが書けず汗顔の至りです。でも文章を書くことなど好きなので日記もずっと続けて書いていますし文章を書くことは気になりません。この間も三十枚ばかりの告白を二篇書いて送りましたが、どうやら没になっちゃったようです。ここ半年

ばかりの間に何人もの方から縛りの経験を受けました。編集部の方から本年のはじめ頃最後に撮って頂いたのがありますが、それも誌上にはまだ発表されないので分撮ってもらったのがあります。私の住んでいる家は裏通りに当ります。殆ど大部分戦災にあった北大阪の中でも、この一かくだけは不思議に類焼をまぬがれたのだそうで、古びた家並が続く、それに道幅も自動車が一台やと通れるか通れぬくらいの広さしかありません。女の子供たちが縄とびをしたりケンパをしたりしている取り残されたような静かな町です。しかしものの二分も歩かないでも行ける表通りには、最近になってパチンコ屋が何軒も立ち並び、お昼すぎになるとチンジャラジャラと賑やかな音を立てはじめます。それに今までから一軒あった映画館のすじ向いに新しく常設館が建てられてからは、競争で流行歌を拡声機で流すので私の家にもよく聞えてきます。そしてお台所のおと片づけをしながら私もいつしかその流行歌をくちづさんでいるのです。私の心の中のふていな欲望とはことかわり毎日が平和で平凡な

生活です。そんな中で本誌は私の夢を満してくれる唯一のよすがのようなものです。どなたかこのようなバランスのとれていない私の生活に力強い絆を与えて下さる方っていないでしょうか。私はずっと家におりますので、午前は九時から十一時頃まで、午後は一時から四時頃まででしたら間違いなく身体があいております。色よいお返事をお待ちしております。無口で話題は豊富ではありませんが、いろいろとお話を伺うだけでも、文通だけでも結構でございます。

（大阪八東浦ひかる）

突然お便りを差上げます失礼をお許し下さい。私は天性のマゾヒストと申すのでしようか。他人に虐待されることにのみ喜びを感じて感じております。小さい時からM的であって今急にMになったのではないのです。縄を使う遊びは小さい時から好きでいつも縛られる方にまわされます。ゆるい縛りなどの時は、わざともがき縄脱けをしたりして、前より一層厳重に縛られ、身動きも出来ない様にされるのがよくありました。ゴムマリ遊びの時もわざと逃げおくれ

## 大名刺判緊縛写真集

大名刺（9×6.5寸）

印画紙焼付

（みい）ヌード初縛り

平野笑子 三枚 二〇〇円

（みは）裸股間縛

岩井知子 五枚 三〇〇円

（みほ）観念の座

絹川文代 五枚 三〇〇円

（みと）開股縛くらべ

絹川文代 五枚 三〇〇円

（みる）ヌード縛り

田原美佐子 五枚 三〇〇円

（みに）全裸後手くらべ

平野笑子 三枚 二〇〇円

（みへ）全裸開股縛

絹川文代 五枚 三〇〇円

（みち）椅子股間縛

絹川文代 三枚 三〇〇円

てマリをぶつつけられたりして筆舌にしようのない快感を覚えまして。たまたま組に肥った男勝りのする女の子がいましたが、私よりも一回りも大きく並んだ時などよく気分を害してヒラ手打ちに合いました。そんな時わざわざ尚更おこらせて一層ひどい目に合わされたことなど、オニゴッコしてもすぐに捕えられ首に足を巻きつけら



れて又胸に足を巻きつけられて締められた事などは忘れることが出来ません。こんな遊びをするときは勉強などそっちのけで熱中しましたが、高校入試が近づくと皆んな勉強に競争心をもやし私も仕方なく励みました。然し大学を卒業して社会人となった今、再び私のMの性格が芽ばえてきました。美女が辻村さんに虐められている姿や絹川さんに虐められている男の

恍惚とした顔は知らず知らず自分に変っているのです。自分が今そこで虐められているような錯覚を起すからなのでしょう。夢からさめた時の現実にはそんな姿はなく、絹川さんのような美人に虐められることは高嶺の花で不可能であることは百も承知ですが、いつか諦めきれぬものではあります。マゾモデル募集は願ってもない機会が訪れたのですが本来の気

### 分譲切腹フオート

(はろ) 悦楽切腹

モデル 梨花悠紀子

大手札 三枚一組 三〇〇円

(おせ) 血紅切腹図絵

モデル 大塚 啓子

大手札 三枚一組 三〇〇円

(こし) 腰元自刃

モデル 村井知可子

大中判 六枚一組 八〇〇円

(せふ) 切腹風景十二態

モデル 大塚 啓子

大手札 12枚一組 九〇〇円

(じじん) 女性自刃三態

モデル 愛川 悦子

大手札 三枚一組 三〇〇円

(こせ) 輝美切腹

モデル 愛川 悦子

大手札 二枚一組 二五〇円

(れい) 切腹のプレイ

モデル 愛川 悦子

大手札 三枚一組 三〇〇円

(ほう) 豊麗切腹三態

モデル 愛川 悦子

大手札 三枚一組 三〇〇円

(によい) 血紅使用・第一集

モデル 絹川 文代

大手札 五枚一組 八〇〇円

(によ2) 血紅使用・第二集

モデル 絹川 文代

大手札 五枚一組 八〇〇円

(まに) 切腹

モデル 切腹マニヤ某女

大手札 三枚一組 三〇〇円

弱さから応募する勇氣が御座居ません。しかしこの機会をのがしたら二度とは来ない、そんな気もするのです。絹川さんの様な美人はこの世に二人といたない気もするのです。早く応募しろ早くしろとせき立てるのですが、やめろ、やめろ、と二つの意見が心の中を左右するのです。そこでこんな虫のよい妥協点が出てきたのです。誌上には載らない分譲写真だけのモデルなのです。これなら存分に虐められて貴誌にとっても都合と思つたのです。今はただ空想のみにより自分を虐めております。たいがいはパンツ一枚、偶には全裸なのです。高手小手にされたり両手を吊られたり、さかさ吊りにされています。美しい女性の手にあるムチは私の身体に力いっぱい炸裂し私はヒイヒイいいながら身をよじり歓喜しているのです。その他流腸、灸責め、等あらゆる強烈な責めを受けます。どうか素晴らしい女王様が私の前にあらわれますようお願いいたします。(長野県上水内郡八青本一久)

御発行の奇譚クラブ、大変面白く興味尽きぬものがあります。画家でこうした方面に独特の才筆をふ

るう人が先頃なくなりましたね。何十年何百年後には、御誌もきつと貴重な文献として残されることと思います。何卒これからも一層充実した文献誌としていついづまでも存続されんことを祈ります。

(静岡県八松本多津慈)

小生二年前より貴誌を愛読しているものです。残念な事はマゾ物が非常に少い事です。古本屋で見ると、三、四年前のものは、それでもかなり多い様なのに現在はその点後退している様に見え遺憾にたえない。マゾ愛好者は氷山の一角と思います。普通、男というものは一種のプライドを持っておりサドとは云えても、マゾとは中々他人に知られたくないものです。小生はマゾの直感から小生の周囲にもかなりの同志のいる事を見抜いている。只お互いに何げなくすましていくだけの事です。サド系は貴誌でなくても巷にあふれている多量の月刊誌、週刊誌、映画等いくらでも見る事が出来る。しかしマゾは貴誌のみだ。貴誌が頑張らねばこの多数の我党の味方になつてくれるものは一人もいない。サド系を極端に減らせとは云わな



## おしめカバー着用と浣腸連続フोट

大手札印画紙焼付 十二枚一組 九〇〇円

略号(ちし)

パンティを脱した若い女性が30CCガラス製浣腸器によって浣腸を施し、やがてオシメを当て総ゴムのカバーを着用して排

泄するに至るまでの連続場面を撮影したオシメマニヤ、浣腸マニヤの投じたアイデアによって特写した秘蔵版フोट。

っていつてほしいものである。女の縛り写真が余りにも多すぎはないか。それに比してマゾ物はほんのツマミ的存在でしかないように思われる。春日ルミ女史等の尻敷きプレーは毎月定期便にしてほしいものです。口絵にも全く同じ事がいえる。貴誌の調査によるパーセンテージからこの様な配分をしているのかも知れないがマゾ派が如何に表面に出たがらないかと云う心理をよく洞察してもらいたい。折角小使をさいて買ってきていざ開いてみるとサド物がほとんどとなると阿呆らしさを通り越し腹が立ってくる。それでもこの十分の一みたさに買わざるを得ない己れの因果さにも腹が立つが、小説の欄についても同様ですが、マゾ愛好者の貴誌へ望むものは普通の小説の様な最初から終り迄読

んでジックリ考えその香りを味わうというものではないのです。余計なところは簡単で良い。大事なところの描写を強烈に詳しくアップピールしてほしいのです。その意味が読者の創作告白等はある程度止むを得ないとして、その代り「フアンタジヤ・マゾヒスティカ」―「愛好者の記録」等のものを大いに増してもらいたいと思う。「大奥裸女血斗」は素晴しかった。最高の讃辞を惜しまぬ。かなり前にあった講談調のマゾの構成これ等も実に良い。現代女性が相手を単に尻の下に敷くのとはい違い、鋭利な刃物が伴うだけに凄味が倍加する相手を格闘の上しっかり組敷いて腰の短刀を抜き放ち喉元へグサリと止めを刺し首級を上げる。マゾ派にとつては五十メガトン級である。仇討、毒婦、女性同志の怨恨

による決斗、巴御前の戦場に於ける組打ち等材料は豊富だと思ふ。これだけさえ毎月出してくれるのなら外は何もなくてもかまわない位である。是非実現出来ぬものだろうか。以上貴誌の都合も考えず小生の希望のみを書き上げましたが、どうか声なき声の多き事を信じ見果てぬ夢にならぬよう御賢察を乞いたいと思う。(神奈川八一愛読者N・BV)

小生は十年越しの愛読者です。私ほど古くしかも幼い頃からの愛読者も少なからうと内心誇りに思っております。その間二、三のノーマルな恋愛も経験しましたがやはりマゾの甘美な世界から抜け出ることは出来ませんでした。美しい女性に奴隷として奉仕し、その褒賞として思う存分の残虐行為とたえ切れない位の恥辱を受けることこそ私の望みなのです。「毛皮を著たヴィナス」のヴァンダ夫人や「痴人の愛」のナオミの様な美しくも残酷な女性が私の前に現れる時を待ちこがれながら日夜悶々としております。私を奴隷にしてお下さる御婦人は居らっしゃいますか。私はすべての点で素晴しい奴隷になる自信があります。

(東京都文京区八宇都宮宏V)

素晴しい六月号のグラビヤ、記事等ほんとに楽しい一時を過ごすことが出来たことをお礼申し上げます。私は女性の責めと浣腸に生甲斐を感じております一男性です。たとえそれが空想ごとであってもMSの世界にたとえ一時でも没入出来ることは私の最大の幸せです。その伴侶としての奇くは私の生涯の友です。又明日の為のよりよき活力源となっています。しかし最近では実際にその様な女性との文通やMSプレイの研究や楽しみを味わいたい欲望がしきりと頭をもたげて参りました。誰か私の夢を叶えて下さる女性はいませんか。文通のみでも結構、胸のいやもやを一気にペンに托して呼びかけたい気持で一杯です。私は年令廿八才、会社員です。浣腸や縛りに興味をお持ちの女性からのお便りを待ちます。(大阪市八江頭常二V)

六月号の口絵写真Mフोटはいつも乍ら見事な傑作でした。特に後手に縛られた男モデルに絹川嬢が棒切れでパンティを男の顔に押しつけている図柄は多年、私の夢



に見た構図で珍重なものでした。欲を云えばもう少し大寫しで男の正面からのものも一枚欲しいと思いましたが、それから男の顔にパンティをすっぽり冠せたものの正面横の大寫しを次の機会に是非のせて下さい。これは男モデルに限らず女モデルにも男のパンツを嗅がせた構図のものを御考案下さい。それから女モデルから無理にコルセットやブラジャーをつけられてる男モデルのフोटを載せて下さい。いま世間では悪書云々という取締を強化しようとしていますので十分御自重の上ますます価値ある文献誌として御発展下さい。

(大阪八一フェチシスト)

私は長い間のメトミ狂ですが、土俵四股平氏では文は面白くとも乳房にこだわりすぎて女が組んだ画がなくつまらなく思っていた。そこへ、雪崎氏が出てきて画はとも面白く楽しんでいますが、雪崎氏も江波氏も(写真は大変いい顔が見えず、ふんどしも越中ではつまらない)外から男の見た小説なのでつまらなく、繰りかえしばかりになると思う。戦う女の氣持を中から書けば、新しい迫力が出るはずだ。大奥裸女血斗は近ご

ろの状況では危いから、ただの女角力、女格闘にして戦う女同志の氣持や挑みののしる言葉で豊かにするのが安全で楽しく、又売れると思います。今度は女角力の連続撮影フोटを頼みます。絹川と大塚のコンビがよい。桜井は美しくないし、梨花は小さすぎる。

(東京八女斗美狂生)

知崎美左子様、五尺三寸、十五貫の素晴らしい肢体をお持ちになりながら、もう少し体に自信でもあればなどと引ひ込み思案なさらないで貴女の美しい体の上に縄と鞭の織りなす美しい芸術を私共に見せて戴けないでしようか。夢に見る程探し求めてかつ中々得られぬSMの世界を尋ねねばならない淋しさ。貴女のような方がきつというの日に現れるのではないかという夢が我々の生き甲斐というものなのです。白く豊かな女体をくびれて埋れてしまうのではないかと、思う程の縄のいしめ。そして吊り下げられた女の赤く充血した顔からもれる苦しげな息。考えただけでも体がぎゅんと引きしまる程の感激を覚えます。たとえ世の道学者がその非をなじり石もてそれを追うともSMへの夢は消えぬでしょう。(愛知八志摩生)

### 編集手帖控Vから

○今月号では毛利三雄氏の「神奈川県児童福祉審議会の勧告に對する私見」という一文を讀者からの反響として代表的に掲載いたしました。その外「神奈川県、広島県の児童福祉審議会に抗議する」といった割合強硬な文章が多数寄せられました。

○その他本誌六月号の巻末に編集者が書いた自肅方針についても反対の意見が毎日のように届いており、私達の弱腰をなじる便りがあとを断ちません。

○しかし、先般四月十四日付にて中央児童福祉審議会から四十一誌二十社に對して要望書が發送されるなど、編集方針について強い反省を求められている実情であります。

○本誌としましては、五月号、六月号、今月号と漸次、グラビヤ、本文、挿絵等に制約を加えてまいりましたが、讀者からは自肅について反対の意見が多く更に本号校了の直前には、神奈川県児童福祉審議会から、四月

号で、本審議会の勧告を受け入れて編集方針の改訂を発表されておりますので、今後の改訂を期待し、今回は指定しないことにしました。という意味の勧告を受けております。

○従って讀者の皆さまとしては非常に御不満であらうとも、今後根本的に改訂を加えなくては発行を継続できないという状態に立ち至っております。仮に従前通りの内容にて発行を強行したとしても、販売方面で制約を受けるとしたら、事実上発行を継続することは不可能になるということですので。この点何卒御賢察下さるようお願いいたします。

○一部の讀者の言われるように本誌が自肅するとうののなら、我々は従前通りの内容の他誌へ移ってゆくという心情も一応もつともだと思えます。然し私達としては、審議会の意向や勧告が善意の編集者だけを脱落させるといふのが真意ではないと考えるのですが、この点いかがなものでしょうか。(編集子)

# 一般創作原稿募集

## 募集要項

- 一、題材は自由です。ファンシーもの、ミステリーもの、スリラーもの、推理もの、伝説もの等、その他、従来の本誌のテーマにこだわらず、如何なるものでも結構ですが、奇譚に類するものを目標といたします。
  - 二、必ず自作のもので、未発表作品に限ります。
  - 三、枚数の制限はいたしません。
  - 四、締切りは特に定めず、原稿到着次第に逐次銓衡の上、何分のお返事を差し上げます。
  - 五、採用篇については、応分の稿料を送呈いたします。
  - 六、稿料の送金は、原則として、作品誌上発表後一カ月以内といたします。誌上匿名は御自由です。
- 以上の通り一般原稿を募集致します。自由奔放にして文学味溢れる傑作を期待いたします。

△奇譚クラブ編集部▽

# 読者原稿募集

## △体験、告白、手記▽

どなたにも一つや二つの思い出とか、体験といったものが必ずあるものです。直接には話しにくいようなことでも、しどしと文字にしてお寄せ下さい。採用篇には本誌三月分乃至一年分贈呈します。

## △創作、小説、物語▽

御自分の描く夢をまとめて下さい。採用篇には本誌五月分以上贈呈します。

## △(映画、雑誌)通信▽

映画や既刊雑誌の中で、特に興味をお持ちになった事項を通信下さい。映画は撮影所名、題名。雑誌は発行所名、雑誌名、発行年月を明記願います。

## △読者通信▽

編集者、執筆者、投稿者への通信、呼びかけ、前号の批評、本誌に対する希望や御意見、感想、思い出話、或いは読者相互間の交歓、文通、応答などをお寄せ下さい。誌面の許す限り、つとめて掲載いたします。

## ☆本誌御愛読の榮

### 予約料

一月分 (1冊)	二百円	△送共▽
三月分 (3冊)	六百円	△送共▽
半年分 (6冊)	千二百円	△送共▽

本誌は各地書店にて毎月二十四日一斉に発売致しますが、若し入手困難でしたら、直接発行所へ代金御送の上、お申込み下さい。なお、急送の場合は発行と同時に、厳重包装の上、急送申し込みを上げます。尚、既刊号の内、在庫分は別項に一覧表を掲げてあります故、注文頂き次第に急送いたします。

## ☆代理部分護品の榮

○本誌代理部分護品は、毎月号の読者通信欄及び本文中に広告してあります。故に、密封の第一金払込みにてお申込み下さい。厳重留、振替部、額小為替、小為替等を利用願います。五分増に願います。五円、十円等小額切手、分譲品目録が完成いたしましたので、十円切手同封の上、お申込み下さい。お送り手同封の上、お申込み下さい。お送り手同封の上、お申込み下さい。お送り手同封の上、お申込み下さい。

## 奇譚クラブ

### 七月特大号

(第十六巻 第七号)  
定価二百円

昭和三十七年六月二十日印刷  
昭和三十七年七月一日発行

印刷兼発行人 箕田京二  
大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号

発行所 天星社

振替口座大阪五〇〇四二番  
(昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可)  
(国鉄大局特別取扱承認雑誌第一二二二号)

口絵写真の複写或いは転載を固く禁じます。